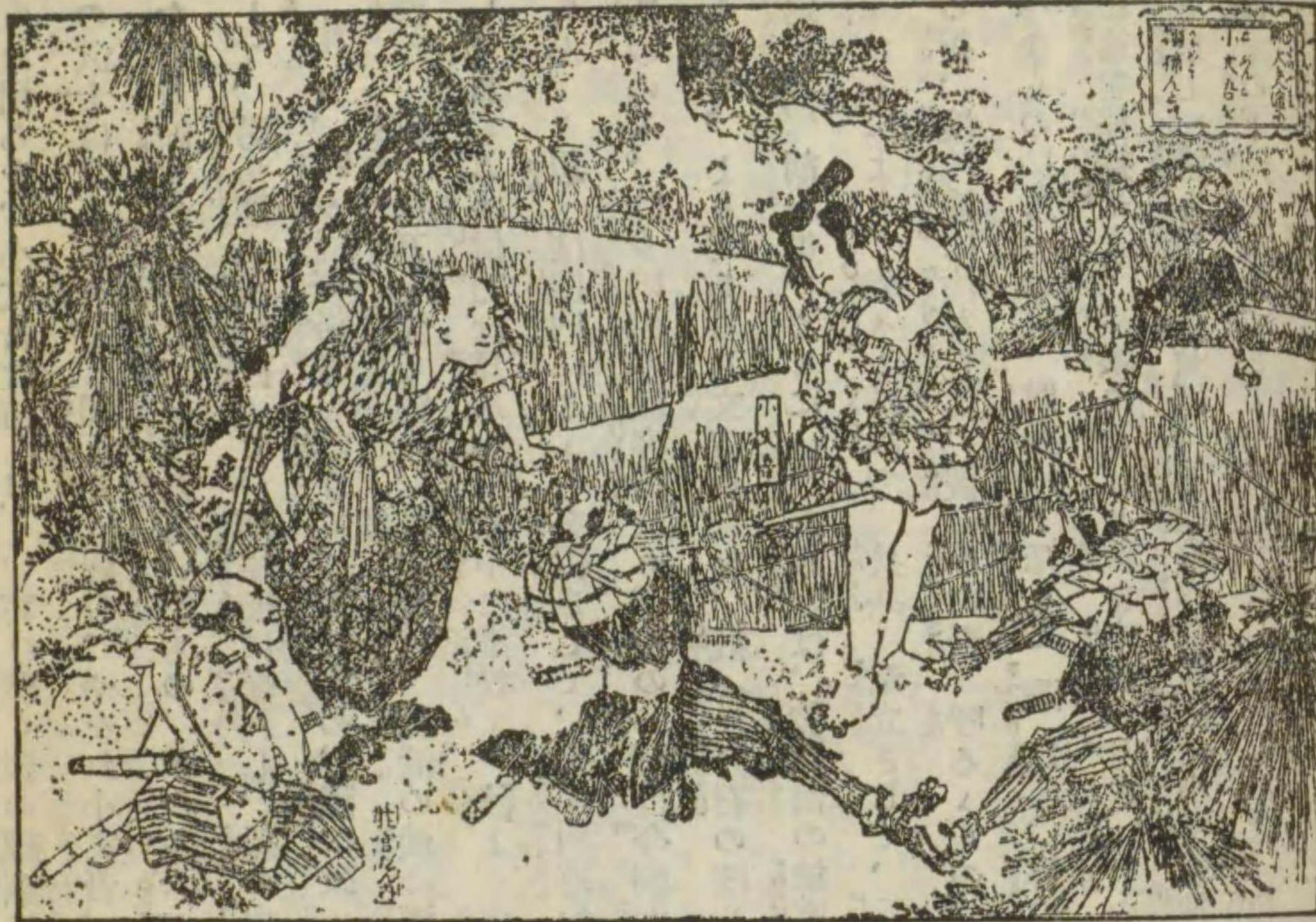


う見て、又輒然とうち笑ひ、小文吾などて立合ざる。相撲とちがふて命がけなる、勝負は拳もおそろしき賊。男態は大きうても、葉つきの橙、銀甜瓜、見かけばかりで味ひなし。かばかりの臆病者を、人がましく打ならばなく、わが拳を穢さん。是を啖へ。と足を飛して、向隅撲地と尻居に蹴居て、土足を肩に踏被たり。小文吾は片膝を、衝たるまゝに手を抗て、その足楚と受とめつ、向上る面色朱を沃ぎ、疾視逼てぞ堪がたき、怒を忍べといはれたる庭訓に悖りなば、親には不孝の子とならん。友には不信と疎れん。昨夕立たる誓言も、紙索も断らじ破らじ、と思ひかへせどかへらぬものは、人をも身をも恨の涙、見せじと汗に紛らして、ふり落す鬘の亂髪、顔を背けてついあたり。當下樹蔭に躲ひて、緯のやうを覽るものあり。是則鎌倉の修験觀得なり。満面に笑ながら、見れ出て再歩に、ほとり近く立よりつ、扇を颯と推ひらきて、房八を豎にあふぎ、横にあふぎて背を拊、通愛たし心地よし。かくてこそいぬる日の相撲恥を雲ぎたれ。奇妙々々。と小鼻を張らし、譽れば房八誇良に、全體八幡の相撲にも、負る筈ではなけれ共、俄頃に轉筋して、思はぬ怪我で、此奴が功名。おん身も先途の腰愈に、些踏給へ。と被したる、足をおろして立替れば、觀得はおそろく、顔さし覗きて兩三步、逡巡して頭をうち掉、いな／＼それはいらぬ事、一口ものに頬もや焼ん、窮寇は追ふべからず。和殿が十分してのけたれば、吾儕が百遍過たるより、格別に痛つらん、尾を曳犬田は打榮なし。こはこの儘にうち措て、例の酒肆で一献酌ん、とくいかずや。と誘引ば、房八は衣領を斂めて、脱捨し下駄穿そろへ、又小文吾がほとり近く、立よりて信と疾視、犬田これではまだ濟ぬぞよ。いふべき事のなほあれども、そはわれ今宵いゆきていはん。もししかへしをせんと思はゞ、寢刃あはして俟てあよ。その折留守を使ふな。といと僧さげに期を推て、先に立たる觀得を、うち見てゆたかに市中の酒肆へとぞ伴る。且して小文吾は、頭を擡げ、手を又き、仰て思ひ、俯て又、思へどもなほ安からぬ、心の芥搔流す、汗の麻衣あさまじき、わが身にこそ、とやうやくに、立あがりつゝ、細につく、沙を拂ふて襟かき合し、さるにても房八が、日ごろに似けなき無法の舉動、八幡の



(す とん 捕 搦 を 吾 文 小 に 途 夫 大 帆)

相撲を根にもちて、身をも親をも忘れけん、物の勝負は争ひの、端緒と知れど名を好み、譽を釣るはなべて世の、人の情といひながら、原は他人の争ひを、身に引受て妹夫と、よしなや怨を結びたる、皆是吾儕の、怨なりき。渠いかばかりに狂ふとも、打倒さん事難くもあらねど、敵手にならぬは親の戒、知らぬ妹へ兄が慈悲、互の無事は、互の幸ひ、わが身ひとつのうへならず、といふころを人しらて、笑ひもすべし、挾しめせん。相撲に負ぬわれにしも、只勝がたきは馬鹿者の、無法なりき。と嗟嘆して、亂れし髪をかき拊つ、再び歩をいそがして、逸こと僅に三町ばかり、薬塚のほとりより、捕手の兵八人、簇々と走り出て、逃さじ遣らじ、と捕籠たり。思ひがけなき事なれば、小文吾は驚きながら、厥邊に紅く花さきたる、怕痒樹を小盾にとり、某犯せる罪あらず。叨に人を認違て、捕な、愈給ひそ。と辭せわしく陳ずれば、やをれ小文吾争ふな。と聲高やかに呼かけて、野裝束せし一個の武士、この地の、莊官、千柄檀内を先に立し、文五兵衛を搦捕りて、夥兵等に牽せつゝ、物蔭より



顯れ出るを、小文吾は信と見て、再び駭く親の縲紲に、こはそもいかに、とばかりに、思はず其處にツイをれば、件の武士はさもこそ、と間近く立對ひ、やをれ小文吾、われは是清我殿の御内にて、武者長を奉る、新織帆大夫敦光なるを識すや、癖者大塚信乃といふもの、きのふ云々の事によりて、御所を騒し奉り、捕手の兵犬飼見八と組撃して、芳流閣の屋の棟より、河原面に墜れし、船の中に滾落て、迹を暗し落亡たり。これにより、某追捕の嚴命を受奉り、昨夕通宵路次を急ぎて、水に索め、陸に致へ、櫓にこの浦に来て、且く長途の疲勞を休へ、莊官檀内に相譚て、竊に信乃を索る程に、件の船は、葛浦の澳に漂ひたりけるを、辛じてこれを獲たり。その船ありて、その人なし。おもふに信乃は見入を、水中に推投て、陸より逃れ去りたるもの歟。しからばなほこの浦に、潛居ることもやあらん、と思へば檀内にこゝろを得さして、市中村落おちもなく、竊に穿鑿してけるに、汝が親、古那屋文五兵衛が宿所にのみ。昨夕兩個の旅客泊れり。その一個は今朝立去りぬ。又一個は滞留せり、此彼共に武士なり。と詳細に聞えたり。よりてあるじ文五兵衛を、莊官許召のぼして、彼旅客の相貌骨法、又その滞留の事の趣、嚴に質問し、返答甚胡論也。こゝに疑を累れば、彼滞留の旅客こそ、正しく大塚信乃ならぬ。それを偽らば文五兵衛も、亦是同罪たるにより、袴々と縛めつ、兵共に牽立さして、檀内を郷導とし、われみづから古那屋に赴き、家捜せんとて來つる折、檀内遙に汝を見て、彼は小文吾と呼らるゝもの、文五兵衛が冢子也、と告るによりて、われはや識れり。見放すべきものにあらねば、夥兵に下知して、遮留め、絆のこゝに及る也。親の縲紲を救ん、と思はゞ汝先に進みて、件の旅客を搦捕せよ。異議に及ばゞ親を本也、身を縛の索に被んず。あるが隨にとくまうせ、旅人の摸様はいかにぞや。と威しつ賺しつ説示せば、檀内も亦進み出、小文吾豫て知りつらん。當領主、千葉殿は、御所の御方にをすれば、領主の下知にあらずとて、絆忽にしたらんには、後の咎を脱れがたし。かしこも御所さまの、鄰郡をな騒せし。しのびに穿鑿して、信乃を搦めよと仰せしとぞ。かゝれば一旦彼癖者を、癖者と知りながら、宿貸たるものな

りとも、はやく自訴せばその咎を、免されて賞賚を賜ふ。素より信乃は武藝拔群、勇力無雙の閑えあり。或は詰計て搦捕る歟。不意を撃て刺殺し、その首捕て獻らば、親の縲紲を釋のみならず、御所の御感に預らん、その身の名譽、領主へ忠節。和郎は拳法と相撲もて、名を近郷に知られしならずや。技も力もかゝる時、播してこそ國益なれ。思按を決めておん報せよ。寔に大事の處ぞ。と名利に諭す口功者、捕手の尾頭に使ふべき、底心とぞ聞えたる。小文吾は目に耳に、見るに就き、聞くに就き、骨ぞ苦しき親のうへ、義を結びたる友の事、浮沈存亡、この時也。何といはほを輒し彼て、壓るゝ如き心地はすれど、色にも出さず頭を擡、仰の趣、悉、うけ給はり候ひぬ。しかれ共某は、きのふの祇園會より濱邊に遊びて、昨夕もけふも宿所に在らず。目今飯宅の中途にて、不慮におん咎を蒙りし、親の縲紲に驚くのみ。かゝればその旅客は、武士やらん、百姓やらん、いまだ見もせず、聞もせず。そはとまれかくもあれ、親の縲紲を放させ給はゞ、こゝより案内をつかまつり、おん先に進んこと、よに願しき所行なれども、もしその事は虚説にて、昨夕泊し旅客なくは、家捜をせられぬる、外聞をいかゞはせん。薄き板戸に低き櫓、藥屋も賤きものには城廓。證據分明ならざる事に、貧乏隠す家の内を、隈もなく搜されんは、こよなき恥に候はずや。數ならねども一丈夫、人に俠者といはれたる、名を惜めば歎きても、なほ餘ある事になん。加旃その癖者、なほ滞留したりとも、武藝勇力捷れたる、大刀風ならば鏡からん。さらば多勢をもてすとも、捕逃さじとはいひがたし。三十六計欺詐を善とす。おん隊勢を遠離て、某に任し給はゞ、何事も親の爲也、ひとり宿所に立かへり、その旅客なほ在らば、詐計て搦捕ん。縦その便を得ずとも、酒を強て酔臥させ、寢首を捕て獻ん。この議はいかゞ。とこしらへて、當坐を脱るゝ才子の辯舌、説賺されて帆太夫は、然也々々。と打領き、汝が意見、説得て理あり。信乃は萬夫無當の勇あり。わが隊兵等破立られて、此度も亦得捕ずは、毛を吹て疵を求る、過失はわれにあらん。現後難を脱れがたし。しからば且く汝に任せん。ようせよかし。といひかけて、檀内を見かへりつ、骨法圖こゝへ。と手に取て、さやくと推開



き、小文吾、是は彼癖者、犬塚信乃が骨法圖なり。よしや武士生まれ、百姓生まれ、その旅客の年紀全骨、すべてこの圖に引合し、一毫も似たらんには、許計寄て搦捕れ。思ひ錯、認悞とも、人たがへは咎なし。市中の出口、江河の船場は、土兵を借加て、嚴重に守らせん。さればとて、遅々すべからず、今宵一夕を限りにせん。明なば有無をまうし出よ。こゝろ得たる歟。と骨法圖を、隊兵して遞與になん、小文吾これを受とりて、うち見て、巻て、懐へ、さし入れて襟かき繕ひ、既にかう命がけなる、奉公を仕れば、願ふは親の縲紲をゆるして、某に預させ給へかし。といはせも果ず、帆太夫は高やかなる、頭と共に聲をふり立、否、そは絶て稱ぬ事也。親をその子に、子をその親に、委ねざるは律令の本文。汝なりとて一ツ穴なる、貉ならん歟、虚とは乗らず。癖者信乃を搦捕るとも、首捕て見する共、兩箇に一箇、功あるまで、文五兵衛は人保也。親を救ふも、罪なふも、すべて汝が心にあらん。そを今願ふことかは、と叱懲せば小文吾は、忽地望を失ふて、嘆息しつゝ頭を低、又いふよしもなかりけり。當下莊官檀内は、帆太夫にうち對ひ、はや曠昏になりて候。彼癖者は夜に紛れて、逃亡る事もやあらん。こゝより小文吾を返させ給ひて、出口の成り肝要ならん。といへば帆太夫後方を見かへり、現日は海に没んとすなり。小文吾は且く放す。まうしつる義に偽なくは、ともかくも功を立て、莊官許まうし出よ。とくく適。といそがして又文五兵衛を牽せつゝ、檀内が宿所へとて、衆皆齊一身を起せば、小文吾は阿とばかり、應はずれど立かねて、目送る子より親はなほ、ものいひたげにいくそ度、見かへるそなたはまだ春ねども、心の闇に迷ひつゝ、後へ牽るゝ縛索、未の歩申過て、鶏は物かは別れの悲み、誰がうへ告る夕鳥、宿巢をこゝに引裂れ、歎きの杜敷願事を、いはて心を千早振、神こそ知らぬ、子は親の、爲に隠しつ、親は子の、爲に隠していと直き、道のゆくてとかへるさと、あなたこなたの物思ひ、立とどまれば、追立てられて、跌く老の背影、杖にはならぬ奥竹の暖の敷に隔られ、看々見えぬなりにけり。小文吾は愀然と、船を掲てうち歎き、六十に近き親の縲紲を、解と易く、又難きは、義の一字も亦重き故なり。且く親を忍び給へ。

ともかくもして救ざらんや。父はさら也、彼人々も、辭安らけく恙なき、尋思もがな、と手を組て、つくつくとおもひ入相の、鐘の聲すら恆ならぬ、胸に應て天うち仰ぎ、われながら女々しくも、よしなく物を思ひにけり。宿所の事も心もとなし。こゝらに躊躇ことかは、とみづから諫て端折し、裙より長き脇刀も、絆突詰し二粒の、家路をさしていそぐにも、倘間諜者をもて、跟らるゝことありもやせん、と思へば四下に眼を配る、心隙なき折なれば、夕の風の涼きにも、汗に喘きてかへり來つ、檐下近くなる隨に、と見れば店前は、過半簾に垂籠て、寂寥として裡面いと暗かり。戸袋より只一枚、繰掛たる戸を開て進み入り、まづ燈火を。とひとりごちて、そが儘庖漏へ赴け共、索わびたる燈盒、火を鑽音も外に憚り、二ツ三ツなる行燈に、辛じて移とりて、一箇は店前にすえ、一箇は引提て子舎に赴くに、現八は在らずして、信乃只ひとり病臥たり。こはいかに、と驚きて、まづそのやうを訊るに、信乃はやうやく起なほりつ、その金瘡の曉がたより、猛に腫疼たる、苦惱堪がたき事、又現八は藥を求んとて、潛て武藏なる、志婆浦に赴きしを、信乃は後に知れる事、又文五兵衛は、曩に莊官許召るゝとて、出てゆきし事を告るに、呼吸せわしく詳細れり。小文吾は憂の中に、又一層の憂をまして、心苦しさ限りなけれど、親の事はさら也、房八が事までも、報るに便わろければ、さりげなく慰めて、遽しく火を起し、粥を煮復して勸るに、信乃はその疼痛の、些しおこたりたればにや、纒に箸をとる折から、店前なる簾を掲て、誰もをらずや、をらずや。と呼びつゝ裡面に入るものあり。これはは何人ぞ、其は次の巻に、解分るを見て知らん。



南總里見八犬傳 第四輯 卷之三

東都 曲亭 主人編次

第三十五回

念玉 戲に笛を借る  
妙真 哀て婦を返す

小文吾は粥を再燗て、これを信乃に勧る折、高やかに呼門つゝ、裡面に入るものありければ、應もあへず立とぎに、障子を磗と引閉て、店前に走出、と見れば是別人ならず、鎌倉の修験者念玉也。左手にはいと大きな、校尾蝶を携たる、右手には濼染の扇もて、胃のあたりをあふぎながら、店行燈のほとりに坐り、小文吾を見て、うち微笑み、關取目今還りたり。扱も昨夕の神輿洗は、聞しに倍て熱鬧かりき。さはれその果の比、彼此の俠客共が角拳は殺風景、何國の浦も壯者の、心は武速進雄の神慮寔に測りがたし。今朝還らんと思ひしかど、濱邊は夏を忘るゝまでに、涼しくもあり、蚤蚊もあらず、いやめづらしき鹽燒等が、辛き世わたりも見すぐしがたくて、けふも彼處で消したり。曩には和殿の力を借りて、争訟には全く捷ぬ、心にかゝる雲齋たれば、絆の序にこゝらの舊跡、眞間國府臺のあたりまで、遣もなく見ばやとて、長逗留になりたれば、明日歟明後日は歸府すべし。今雲時の程にこそ、又厄會になるべし。と他事なくいはれて、小文吾は、あらずもがなと思へども、出てゆけとはいひかねて、困じ果つゝ沈吟じ、そははや留別になりたり、然らば今宵は心ばかりの饗應すべき筈なれども、いかにせん、この土地の習俗にて、婢兒們はきのふより、走百病したれば一人も在らず。親さへ人に誘引れて、近郷にいゆきしかば、留守は唯某のみ。庖厨の事に疎くとも、夕膳を進らせん、物はしうはをはさずや。と問は頭をうち掉て、否、今途で飯も瀆も、たうべて來

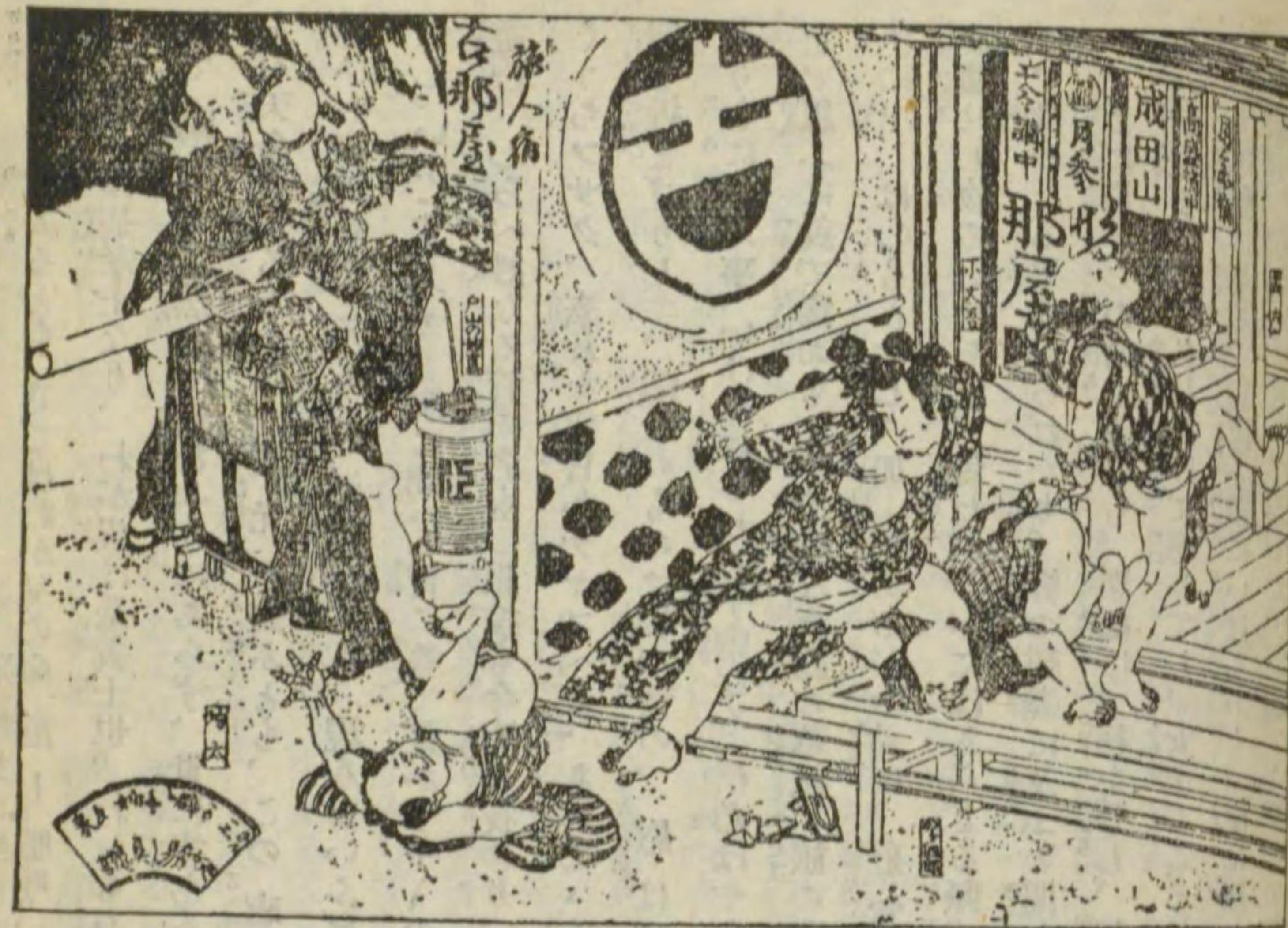
つる膳なれば、饗百味の飲食でも、翌までは腹に腐なし。佛の一室に密はあらじ。解貨給へ、ゆきて登ん。いとて、貝を突建て、やと聲かけて立んとするを、小文吾急に推とめ、まだ行燈を置ざれば、奥の院は常闇也。灯を擧すべし、待給へ。といひつゝ、貝をつらく見て、そは珍しき大貝也。何處で購給ひし。と問れて右手に拿なほし、こは瀨に濱邊なる、人の家にあるれば、些の酒價と換得たり。水を盛らば一升あまり、二升もや入るべからん、是見給へ。とさしよするを、そがまゝ拿て、と見かう見つ、現大きな校尾貝也。濱邊近く處るわれすら、かくの如きは多く見ず。物は好む所に聚へり。校尾貝なれば修験者の、目にはやかかりしものにこそ。とうち微笑ば念玉も、笑つゝ傍を見かへりて、彼處の壁の下なるは、尺八の笛ならずや。和殿は笛を好る歟。わが僻目歟。と指せば、小文吾も透し見て、いはるゝごとく尺八也。某音曲を嗜むにあらねど、近屬俠者といはるゝものは、一箇印籠、一節切を、腰に著ぬは稀なりき。そもはや今は廢りたり。彼はいぬる日誰やらが、措置れたるものにこそ。といふ間に念玉は、膝を進め臂を伸して、件の笛を掻よせつ、袖もて拭ふて、歌口を、澤して梵論々々と吹試み、是はいとよき尺八也、その主定かならずとも、今宵一夕和殿に借ん。寝るより外にすべもなき、旅宿なりとて甲夜の間より、軻に入りつゝ、蚤の腹を、肥さんはあまりに興なし。しかも今宵は庚申なり。拙くともわれとわが、徒然を慰る、こは究竟の物になん。遊みてしづかに月をまつべし、いでゝ。といひかけて、笛を携て身を起せば、小文吾はともかくも、おん身の隨意慰め給へ。その尺八は要なし。と回答て纏て、遽しく、燭を秉て移す行燈を、引提て念玉を、別室に案内して、預りたる行李などを、遞與して舊の處に來つ、思はずも嘆息して、腹裏に思ふやう。搗て加て彼修験者に、今宵の宿は影護し、さればとて今更に、出しやるべき術もなし。よしや強顔いひこしらへても、他處へ移さば疑れん。渠尺八を吹遊みて、夜と共に月を俵ん。といひしは心ありての事歟。させる悪心はあらずとも、密事を知らば身の仇也。刺殺して口を塞ん。そは機に臨み變に應じて、ともかくもすべけれど、せんすべなきは病臥せし、奥なる人のうへなりけ



り。譬ば病難のみにして、命に恙あらず共、稻塚にて帆大夫に、諸ひし事は翌まで、といひ延されぬ手遍の難題。その折に涙與されし、骨相圖こそ心憎けれ。鶴にはいとも慌しくて、只うち披きしのみなりき。復よく見ばや、と懐へ、手をさし入れつゝこはいかに、と左右の袂を掻探り、衣領を披きつゝ、振へども、涕紙さへになかりけり。原來途にて遣せしならん。夏は衣物の薄かるに、黄昏時のいとせわしく、走り還りし彼處より、遠くもあらぬ程なるに、われながら、鈍ましかりき。遮莫要なき物也。惜むべきにあらざれども、倘途にして人に拾れ、訴られなばその疑ひ、いよ／＼私儕に係るべし。門より内にあらずや、とそこら隈なく立遠れば、思はずも梭尾貝に、足踏かけて仰さまに、輾んとして推駐り、こはそも何ぞ。と取あげて、うち見て更に奥を見かへり、あな不覺也旅修験が、笛を愛つこの貝を、そが儘にはや忘れたり。譬ばこの梭尾貝の、海中にして生あるときは、運動するのみ、聲を聞かず、その肉を祛り、殻を留め、死物となりて吹るれば、その聲數町の外まで聞ゆ。人のうへも亦如此也。その居を失ひて、他郷に浮浪するものは、鱗介の水を離れて、歸るによしもなきに似たり。況罪なうして沈落し、隠すとすれど人にはや、知らるゝは聲なき貝の吹れてその音の聞ゆる如し。且罪なきを罪するは、これその沙汰の逆なるもの、その罪ならで咎を稟るは、威勢に壓るゝこれ順也。禱る驗もなき世には、果敢なく物を思ひ貞に、ひとりそら見つ山伏の、萬よし野は名のみにて、入ることかたき順逆の峯には齧るゝ雲もなし。そもいかにせん、とばかりに、拿たる貝を擲ちて、眼を睜り氣を籠て、言に出さねばいとゞしく、苦しき胸に當る手の、やるかたなきは恨み也。かくてあるべきにあらざれば、又骨法圖を索んとて、邊しく紙燭して、門邊に出んとする程に、皆とく來よ。と外面に、囁しく呼かけて、樞戸嚙と推ひらき、關取在る歟。と顔さし入るゝ、塩濱の鱗四郎を、先に立して、板扱均太、牛根孟六など呼れたる、土地に名だたる破落戸、三人ン齊一店前なる、板席に推並べば、小文吾は見えて、紙燭を振動し、こは氣立しき人だまかな。三人ン揃ふて解事ぞ。しづかに坐れよ、實子が成ん。といはせも樂す鱗四郎は、手袋脱りと罷に驚かす。

關取今宵は些ばかり、物いはんとて三尊佛が、臺座をはなれて來迎せり。此氣に居て拜すや。といへば、鱗太は佛より、鹹四鐵言吐すもあれ。一番地取の夜稽古に、三人ンがかりて肩を入れん。と禁て借と見かへれば、孟六も亦進み出、關取斯皆うち連拉て、來つるは別の議にあらず。年來和主が弟子とはいへども、根が技もよし、地力ある、吾們なれば彼此の辻相撲に怯を取らず、犬田は現よき弟子をもちぬ、と人が譽ればおのづから、和主の鼻まで高うしたれど、けふ一チ日で、見限りたり。とかく浮世は倒さまで、門弟達から師匠を破門、その斷をいはんとて、この三人ンは總名代、今よりしてこの葛飾に、和主の弟子は一人もなし。しかこゝろ得よ。翌からは、頭高に口を利さぬぞ。忘れたりとて、悦惚な。と諸聲立る諸胡坐、嘔けば聚ふ蚊を打て、膝に拍子をもたしけり。小文吾聞て冷笑ひ、あな味や奴原が、しづかに物をいはれぬ歟。總角の時よりして、われも相撲を好みしかば、關取などいはるれども、世わたりするにもあらず。寔に田舎の素人技、弟子はありとも、又なくとも、吾儕に物を缺べしやは。情由だに立ば、面り、望に任して破門せん。その情由をいへ、いかにぞや。と問ば三人は膝立なほし、いはずも知れたることながら、昨夕濱里の擲擲を、和主がひとり裁判きたる、適俠者と思ふに似ず、山林にしかへされし、栞崎の爲體、問道より遙に見つる、人より人の風聞は、千里を走る世の常言。誰とてしらぬものもなし。泥塵揚て踏れたる、師匠は弟子の面汚し、さるにより破門する、それを朽をしと思はずや。敵手は正しく妹夫、借財でもある歟、手ごみにされて、なほ阿容々々と猫の糞、踏れて花の開ものは、路傍の狗腸のみ。和主は門の腰脱犬田、畢竟八幡の取組に、あがりし團扇は怪我の功名、緊要の時には山林に、手も足も出ぬ藥罐の湯煮章魚、眞赤になりても恥知らず。陰囊をもたば、撃すや突すや。成らずは舌を啖すや。と誰聲高く手ぶりして、異口同音に向火を、焼つくれども小文吾は、騒ぎたる氣色なく、あな復してもいと咄し。扶搖に羽を搏大鵬の志を知らずして、共音に轉る群雀に、囓賂を養るゝわれにはあらず。栞崎にて房入が敵手にならぬは親の爲、わが爲、彼等夫婦が爲。負るは勝にますことあり、道理をしらぬ白徒を、避て通すは羞





(訪來眞妙易辟奴三)

戸口をやら推開つゝ、なほ外面に心をつけて、門の戸  
 礎と引よする、樞は一重、夜は五鼓、打添る里の鶴子木  
 も、恒より早き心地しつ、僕て獨うち點頭、この頃の  
 夜の短さよ。今春にきと思ひしに、白物們にかゝらひ  
 て、可惜時を移したり。彼奴等がよしもなく、置かり  
 し高聲の、さこそは奥へ聞えけめ、おもへば其處にも、  
 彼處にも、影護し。とひとりごつ、果ぬ尋思の片胡床、  
 膝を抱きてつくくんと、思へば悲し親の事、今比はいか  
 にして、この夜を明し給ふらん。暗き處にあらませば、  
 寝られぬまゝに蚊のくはん。いと痛しき限りなれども、  
 今宵一夕堪給へ。田圃を沽り、家を售り、財もて贖ふに、  
 足らずは己なり代りても、救ひとる術なからずやは。救ひ  
 がたきは奥なる彼人、破傷風の妙薬は、わが亡伯父の傳  
 法あり。然れども求め易からぬ、鮮血は今わが股を劈き、  
 絞り取るともとるべきが、それに合する女子の生血、絶  
 てなければわれとわが、身を傷るともせんなき事也。只  
 彼人を船に乗して、今宵潛に走ん敷。いなく里の出口  
 には、水陸共に豫より、警固の夥兵ありとぞ聞く、そを

ならず。そを思はずに怯せし、と挾するものゝあらばあれ、吾身に絶て痛からず。情由だに聞けば要はなし。とく  
 とく邁と追立てば、三ッ人齊一身を起し、邁といはずも去ざらんや。師弟の因はなくなりても、この一郷の面ぶせな  
 る、人の口には戸も建られず。他人になりし後日の手形に、極印打ん。と鹹四郎が閃拳と共に、足を單ふて筋斗  
 を打し、續て蒐る孟六と、均太が腕を振揚て、起んと齷鹹四郎が、背を楚と踏居れば、二人は足を翹つ、面を皺  
 めつ天うち仰ぎ、あな疼、痛や腕が抜ん、放せ。とばかりに、共音に弱る鹹四郎、からきめ見つゝ大の字に、身  
 を平めかして眼を睜り、あら苦しきかな堪がたし。人はともあれ目子が、飛も出なばいかにせん。背骨が折るゝ。と  
 叫びあへず、おのが名におふ鹽辛聲、敷板背で喘ぎけり。小文吾はさもこそあらめ、と懲せし隨に手を緩めず。奴原  
 骨にこたへし敷、怒を忍ぶは親の戒、人の拳を禁るのみ、われから拳を抗るにあらず。是までの好がひに、一度は  
 許す、とくゆけ。と孟六均太を推遷らして、ひとつによせて外面へ、そが儘撲地と突出せば、三間あまり踏々と、走  
 跌き轉輾びつ、又鹹四郎を引起して、項を颯と推落せば、糾れるが如く爪走して、おなじあたりに倒れつゝ、皆且く  
 は得も起す、狐の如くしばく見かへり、猫の如く背を高うして、やうやくに起なほり、或はみづから脈を診り、或  
 は腰を摩摯り、膝頭に唾を塗たる、口を喝め、眉根をよせて、此彼等く息を吻き、迭に手に手を掖扶て、やと諸聲に  
 立あがる。鹹四郎は蚕の、籠に啼く如く舌うち鳴らし、均太孟六は去らずや。俠骨を磨けばかばかりの、罰はあ  
 たれど利生はなし、間のわるさよ。と呟けば、二人は俱に嘆息し、循環がよからねば、七難八苦は娑婆の厄。力に  
 負ても口に勝、いふべき事はなほあれども、いはぬはいふに升飲の、地酒二斤で氣をなほさん、弱ることかは。と慰  
 めたる、均太は腰を振擲て、こゝろ邁て、と見かう見つ、等々玉を遺したり。といふ間に孟六は、足に踏かけて、  
 透し見て、こゝにござると連綿錢、二百兩與せば引提て、誘とく先にたつか号、腰を反しつ折しつ、うちつれ拉て  
 野平玉の、夜のみかよふ味酒屋、三輪の杉の影葉せし、觀樂の器を設てめく、足音聴て寂たり。小文吾は行儀の







み、色見えて、轎子よりやをら出んとすれば、揺覺されて、あなと泣く、大八を抱きなほして、しづかに背を敲著け、家兄骸骨に恙なく、家尊もいよく、健にをはしますや。とばかりに、低る頭の病しげに、撲地と落たる釵兒も、別の櫛敷、とうち敷く、涙を見せじ、と背向になりて、聞きかたにと姑の背を盾に取てをり。當下戸山の妙眞は、轎夫等を見かへりて、喃人々、よしや亥中は過すとも、吾儕は今宵退るか。この前面なる杭根のあたりは、南を向て涼しからん、且く其處に俟てよ。といふに皆はやこゝろ得て、轎子を外面に擡出しつ、巨戸を礎と引よせて、辭し出るとき巨戸を、又あなたより闔たりける。且して妙眞は、小文吾にうち對ひ、やよ、阿舅、爹々は臥房に入り給ひし敷。堪がたきまで炎熱かるに、恙なくこそをはすめれ。去年までは娼婦をも孫をも、神輿洗に來したれども、きのふは何やら事の多くて、出しかねつゝ本意なかりき。婢兒達は處らずや。と問ふ言の葉に花はあれども、小文吾は雨夜の月と、露ぬ疑念に眉うち顰め、否、家翁は人に誘引れて、眞間へいゆきていまだ還らず、婢兒們は走百病しつ、奥には止宿の修験者のみ。折のわろくて人氣なく、欸待態の疎さよ。納戸は絶て風も入れず、且くこゝにて相譚給へ。扱も婦人の夜行を厭はて、沼蘭をしも將て來ませしは、大かたならぬ故こそあらめ、と問かへされて、妙眞は、衣領推緩めて、小膝を進め、現推量せらるゝ如く、いとひがたき事なれども、凡貴きも賤きも、男女のうへはしも、親の隨意なるものならねど、年來夫婦睦しく、孫さへはやく擧たる、母は老樂、幸あるものと、近きわたりの人々に、羨れしは今恥しき、夫婦口舌の纏れより、憎からぬ娘婦を離別の斷り、憎れに來つる心の苦しき、神ならずして誰かはしらん。はじめをいへばいぬる日の、八幡の相撲に房八が、おん身に負てかへりしより、左に右機嫌のわろけれど、敵手はお沼蘭が家兄也、慰めかねしこの子の當惑、一日二日と歷る程に、何思ひけん房八は、生涯相撲を取らじとて、額髪を剃落せし、昨夕俄頃、濱邊の御旗、利げ給ひしおん身の裁判、如才あるにはあらざれど、根は腹たちのおさまらぬ、前さきわらるるに房八は、御旗は若く、女房去てこの御旗の、黒白を報るとて、母が御旗

ひぬ短慮。媒始は去歲の秋、古人になりつ、今さらには、誰とて權謀ふものもなし。さりとて人に頼らして、情由も傳はず返さるゝ、事にしあらねば母親の、役ならぬ役に供して來つ。然も馴染て濃中を、裂くはうら見の幕の布、縫合されぬ案苧の、くるしきものは浮世の義理と、丈夫に勝れぬ女子の甲斐なき。可愛やお沼蘭は蟬の、鳴より外に御もなき、心の誠を知りながら、果しなれば慰めて、扶けて轎子に乗する折、大八が跡追ふて、泣くは理り母と子の、別れを蚊が知らせて敷、携がる袂を振拂ふて、出られもせず、出しもせず。四ツとはいへどその冬の、師走生れの年弱もの、いまだ乳房をはなさねば、二葉の小草、はゝその森の、蔭ならずして、いかてか延育ん。已ことを得ず合轎に、乗して來つればよなき歡び、外祖さま許とくゆきて、美衣着たるを見せ侍らん、物賜らん、と餘念なく、膝踊せし稚兒の、心は智恵なき聖乎神乎。門まで來つ、母親の、膝倚子借て熟睡せし、夢の浮橋中絶る、敷を知らぬが敷きのひとつ、涙の種は蒔なくに、憂事毎に生出て、思ひ草とやなりぬらん。愚癡は女子の苧車敷、繰返し又かへしても、返すに難き離別の情由。爹々にもこれらの趣、とにもかくにも執なして、まうし給ひね。といひかけて、酸鼻たる姑の言葉に露を結びそえし、沼蘭はよゝとぞ泣沈む。小文吾はつくづく、うち聞て嗟嘆しつ、言、詳なる大家の口狀、大かたはこゝろを得たり。沼蘭は又思ふ事、いふ事あらばいへ聞ん。いはれし外になほ深き、意味はあらずや、いかにぞ。と問ばやうやく頭を擡、女子のうへには五障とやら、三従とやらいふことの、ありとし聞けば良人には、理なきことも悖らはず、四年以來聲立て、いひ懲されしこともなく、心を小めて家の内、風波立す取る楫の、朝な夕な船日記、世わたる業も人の手に、任せぬまでに暇なみ、馴し住ひは川添の、門の柱は朽るとも、死すは出し、出されじ、と思ひしものを、思ひきや、飽もあかれもせぬ中を、去れて還る親里の、岡も高くならんとは。只願しきは兩方の、心こゝろの和きて、曾騒しき風雲の、舊の峯上にをさまらば、かきくらしつゝ迷ひ來し、涙の雨はとく過て、是より袖の乾きてん。吾儕は撲れ、傷られ、いくその艱苦を受るとも、恥も厭し、恨みもせじ。品よく應接し



給はらば、十日の飼濁に糧を獲て、千年の齡を延んより、これにましたる歡びの、又あるべしや。とばかりに、涙生にはふり落て、膝に抱く子も袖濡さるゝ、隻手空しく使れぬ、病壓だに撓けなり。當下小文吾は、又きたる手を釋て、氣色稜だつ行燈の灯光に妙眞を信と見て、大家、離縁の趣は、大かたこゝろを得たれ共、今は一個の難義あり。沼蘭は親の女兒也、某がこゝろをもて、房八には妻せざりき、又この家は親の家也、親の他行に離縁の斷り、承引かば道理に背かん。況大八は幼稚とも、母に諫らるべきものならず。老父は今宵還らん歟、明日も明後日も逗留せん歟、その時日は定かならぬ、留守にはよしや女弟でも、一宿も留めがたし。今宵はこの儘將てかへりて、親の在宿したらん日に、又出なほして來給ひね。某が知ることは。と敦圍あらく立んとすれば、袂を楚と引とどめ、阿舅、そは辭がたがはん。氣をとり鎮て聞給へ。と推居て鼻うちかみ、姑と婦の中のみきは、世界の不思議と人はいへども、お沼蘭がよろづ老實なる、房八に彌まして、孝行にして給ふから、又房八に彌まして、憎からぬものをいつまでか、去らして外に見らるべき。離縁といふは夫の意地、一旦立て後は又、治る術のありもやせん。縱參々は在さずとも、こゝは參々の家ならずや。參々の宿所へ參々の女兒を、將て來て返せば留守の役、受とり給ふが道なるべし。又大八は坐艸のうへより、左の拳の人なみならず、物を拿ることかなはねば、厄弱者とて持あまし、母に添して來せし歟、と思はるゝにや知らず侍れど、厄弱の孫は可愛さの、八しほにまして侍るものを、去らるゝ母に縁て來せし、子に羅されて房八が、武きこゝろも折れよかし。孫共侶に婦をしも、召かへさせんと思はずは、挿頭の花歟、掌の、中なる玉歟、と一チ目も、側はなさぬ一個の孫を、こゝに留めて祖母ひとり、別れて何處へ還らるべき。拳はとまれかくもあれ、年歳にはませて智恵はやく、身長も伸て庸碌の、六ツ七ツなる飯子にも、劣らぬものを心なの、里の子共が緯名して、大八とのみ呼ぶ程に、祖父の命で賜せし、眞の名をば呼びもせて、閨宅のものまで呼熱し、彼が渾名の太八は、原是車か事にして、世輪といへる器と、後に繋つ、羅しく、呼じともへど口癖の、なほらぬも現名給ひ侍り

いかで拳の人なみに、なれかしとのみ念がも、腫かぬ醫藥、加増祈禱、神に佛に願言を、かけしも四とせにはやなりぬ。要なき事までながしう、告るは限なき心の誠、それを疑ふて大八を、留めじとならば藥は旅客、腰錢を置さば渡世に負て、宿賃給へ犬田どの、獨行にはあらざりき。しかも母と子、同行二人、かくても推辭給ふ歟、といひとくいと口雄々しげに、淀なかりける辯舌は、心の憂ひに濁さず澄まず、辭の歩水渡しかけし、現船長の母なりけり。小文吾は信乃が事、今宵に限る手廻の難義、女弟なりとて留めおきて、いかでか密議を知らすべき。いひこしらへて返さんものを、と初より思ひしかば、今妙眞が理諷て、説ども屈せず冷笑ひ、口賢しうもいはれたり。客店の事なれば、旅客にして宿借る共、はや甲夜過て座席もなし。宿すに餘る旅客を、推辭はよになき事ならず。とばかりいはば、大八は、祖母に俱して還しもせん、沼蘭を留めよといはれん歟、渠今親の家なりとて、返さるゝとも離縁の狀なし。離縁の狀を添られねば、是私の逗留なり。縦同胞なればとて、男女はその差あり。傍に人なき留守の家、倉庫らわかき妹のみ、留めて鷗さば瓜田の履、そは兄ながら影護し。枉て今宵は將て還り、去狀齎して、復來ませ。といはせも果す妙眞は、思はずほ、とうち咲ひ、原來おん身は離縁の狀を、望しさに云云と、固辭給ふ歟、こゝろ得がたし。一文不通の夫なりとも、妻を去るに離縁の狀を、取せざるものあるべしやは。其を出さぬは吾儕が情誼、遞與せば再び結れぬ、離縁の狀はこゝにあり。といひつゝ、帯の間より、一通の狀を取出て、ほとり近くさしよするを、小文吾は受取て、見んとて披けば去狀ならで、囊に途にてわが遺しつる、犬塚信乃が骨相圖也。愕と駭く當惑の、難義はいよゝます鏡、影は認てもなほ騒がず、そが儘巻て側に置き、こは訝しき書さまかな。離縁の狀は三行半、世間普通の文言を、この骨相圖に換たるは、房八が所爲なる歟、亦唯おん身の所爲なる歟。と詰れば妙眞顔うち目成り、恍惚給ふな犬田どの、そはおん身こそ知りつらめ。請我の御所より火急の穿鑿、その犬塚信乃とやらんを、舎藏たるものあらば、親族縁者も罪せられん、と嚴に徇られしは、わが市川の郷のみならず、こゝもなべての事なるべし。これ



らのよしを思ふにより、女房を去る房入を、理なしとのみいひがたし、その去状を受納めて、お沼蘭はさら也。大八をも、留め給はせ送り來ぬる、吾儕も本意ある心地ぞせん。その去状を受じとならば、莊官許もて参りて、訟庭に浪速江の、よしあしわけん。それさへに、おん身は事を好み給ふ歟。否いかてかは事を好ん。しからばお沼蘭をとり給ふ歟。そは又絆の難義あり。さらばその去状もて、訴ふべき歟、いかにぞや。と問禮られて、小文吾は、困じ果つ、うち點頭、大家さのみな急り給ひそ。去状楚と納めたり。沼蘭はさら也大八をも、今宵は某預るべし。有無の答はわが父の、還りて後と房入に、しか傳へ給ひねかし。夜ははや更たり、いそがせ給へ。と稍うち解る辭の花柯、折れては脆き袖の露、妙眞は目をおし拭ひ、扱は納得し給ひし歟。心に思はぬ事をだに、いふは迷に身の爲のみ。吾儕に怨はなきものを、現苦しきは浮名の境界、三年以前の秋の比、亡父に後れつ、頭髻を剪て、形貌は烏髮尼、妙眞といふ逆朱の戒名、血脈さへに受たれども、尙年わかきわが子夫婦の、成に浮世を棄かねて、朝夕家廟に對へ共、看經の暇もなく、日毎の出船入船の、舟子の駈引、庶物の水揚、世帯を執れば舊の名の、戸山と人はなほ呼ぶを、否、妙眞と更侍り、と告れども又忘れてや、或は戸山よ、妙眞よ、と道俗二名をひとつに合して、遂に戸山の妙眞と、呼ぶ、はいと鳥濤なりき。よに夫となり妻となり、婦と呼ばれ、姑といはるゝ縁しはありながら、本末遂ぬは産靈の約束事にこそあらめ。人の心は善も悪も、うち見てしらるゝものならねば、只鬼々しきこの婆々が、兎毛ばかりも疵なき婦を、追出せし、と人もやいはん。これも無益の諍言なりき。然らば吾儕は退るか。お沼蘭は狭き心から、病煩ふて親同胞に、劬勞をな被給ひそ。夏の夜のいぎたなくとも、大八に衣推脱して、寢冷して風ひかし、煩し給ふな。と心をつくれれば、泣腫せし、目を推拭ふて、頭を擡、年來の御高恩、稟つゝさせる孝行を、竭しも得せずゆくりなき、おん別れにこそなり侍れ。はや真夜中に侍りなん、ひとつ船にもあらなく、はるゝ還しまるらす、ひびきさよ。といひかけて、人をも、落る涙をも、とどめかねてそ別れに、船を別れを離れ、又お沼蘭を戻入に、妙眞

は耳を側て、後笛の音は鶴の集籠、徳野の雉、夜の鶴、凡生とし活物、夫婦の哀別、親子の恩愛、いづれを疎なりとせん。あふことあれば別あり、歡あれば憂事のなからずやは。と獎して、涙をおさめて小文吾に、告別して立鴨の、翅に遺す一滴、濁さぬ水に任しつゝ、見送る兄は辭なく、妹はよと音にぞ泣く。心細けき繁棧の門の、欄干推開る、妙眞は外に出て、こや〜と呼ぶ程に、轎夫等は遠しく、轎子をもて來て昇居つ、乗給はずや。と促せば、見かへりもせて頭を掉、廿二日の月ははや、出べき天の色づくまで、夜は既に更そめたるに、市川へやけ還らるべき。豫て心意せし、今宵の宿はちかきにあり。吾儕に眼てとく來ね。と竊にこゝろを得さしつゝ、轎子を扛して赤羅引、東の町へといそげども、進みかねたる足引の、山路わけ入る心地しつ、迷ふは胸の私雨に、露けき袖をうち合し、ひとり頭を傾けて、おもひ〜ぞねりゆきける。

第三十六回

忍を破りて犬田與三山林一戦ふ  
怨を含て沼蘭四大を傷害す

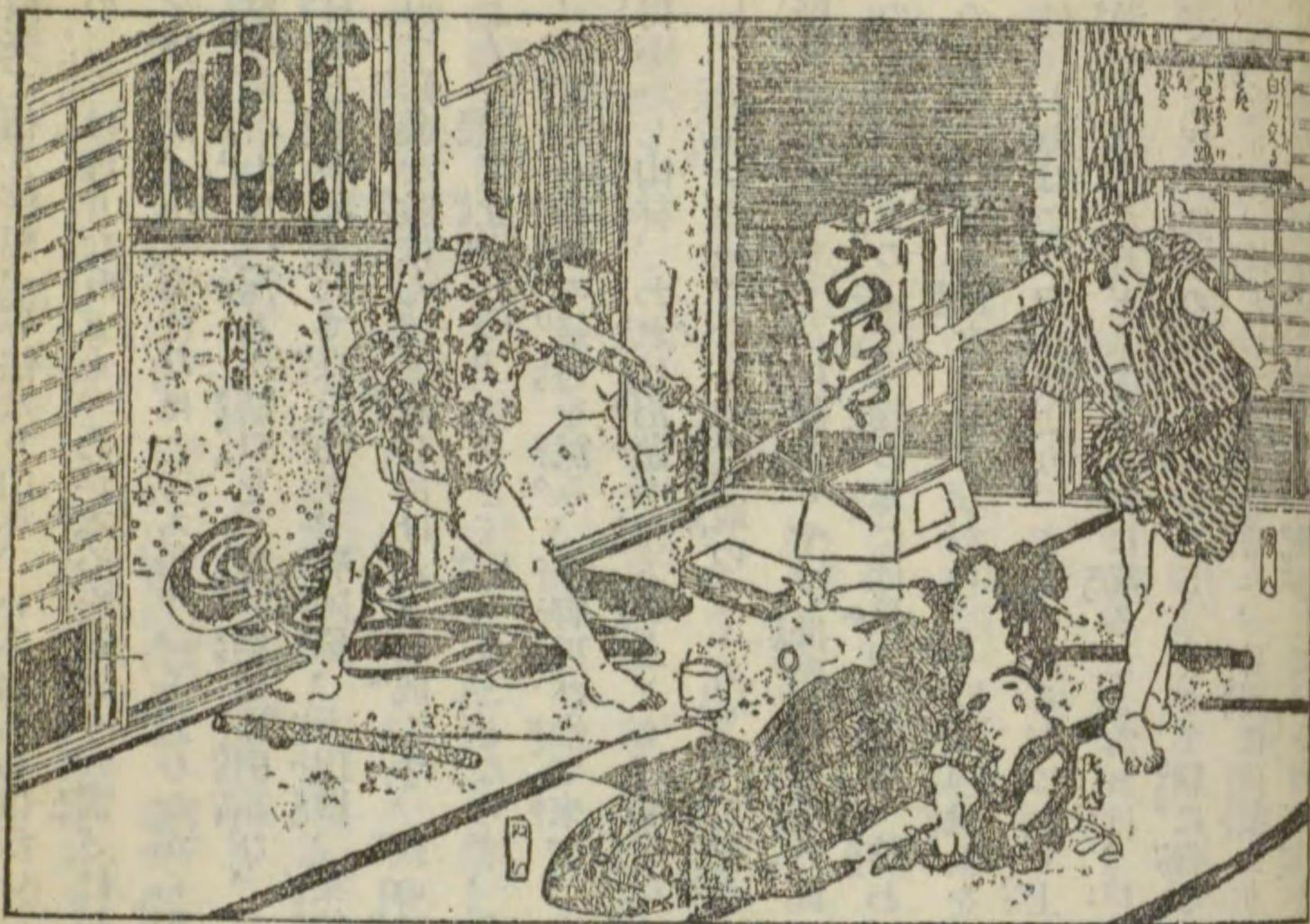
人さま〜に志す、道引ちがへて、かゝる折、均太孟六鹹四郎は、甲夜の遺恨を復さんとて、古那屋の門に潛來つ、或は戸に耳をよせ、或は戸節よりさし覗けば、燈燭あかく、聲す也。時なほ早し、と退きて、耳語あふたる後方より、こなたをさして來る者あり。見咎められじ、と三人一、瞻迷ひて庇間より、背門のかたにぞ隠れける。さる程に山林房入は、母妙眞に送らして、女房沼蘭を去りしかど、彼方の回答も心もとなく、なほ又思ふよしあれば、小文吾に對面して、昨夕の確執を果さんとて、更闌て只ひとり、しづかに戸口に近づきて、裡面のやうを窺ふに、小文吾は沼蘭と端居して、うち歎く聲、噓す聲、いと蕭やかに聞えけり。その絆の趣を、よく推究めて後にこそ、裡面にいらめ、と尋思しつ、門の柱に手をかけて、身を欬て竊聞せり。かゝるべしとは知らずして、沼蘭はやうやく涙を禁め、不慮の事よりこの身の厄難、參々さま還らせ給ひなば、何とまうしてよからんやら、甲斐なきは現女子ぞと、



思ひくみして、やよ家兄、よき商量を聞してたべ。果敢なく物を思はんより、大八を納戸に臥させて、爹々さまを俵侍らん。嗚呼胸痛や。と身を起せば、小文吾吐嗟、と立塞り、やをれお沼間は何處へゆくぞ。と辭せわしく禁れば、呆れて顔をうち目成り、こは狡猾なる物咎め。去られて来ても親の家、納戸へゆくに科はあらじ。といはせも果す頭をうち掉り、縦親の家なりとも、留守すれば兄が隨にせん。知らずや今宵は庚申守也。われは祈願の事ありて、齋戒すれば、親類でも他家より来つるものを留めず。況奥へは、一步も、許さぬ關の戸を開て、わが心願を空しうせんや。と敦固あらしき心はうらうへ、只小舎に病臥せし、信乃を見せじと慢に、いひ黒むれば涙漣み、そはそら言て侍るべし。今宵はしのぶ花妻ある歟。人には隠し給ふとも、妹に隔のあるべきやは。と怨じて進めば眼を瞪し、尾陋の推量奇怪也、祈願の外に物もなし。一旦鎖たる出居の關を、疑るゝとて許すべき歟。強て納戸へゆかんとならば、わが齋戒を障碍する、只是惡魔の所行に似たり。さらばこゝにも置ことかなはず、不便なれども親子共侶、檐下に立て夜を曉せ、心からぞ。と罵懲して、搔癢み引立つ、わりなく戸口に推おるせば、あなや。と叫ぶ母の聲に、驚る稚兒も、共音立てぞ泣叫ぶ。小文吾はさもこそ、と思へば見れば共侶に、弱る心を鬼にしつ、泣聲奥へ聞せじ、と櫃戸礙と踢開きて、推出さんとする程に、外面より手をかけて、沼間が肩尖推展し、閃りと内に入るものあり。小文吾これを信と見て、房八なる歟。小文吾歟。何とおもふて眞夜中に、問ずも知れたる確執の後段、別にいふべきこともあり、他人になりて潔白く、果さん爲に夜をこめて。それで来つる歟。しかなり。と迭の問答由斷せず。かく答つ、房八は、櫃戸楚と引闔たり。當下小文吾は、舊の席に退きて、一刀取て傍に引著、俟間あらせず房八は、極光かす長腋刀に、四下も狭しと裳を穿て、續て進む前房の正中、小文吾がほとり近く、向臨あらはす高脚靴、膝突つけて疾視たり。沼間は思ひがけなくも、更關て来つる良人の勢ひ、兄も有聲に氣色だつ、心の底を汲かねて、うち騒ぐ聲を聞きながら、遠より急ぎ一瞬の呼吸、和室のよしもなげに、敷上たる大八を、腕に抱きて、含する、乳房も縮る、

無量の苦勞、後立並つ退きつ、心腹の片手繋に、せんすべもなく行燈を、壁のほとりに推退けて、そと擧げず鬱心の、丁子頭もそらだのめなる、われや波んとうち歎く。房八これを見もかへらず、腕を掲げて腕をふり立、小文吾、和郎も男子ならば、葉崎にて踏れたる、恥をし恥と思へかし。辱めても窘めても、いふかひのなき臆病者を、敵手に取らんは大人氣なけれど、些見も聞もせし事あり。さて女房を去たれども、渠が所藏の衣裳調度を、まだ返さねば後日の異論、奥齒に物を挟しては、慾に轉ぶと人もやいはん。そを返さんとて齎し來つ、物檢めて受納めよ。といふを小文吾聞あへず、何事やらんとおもひしに、沼間が衣裳を返さんとて歟。人隠しに更關たる、今宵ばかりに限る事かは。囊に妙眞刀禰に答しごとく、わが親はまだ還らねど、枉て妹を留めしは、よに情ある。姑の面に顧し寸志のみ。回答は親の還りてこそ、といひつるをまだ聞ずや。と問せも果す冷笑ひ、明日かへらん歟、明後日やら、生涯還らて果んやら、いとおぼつかなき文五兵衛を、俟ていつまで俟るべき。われも亦男子也。今返さんともて來し物を、受られずとてたゞやは止ん。流行模様京鹿子、美濃の八丈、飾磨の褐、沼間が祕藏の衣の中に、和郎が欲がるものこそあれ、これは是認らずや。と問かへしつ、懐より、取出したる血つきの麻衣、これはいかに。とさしよするを、小文吾は見て、うち驚き、正しくそれは。と掛る手を、拂ふて左に取なほし、さぞ欲からん、欲かるべし。昨夕入江の蘆原にて。といふに小文吾陸推進め、しかも甲夜闇黒白を別かず。(句)背負てかへる一包箱。(句)、誰とはしらず後より。(句)引とむるを。(句)振拂ふ。(句)迭の手煉も如法夜に。(句)引綻せし袂の、裂口を漏て遺たるこの衣。(句)とは知らずして突退け、飯宅の後も事多く、心もつかで今こゝに。(句)うち見て胸が潰るゝ歟。(句)、原來其折、癖者は、房八汝が所爲なりき、と今ぞ讀たる離別の狀。(句)、三行半も夜照遠見、黄昏時にゆくりなく、途て拾ふて又途で、母に渡與せし信乃が骨法圖。(句)、しからば機密をみな知て。(句)女房去りしは祟の注連、連係せられぬ身の用心。そこらに隠せし喪家の犬塚、外より洩ては物もなし。これまでの好甲斐に、賞錢は己が酒の價。莊官屋敷





(るき殺踢て露兒小きとる交刃白)

嗚して、かき掃きたる大入を、撲地と燃茶、身を起す、哀しみあまりて、些も擬議せず、そは情なし短慮也。物にや狂ひたまふらん。止り給へ。と呼かけて、打あはしたる白刃の中へ、入らんとすれば小文吾は、あぶなし、退け。と疾視て、よせも立ねどあちこちと、搦筋禁る女の念力、躬を投かけて良人の袂に、携るを透さずふり落す、房八怒れる眼を反して、碍すな。と蹴倒せば、筈撥矢と折飛て、髻結斷離るゝ亂髪、纏くるしく臥つゝも、足を抱けば踏かへされて、起んとしたる頂の上に光く良人の刃、踏入て、小文吾を、撃んとうち振る拳、狂ふて、沼蘭が乳の下腋と破る。灸所の深痕に霎時も得堪ず、苦と叫び倒れけり。是は、と駭く敵の透間を、得たりと進む小文吾が、閃したる白刃の電火、房八は右の肩尖、ばらりずんと砍割れ、拿たる刀を奪と捨て、尻居に撞と平張仆を、再び撃んと、振揚る、刃の下に房八は、や上等、犬田、いふことあり。とせわしく禁て左手を突き立て、頭を擧つ、蜻蛉の、息吹あへぬ。深痕の苦痛、小文吾は訝しと、思へば些も由断せず、血刀閃りと取なほして、

に繋れし、親の縲綯を解んとならば、信乃を搦て吾儕に遞與せ。否小ざかしき汝が贅託、罪人舎藏ふわれにはあらず。といはせも果す腋刀の鋸下握て瑞を突立、この期に及びてなほ陳するや。拒ば奥へ踏入て、索を被んず、いかにぞや。と送に怯ぬ蝸牛の、角芽立たる争ひに、沼蘭は悲さやるがたなく、慌迷ひて兄と夫の、間に入りて推隔、こは不覺也、外にや洩れん。家兄上賢き心にも、思ひあやまちし給ふな。今はじめてしる家尊の大人の、縲綯も人の、所以ならば、親には換るものあらじ。わが夫子も亦心づよし。この難義を幸あり良に。罪人捕へて何にせん。磯うつ浪も當て碎け、雨ふりてこそ壤も堅れ、思ひし事を思ひのまゝに、いひ果ては胃の火も滅ん。送に陸み相譚ふて、親をし救ひとり給はじ、是にましたる幸ひの、又あるべしや。と氣を悶て、彼方此方を和諭つゝ、聲うちくもり、泣潤らす、簀子の下の蟬も、霎時その音をとどめけり。小文吾は今さらに、事を好むにあらねども、しうねく怨む房八に、既に大事を知られしかば、忍べと親の箴に、刃に被し紙索すら、今は厭ふに違あらず、わが顯身の息ある程は、いかでか彼人を遞與すべき、と思へば些も退かず、立ば撃んと、刀の柄を、握詰たる指の汗に、鞘釘も濡る可也。當下房八ますく、焦燥て、あな見ぐるしき女子の裁判。泣ばとて口説ばとて、寶の山に入りながら、手を空してかへらんや。喧嘩の側杖打れんより、其處退すや。と敦囑て、衝と立さまに蹴と踢る。爪頭狂ふて大入が腋肚を蹴てければ、苦と一聲叫びもあへず、そがまゝ、息は絶にけり。沼蘭もその子を抱るまゝに、横轉帳てよゝと泣く。房八是を物ともせず、信乃はまさしく小舎に、と進む前面に小文吾が立塞るを抜打に、拳尖く丁と撃、刃を鋸もて受留れば、紙索は断れつ、小文吾は、今ぞ仇なる堪忍の、二字も反故と恨の刀尖、抜あはしつゝ、丁々、と、鋼を削る送の大刀風、四下を蹴立て戦ふたり。沼蘭はやうやく身を起して、見ればわが子は息絶たり、こはいかにせん、かなしや、と泣つうらみつ見かへれば、兄と良人は一上一下と、歎結びたる生死の際、この子もいと惜し、彼首も危し、夫子には去られ、子は救され、わが身ひとつぞ、悲に、坐る甲斐なき火葬の形、那の下に玉の櫛の、眼なば眼、と、眼なば眼、と、眼なば眼、と、



片膝突て倍と疾視、卑怯なり山林、いふ事あらば疾いはて、この期に及びて、何をか聞ん。と窺れば、眼を睜り、その疑は理りなれども、わが本心を初より、諦さば特に義を守る、和殿いかでかわれを破るべき。且この瘻を。と手を抗れば、小文吾はなほこゝろ得ず、と思ひながら刃の濃血を、拭ふて遠しく韃に納め、單衣の袖を斷離つゝ、手拭と結合して、房八が瘻口を、楚と巻て端引結び、やをれ房八、瘻は淺かり。いふ事あらばいへ聞ん。いかにぞや山林。と呼かけられて息を吻き、喃阿舅、犬田殿、葉崎にて理不盡なる、わが爲體は豫より、和殿に怒を發さして、撃れて難義を救はん、と思ひにけれど事成らず、親の諫めと堪忍を、守らるゝにはすべくなく、よに有がたき大勇に、いよ／＼羞て立別れつ。さりとて已べきことならず、わが母には豫より、示あはせしよしあれば、沼蘭を離別に假托て、甲夜より和殿の氣色を試み、今宵再び惟て来て、やうやく本意を遂にき。と告れば小文吾眉根をうちよせ、こゝろ得がたし山林、われは沼蘭が兄といふとも、和殿に大恩あるものならず。然るをその身を殺すまでに、志を盡されし、是疑ひの一ツなり。縦和殿のこゝろもて、可惜命を隕すとも、今宵に通りしわが難義を、救るべきよしあらず、是疑ひの二ツなり。なほ故ありや。と問詰れば房八聞て、聲を勵し、さればこそ其事なれ。言なかくとも聞給へ。輪回の説、因果の理、物の本には見つれども、皆わがうへにあるべしとは、一切思ひかけざりき。是も果敢なき今般の懺悔、告るも面なきわざながら、一昨年の秋世を逝りし、わが父の病危かりし時、竊に母と某を、枕邊に呼近づけ、われはこゝの小厮より、こゝのあるじになり上りて、一子房八は成長りぬ。わが齡五十を超て、一期の望、分に過たり。しかれども、こゝろに恥ることあれば、戸山はさら也、房八にも、素性を定かに告ざりき。思ひし事をいはて死なば、冥土の障になりぬべし。よりにて竊に告るのみ。抑わが父は、柚木朴平と呼ばれたる、安房の青海巻村の百姓なりき。性として武藝を嗜み、殊更に俠氣ありけり。この故に、故領主、神餘長與介光弘朝臣譜第の忠臣、金八郎が討たれし、武藝を期に習熟して、その難儀を受んとて、彼家に出じ事あり。かくて父年を經て、彼山を下り

包が、神餘の執事たるにより、淫酒を勸めて民を虐げ、遊、罪を見せども、光弘これを囑り給はず、金八郎は是はさら也、諫るものは皆追れて、その家竟に亂れたり。わが父は是義氣ある人なり。里人等が爲、金碗氏の爲に闘憤り、いかで定包を撃んとて、同志の友だち、洲崎無垢三といふ壯夫を相譚つ、彼定包が遊山を窺ひ、落羽殿に埋伏して、乗たる馬を心當に、射て落せしは讐ならで、領主光弘にぞをはしける。無垢三は當坐に撃れ、わが父は領主の近臣、那古七郎と血戦して、七郎を吹仆せたれども、その身遂に生拘られて、總て刑戮せられけり。この條の錯悞は、みな定包が奸計なるを、わが父漫に思ひ迷ふて、かくは領主を犯せしかば、金碗氏は里見を佐て、功成り名を遂し後、祿を辭して自殺せり。こもわが父の故とぞ聞えし。當時吾儕は十四歳、母は叢に身まかりぬ。獨安房國を亡命して、この地に漂泊する程に、里人に汲引せられて、こゝの小厮になりけり。是よりして年あまた、心を切て仕しかば、先主人愛敬ひて、さるものなりと思はれけん、家督の男兒なきゆゑに、吾儕を女婿にし給ひぬ。しかるに去歲より通家になりし、房八が舅文吾兵衛は、那古七郎が弟なりとぞ。今歳はじめて仄に聞ぬ。渠その婿は兄の讐なる、柚木朴平が孫なるよしを、傳へも聞かば、いかにして、その女兒をもて阿容々々と、房八に齊肩すべき、とり復されん事疑ひなし。しられねばこそ口舌もなけれど、怨を慰して好を結ばゞ、終に子孫の思を遺さん。さればとて、沼蘭が伶俐き、人も羨む娘なるに、いちちはやく擧たる、孫に乳房を放さして、去せんはいといたう、忍びがたきわざになん。那古が弟と知らずして、通家になりしは悪因縁。孫が拳の人なみならぬも、三世の後まで怨を惹く、彼刀祿ばら(神餘、那古、金碗をいふ。)の祟敷、と思ひ屈しつゝ、病煩ふて、わが死期ちかくなりけり。人の怨を解んとならば、陰徳にますものなし。房八は親に代りて、祖父の爲に汚名を雪め、彼舊怨を釋ことあらば、寔にこよなき孝行ならん。且房八は祖父に肖たる、俠氣ありて武藝を好み、義の爲には命も惜まじ、戸山も心を雄々しうして、わが子を諫奨し給へ、と竊に遺言せられたり。父は義理に慍懣き事、既已かくの如し。われは親に及ずとも、その子として



志を、嗣ぎるべきや、と思ひ起しつ、祖父の汚名を雪ん爲に、柚木の柚の木篇を除て、下なる木字に相合し、みづから山林と名告れるは、その比よりの事なりき。さるによりわが舅、文五兵衛殿親子の爲には、人に異なる志を、竭して後に親の遺言、明々地に告げや、と思へども折もなく、實義をあらはす術もなし。さればいぬる日八幡の相撲は、和殿とわれと目星に指れし、修験の募に任するものから、吾儕は絶て勝負を好まず、技も力も和殿には、及ぶべくもあらざれども、怪我にも勝じと念じつ、果して負しは歡びなれ、何てふねたく思ふべき。そをかにかくといひ立しは、婿るものさかしらのみ、かくてきのふは祇園會の、神輿洗を觀ばやとて、この濱に来て遊びつ。獄父(文五兵衛をいふ)を訪んと思ひつ、入江橋を渡る程に、獄父は遙に水際なる、蘆分船の中にして、怪しき兩個の壯俊と、うち相譚給ふになん、端なく呼も立がたさに、そのほとりに近づきて、思はず竊聞してけるに、犬塚大伺値遇の奇譚、和殿も亦その相似たる、玉さへ痣さへあるよしを、聞くにますく、感激して、今更出るに出不れず、蘆原に躲ひて、獨情おもふやう、われも亦相似たる、玉と痣とあるならば、彼人々の隊に入て、世の豪傑といはれんものを、過世わろくてさるものなければ、義を結んと願ふとも、許さるべきよしあらず。同盟の議は協す共、當所は千葉の采地にして、潛我の御所の御方なり。犬塚大伺穿鑿せられて、難義に及ぶことあらば、竊に勇に力を盡して、わが性命を阻すとも、その危窮を救ざらんや。しからんにはわが父の遺言を果さん事、只この時にあるべし、と竊に思ひ決めたり。かくてその日ははや暮て、彼人々は古那屋へとて、あるじの翁に、伴れつ。和殿はひとり留りて、件の船を推流し、血つきの衣ども背負つ、立かへらんとせらるゝにぞ、あまりに遺憾ければ、卒ともいはん、と蘆原より、立は出てもいひがたさに、恍惚に引留しを、和殿は癖者なりとして、振拂ふたる勢ひに、いよく呼もかけられず、且く挑争ふ程に、吾儕は勝をいたく打れて、倒るゝ間にいちはやく、和殿は走去たりき。隊には遺せし麻衣あり。和殿は人に拾はば、彼處其處に隠らん、と思へば、隠るゝとありあけて、更時て隊所に隠りつ、母にすらまが告げりしに、

犬塚生追捕の事、はや莊官より御られたり。當下われ又思ふやう、わが舅は客店なり、彼人々を留置ふとも、人の出入多ければ、いく程もなく顯れて、犬塚大伺いへばさら也、あるじ親子も罪せられん。さればとて今更に、義を結びたる人々を、出し遣るべくもあらず。所詮今わが命を限して、其處に危窮を救はずは、竟に脱れがたかるべし。きのふ入江の蘆原にて、つくんと闕竊じに、彼犬塚が面影は、わが面影に似たるやうなり。さればわがこの頸をもて、犬塚生の首級と偽り、潛我のおん使に遞與しなば、獄丈父子に祟もなく、犬塚生を落しやる、便宜はこれにますものあらじ。然ども似ざる所あり、吾は相撲を好む故に、額髪を剃ざれば、その面影は似たりとも、この儘にては欺きかたし、と心づきては曇時もあらず、八幡の相撲に負たれば、生涯土俵に足踏かけじ、と寓言して今朝俄頃、額髪を剃落させ、鏡を把て照し見れば、年紀さへ面影さへ、犬塚生によく似たり。よりていよく深念を決し、竊に母に云、と思よしを告げしかば、母は涙さしくみて、許すべくもあらざれば、われも有繋に請かねて、自殺の遺書する程に、母はやくも闕竊て、禁めがたしと思はれけん、泣つゝやうやく許されけり。わが母も亦義理に憐れ、男魂あるにより、今生の告別、思ふ事皆いひ盡しつ、粹のやうを知らん爲に、俄頃、沼田を離別して、親家へかへすといひこしらへ、離別の事は母に任して、われはやこの濱に来つるとき、栗崎にてゆくりなく、和殿が宿所へ還るにあひぬ。折ふし往返の人もなし、わが撃れんには便宜の場也。和殿は身がはりに意なくとも、犬塚生とわが面影の、似たりと視る目は、誰にもかはらじ。わが死するの後わが頸もて、彼身がはりに立ばや、と心づかざることはあらじ、と思へば些も躊躇す、濱里の確執に假托て、理不盡に譴罵り、蹴倒してもなほ争はて、親を思ふて堪忍ぶ、その孝心にはすべもなく、本意を得遂ず別れたる、途より酒を酌んとて、只管誘引ふ觀得を、先に立つゝ出し抜きて、取返して稻塚の、邊まで來つるとき、和殿は既に難義あり。潛我より犬塚追捕の大將、新織帆大夫とやらんが影兵等にとり圍れ、剩獄丈文五兵衛殿は、縛られて牽れたり。吐嗟、と聲は騒げども、救ふべくもあらざれば、數陸に躲ひて、



一五二十を見聞たり。かくて、和殿は虎口を脱れて、家路をさして遠く去りにし跡に一通あり、取揚て見れば、彼骨相圖なり。麻衣といひ、繪圖といひ、不思議に他人に拾れず、わが手に入るは緯の幸ひ、今宵は決して本意を遂げん、と思へば心に勇あり、豫て示しあはしたる、中宿に赴きて、竊に母の來ぬるを俟つ、云々と密報て、彼骨相圖を遞與せしは、和殿が心を騒して、今宵撃れん爲なりき。さるにより甲夜の間は、背門の邊に潛來て、犬塚生の大病も、和殿が苦心もよく知たり。願ふは阿舅犬田殿、わが頸取て役にたて、獄父の縲繩と犬塚生の危窮を救ふ手段をめぐらせ。ふるき怨を釋としならば、これを一期の功にして、昔柚木村平は、定包を撃んとて、領主を犯して、剩那古七郎を撃とりつ、且その師なり故主なる、金碗氏にもこの故に、腹を切せしものなれども、今はその孫房八が、云々の義烈によりて、孝子義男の冤枉と、獄父の縲繩を釋にき、と口碑に遺し給はらば、祖父の汚名を雪むべく、父の遺訓も空しうせず、死して榮あるわが歡び、百歳の壽を保て、富貴の人とならんより、これにます事あるべしやは。身の歡びに就てなほ、不便なるは沼蘭大八。親子三人がおなじ日に、おなじ所に命を隕すも、亦是祖父の惡報歟、妻子には一毫も、意中の機密を告されば、怒を移して去るとのみ、思ふてさぞな恨みけん。われこそ必死を究めたれ、沼蘭は年なほ二十に足らず、わがなからん後、慈に、後家立させんは便なきわざ也、事に假托、離別せば、かへりて渠が爲ならん、と思ひし故につれもなく、もてなせしこそ悔しけれ。かうなるべしと豫より、悟らばいかでか返すべき。大八さへに諫て遣りしは、渠が成長る後まで、外猶父に教育を頼ん爲也。しか思ひしは仇事にて、過失とはいひながら、妻をも子も手にかけて、殺して竟に身を殺す、輪回應報かくまでに、ありけるもの歟犬田殿、この惡縁を結びし故に、沼蘭が枉死は夫の餘殃、獄父の歎きも、和殿の憾みも、想像つゝ面目なし。許し給へ。と血に染し、左手を抗ておろがむまで、心の誠を語り、傳稀なる孝順節義、深黄に屈せぬ長語を物に、小文吾耳を側につり、罪を謝りて獄の目をしばたきて、獄を解ひ、思ひがけなしたる山林、和殿は親の遺訓を守りて、賢徳を賜ふ。

を殺して仁をなす、心操こそ微妙けれ。和殿の親父が、罪せし罪は重くとも、子孫三世の命にして、その汚名を雪る孝順、和漢に多くあるべしやは。犬塚生の面影は、和殿とよく相似たるものから、異世の主君の爲にも、身を殺してその死に代る、忠臣いと稀なるに、和殿とわれは通家にして、犬塚生は相識ならず、且八幡の相撲より、快からず見えしかば、窮難今宵に逼れども、外にだも憂苦を告て、その智慧を借んと欲せず。況身がはりの事などは、企及ぶべきにあらねば、一切思ひかけざりしに、今ゆくりなき資を得て、父の縲繩を解くすがにも、わが同盟の士を救ふ、便点にもならぬ事、意外に出て歡しく、又哀しさも一トしほ也。人を殺して、人を救ふは、素よりわが願ひにあらず、犬塚生も如此ならん。しかりとて今更に、推辭てその意に従はずは、水に懲て湯を辭す如く、和殿をここに狗死さして、事に益なきをいかゞはせん。又沼蘭と大八が、枉死はいよゝ意外の殃、哀傷の涙、胸に盈、遺憾腸を斷といへども、みな薄命の致すところ、うち歎くのみせんすべなし。さはれ妹が刃を犯して、身を殺せしも狗死ならず。わが家に相傳る、破傷風の奇方あり。男女年なほ少壯もの、鮮血各五合を取り、合してその瘡に沃ぎ洗へば、よく死を起して生に回し、その瘡も亦愈ること、箒の塵を拂ふがごとく、百發百中愈す、譬ば養由基が百歩を隔て、柳葉を射つるが如し。便是わが伯父なりし、那古七郎の傳方なりとぞ。父に口授せられしかど、求めて得べき藥劑ならねば、施しがたしと思ひしのみ。犬塚生はその曉より、破傷風によりて、命危し。この故に犬飼生は、武藏の志婆浦に良藥あり、それを求んとて潛やかに、今朝しも彼處へ赴きたれども、道遠ければいまだ還らず。縦和殿の便点に任して、今宵の危窮を脱るゝとも。彼人の命終らば、亦何の益あらん。されば沼蘭が枉死によりて、圖らず男女の鮮血を獲たり、不幸の中の幸歟、天歟、人歟、欲する所、只寒翁が馬に似たり。是はこれ犬塚生の孝心義胆世に捷れしを、憐み給ふ神明佛陀の、冥助にあられて亦何ぞや。心安かれ山林、和殿とわれと前世は、相殺したる讐敵、今は舊怨氷解して、恩義は千引の石より重かり。功德をながく口碑に傳へて、義烈の龜鑑にせざらんや。と



はいへかく迄逞しき、志氣ある壯夫を、よしや彼玉はなくとも、又つゆばかりの痣はなくとも、わが同盟に請加なば、久後さへに憑しからんに、親子三人が共侶に、こゝに命を隕す事、恨のうへのうらみなれ。賢にして且雄々しき、大家なりとも斯とし聞かば、いよますく顔折て、歎き給はん痛しきよ。嗚呼何とせん。とばかりに、義理にしがらむ愛哀苦、浮世はうしや丑三の、鯨音遠く響つゝ、いとゞあはれをそえにけり。

南總里見八犬傳 第四輯 卷之三 終

南總里見八犬傳 第四輯 卷之四

東 都 曲 亭 主 人 編 次

第三十七回

病客薬を辭して谿を延ぶ 俠者身を殺して仁を得たり

房八聞て莞尔とうち笑み、物識る人は常にいふ、積善の家、餘慶あり、金言寔に故あるかな。犬塚生は父祖三世、忠信孝義、儻稀なる、その絆の趣は、船中にてみづからいへるを、われ竊聞して詳に知れり。さればこそあれわが妻の、不慮に命を隕したる、鮮血は自然と彼人の薬になるも天の冥福、わが過失もかくてこそ、聊面を起に似たれ。夫婦の恩愛今更に、いはぬ心のかなしきは、千萬言もなほ足らじ、不覺に時を移さんより、とくく鮮血を取り給へ、一ト刀にして死たりとも、全體はまだ冷べからず、温熱失なばいかにして、絞るとも血を獲んや、とくく。といそがせば、小文吾この議に従ふて、やうやくに立あがれども、四下にさせる器なし。何をがな、と見かへれば、念玉坊が遣れたる、彼校尾貝横はりて、行燈のほとりにあり。こは究竟の物にこそ。とひとりごちつゝ、左手に取りて、仆たる女弟を引起せば、苦と叫びし聲と共に、鮮血は颯と瀆る。瘡口に貝を推著て、南無阿弥陀佛、南無阿弥陀佛。と唱る間に、韓紅、貝の半分を受たりける。小文吾はいとどしく、弱る心を勵して、お沼蘭々々々。と呼活れば、糸より細く目をひらき、實兄、わが伏はまだ存命で歟。よに憑しき誠心を、説明されし幾條を、夢かとはかりうち聞からに、物いはんにも、聲は得たゝず、身を起さんにも動かれず、こゝろに泣つ、歡びつ、疑ひ辨て共侶に、滅てゆく身は惜からで、惜む名残は今一トたび、いかで言葉をかは嶋の、よるべの岸に渡りかねて、瀬にたつ心地に侍りき。

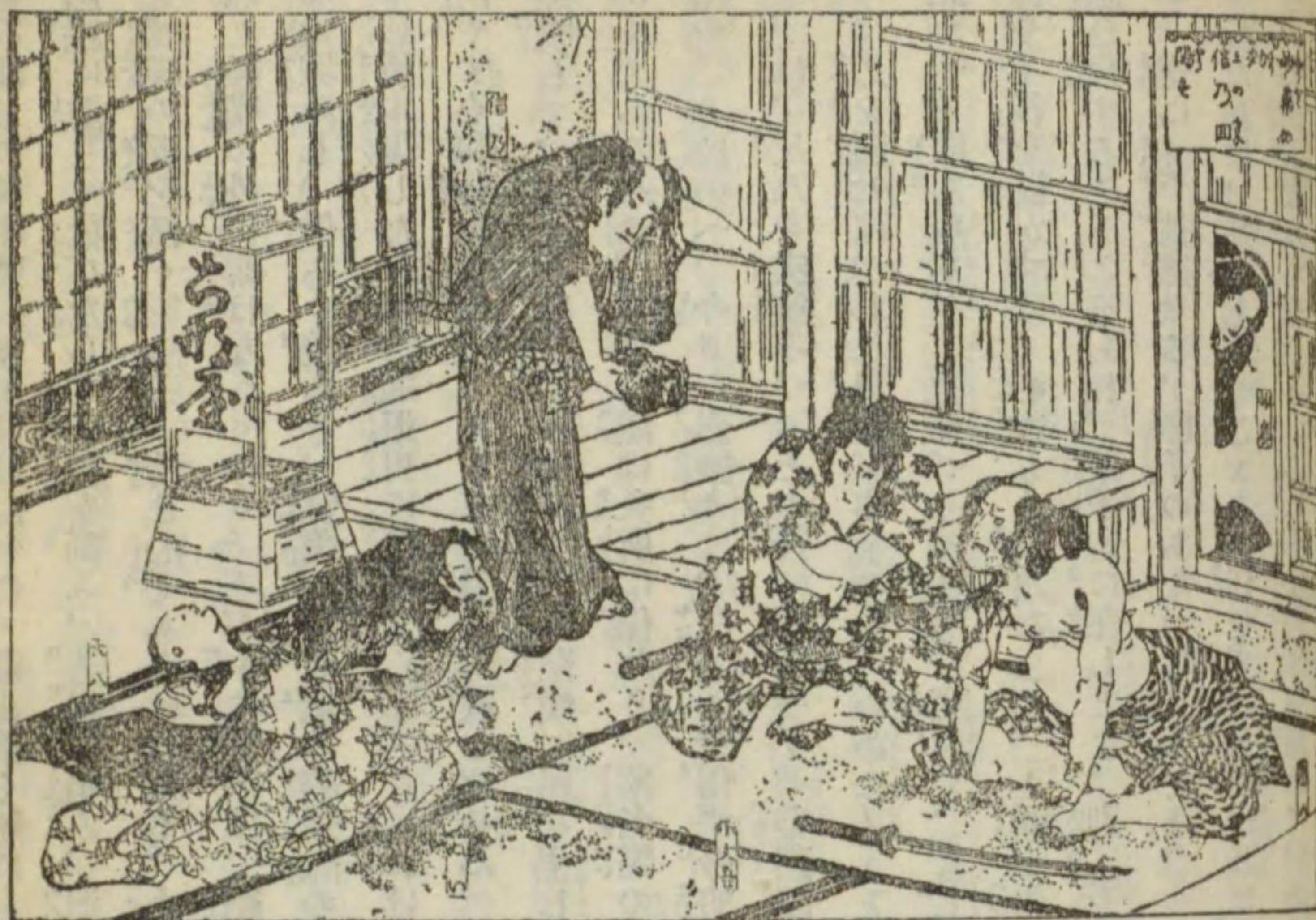


といふ聲はたゞ冬枯の、朝の原の虫の音よりも、衰果し、今般の呼吸に、小文吾は呼吸して、武心も庭多泉、流るる涙をふり落し、原來お沼蘭は現にて、事大かたに聞とりし歟。然らば冥土の迷ひは幾ん。山林は彼處にぞ。と良人のかたに推向れば、房八うち見て、目をしばたき、お沼蘭よ、思ひがけもなく、狂ひし刃は、おん身の薄命、わが子の横死は、過世の業報、勸解て今さらかへすによしなし。しかはあれ共夫婦の鮮血は、世にありがたき雋傑の、その死を起す藥劑とならば、是にましたる功德はあらじ。心からこそ迷ひもすれ、正念とりな亂しそ。と獎されてうち點頭、そころ得待るかし、思ひ堪ても堪がたきは、只大入が事のみぞ。亡骸なりとも今一たび見給はずや。とうち歎けば、房八頭をうち掉て、それも益なし、歎をまささん。皆是諄言、われながら、女々しかりける面なさよ。とくこの布を解法て、わが血も取らずや犬田殿。といふにいなとはいは白の、松ならなくに結びかけし、布を解んとする程に、嗚今霎時吾儕にも、告別を。と外面より、密音立て禁るは、是月山の妙眞也。開て入りつゝ又闖る、戸は走れども運びかねし、手の舞足の踏所、われにもあらで房八と、沼蘭がほとりに身を投かけて、哽かへり泣沈みつつ、且くして目を拭ひ、嗚房八、豫ての歎きやまして、かへらぬ旅の伴侶に、娘さへ孫さへ放遺る、わが身ひとつをいかにして、翌よりは又誰を友、誰をよすがに慰ん。子を先だて、幸なきもの、ありとある世の例にも、けふより入らん悲しさよ。寝られぬ宿に獨不樂て、苦しきこの夜を曉さんより、切ておん身の勇しき、最期を看一看ばやとて、竊に宿を起出て、又この檐下に來にけれど、とてもかくても存命ぬ、わが子と知りつゝ、迹追ふて、哭に來つると叱られん。最期の趣、これ彼の、いはれし事は竊聞つ、逢てこゝより返らん、と思へども足の進まねば、開ぬ戸口に身を倚かけて、音にこそたてね夏虫の、ひとり焦れて又濡らす、檐の玉水われからに、雨は涙の咎なりき。かうなるべしと知るならば、お沼蘭を送りかへしはせじ、大入をさへ諷ては來さじ。嗚の羽振き、百羽振き、かき口殿どもなき雲、わが涙とかなしさに、眼ひくらべつ犬田殿、涙の聲はいかならん。後の歎きを今暫そ、と知らず

よしもなきこと歟。嗚お沼蘭、吾儕は豫て事情を、知りつゝ、おん身に告ざりしを、心づよしと恨みけん。惜しや釋草の、霜に先だつ幸なさよ。さるにても大入が最期は特に遺憾し。やよ孺兒よ、祖母なるぞ、物いはずや。と亡骸を、抱きとりつゝ揺動して、又哽かへる千行の涙は、岩走る瀧のいとせめて、碎る骨の苦しさを、やるかたもなき歎きせり。沼蘭は有繋に姑嬢の聲は聞け共哀傷と、深處に息を吻あへず、房八も共侶に、弱る心を勵して、母御よ、さのみうち歎きて、病わづらひ給ふなよ。父の遺訓を果さんとて、身を殺せば母に孝ならず、子に又不慈の愆あり。一個は是にして、兩個は非也。孝道寔に難かな。便りすくなき母の事、頼むは阿舅犬田殿。われ、慈に顯身の、息ある程こそ苦惱しけれ、とくこの布を解てよ。といそかされて小文吾は、慰めかねつゝ嘆息し、われ認て妹夫を、撃ば又認て、妹は良人に撃れたり。父といふとも誰をか恨ん。大家よ、歎きは理りなれども、今更千萬口説も要なし、後世のいとなみ肝要ならん。と諫て癒て房八がほとり近く身をよせて、布引解ば、瀆る、鮮血を受る法螺の貝、吹かて無常の風はやき、死天の山伏わけ登り、岩懸む鷲の峯入に、夫婦手を抜き、子を負て、往方は十萬億佛土、蓮の臺、法の雲、踏な迷ひそ。と薦めたる、母はしばし、唱名の聲も涙に口隠けり。さる程に犬塚信乃は、曩に小文吾と房八が、うち合したる大刀音の、子舎へ聞えしかば、事こそあれ、と安からぬ、骨を鎮め、苦痛を忍びて、身を起さんとしつれども、腰の立ねば枕邊なる、刀を拿て杖にしつ、身を坐行しては息を吻き、幾間もあらぬ家の内を、虫の跂ふ如くして、出居と前房の間なる、障子のほとりに來つるとき、房八ははや痕を負ふて、その赤心を諱したる、彼條の物がたり、その妻その子の横死の事さへ、聞ては病苦も外になるまで、且驚き且悼みて、感涙を禁あへず、人を思へば身もよはりて、僅に障子一隔にして、その處へよる事得ならず、苦痛類に堪がたければ、そがまゝ其處に俯てをり。かくて又小文吾は、信乃が爲に房八夫婦の、鮮血を貝に盛るに及びて、信乃の愀然としてやうやくに、頭を擡つゝ思ふやう、生を好し死を憎むは、則天の心なり。君子は庖厨を遠ざくるとこそいふなるに、今わが命終るとも、いかで



かは義士節婦の、血をもて藥劑にせらるべき。人々の心操は、貴ぶべく歡ぶべく、謝して且受べからず。彼房八が孝なる義なる、類を古今に多く得がたし、わが身も翌は保がたけん。息の内に對面して、志を告げやとて、辛く坐行て進み近づき、障子の腰に手を掛ても、開るばかりの力だに、なくなり果し身の衰微を、いと朽をしく思ひけり。當下小文吾は、鮮血を貝に受しかば、房八はとく／＼奥へ。と願もて頻に進るにぞ。小文吾猜してうち點頭、甲夜より異なる事に紛れて、一トたびも彼人の病を訪ふに暇なければ、今さらに心もとなし。かくまでに調ひし、良藥を空せんや。さはとてしづかに身を起しつゝ、溢るゝまでに血を盛たる、校尾貝を右手に持て、子舎へとて遠しく、障子を莎羅と引開て、進みゆかんとする程に、思はず信乃に足踏かけつゝ、跌騰て持たる貝を、忽地破とうち落せば、信乃は肩より脛腓まで、透間もなく血を沃れつ、衣羅ければ肌膚に徹て、彼瘡口に流入りけん、苦と叫びて仰反たり。小文吾いよ、驚遽て、と見れば是信乃なりけり。そもいつの程より歟、犬塚はこゝに來たりけん。不思議に獲たる良藥を、うち落せしこそいと惜けれ。としてやよけん、かくせん、と後悔こゝにたつよしもなく、項と腋へ手をかけて、起せどもはや氣息なし。聲ふり立て呼活ば、倘念玉が覺もやせん、と思へば奥に憚あり。いかにすべきと氣を悶て、なほさま／＼に勦るにぞ、妙眞もこの爲體を、外にし見んはさすがにて、行燈の灯口推向て、いかにいかに。と問ふ程に、信乃は睡の覺るが如く、身を戰して、目を開き、吻と息して起なほる、面色忽昭回陽して、枯たる枝に花さく如く、腫色つきし金瘡は、瞬間に結痂て、邪熱祛き、身は軽く、元氣平日にいやまして、心地清々しくなりけり。小文吾は此光景に、再び呆れつ歡びつ、わが愈てうち被し、藥血の效なりけり、とはじめて曉りて面を起し、扱云々と告るに、妙眞も亦わが子夫婦の爲に、いと本意ありとぞ稱ける。當下信乃は形を儼して、小文吾にうち對ひ、曩に大刀音の聞えしより、いと心もとなさに、苦痛を忍び、身を坐行して、こゝまで來つれども、障子を開ること得ならず、俯つゝ障子の趣を、うち聞くからに感ふかかり。さはれ彼夫婦の血をもて、わが破傷風に沃ん



(す陽回乃信効の藥妙)

は、忍びがたき所行なれば、推察ばやと思ふ程に、跡まどひの失にて、うち被られし鮮血の效驗、病竊立地に本復しつ。今更辭するに由なしとて、その恩を謝し、義を感じ、且妙眞を慰めて、共に房八がほとりにいゆきて對面し、姓名を告りて、その義勇を譽、恩徳を歡びて、その死を憐み、今生にして交る日の、久しからざるを歎きつゝ、又いふやう、某ははからずも、和殿夫婦の惠によりて、難治の金瘡愈たれども、和殿夫婦を生すべき、良藥なきこそ恨なれ。われ幸にして難を脱れ、志を得ることあらば、わがこの衣を染たる鮮血を、後々までも秘藏して、その恩徳を子孫に傳ん。親の遺訓を守りつゝ、ふるき怨を解けばとて、死ても事の濟べきに、可惜義勇の壯夫の、その身のみかは。妻をも子をも、殺すは天道暗きに似たり。嗚呼これをしも命といはん歟。且母御拵のいと賢なる、内室のいと貞なる、その子も成長るならば、忠孝義勇親に背て、世の雋傑なるべきに、後なくならんはいと惜けれ。加旃犬田親子も、亦是忠信孝義の人なり。斯良善の人々の、縁を結び、義に仗ながら、



彼枉津日の神事敷、家の艱は惣に、憂事緊く船にして、死を救れしわれゆゑなりき、と思へば今又難治の病著、不思議に愈しも歡びならず。經を誦み、菩提を申ふ、追齋回向は法師の所爲也。われ何をもてこの恩義に、酬ふべしや。と感嘆の涙を沃ぐ露の玉、清き心ぞあらはれたる。小文吾も妙眞も、人の誠に憑しく、いと理りと思ふのみ、慰めかねし愁嘆の外に辭はなかりけり。そが中に房入は、絶なんとする氣を引起して、歡しげに信と見かへり、君子なるかな犬塚ぬし、信あり義ある、賞美の言の葉、善知識の引導も、千萬僧の説法も、これにますことあるべしやは。和君の難瘡本復したれば、進退更に自在ならん。かゝればはやくわが頸もて、彼帆大夫等を欺きて、水陸の守兵を退け、後やすく和君を落して、あるじの翁の縲紲を解せん。介錯たのむ犬田殿、とくく頸を、といそがせば、小文吾頻に嗟嘆して、そはなほ早かり山林、數刻深處に屈せずして、今までも物いふこと、勇悍和殿の如くならずは、誰かよくかくてあるべき。さはれ病は灸所に係り、縦名醫の門に立とも、存命べくもあらざれば、われ亦その意に従はざらんや。とはいへ、今さら影護きは、已ことを得ず今宵も宿せし、彼修験者念玉のみ。渠は別室にをり、甲夜過る比までは、尺八を吹遊みつ、その後は音もせず。渠熟睡して一毫も、絆のやうを知らずは許さん。今の世の人心、笑の中に刃を隠せば、われ只彼が事をのみ、いかに／＼と思ひつゝ、四目八臂にあらざれば、その寤たるや、寐たるや、見かへる暇あらざりき。まづその臥房を窺ふて、もし訝しき事あらば、とく禍の根を斷ん。事は洩易して成がたし、はやく後を防がずは、心盡しも仇事ならん。と聾き告て身を起せば、信乃は聞てうち點頭、いはるゝ趣今さらに、思ひ合することこそあれ。某子舎に在しとき、別室のかた敷とおぼしく、密譚ふ聲したり。只その事のみならず。欄に某彼處なる、障子のあなたに在しとき、しばし簀子の開む音せり。見かへらんと欲せしに、病苦甚しき折なれば、進退よろづこゝろに任せず、且暗ければ人賊猫敷、或は鼠の所爲なりし敷、定かには聞とらざりき。偏しその修験者ならずや。といふに小文吾うち驚きて、そは念玉に疑ひなし。且密談の聲せしは、謀しあはせしものあり

て、竊に背門より來つるならん。この條の事はや洩れて、密評せられれば腹れがたし。由緒大難われながら、絆や大事を懐ぬ。と慚愧後悔措よしもなく、腋刀の輪釘走せじと、舌潤したる怨敵の面色、進むを妙眞推禁め、その人同類あらんには、敵の多少は揣りがたし。漫にはやり給ふな。と心をつくれれば、房入は、氣を悶あげし、今般の苦痛、只とくといそがすにぞ、信乃も俱に、と遽しく、刀を帯て身を起し、小文吾に引そふて、齊一別小室へ、赴んとする程に、出居と前房の間なる、障子のあなたに人ありて、思ひがけなく聲をふり立、やをれ人々且く等、安房國守、里見治部大輔義實朝臣創業の功臣なりし、金碗八郎孝吉が獨子、金碗大輔孝徳法師、大坊、同藩の士、故伏姫君の傳なりし、蜚崎十郎照武が冢男、蜚崎十一郎照文等こゝにあり。今對面して疑念を釋ん、且く等。と呼かけて、障子を颯と推ひらき、竝拉つゝ近づくを、と見れば是別人ならず、大先達念玉は、幾年か旅に寢れたる、黒染の麻の法衣を、腰短に袂端折して、白棒の脚絆を穿、頭陀袋を背にして、左手に網代の笠を拿、右手に錫杖を突立つゝ、徐々となり出て、上坐にぞ着たりける。これは是、大なり。又修験道觀得は、鬚髮を髻結して、段々筋の麻衣に、精好の野袴の段子の下縁取たるを、腰印に著くだし、朱鞘の兩刀を跨て、白木の小四方に、書札四五通乗たるを、恭く捧持て、大が次の席に著ぬ。こは蜚崎照文なり。思ひがけなき事なれば、誰かはこれを怪ざるべき。その吉凶を料かねて、おの／＼心やすからず。當下、大は席上を、つらく／＼とうち見巡らし、人々ふかくな訝りそ。初より實をもて、汝達に告ざりしは、思ふよしあれば也。われは年來故ありて、仁義禮智、忠信孝悌の八つの文字、おのづから見たる、八顆の玉を索ん爲に、六十餘國を行脚すれども、一個の玉だも見るることなかりき。かくて今茲五月の初より、杖を鎌倉に曳く程に、昔歳竹馬の友なりし、蜚崎十一郎照文が君命を稟奉り、賢良武勇の浪人を、しのび／＼に募るとて、關東なる國々を、潛行くに環會ぬ。折からこの行徳に、云々の力士あり、そが一人は臂に、黒大なる痣ありて、牡丹の花に似たりといふ、風聞仄に聞えたり。その痣牡丹に似たること、思ひあはするよしあれば、そが



膂力をも試るべく、又その痣をも見ばやと思ふて、竊に十一郎と示合し、われは鎌倉の修験者、念玉と假名を告り、彼も亦鎌倉の修験者、觀得と假名を告て、途にて從者を備ふまで、衣賞も行李も似つかはしく、山伏に拵立て、共侶にこの浦に來つ。先達職得分の争訟に假托て、いぬる日八幡の社頭にて、犬田と山林が相撲の勝負を試みしに、技も力も劣らず優さず、但房八は小文吾に、藝術聊亞なるのみ。この折果して犬田が痣を、眼前に見ることを得て、いよ、捨がたきおもひあり。しかれども、多力にして智恵なきものは、是則牛馬に等し、兇勇にして殘忍なるは、是則虎狼に等し、縦犬田山林等、人に捷れし力藝ありとも、その心術正しからずは、聽るに足るものならず、よく行狀を見究て、後にこそ、と深念しつ、遊山甌水に假托て、十一郎共侶に、逗留して今宵に及べり。かくてきのふ甲夜の間、われ濱里よりかへり來て、呼門ども應ずるものなし。よりて背門より入らんとて、漫に立逸つ、生垣の、間より不圖うち聞けば、あるじ親子は子舎に、犬塚犬飼等と團坐しつ、彼玉の事、痣の事、又彼額藏の莊助が事さへに噂せしを、聞とはなしに竊聞つ、又闕窺つ、年來の、宿望成就の時到れる、わが歡びは俄鬼にして、地藏の寶珠を見るに勝れり。さはれその宵はこゝに宿らず、背門の庭より取てかへしつ、十一郎が旅宿にいゆきて、竊に云のよしを告、謀あはして今宵又、こゝに宿りを鶏が鳴く、東に廣き國々にも、類稀なる房八が、孝順義死の事の趣、犬田親子が良善信義、及犬塚が、賢にして薄命なる、又犬飼は友の爲に、志婆浦に赴きし、いくそばくその憂苦艱難、竊に見もし聞もして、且感じ且悼る、わが袖さへに濡しつ、おなじ浮世の笠やどり、其處に在る身も有繋にて、出て我うへ人のうへ、説諭すべき時宜のなれば、なほそのやうを見果んとて、かくまで時を移しつ、今はかうと思ひしかば、行李を披きて姿を更め、旅より旅に實れたる、われは行脚の老僧なるを、人々に示すべく、且房八等、その妻その子の、臨終正念、幽魂解脱の、導師ともならばやとて、二十年あまり埋木の、花さかぬ身の苦衣、體の衰になりたる也。われも昔は愛に權て、捨果し世にすみ業の、權もて地ふに餘りある、四個の義士等が不幸薄命、或は一

慈父、一賢母、或は貞婦と小兒の極死、おもへばむかし薄命を、歎きしわが身は數ならず。南無阿彌陀佛と唱つ、そが業略をぞ説示す。當下登崎照文は、扇を膝に攤立て、諸賢者、傳へ聞るや否や、わが主君里見殿は、文を右にし、武を左にす、當時無双の良將たり。この故に、仁義にあらざれば動さ給はず、禮智にあらざれば起給はず、忠信にあらざれば用ひ給はず、孝悌にあらざれば賞し給はず。しかれども安房上總は、南島の盡處にして、賢を招くに普からず。よりて某、主君の密詔を奉り、封璽を出て、英士を募め、且二十有二年、絶て信聞えずなりし、孝徳入道、大坊が、存亡を訪ん爲に、今茲東八ヶ國を編歴つ、はからずも鎌倉にて、法師と再會の事の趣、目今、大いはれし如し。されば、大と某と、姿を變てこの地に來つ。陽には不快にもなしたれ共、陰には水魚の如く、影の形に従ふ如し。さるにより、某は、甲夜に背門より潛よりて、俱に別室にをり、大が笛を吹くときは、われ立出ておのくの爲體を窺ひつ、われ退けば、大法師が立かはりて窺ひつ、緋おちもなく聞見して、感涙ほとと袖を濡せり。犬塚犬飼大田等は、既にわが主家に宿縁あり。山林はその事なくとも、亦得がたきの豪傑なり。われ、ともかくも相謀ふて、犬塚が今宵に逼る、窮厄を救ふべきに、早りて命に代らん、とせられしは遺憾し。わが主君里見殿は、おん父季基朝臣共侶に、結城籠城の折、忠戦の義によりて、成氏朝臣の御方たれども、近き比は、吾我の執權、横堀史在村が、奸佞非法の聞えあれば、おのづからに疎遠にして、交はじめの如くならず。されば犬塚難義に及ば、われ亦一臂の力を勤して、追手の兵を殺ちらし、相伴ふて本國へ、還らんとこそ思ふなれ。人々心安かるべし。と叮嚀に慰めて、來意を詳に告るになん、愈駭然としてうち驚き、思ひ惑ふてなほ覺果ぬ、夢に夢見る心地せり。そが中に信乃小文吾は、共侶に膝を進めて、大照文等にうち對ひ、思ひがけなき兩君の本名來由を示されて、疑ひ忽地氷解せり。しかれども、道德は又何等の故に、仁義禮智云々の、八个の文字見れし、八个の玉を索給へる。又何等の故ありて、身の痣牡丹に似たるものを、竊に愛顧せられしやらん。こゝろ得がたく候。と辭齊一尋れば、大はし



ばしばうち点頭、しかおもはるゝは理り也。さらば縁故を告ん。その所以は如此々々、と彼八房の犬の事、伏姫うへ始終の事、役行者の示現感應、并に白玉の數珠の事、わが身出家行脚して、二十二个年歴たる事、凡事の顛末は、安西景連が滅亡の條より、伏姫自殺の條まで、辭短く解示しつ。さていふやう、伏姫うへは賢にして、心操いと雄雄しく、孝にして慈悲ふかく、才貌無双の未通女なりき。この故に、八房の犬に伴れて、富山の奥に入り給ひしかど、絶ておん身を汚され給はず、法華經讀誦の功德によりて、彼犬さへに成佛せり。しかれども、因果脱れがたければにや。思はずもその氣を感じて、懐胎六个月に及び給ひしかば、差て自殺し給ふ折、その瘡口より一道の白氣忽然と立沖て、彼感得の數珠もろ共に、中天に晃き亂れ、仁義八行の文字見れたる、その八個の巨玉は、八方へ飛行し失て、残れるは地に墮たり。われ謬て鳥銃もて、件の犬を撃殺し、刺姫に傷けたれども、君公の仁慈なる、當坐に自殺を禁給ひて、御手親某が醫を剪捨つゝ、出家を許し給ひしかば、いかで失たる八個の玉の、往方を索て又舊の、數珠に繋ずはかへらじ、と誓ふて故郷を立去りにき。しかるに汝達現入等、又彼犬川莊助も、感徳の玉あるのみならず、その玉に見れたる、文字はわがこの數珠と符合す。且八房てふ犬は、その毛白と黒きを雜へて、黒きは牡丹の花に似たる、その數八個の斑毛なりければ、八個の花房といふ義をもて、八房と名づけ給へり。しかるに汝達莊助等まで、四個は俱に身中なる、その痣牡丹に似たるにあらずや。かゝれば汝達は、おのゝ父あり母あれども、その前身は伏姫の胎内より顯れ走りし、白氣の生れるものなる歟。その困を推して果をおもへば、皆伏姫のおん子にして、義實朝臣の外孫たるべし。且おのゝその氏さへ、或は犬塚、或は犬川、或は犬飼、或は犬田と、皆犬をもて稱すること、是不可思議の因縁なり。かゝれば汝達四人の外に、又四個の犬士ありて、その相似たる玉と痣を、具足したらん事疑ひなし。今その人を得ずといふとも、竟に全く聚ざらんや。わが宿願報時到りて、こゝに半果したる。疑はくはまづこれを、よく見よかし。と説諭して、伏姫の體見なる、數珠を取出して示すにん。信乃小文吾は驚

然と、玉の來由を感悟しつ、驚しく彼數珠を、受てつらゝとこれを見るに、現自他四人が所屬の玉と、一層も異なることなし、只顯れたる文字なきのみ。數珠は百顆にして、數とりの、八個の巨玉なかりけり。原來吾們が所持しつるは、みなこの數珠の巨玉なりき、と思へどもなほわれとわが、過世怪しむ兩犬士と、俱に妙眞も感嘆して、件の數珠を見つ拜みつ。幸にして、繚斷ざりし、夫婦が耳にも入りたりけん、房八は苦しげに、吻と息して眼を睜り、よに羨しき人々かな。わが子の横死は惜むに足らず、わがその隊に入るによしなき、なからん後までいと欲けれ。噫憾べし憾べし。と只管嗟嘆したりけり。大はこれを憐みて、そのほとりに立よりつ、やをれ房八、さのみな憾そ。汝犬士にあらずといふ共、その義烈は犬士と共に、後の口碑に傳らざらんや。われは則汝が祖父、安房の柚木の村平が武藝の師なり主なりし、金碗八郎が獨子也。八房大人の自殺の事は、定包を討滅せし、功成名遂て、榮利を願はず、死していよゝ亡ざる、是忠臣のこゝろなり。さりけれども、彼朴平が失は、尤わが父の憾る所、誰かこれをよしとせん。誰この順孫房八ありて、祖父の惡名を雪るに足る。よりてわれ今汝が爲に、朴平が疎忽の罪を、亡父にまうし宥るものなり。これを冥府の靈にして、清果を得よ。と諭したる、辭をちからに房八は、信と向上つゝ、左手を抗て、頬に、大をうち拜む、歡びさこそ、と妙眞は、又哽かへりて哭にけり。且して、大法師は、妙眞がほとりに臥させし、大八が亡骸を、と見かう見つゝ、嘆息し、この小兒憐むべし。死して時を歴たれども、その血色變らずして、さながら生る如く也。故なからずや、亦奇也。とひとりごちつゝ、小膝を突て、やをら死骸を抱きあげ、そがまゝ膝にうち乗して、脈を診んとて左の手の、寸口を楚と拿れば、大八忽地甦生して、曰と哭こと頻なり。臘生れてより、握詰たる左の拳を、初て撥きたりけるに、掌の中に玉ありて、信乃小文吾等が玉と異ならず。是には仁の字見れたり。加旃大八が腋肚に痣いて來つ、單衣の腋散より、黒やかに見えたるが、形牡丹の花に似たり。父房八に蹴られしとき、この痣はいて來しを、人みな今までしらざりけり。凡この席にありとあるもの、かゝる奇特に驚嘆して、歎きを復す歎



びの聲は早魃に雨ふりて、枯たる稿に八束穂を、得つるにもなほ勝なるべし。そが中に妙眞は、歡びあまる涙を拭ふて、小文吾と共侶に、又手負等を慰めつゝ、耳の邊に聲立て、房八よ、ややお沼蘭よ、大八は甦生して、如此々々の奇特あり、これ見給へ。と稚兒を、引よせて見せ、玉を見せ、やよ喃々。と呼活れば、房八やうやく點頭て、原來わが子は宿世あり。渠は坐艸の上よりして、左の拳を撥ねば、尪弱者とて賤しめられ、大八といふ渾名さへ、負せられてもかくまで、親には生れ勝たりき。渠その玉あり悲あれば、犬士と誰かいはざるべき。それを冥土の餓別に、受る親さへ果報あり、母もさこそほみならめ、適よき子を産にき。と譽られて沼蘭は目をひらき、あな歡しや。とばかりに、末期の一句果敢なくも、玉の緒終に絶にけり。喃いと惜しや。と妙眞は、むなしき骸に手をかけて、呼かへせども逝しより、かへらぬ人の數に入る、親としらで大八は、母御喃乳汁賜てん。と携るを懸て小文吾は、そはせぬものぞ。と後より、抱き留めてもとめあへぬ、涙はおなじ哀別離苦、顔を背けて泣然たり。當下戸山の妙眞は、頭を擡、涕うちかみて、大等にうち對ひ、孫大八が生れながらに、左の拳を撥ざりしは、胎内よりかの玉を、握りたる故にして、彼伏姬うへとやらんの、菩提を弔せ給ふなる、道德のおん手を觸られて、うち發くべき爲なりき、と曉りてもなほ怪しく侍り。就てはこの孫を、大八と呼侍るは、人の負せし渾名にて、片輪車といふ謎也、實は眞平と名け侍り。房八が親の字を、眞兵衛と呼れしかば、その眞の字をかたとりて、祖父が如此命し也。氏は則犬江にて、家號も大江屋と呼れ侍り。今さら思へばこれも亦、犬といふ字を冠せし、いとも不思議の因縁なり。願ふは今より孫が名を、大江眞平と呼し給ひて、物の數には足らずとも、犬士の後に居らし給はば、今日を閉る親へ孝養、これにますこと侍らじ。と涙ながらにかき口説ば、大は聞て、莞尔とうち笑、善哉々々、祖母の情願。氏も家號も主を識る、犬江なりしは亦奇也。且その親房八は、身を殺して仁をなせり。よりてその子は仁の字の、見れたる玉を得たり。仁は五常の最たるもの、懸天の心にして、獸者もこゝに居ること難し。今眞平は親に代りて、犬士の隊に入る

ものなれば、その眞の字を、おやと讃む、親の字に當りて、大江眞兵衛といひ告らば、その子にして親なるべく、房八は再生して、犬士の隊に入るに等し。且房八の二字を轉倒せば、則八房也。沼蘭を轉倒せば、是いぬ也。妙眞が俗名なりし、戸山と富山と和訓おなじ。俱に名詮自性にして、八房の犬富山に因あり。又妙眞は眞俗二諦、一念三千の妙旨によりて、その夫、その子、その婦と、俱に清果を得るの義ならん。その禍の胎を推せば、房八が祖父なりし、朴平が失にて、光弘ぬしを犯せしかば、嬖妾玉梓、時を得て、逆臣定包を佐けつゝ、主家を横領せしに起れり。又福の基を推せば、朴平が獨子なりし、大江眞兵衛その性直也。かくてその子孫の爲に、舊怨を釋んと欲して、慈善の誓願を發せども果さず。その子房八遺命を守て、身を殺して仁をなす。則二世の功德に生れり。因果の脱れがたきこと、鳥の林に集る如く、虫の草に聚くが如し。只悟りがたきのみ。かゝればその死を歎くべからず、只その生を樂むべし。さは思はずや。と解説せば、尪稍無明の醉さめて、齊一阿と感じける。當下小文吾膝を進めて、大等にいふやう、道德の教化いともかしこし、就て又一條の奇談あり。外姪大八の親兵衛が、玉を握りて生れし事、今さら思ひ合するよしは、某總角なりし時、二親の夜話に、往時寛正三年の比かとよ、この入江河の水中に、夜なく、光明を放つことありけり。人みな怪み思へども、怕れて水底を撈るものなし。わが父文五兵衛は、年來漁獵を嗜により、一夕網を携て、入江河原に赴きつゝ、件の光明を心あてに、しばしば網をおろすものから、物一ツだに罹らねば、其處に望を失ふて、その曉がたに宿所にかへりつ、次の日網を乾さんとて、引揚て擔へ掛るとき、網の中に物ありて、漏落るとおぼしき物を、撮て口に入れしかば、父は吐嗟と驚きて、その口中へ指をさし入れ、泣をも遣よりつゝ、彼落たりとおぼしき物を、撮て口に入れしかば、父は吐嗟と驚きて、その口中へ指をさし入れ、泣をも厭はで、探りしかども、はや吞下したりけるにや、竟に及ばで止にけり。いかなる物を吞たりけん、と思へば安き心もなく、はや日數経る隨に、沼蘭は恙もなかりしかば、やうやくに安堵しとぞ。彼水中の光物は、名劍にもやと思



ひしかば、夜を犯して網せしかども、底には藻屑もなかりしにや。この後は入江河に、光明を放ざりけり、と昔語にせられし事あり。願ふに女弟がいはいけなき時、網より落るを拾ひつゝ、吞たるは彼玉なるべし。かくて彼玉は、その腹中にあること十五年、沼蘭が十六歳の春、房八に歸くに及びて、いく程もなく有身つ、その年の多生れたる、赤子の左の掌に、その玉を握れども、時知らねばいまだ撥かず、今又こゝに四年に及びて、件の玉は見れにき。亦是不思議の事ならずや。と告るに人みな耳を澄して、いよゝ感嘆したりける。

第三十八回

戸外を成りて一犬間者を拉ぐ  
 徴書を返して四彦來使に辭す

信乃は件の物がたりを、つくづくとうち聞て、稱賛特に淺からず、さていひけるやう、某總角なりし時、家に畜たる犬の事は、昨夕あるじ親子に告にき。その折に外に立給ひなば、道徳にも聞れしならん。彼巨犬を與四郎と、名づけしよしは、其全身、黒白八今の斑毛ありて、その足はみな白かり。因て四白といふべきを、訛りて與四郎と呼べる也。後にその犬の斃れし時、庭に埋たりけるに、次の年の春、そのほとりなる梅に、最も異なる子を生て、一葉に八子麤り。世にいふ八房の梅是也。且その梅子に、仁義云々の八行の文字見れて、鮮にぞ讀れたる。日を経て文字は消失たれども、その核は今なほあり。彼與四郎はわが母の、感得しつる玉を吞ぬ、とは知らずして年を匿て、玉は犬の瘡口より、忽然と顯出て、某が手に入れり。梅の異名を木母といふ。木母は則母の木也。今この兒とわが玉は、おのおの母よりいで來れり。且彼梅子の八房に生りたるも、與四郎犬が八今の斑毛と、みなおのづから因縁ありしを、やうやく爰に曉得たり。加旃梅子に、八行の文字見れしも、亦某と莊助と、外にも六個の豪傑ありて、その相似たる玉と痣と、具足しつるを告給ふ、伏姫上の神靈なす、神事にこそありつらめ。現八房の犬を轉倒したる、房八河蘭の鮮血ならずは、よしや男女の血を流くとも、わが難衛かくまてに、速に應べしやは。いはんや又彼血を盛し、貝は

修験の法器なり、役行者の利生もあるべし。左にも右にもこの夫婦は、わが再生の恩人也、惜むべし。その身犬士の隊に得入らて、その子に譲るの故をもて、世をはやうせらるゝことよ。今は彼梅子なる、八今の文字は消失たれども、八房の梅と房八夫妻と、亦是名詮自性の義あり。核を夫婦が墓に伏て、末世に功德を標すべし。かゝればその子大八の親兵衛は、わが骨肉の弟に等し。後年里見殿に仕まつりて、俱に戰場に臨まば、某かならずこの子を資て、敵を塵にして功を讓ん。倘その戦ひ難義に及ば、近づく敵を殺拂ひ、或は箭面に立塞りて、その死に代りて今宵わが、受し再生の恩に答ん。かへすゝも山林、今中途にして傾逝の遺骸何物にか譬ふべき、悲しきかな。と友をおもふ、心の誠二鞋の、隔なき胸をうちあけて、懷囊に納たる、梅の核を撈り出しつ、包紙を推披きて、房八にぞ視しける。さればこの梅の核は、後に件の夫婦が墓に、蒔れてより、芽を生じ、八株の弱木年を歴て、その實八房に生しかば、里人なべて件の梅を、房八の梅と稱へ、又八房の梅と呼びけり。間話休題、房八は大かたならぬ、信乃が誠心の歡しさに、苦惱を忍びて、梅の核を、と見かう見つ、膝折起し、吁賢なるかな犬塚ぬし、博愛言下に顯れたり。某は過世あらで、犬士たることを得ざれども、金碗殿の子息にをせし、大道徳に邂逅して、祖父が罪を宥られ、いとなきがたき年來の夙願成就せしのみならず、齡甫て四歳なる、大八の眞平は、親に代るの義を取て、親兵衛と字せられ、仁と名づけらるゝ事、意外の大幸、今般の歡び、何事歟亦これにますべき。かくはわが子は犬士たり。且その小父に犬田ありて、後見をせらるべく、犬塚ぬしを師とし頼みて、此彼の愛顧によらば、二親なしとも何をか憂ん、わが面影の怪しきまでに、犬塚ぬしに似たりしも、是等の因果あればならん。加之某夫婦も、玉に象る八房の、實生の梅もて墳墓の、標としもせられなば、これ員外の犬士におなじ。望足り候。と答る間に、ろなの、惜む別を促し貞に、埒に鶏の聲立て、夜は明なんとぞ亂れ鳴く、房八耳を傾て、はや鶏明なり、東はしらまんと。歎きによりて時後れなば、わが死も遂に空事なるべし。阿舅々々、介錯たのむ。とくくくと焦燥にぞ、小文吾は



今更に、推辭べき事ならねども、猛き覺期にいとどなほ、足も進まず拳も撓みて、應をしつゝ立かねたり。當下猿崎照文は、房八小文吾等にうち對ひて、人々よ、わが言を聴け。促すとも、惜むとも、生死は天理自然にして、亦いかにもとすべからず。むかしわが父十郎は、伏姫富山に入り給ひし日、おん傳を命ぜられ、直に汗馬に鞭うちて、姫うへを追奉り、彼山河のはやき瀬を、わたさんとする程に、人馬俱に推流されて、其處に命を隕したり。しかるに某、此度君命を稟奉り、大約關の八州に、賢良武勇の雋傑を、募んと欲する程に、大法師に環會つゝ、その引接に依るまに、伏姫上のおん子に等き、四大士に相見しは、賢を招くの本意に稱へり。されば山林房八郎は、その義その勇大士に劣らず。非命にして今終るとも、宜里見の家臣たるべし。わが君公の徵書こゝにあり。拜受して夜臺に就かば、その子親兵衛幼少くとも、君臣二世の恩義深かり。身後の榮子孫の爲にも、亦よからずや。と薦揚の、こゝろを述べて小四方なる、一通を取あげて、房八が額に翳させ、又小文吾を見かへりて、大田生この意を得つる歎。房八郎はけふよりして、里見殿の家臣なれども、其身必死の深痕を負ぬ。かゝれば忠勤に餘日なし。只その僚友犬塚信乃が、厄に代り死を救はせ、主君の爲にするに等し。是莫大の忠なり義也。救ひがたき深痕と知りつゝ、いつまでか苦痛をさせん。介錯も亦惻隱ぞ。と奨す武士魂に、小文吾有理と思ひかへして、腋刀引提て身を起せば、房八莞尔とうち咲て、鄙言にいふ人は武士、世は唯なざけ、蚤崎ぬし、厚意謝するに餘あり。われは賤しき船長の、子に生れても幸ありて、武門に入てその死を得たり。さらば阿舅の刃を勞せん、いざ介錯を。と拳を、合して項を伸たりける。こゝろ得たり。と小文吾が抜側めたる刃の光りに、吐嗟とばかり母妙眞は、身を劈くより堪がたき、胸は板久の潮けぶり、よせて碎けてはかなくも、消てゆく子をとどめかねし、涙の出水、海に入らば、瀬による龜の浮木にも、復あひがたき別のかなしみ、聲を立じ、と噎縮る、袖もろ共に、陽の斷るばかりに哭沈む。信乃も有聲に哀戚の、觀を痛めてうちまもれば、大法師は房八が、ほとり近く歩み立て、雙前被つゝ俯を示し、しづかに授かる念傳の、歎

は十聲と、八聲の鶴の音、雌は鳴ねども、雌は哭く、まだほのぐらき心の暗を、照らすともなく振揚る、刃の影も東天紅、雞鳴ながらの羽搏きと、共に閃めく大刀音は、無常迅速、夢歎とばかり、覺なば死天の山林、惜や抄の獨花の、ちり際清き最期也。妙眞はかねてより、かゝるべしとは思へども、おもひ得堪て伏沈み、聲ふり絞て號哭せば、膝を枕に再寐せし、稚兒は驚覺て、そこら烏亂々々見かへりつ、爹々さま喃。と立よれば、小文吾は遽しく、血刀控に納めつゝ、その亡骸を見せじとて、房八がもて來りし、信乃が血著の麻衣を、うち披きてぞうち被たる。ともしらねばや稚兒は、訝はしげに又見かへりて、奶々さまなどていつまで歎、さのみは獨臥給ふ。祖母さまのむつかるに、よき物夥まらして、賺して遊し給はずや。その替に吾儕には、乳汁賜てん。と死顔を、さし覗きつゝ細小なる、手を懐へ入れんとすれば、妙眞いよ、堪かねて、慌忙き稚兒を、やをら引よせ抱縮つ。理りなれど大八よ、縦百年呼覺す共、爹々はかへらじ、奶々も得起じ、慕ふてかなしき事をないひそ。いはるゝ隨にわが臂は、張や裂ん。とうち歎く、憂には洩ぬ袖の露、皆手を叉き頭を低て、慰めかねつゝ慨然たり。浩處に、外面俄頃に騒しく、投らるゝ音、叫ぶ聲、檐下近く聞えしかば、衆皆齊一驚立たる、中に小文吾いちはやく、土間に飛下りつ、樞戸を卒と開て、見る間あらせず外面より、控と投込む人礫に、その人樞に頭を撲して、腦黃垂て死てけり。人々いよ、驚きつ、信乃は手ばやく紙燭して、小文吾に見するになん、死したるものは別人ならず、是則 甲夜に來つる、鹽濱の鹹四郎也。これは、と訝る程もなく、敵を左右に挟みて、衝と内に入るものあり、と見れば犬飼現八也。拉れたる間、者は、是鹹四郎が等類なる、牛根猛六と、板扱均太なり。大力に締著られて、目をそらさずに、舌を吐き、悶苦しむ息吻あへず。當下信乃は立かはりて、樞戸を闔しかば、現八は兩敵を、一度に控と投累ねて、膝に引布き動せず、小文吾信乃等に對ていふやう、某叢に志婆浦へ赴きて、破傷風の藥を求めしに、彼藥店はいぬる年、鎌倉へ移住して、今は彼處になしといへり。忽地望を失ひつゝ、惘然としておもふやう、こゝより又鎌倉へ、いゆかばいばかり急ぐとも、



を穿て、簀子の下に身を潜し、緋みな聞ぬとおぼしくて、蚊に刺れたる尻を掻き、蟻蟻かゝれる面を擦、三人聲一此  
 間より、蝦蟇の如くに跣出て、櫓下近く立聚合、彼罪人信乃が事を、汝も聞し歟。われ認得たり。とく莊官許訃  
 て、甲夜の怨を復すべく、賞錢は心に願つべし。とくく走れ。と密語て、歩を竊つゝ共侶に、去んとしてる後より、  
 某矢庭に跳菟て、一賊が袴上搔癩み、引戻して掉胡せば、残る兩賊は駭怒て、打んと拳を閃かす、下を拂ふて  
 筋斗らせ、起んとしたる初の一賊を、又搔癩て裡面へ投入み、なほこりずまに組んとせし、兩賊を左右に挟みて、  
 一人も漏さずかくの如し。と辭せわしく告るにぞ、小文吾聞てふかく歡び、この三個の癖者は、名を云々と呼れたる、  
 妻もなく子もなき奴原也。辻相撲を好めども、心よからぬもの共なれば、近屬はよせつけざりしに、甲夜に此奴等推  
 蒐來て、云々の事ありしかば、その怨をかへさん爲敷、再び潛近づきけん、緋みな聞れしは危かりき。和殿彼處に微  
 りせば、遂に大事を懼りてん、密議を聞たる奴原なれば、命は既になつ虫の、火虫のわれから死に就くのみ、息絶絶  
 して禍の根を斷給へ、とくく、といふに現八は兩敵を、膝に引著壓へし儘に、項骨屈と應折けば、苦とばかりに  
 叫びも果す、諸齋脆く目鼻より、血を流しつゝ死てけり。かくて現八は、孟六均太鹹四郎等が死骸を片隅に推累て、  
 物うち被て、よく掩ひつ。さて信乃には、病著速に本復の歡びを述て、小文吾が苦心を勞ひ、引れて、大照文等に  
 對面し、且妙眞を慰めて、山林夫婦が義死を嘆賞し、その子大八の親兵衛が犬士たる事を祝しける。當下小文吾は、  
 現八にいふやう、犬飼生は外に立て、絆の顛末を聞りといへば、今さらくだしく告るも要なし。既にはや天は明  
 めらんに、猶豫せば彼帆大夫等、夥兵を將て必來つべし。縦贖首をもて欺き得るとも、さてはよろづに不便也。わ  
 れは首級を齎して、莊官許赴きて、親を救ふてかへり來てん。門を出ればよう見ゆる、橋のほとりに繋るは、わが  
 家の釣舟なり。水陸ともに警固の夥兵等、釋去れるを見定めて、房八沼藪が亡骸はさら也、人々を舟に乗して潛やか  
 に市川なる、山林が宿所まで退き給へ。和殿は前にもこの地に來つれば、大かたは案内なるべし、因てをさくうち



(すに 壓を 若 間 三 力 勇 八 現)

ける翌には還りがたし。犬塚氏は大病也、われ往返に日  
 を過さば、よしや藥を購得るとも、輻射の窮を救ふに足  
 らじ。とく立かへりて犬田親子に、よしを告て相譚はど、  
 なほせんすべのなからずやは、と吐裏に尋思しつ、そが  
 まゝに取てかへして、且くも途に憩はず、只管急ぎにい  
 そく程に、丑三の比及に、門までかへり著しかど、裡面  
 にはいたくうれはしき、人々の聲聞えたり。訝しければ  
 仍なく入らず、よく聞定めて後にこそ、とおもふて彼處  
 に立在つゝ、あるじの翁が不慮の窮厄、山林夫婦、その  
 子の事、犬塚生は幸ひに、難瘡早に愈し事、大道徳と  
 蚤崎ぬしのうへさへ大かたは聞とりつ、歡しさと哀しさ  
 に、潰れし腎はおちつかず、進み入らんとして、又思ふ  
 やう、山林は深瘡を負ぬ。その妻ははや絆絶て、犬塚不  
 思議に平愈たるに、われ今圓坐に著たりとも、死すべき  
 人の生るにあらず。此あたり何となく、心もとなきこと  
 あれば、天の明るまでこゝにをりて、外を防ぐにます事  
 あらじ、と思ひにければ、駒繫ぐ、袖垣に身をよせて、  
 音もせて時を移せば、果して三個の癖者等、此間なる處



任す、こゝろ得給へ。と密語ば、現八聞てうち點頭、そこらの事は心やすかれ、犬塚生と相譚て、ともかくもすべき也。天は既に明たれども、猶もかう暗かるは、今朝はふかく靄立こめて、咫尺の間も別がたし、されば鳥の聲だにせざるなり。巳の比及ならざりせば、この靄決して霽べからず。皇天后土吾黨を、祐たまふにぞあらんずらん。よしや出るに遅くとも、緯の妨あらじといふ。當下、大は、照文を見かへりて、既に四犬士こゝに聚合り。御説を傳へ給はずや。といふに照文こゝろ得て、信乃現八小文吾等にうち對ひ、嚮にも演説せしごとく、おのゝは大かたならぬ、里見殿に由緒あり。おん黒印を受納めて、主従の義を固せられよ。相伴ふて安房へかへらん。おん承勿論なるべし。と聞えしらして徵書を、人別に遞與にければ、信乃等は謹て拜受して、これを照文に返しつゝいふやう、某等は幸ひに、尊藩に宿縁あり。譬ば後に將軍まれ、管領まれ徵させ給ふとも、他祿を受べきものにはあらず。しかれども、今俺們五人の外に又三犬士あるべきに、いまだその人に遭ず。さはその三士はありやなしや、目今定かにいひがたけれど、額藏の莊助は、既に同列の犬士也。彼人ひとりこの席に缺たるをいかゞはせん。彼犬川莊助は、故伊豆の北條の莊官なりし、犬川衛二が獨子也。その母親は蛭崎ぬしの先考と聞えたる、十郎ぬしの從弟也とぞ。寛正六年の秋九月、その父衛二は横死しつ、妻子は追放せられにけり。この年莊助六七歳、乳名を莊之助といへり。母親は辛して、稚兒を携つゝ、さして往方は水長島、安房に親族は蛭崎のみ。某處かとばかり心あてて、その冬の比かとよ、武藏まで來つるとき、大塚の里にして、母親俄頃に身まかりぬ。是により莊之助は、土地の莊官、墓六が小厮にせられて、額藏と名づけられ、今もなほ彼家にあり。身は村落に成長れども、武藝を嗜て、謀慮あり。孝にして且信義を重んず。實に得がたきの豪傑也。餘人はしらず某は、彼莊助と俱ならで、官途に進まば、是不義也。愚意の趣かくの如し。賢察せられれば幸ひならん。と推辭ば小文吾現入も、辭齊一亦いふやう、某等が願ふ所も、大塚と相同じ。一團大塚の里に赴き、彼莊助に對面して、これらりの事の趣を、告すは大塚のみならんや、某等も本意にた

がへり。かくて壯く武者修行して、おのゝ武術を傑出すべく、里見殿のおん爲に、敵國の案内と、その強弱を窺ひ知らば、後に資となることあらん。されば又この五人の外に、三犬士あるならば、値すして轍べきやは。八士全く聚りて、安房へ參るとも遅きにあらじ。この徵書はその日まで、和殿預り給ひぬ。と志を述しかば、照文聞て嘆賞し、三士の辭讓寔に賢なり。嚮に某葉崎にて、大田生の大忍の、凡ならぬに感佩して、世に大勇士ありといふも、これにますものあらじとおもへり。かくて又こゝに來て、犬塚生の信義博愛、犬飼生の遠慮勇力、いづれをか兄とせん。孰をか弟とせん。俱に蓋世の豪傑也。又彼犬川莊助は、伊豆の北條の莊官なりし、衛二が子ならば、某と、再從兄弟なるもの也。犬川衛二は横死して、その家斷絶したること、某近屬北條を過りし日、里人等に傳聞て、いとうれはしく思ひたるに、その子は今も恙なく、犬士の一人なりける歟。幸ひ尤甚し。北條はわが父の故郷なりしと聞くものから、遠くもあらぬ類族のうへすら、年來迭に疎濶にして、その家の斷絶を、今茲はじめて傳聞し、戰國の習俗、是非に及ばず。そはとまれかくもあれ、三士の辭讓も誣がたし。しからんには某も、俱に大塚の里に赴き、莊助に對面して、徵書を授くべき歟、貴僧の意見聞まほし。と問つゝ、大を見かへれば、大は霎時沈吟じ、武藏なる大塚には、管領扇谷麾下の軍將、大石兵衛尉が城墩あり。倘額藏の莊助は、云々の勇士なれば、里見より募らるゝ、といふ事はやく彼處へ洩なば、大石が陣番等、莊助を取籠て、決してこなたへ遞與べからず。さる事あらば可惜しき、一犬士を喪ふにあらずや。貧道は行脚の事なれば、彼處へいゆきて、莊助に對面して、命を傳るとも、人の疑ひなかるべし。しかはあれども蚤崎生、たまゝ四犬士を識ながら、その一人だも俱せずして、安房へかへらば何を畏、何を徵に反命をまうすべき。かゝれば大江親兵衛と、その祖母妙眞を俱し給へ。親兵衛既に安房にあらば、自餘の犬士は招ずも、竟に參聚ふべし。貧道も一たび故郷へ還りて、君の見參に入らん事、願はしからぬにあらねども、むかし失たる八顆の玉、いまだ全く聚らざるをいかゞはせん。かゝれば滿願の時至らん日に、七犬士を伴ふて、



見參すべく思ふかし。よりてその微書は、野僧且く預るべし。犬塚犬田犬飼等は、且市川まで退きて、はやく大塚の里に赴き、竊に事の趣を、莊助に告るこそよかんめれ。貧道は、山林夫婦の爲に、追鹿の讀經して、後に彼處へ邁くべけれ。この議に従ひ給へかし。といへば照文大に歡び、別に四通の微書を、とう出て前の三通と、共に、大に遞與けり。當下妙眞は、大照文等がほとり近く、親兵衛を果らして、さていひけるやう、かばかりの稚兒を、はるばる安房へ徴るゝ事、こよなき幸ひに侍れども、三大士すら推辭まうすに、物數ならぬ親兵衛が、ひとり先だちてまるるべきや。退くとも進むとも、人々と共侶に、と宣はばおん情ならめ。今孫をのみ微れなば、影護く侍りといふ。理りなれば小文吾も、外任の爲に辭を添て、只共侶にと辭しにけり。さりけれども照文は、つやく許す氣色なく、説諭さんとて争ふを、大は急に推禁め、今又これらの問答に、時を移すは要なき事也。親兵衛は小兒といふとも、亦是犬士の一人なれば、則隣趾龍孫也。これを他領へ措べからず。さればとて、今將て安房へ邁にあらねば、後に議する共運きにあらず。文五兵衛が還り來なば、外祖の意見もあるべき歟。伏姫うへのおん數珠は、役行者の通力もて、授給ひしものになん。さればにや、姫うへ幼稚をせし時より、卒れ給ひしその日まで、行者の示現しばくなりき。願ふにわれと十一郎と、大田山林が甲乙を、試んとて修験者に、打扮てこの地に來つ、はからずも四大士を、相識る事は是も亦、役行者の利益ならめ。さらば親兵衛が進退も、亦おのづから便宜あらん。朝霞ふかく立ちこめたりとも、今ははや時移りぬ。小文吾は謀りし儘に、とく莊官許ゆかずや。と促せば阿と應つ、信乃が血著の麻衣の兩袖紗羅離と裂とりて、房八が首を引よせつ、手がへしはやく包めども、見つゝ又哭く妙眞は、包かねたる袖の雨、霽間は絶てなき人に、被せなば後の片身衣、これやこの世の別ぞと、知らずも慕ふ稚兒は、小父さま何處へ邁給ふ、吾儕も俱に。と責難るを、信乃は謙して引放つ、糸のもつれの苦しさと、歎きはおなじ煩惱の、大飼に目をあはしつゝ、齊一悲歎したりける。かくて小文吾は、數用余て腕に懸、首級を右手に懸込て、大照文に別な言、信乃現入に後、

事、鹹四郎等が屍は、入江の淵へ、と密やかに、謀しあはして妙眞を、慰めつ又哭しつ、親兵衛が玉の事さへに、堪ぬ歎きに懶惰で、失し給ふな。と心をつけて身を起せば、霎時目送るもろ人を、立して迹に續はる、あはれ夫婦の亡骸の、夫は舊の儘ならで、軀と首の死別れ、歎きを霧と憂也露に、胸も曇て尙暗き、門の戸を卒と推あけて、廻しをれし鳥自物、朝立遠く出にけり。

南總里見八犬傳 第四輯 卷之四終



南總里見八犬傳 第四輯 卷之五

東都 曲亭 主人編次

第三十九回

二箱に斂めて良儔夫妻を莖る  
一葉を浮めて壯士兩友を送る

文明十年 戊戌の夏六月廿三日の朝未明に、犬塚犬飼の兩義士は、大照文等と俱に、犬田小文吾を目送りたる、門の戸やをら引闔て、舊の席に團坐しつ、まづ亡骸を隠さんとて、泣洗みたる妙眞を、おぼつかなくも案内にして、辛して納戸より、求出たる兩箇の葛籠に、山林夫婦の骸を、精悍しく斂めつ、そが表を筵に包みて、船荷のごとく造る程に、大法師と照文は入江橋のほとりにいゆきて、文五兵衛が舢舨を、竊に背戸川へ漕よするに、露ふかければ人にしられず、又彼孟六鹹四郎等、三個の悪棍の亡骸は、信乃と現八と、背戸の河原へ扛もて出しつ、腰に錘の石を附て、水底ふかく沈るに、大はこれにも回向して、頓生菩提と念ずれば、人みな有繋に不便におぼえて、共に念佛したりける。とかくする程にはや、緯遺もなく整ひしに、天はなほ暗うして、進退既に便宜を得たる、入江橋のほとりには、戌兵絶てなし。誘給へこの隙に。と聶きつ領きつ、謀し合する出船の機、とくくと急せば、妙眞は大八の親兵衛を抱きつ、葛籠に添ふて船に乗る。信乃現八もうち乗りて、板子の下に伏してをり。當下蟹崎照文は、篋笠に姿を襲して、竊に船を漕出せば、大はひとり留りて、霎時河原に目送るに、送に其處とも見えわかず。方には義士節婦を、皇天憐み給ひけん、露はいよ／＼立籠て、咫尺の間も定かならねば、彼帆大夫が遠見の兵、なほ退かてありとも、いかでかはこれをしるべき、船路に離る事なく、海上遙に走る程に、露散りて日は出けり。されば

こそあれ照文は、緝とり逃ふべくもあらず、素より安房人なりければ、水をゆくこと陸より易かり。はや市川の舟見えて、吾儕の家は彼處ぞ。と妙眞が指すまに、船は門邊に着にけり。緯の便宜は是のみならず、犬江屋の篙工柁は、おの／＼遠く船を出して、昨夕より一人も在らず、留守には耳のいと疎くて、只炊をする婆々のみなれば、信乃現八は後やすくて、照文とともに河岸に登りつ、妙眞を先に立して、柁に代たる兩箇の葛籠を、そが儘母屋に運び入れて、家庶のほとりに打居たる、客もあるじも慰めかねて、齊一嘆息したりける。しかはあれども妙眞は、心ざまなみなみならねば、わが子の義烈に羞たりけん、復うればしき面色せず、奥なる一室の塵うち拂ふて、信乃と現八を、この處に潛しつ、照文にも茶を勧め、膳を薦めなどしたる、饗應の丁寧なる、又暇ある折々は、しのび／＼に家庶に對ひて、香を焼き花を齎して、わが子と息婦の後世を弔ふ、看經の外他事もなく、忘れんとすれば生憎に、その面影の目に見えて、いはれし事の胸にのみ、おもひ出つ、禁めかねて、落る涙の玉匣、ふた親ながらなき身ぞ、としるやしらずや稚兒は、母を慕はで大人しく、或は外に出、門に立て、獨遊に餘念なき、鳩の車に竹馬に、走り疲れし假寐の、裙に衣添ものもなき、睡貌を見れば親に肖て、逞しげなる生育も、今茲も末は遙なる、土用央にたつといふ、私の風より悲しきは、残れる老の身にこそ。とひとりごちつ、抱き揚れば、夢歎現か懐へ、手をさし入れて萎たる、乳房を探るも哀れなり。かくてその曠昏に、小文吾、大はうちつれ立て、行徳より來にけり。妙眞はやくこれを見て、いざとて奥へ案内をすれば、信乃現八照文等は、歡びて對面しつ、彼條の首尾を尋て、文五兵衛が安危を問ふに、小文吾聲を密して、曩には某路を急ぎて、莊官檀内許赴きしに、露深ければまだ開ぬ、諸折戸をうち敲きて、犬塚信乃が首捕て、來れりと報しかば、且して召入れつ、新織帆大夫奥より出て、みづから事の趣を問料すに、狐疑の用心大かたならず、檀内はわが側に坐り、夥兵はおの／＼十手を把りて、左右間ぢかく捕卷たり。そのとき某いひけるやう、豫て仰を稟たるごとく、僕きのふの黄昏に、宿所に走り還りて見れば、果して一個の旅客



をり。そは武士にして身の中に、刀瘡などのありとおぼしく、起居に聊不便也。よりて彼とき賜りし、骨相圖をうち披きて、これ彼癩に合し見れば、年紀より面影より、被たりし衣の色までも、その模様些しも違はず。かゝれば警者に撈らしても、その人ならずとはよもいはじ。現疑ふべくもあらぬ、信乃とやらんに極れど、と思ひにければさり氣なく、晤ひよりて酒食を薦め、更闌、臥房に潛よりつゝ、只一ト刀に刺殺して、首捕て候なり。交り廣き僕だにも、きのふまでは見も知らざりし、犬塚信乃をいかにして、親文五兵衛が識り候べき、しらねば舍藏べくもあらず。そをおん答に胡論なりしは、事に熟ざる老人の、僻耳にこそ候はめ。あはれ此度の恩賞に、親の縁組を免させ給へ。といひつゝ、彼首級を取て、包みし儘にさし寄すれば、莊官 權内受とりて、實檢にぞ備へたる。當下新織帆大夫は、包みし衣をよと見かう見つ、又うち披きて、首級を見つ、又骨相圖に合して見つ、忽地横手を敲と拍て、感ずること半响許、満面に笑を含みて、某を招き近づけ、小文吾微妙き働き也。こは紛ふべくもあらぬ、信乃が首級を進らしたれば、文五兵衛は科を免して、汝と共に宿所に還さん。われも亦遅々しがたし。速に潛我にかへりて、事の趣を聞えあげずは、怠慢の罪を得つべし。とく人を走らして、戍兵を退せよ。その餘の事は云々と、うち案じつゝ、檀内に、こゝろを得させなどする程に、靈齋て日の升りしかば、帆大夫は促装して、首桶を携、夥兵を將て、遽しくかへり去りぬ。わが父は免されしを、相伴て入江に還るに、彼權謀をまだしらねば、身の縛の釋たるを、歡べる氣色もなく、却にうらみ良なる、胷中さこそと推量れども、路次にしあれば告るに由なし。かくて宿所にかへり著ば、大道徳に迎られて、みな子舎に圓居しつ、さて身がはりの事の趣、房八が義烈、沼蘭が枉死、及薬血の奇特によりて、犬塚生の難産平愈、大八の親兵衛が玉の事徳の事、念玉 觀得兩修験の、本名本心遺もなく、わが父に報しかば、大道徳も人々を、船に乘し靈を犯して、市川へ遣したる、事のよしを告給ひき。父はつら／＼聞くに、一トたがひは驚きつゝ、又一トたがひは驚きつゝ、且驚き且驚き、涙を袖に濡かねて、涙に流れてゆく水、かへらぬ涙をく

り返す、相繫に老の心細くて、今さら何に立がたし。かゝれば涙は道徳に俱して、とく市川へ赴きて、妙眞どのにがを勤しね。房八沼蘭が野邊送りは、今宵にぞあらんずらん。葬りの事果なば、汝は彼兩友を、潛やかに船に乗して、犬塚まで送れかし。われも共侶にと思へども、婢兒們ははまだかへらず、よしや彼等はかへり來るとも、親子齊し出てゆかば、留守の程なほ心もとなし。且愁に彼柩を見れば、又哀みを増んのみ。家厩に櫛を折添て、看經してあらんこそ、老人には相應しからめ。汝はよろづを聞き、とく／＼、といそがしたる、親の意に任しつゝ、彼此に血に染たる、物大かたに洗ひ流して、道徳に俱して來れりとて、その襲略を報にければ、人々感嘆せざるもなく、就中現八は、文五兵衛が無異を祝して、小文吾を勞ふことの、大かたならぬ言葉の末にも、なほ山林夫婦が死を、惜むところぞ深かりける。且して妙眞は、涙うちかみて、小膝を進め、喃犬田ぬし、かくはわが子の志、竟に空しからずして、輒く追捕の人々を、歎き得たれば亡魂の、さぞ歡しく思ひ侍らん。けふは篙工等もみな在らず、現大人のいはれしごとく、葬の事今宵ならずは、いよ／＼影護かるべし。といへば小文吾點頭て、己もさこそおもふなれ。犬塚生の急難の、一旦は釋たれども、こゝより潛我へ遠くもあらねば、房八沼蘭が死したる事を、且く人にしらすべからず。四鄰の人のもし問はば、沼蘭は聊故ありて、行徳へ遣したり。房八は所要ありて、鎌倉へ赴きたり、と答給はんこそよかんめれ。月も纔になりたりし、この密闇を究竟なる亥中の頃に如此々々。といひ合しつゝ、時刻をまてば、大法師は亡骸を、斂めし葛籠のほとりに退りて、潛やかにぞ回向をすなる。枕念仏も夢の世や、彼邯鄲のあはれげに、母が手づから焚おろす、出立の飯も逆縁の、涙を鍋に落し味噌、妹さへ伏さへ花開かて、縁しは薄き實なし汁、すくはせ給へ阿弥陀佛、弥陀仏々々と念すれば、はや初夜過ぎて寺々の、鐘も無常を示すなる、流轉の巷、煩惱の、狗の聲より更そめて、生死の海近ければ、彼岸にうつ波の音、よせては返す呼吸の、徂徠の人の迹絶て、既に時刻になりしかば、おの／＼手ばやく支度をするに、房八沼蘭が亡骸を、斂めたる兩箇の葛籠は、小文吾と現八と背に負ふ





(朝露碎玉豪華に送らる)

て、これ彼整を携たり。大八の親兵衛は、この時にはや熟睡せしを、信乃が横ざまに扛抱きつ、墓所まで供に立んとて也。照文は豫て準備せし、單張燈を引提て、先に進めば、大は則導師にして、兩箇の葛籠の間に立けり。既にして背門口より、送り出すを靈時とも、留め難つ、妙眞は、姥捨山の姥ならで、とり遣されて只ひとり、端居に携る柴垣の、袖に涙のたまよばひ、爪繰る珠數に唱名の、聲しも曇る宵闇の、天斑雜なる星影も、定めなき世の哀別離苦、堪ぬ炎暑の六月も、今宵ばかりは肌寒き、風は本來空水火、滅んとしては又光す、螢歟とぞ思ふ張燈の、見えずなるまで翹ちつ、伸あがりつ、目送りけり。さる程に人々は、阡陌を邁くこと百歩許、西へ入ること一町にして、狭小なる岡ありけり。この處は昔より、犬江屋の墓所なるを、小文吾のみよく知たれば、云々といひしらして、廳て葛籠を卸すにん。現八もやをら卸したる、葛籠の上に附たりし、整を兩人手に手に抱て、房入が親、眞兵衛が墓の側なる、塚を掘起すこと七八尺、はやくも穿果にけり。當下信乃は稚兒を、

石の上に居指て、兩箇の葛籠を置すれば、小文吾現八親手をかけて、

大法師は、夢のほとり近く合掌して、引導の語句を唱ていへらく、  
 諦聽諦聽。四大本來空。奚分別泡沫與夢幻。妻子猶漫器。況珍寶乎。嗚能隨汝者。儼不破壞一團心識。亦焉知寂滅之爲至樂。頌曰。荷葉與花共浸影。浙瀝涼風。蕭颯急催。秋其氣清冽。其色慘淡。涅槃室中。物愈休息。吁得時哉。吁得時哉。即投與以下火。最後之句子作麼生。看破熱池中。頭蓮分明。紅爐上一點雪。喝引

唱了て退くとき、小文吾と現八は、再び整をとり揚て、立地に埋めにければ、信乃はいと大きな石をもて来て推すえつ、左右に梅の核を伏せて、阿伽を沃ぎ、葬草を挿み、大八の親兵衛を、第一番に推向つ、頭に手をかけて額づかせ、次に小文吾、次に信乃、次に現八、次に照文、次第に焼香回向せり。この時にしも稚兒は、全く睡の覺にけん。いと訝しげに左見右見つ、細小なる手をうち合して、廻らぬ舌に念佛の、南無とばかりに弥陀頼む、人まねの所作ぞ、痛ましき。これを見、彼をおもふにも、人々嘆息せざるはなし。扱あるべきにあらざれば、又稚兒を携て、兪大江屋へかへり來つ、背門より入らんとする程に、後方遙に撞出す、鯨音は四更なるべし。妙眞はやく出迎へて、人々を勞ひつ、盆に茶碗を並居て、準備の煎茶を薦れば、小文吾は墓所の事、埋墓の爲體を、云々といひしらす。妙眞これをうち聞て、わが子はさら也。媳婦さへに、彼瀬にたちて、義の爲に、共に命を隕さずは、世の篤傑達に、柩を送らるゝよし侍らんや。況祖父柚平の主なり師なりとか聞えたる、金碗大人の子にまします、道徳に引導せられしは、五山の衆徒を全聚して、經誦せしにもなほ優べく、千萬人の道俗に、棺の繩を曳れしより、渠等が爲に面目なり。亦只これらの事のみならず、尙俗く孤なる、孫さへ思ひ捨られずは、何をか歎き侍らんや。といひつゝも又うち歎く。袖に黄縁の稚兒を、いざとて臥房に伴へば、萌葱の幟の七布八布、廣きも今は化野の、中に捨たる撫子の、



聽て睡るも哀れ也。かくて又妙眞は、舊の處に出て來つ、蚊遣火焼て管待ば、小文吾これを見かへりて、大家よ、甲  
 夜にもいひつることく、こゝより計我へ遠くもあらぬに、斯うち揃ふて坐んは危し。某は驚かけて、犬塚犬飼兩  
 友を、船もて大塚へ送るべし。この事はわが父にも、豫てこゝろを得さしたり。こゝにも商量決着したれば、心急ぎ  
 のせらるゝかし。といふに妙眞さし寄て、そは名残こそいと惜けれ。切て初七日の比までも、留まほしく思へども、  
 さる筋なればすべもなし。さはれ夜はなほ深かるに、明果るまで緩やかに、相譚給へ。と慰れば、信乃は現入共侶  
 に、妙眞にうち對ひて、此度某等ゆくりなく令息賢母に稟たる恩義は、今さら演盡すべからず。なほ後難を憚りて、  
 本意なく故郷へ赴けども、ふかき故ある伯母夫許、再びこの身を寓難かり。只同盟の一犬士犬川莊助、一字を、額藏  
 と呼るゝものに、潜やかに對面して、わがうへ人のうへを告べく、その餘の所要も果さばや、と思ふ外亦他事もなし。  
 かゝれば一所不定の身也。一旦袂を分つとも、こゝにも實生の犬士あり、鄰郷には犬田父子あり、いづれに疎遠すべ  
 くもあらず。嫡孫の爲、自愛して、哀感にな傷られ給ひそ。なほ再會の時にこそ、心緒を盡すべけれどとて、告る別に  
 妙眞は、心ほそげに應をしつゝ、霎時頭を擧ざりけり。當下登崎照文は、懐より準備の沙金を、五包とり出しつゝ、  
 先三包を扇に乗たる、そが儘信乃現入小文吾等が、ほとり近くさし寄て、三犬士、この金は、三十兩を一包とせり。  
 尤些少の東西なれども、此度の路費を資るのみ。わが私の餞別ならず、里見殿の賜なるに、辭はて納め給へと  
 いふ。三人はこれを聞あへず、そは思ひがけなき事也。某等は過世あるべき、同盟いまだ全からねば、徴に應ずる事  
 を得ざるに、今又何等の功ありて、この賜を受まつらんや。且大塚へは道の程、十里に足らぬ旅なるに、影の纏着  
 は要なし。と推辭ば照文頭をうち掉り、しかいはるゝは本意に違へり。同盟の義によりて、且く徴に應ぜずとも、そ  
 の因と果を推せば、各位は伏知うへの、おん子なるべきものなるに、いかてかその功あるを俟て、賞を行ふゝの儀  
 ならんや。且照文の犬塚は、皆月の大川を隔るのみ。その道の程遠からずとも、犬塚生は伯母夫の、宿所にかへり入

らじとならば、露骨こそ要ならぬ。某も亦、辭にしあれば、囊中に貯藏の、多からぬを憚るのみ。もしせばかり  
 の物受られずは、安房に還りてわが君に、報奉る辭もなし。とくく納め給ひねとて、類に勸めて已ざれば、信乃  
 現入小文吾等は、その理りに感服しつゝ、三人齊一恩を謝して、やうやくに受納めしかば、照文は又一包の沙金を扇  
 にうち乗て、妙眞を招き近づけ、老母よ、こは房八夫婦が追薦の香華の料に、その子親兵衛に賜ふもの也。辭讓は要  
 なき事にこそ。といふに是さへ推辭得ず、感涙坐に禁めかねて、受いたゞきて退けば、照文は又一包の沙金を扇に  
 うち乗して、犬塚生この一包は、彼同盟の一犬士、莊助とやらんに届け給ひね。某は、大八の親兵衛を伴ふて、  
 安房へかへりて後に又、大塚に赴きて、各位と再會せん。これらのよしを傳へてよ。といはれて信乃は感謝に勝ず、  
 遺る限なき賜を、推辭奉るは失敬ならん歟。しかれども、彼額藏の莊助は、この席に缺たるに、かくのときは  
 冥加に餘れり。別にこの賜なくとも、某等に給はりしを、彼友に分與ん、と今はや思ひ候ひき。この義ばかりは許  
 させ給へ。といひつゝ扇を推向て、返さんとしてけるを、大は急に推禁めて、そは又益なき口誼なり。俺們はまだ  
 彼人に、一面識ならずといふとも、犬士の一人たらんには、この賜に漏らすべからず。是則十一郎が私の計議  
 ならず、貧道にも示し合して、賢を招き士を徴給ふ、君命によるものなれば、聊辭を添るにこそ。われも今おのお  
 のと、共侶にと思へども、山林夫婦の爲に、初七日の回向もせて、はやく他郷に赴かば、出家の所行に違ふをもて、  
 且杖を駐るのみ。遠からずして再會せん。そはその儘に納めずや。と懇にとき諭せば、信乃等ははいよ、感佩して、  
 遂にその意に任しけり。これ彼の問答に、夏の夜いと短くて、明なんとする鐘の聲に、信乃現入は退きて、行装  
 を整へつゝ、辭別して出んとすれば、小文吾も亦別を告て、遽しく身を起すを、妙眞急に呼留めて、準備の割籠を  
 遞與になん、小文告これを受とりて、某は大塚まで、この兩友を送り届けて、彼犬川莊助にも、對面すべう思ふな  
 り。かゝればはやくて兩三日、遅くとも四五日の程には、必かへり來つべし。賓客達はこゝにも留め、又行徳へも憚



なし。わが父も翌のころは、市川へ邁んといはれき。とにもかくにも相譚で、等閑ならず款待給へ。といへば妙眞領きて、それはこゝろ得て侍るかし。彼地に逗留し給ふとも、房八沼蘭等が初七日の、逮夜の比にはかへりてよ。とそこの期を推すを聞あへず、そはいはるゝまでもあらず、よろづかへりて後にこそ。と回答て河岸に立出れば、大照文も、妙眞共侶、水際に立てそ目送たる。信乃現八は再會を、契りて船に乗移れば、小文吾も閃りとうち乗て、棹りのべて推出す。はや黎明の潮合に、漕れくてゆく船の、迹なきごとく世の中に、別といへば牝鹿の角の、束の間もなほ惜るゝ、脆きは人のこゝろなり。却説この日、亭午の比に、文五兵衛は、行徳より來にけり。妙眞はやくこれを見て、こはよくこそ來ましたれ。いざあなたへ。と眞成に、上座にすゝめたる、送涙吐みて、髪時は何事も得いひ出す、あるじはそが儘背向になりて、頻りに涙をうちかめば、客も術なく、腰なる扇を、拔出し、推ひらきて、胸のあたりをあふぎつゝ、しばたゝく目を紛らせども、紛れぬものは愛惜の、歎きの霧の離には、憂を隠すすまもなきを、やうやく思ひかへしけん。文五兵衛は疊む扇を、側に措て、喃阿懐、よに向上たる房八が孝なり義なり、潔き、今般の遺言曲に聞たり。さばかりに義を竭さずとも、世を隔たる怨を執念深、今さらに何とかなすべき。かうなるからはいよよますく、ちからにもなりなられて、憑しうしたらんこそ、なき人の追薦ならめ。沼蘭が事、大八がうへ、聞けば胸のみ痛かるに、諄々しうはいはぬぞよき。小文吾は彼兩友を、送りて江戸へ赴きたらん。又二はしらの賓客達は、奥にやをはする、子舎に歟。と問へば妙眞涙を收て、現宣はするごとく、子どもが事はしも、いはでも思ひ絶る間、なきものを又口説立て、泣げ冥土の碍りとならん。大田どのは今朝未明に、船もて彼二がたを、大塚までとて送りにき。遅くともあれ四五日には、還らんといはれたり。かゝれば後安がるべし。大道徳と登崎ぬしは、子舎にこそをはずなれ、誘給へ。といひかけて、身を起さんとする程に、大八の親兵衛は、外面より走り來て、祖母さま、やよ物たべ。と驚かすを、推して、こは對也。行徳なる、外郎さまの來ませしに、驚き、かするを、文五

兵衛はそが儘に、明よせ、膝にうち跪して、大八よ、御前にはさて、愛憎見聞にいたう、大八しうなりになり、物取せん、と探探出す、杖、袋の花黄葉、田舎籠を袋の儘に、還與せば受て戴きたる、袴袴ものぞ。と抱き締めて、頬を合しつ、頭を拊つ、愛やかしつゝ、忽地に、思ひ出けん手を抗さして、單衣の腋開より、牡丹に似たる痣を見て、只顧感嘆してければ、妙眞は孫が腰著なる、護身囊の紐解緩て、彼仁の字ある玉をしも、撈出して示すにん。文五兵衛は、遠しく、懐紙の間より、眼鏡を取てつらくと、うち見ていよく感じて已まず。現玉といひ、痣といひ、聞しにまして灼然也。既にかゝる奇特あれば、孫が久後いとく憑し。努力はし給ふな。といひつゝ、玉を護身囊に、納めて腰に著さしけり。かくて又文五兵衛は、妙眞を先に立して、子舎に赴きつゝ、大照文に對面して、送に意を演、情を説く、閑談すべて蕭々やかなる、大は昨夕三犬士と、竊に山林夫婦が柩を、岡に送りて埋葬し爲體、及犬田大江の舅甥は、犬塚犬飼等に等しく、里見家に過世ある、辭の趣をとき示せば、照文も亦來意を告て、賢を招き、士を徴給ふ、君命を述傳へつゝ、又いふやう、かゝれば此度某は、四犬士を相伴て、安房へ還らんと思ひたりしに、彼大川莊助とかいふ一犬士、今なほ武藏の大塚にあれば、同盟全からずとて、犬塚犬飼大田等は、且く徴に應ぜざれども、里見殿の家臣たるべき、前諾は違ふべからず。然ばとて手を空して、歸國して云々、と聞えあげんは面なき事なり。よりて此度は親兵衛を、自他の證に將て還りて、主君の見參に入れんと議せしに、是すら祖母に辭讓せられ、て、なか／＼に事ゆかず。そも亦よしある事なれども、未憑しき奇特の小兒を、この市中にて育ると、安房の藩中に人となすと、その子の爲、いづれか可らん。謙退辭讓も事によるべし。この議、足下だに承引ば、妙眞も推辭がたけん。今とて急ぐ事ならねども、安心の爲告るのみ。といへば亦、大法師も、共侶に辭を盡して、懇に勧めけり。文五兵衛うち聞て、寔に怪き因縁にて、拙郎小文吾等はさら也。物數ならぬ孫さへに、大諸侯に徴るゝ事、こよなき幸にこそ候なれ。孫大八の親兵衛も、丈夫で候はゞ、四犬士に先だちて、何てふ徴に應すべき。そは勿論の事ながら、



渠はまだ東西だに、得わきまへぬ小兒なり。さるを今、四犬士の名代に、殿の見參に入ればとて、その心から進むに  
 あらず。又唯推辭奉るも、その心から退くならず。無慾のもの、進退は、某とていかゞはせん。妙眞だに點頭  
 ば、ともかくも仕らん、とは思ひ候へども、渠は二親を喪ふて、まだいくばくの日子を經ず。縦七歳未滿也とも、  
 些の憤なからんや。初七日を迎る比には、小文吾もかへり來てん。又これ彼と商量して、おん旨に従ふべけれ。犬  
 塚生の厄難の、既にして釋たれば、世に憚の關もなし。こゝにのみあまさんより、又行徳へ來給はずや。素人宿は  
 町學なれども、心づきなき事もぞあらん。客店の無造作なる、いづれまれ二かたの、隨意逗留し給ひね。と他事もな  
 くいふ人の誠に、大照文は歡びて、迭にかたり慰めけり。かくてこの日、文五兵衛は、照文を相伴て、行徳へかへ  
 り去りつ。これより、大と照文と、或は一日、或は二日、迭代に市川と、行徳に宿しつゝ、四五日を送る程に、  
 房八沼蘭が初七日になりぬ。しかれども小文吾は、大塚よりいまだかへらず、文五兵衛は朝より來て、竊に追薦の法  
 筈を責れば、大は速夜より讀經しつ、照文も正首に、俱に席につらなりて、そのなき迹を弔ひけり。とかくする程  
 に、秋の初風はや立て、外に夏越の幣だにも、流れて河岸によすれども、小文吾はなほ立もかへらず。文五兵衛も妙  
 眞も、いと／＼心もとなしとて、大照文等と相譚けり。時に七月端の二日、大はきのふより行徳にあり。朝とく  
 起て、文五兵衛にいふやう、われつらくと思惟るに、犬田がけふまでかへり來ぬは、必故あることなるべし。信  
 乃は定かに告ねども、その伯母も伯母夫も、甥を亡はんと謀らずは、彼村雨の刀を奪ふて、賺して潛我へ遣るべくも  
 あらず。これらの嫌疑あればこそ、信乃は故郷へ赴きて、伯母夫許身を寓がたし、云々といひし也。その親族だに  
 憑しからぬ、彼處も亦大塚が久戀の地にあらず。只その友と、眞實なる、婦にわがうへ人のうへを、報ばやと思ひし  
 のみならんに、送りゆきにし小文吾すら、けふまでかへりぬは、其處に不測の事ある歟。こゝにて物を思はんより、  
 竊に訪はば立地に、その消息を得つべき也。竊これらのすぢなくとも、房八夫婦の初七日を果せば、大塚に赴きて、  
 彼大川莊跡に、潛やかに對面して、わが年來の行脚の趣意を、告て里見殿の家臣たるべき、契約をせんと思へり。今  
 より過かば翌の夜は、小文吾を將て、必かへらん。頭を病することかは。といふに文五兵衛歡びて、且く閑談する程  
 に、折もよし市川より、蛭崎照文來にければ、寢て閑室に迎入れて、大法師共侶に、件の趣を告るに。照文  
 も亦歡びて、法師彼地に赴き給はゞ、これにましたる便宜はなし。某が今朝出て來つるも、をさ／＼その事を相譚  
 ん爲なり。親兵衛が二親の初七日もはや果たるに、いつまでかかてあるべき。よりに安房へ俱すべきよしを、折々  
 妙眞にとき勧めしかば、渠もやうやく承引く物から、小文吾いまだかへらねば、この一條にて事整はず。さるを法師  
 は秋暑も厭はて、彼地へ邁んといはるゝよ、日ごろの鬱胸をひらくに足れり。歡ぶべし。と只管稱賛したりける。  
 かくて文五兵衛は外に出て、便船を求るに、未の比に出船あり。よりに、大照文に、酒食を差めて款待す程に、はや  
 その時刻になりしかば、大は行装を整て、遽しくたち出れば、文五兵衛も照文も、後に跟き、先に立て、入  
 江の船場に送りつゝ、よるべの波もかへる日を、翌と契りて袂をわかちぬ。かゝりしかば照文は、これらの事の趣  
 を、妙眞に報んとて、文五兵衛に辭し別れて、亦市川へ還りけり。嗚呼趣舎の不定なる、絆逆期すべからず。値遇  
 も時あり、別離も時あり。あふては別れ、わかれては遭ふ。現風雲のたゞずまひ、親串眷愛、前諾後信、料りがたき  
 は世間に、なべて離合と聚散なり。

第四十回

密葬を詰て暴風妙眞を挑む  
 雲霧を起して神靈小兒を奪ふ

大が武藏の大塚へ赴きてより、又はや三日ばかりを経たるに、これも亦信なし。その次の旦照文は、思ひかねつ  
 つ妙眞にいふやう、小文吾が還らぬは、彼處の友に留られて、思はずも日を耽ること、なきにしもあらざめれど、翌



は必と契りたる、彼法師すら約束に、二日後る、はいかにぞや。ともかくにも心もとなし。倘昨夕更闕て、古那屋まで還りし敷、われ行徳へ邁て見ん。いまだかへり來ずといはゞ、文五兵衛と相譚て、又彼地まで赴かずは、何もてかさねかさねし、疑ひを解くよしあらんや。よりておん身に告るかし、といへば妙眞歎息して、現宣はすることなく、胸やすからぬ事に侍り。小文吾とても言を食むものにしあらぬに道徳すら、何してゐますことやらん、と思ふのみにて術もなし。然とておん身も迹を追ふて、彼地に赴き給ふとも、引留られて速にかへらせ給ふことならずは、是處と行徳に俟ものは、なほ物思ひを増んのみ。まづ古那屋までにして、便の有無を問せ給へ。けふならずとも翌朝翌去日は、兩人に一人信のなきことは侍らじ。と慰められて照文は、寔に然なり。と應つゝ、馳て行徳へ赴きけり。かゝりし程に妙眞は、ひとり悔々うち歎く、日數はやくめぐり來て、けふはわが子とわが娘の、二七日に當れるを、今朝は生平より事の繁さに、雲時珠數把る暇もなく、はや正午になりたり。大八が晝寐せし間に、香盛添ん、と家席なる、定香盤を卸しすえて、かき坦し、又搔ならず、灰は涙に濡れども、立ことはやき夢の迹、煙となりし人をのみ、思ひつゞけて瞻むかふ、心の闇を弥陀本願、照させ給へ。と燈明を、卒と掻起して線香に、移してうつす香柘は、四條五條一トすちに、正念唱名應頂禮、飯依佛飯依法、看經に、外へ憚る木魚の音も、時移るまで絶間なく、積らば功德高き山の、石だに打ば化るといふ、未の比敷横日影、背門の槐に秋蟬の、しばなく聲を暑かりける。浩處に訛聲高く、阿懐久しう値ざりき。と呼かけて背門より來るものあり。妙眞は誰ぞ。と應て、木魚かい遣り、珠數とり收めて、身を起さんとする程に、はやあなたより縁頼なる、簀戸に會釋もなく手をかけて、戸走り殿と推開くを、驚きながら見かへれば、その人の年は齡、五十にもやなるべからん。眼圓に鼻大く、頬骨高く、唇厚く、板齒一枚脱たるを、鬚石をもて補ふたり。皮膚は赤黒にして、秋茄子の如く、鬚鬚は半白して、老冬瓜に似たり。賢良本願の單衣は、肩と腕と汗染めて、申の袴になりたるに、後腰帯のみ花々しきを、これ見よがしに懸けて、片膝折

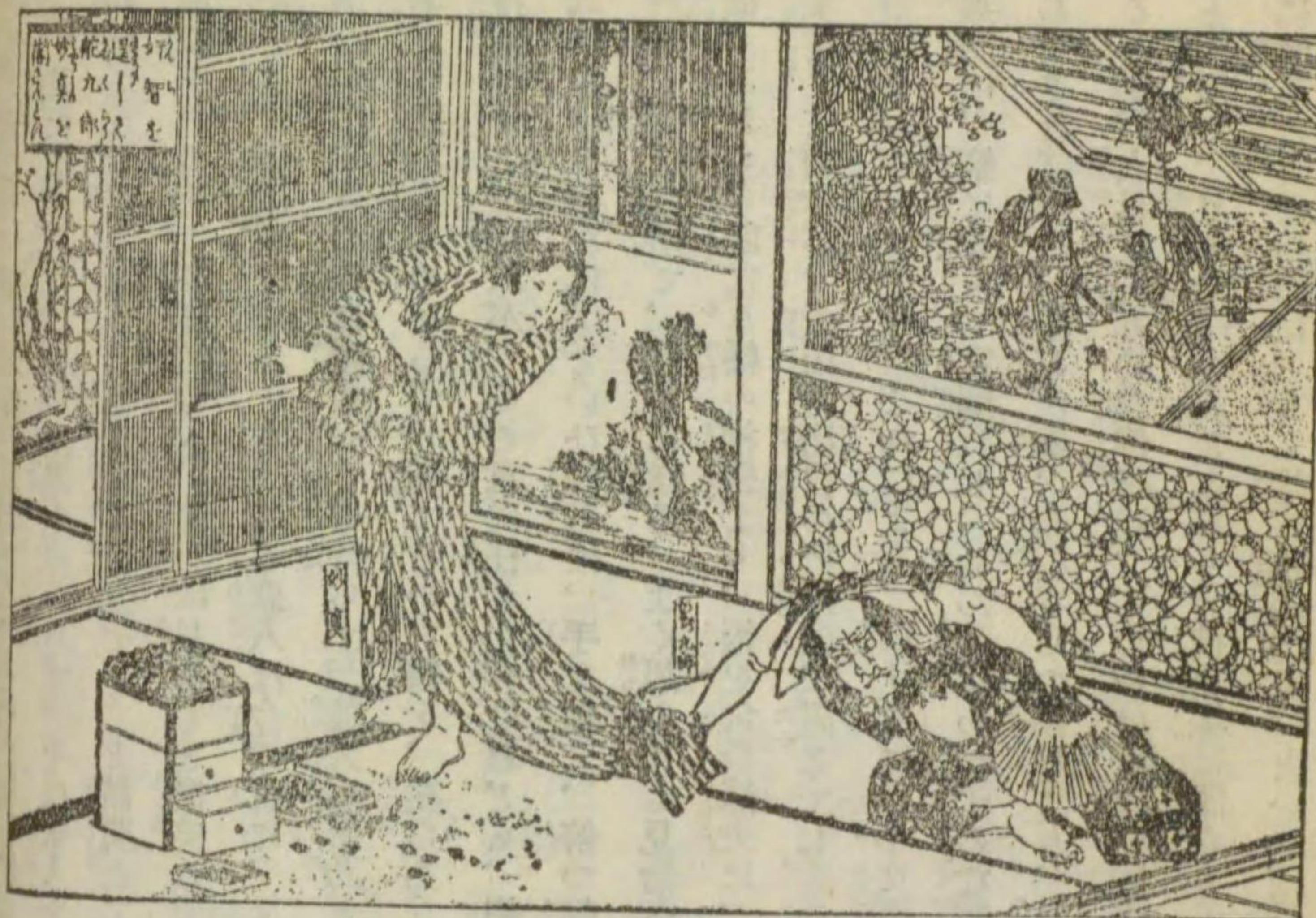
せし袴も下さず、四空柱に身を倚て、己か職なる高胡床、近邊の團扇をわが腕に、とり擲て衣領を捲ぎ、暑し暑し、とうち扇げば、戦ぐ胸毛の態に似て、花繡さへ月輪敷。命と書し瘦肩に、掛たる手拭左手に攫て、腮の下まで流るゝ汗を、頤擡けて拭ひけり。これは是土地に各だたる、暴風の舵九郎と呼ばれたる、宿も定めず彼此に、身を備して船を漕げども、酒と賭博にのみ耽る、嗚許の癖者にぞありける。曩にこの大江屋にても、篙工の乏しき折々は、備ふて出船に遣せしに、船荷を竊減すといふ、よからぬ風聞ありしかば、房八はうち腹たて、大く罵り懲しつゝ、介後は寄つけざりしに、今ゆくりなく來にければ、妙眞はあらずもがな、と思へどもさらぬ面色して、背門より奥まで進々と、呼門あへず來る人は、誰なるらんと訝しかりしに、居起に途を斷られたる、舵九郎どのにこそ。けふはいかなる風に吹れて、こゝらへ訪れしことやらん。と寤れども些も羞ず。さのみ鬱悒し給ふな。錢がなければ洒落もせで、濱邊の貝に劣れども、風に吹れて來たるにあらず、波に捲かれて寄るにもあらず。いぬる日夥計の奴原が、娟みて讒告したりけん、こゝの哥々に罵られて、安否も問はずなりたり。そはとまれかくもあれ。舊き馴染を今さらに、さまでもなき事氣に持て、いつまでかかくてあるべき。けふは訪ん、翌は邁ん、と思ひつゝ人に聞けば、哥々は鎌倉へ赴きて、いぬる月より今に還らず、娘御は里へ返されし。といふはつや／＼解せぬ事也。故なからずや、と手を交て、他の疝氣を頭痛に思むまで、とさまかうさま案ずれば、仄に聞しこともあり。又見出せし物もあり。是から勘を附て見れば、こゝには近屬法師と武士と、或は一宿、或は二宿、迭代に逗留せり。それでやうやく云々と、疾視し眼は違ざめれど、人の讒訴をすべくもあらず。かゝる時こそ馴染甲斐なれ。問状かけて、阿懐の、返答聞て身にもならん、仇にもならん、と思ふ程に、けふは闔宅の篙工們も、出船に就てみな在らず。彼客人も出てゆきし。と定かに告たるものあれば、氣の毒ながら推掛相談、人に聞する事ならねば、背門より見舞ふ故事來歴、序開はまづかくの如し。後段はいと／＼長かるに、間近く寄りて聞給へ。問べき事もあるものを、こゝへ／＼。と狎々しげに、席薦敲



きつさし招く、言葉の端も伎倆ある事とし猜する妙眞は、うち騒ぐ臂を鎮めて、聞てはいよ、油断せず、そはよく心つかれたり。志は大かたならず、歡しう侍れども、疑るべき筋ならんや。房八が鎌倉へ、赴きは人みなしれり、沼間を行徳へ遣せしは、初媒介せられし人の、去歲の秋身まかりしに、今茲は又その後家どのの、長き病著に臥したり。と告られたればうちも措れず、そを看とらせん爲にこそ、彼處へとて遣したり。又彼兩個の旅人は、原は古那屋の客なれども、又房八にも疎からねば、渠が還るを待わびて、しばしこゝへも來給ひつ、道遠ければ日の暮て、かへすに遅き折々は、宿する事なからずやは。といはせも果す膝突詰て、否、宣ふな悪し給ふな。情由は大抵猜したり。おん身なりとて老饒ふたる、檜垣の媼が姉にもあらず。齡は四十あまりといへども、根がその縹致の捷れしゆゑに、脂も脱ずみづ／＼し。久米の仙人に闕窺さしても、雲の歩板を踏外して、忽地落ん女房盛りを、うたてや年來寡居の、枕寂しく不圖せし事より、心ともなく惑ひ染て、何がし寺の色界和尚、或は連歌に香立花、手蹟美事に趣ある、鎧刀武士の浮浪人、一個も二個も密夫の、なしとはいはさず證據あり。色に惑へば子でも亡ぶ、昔物語もあるものを、不便や哥々は殺されし歟。第一番に疑しきは、こゝの墓所なる岡山に、新に物を瘞めし跡あり。されどもこゝには大猫でも、死たりといふものなし。只房八は鎌倉へ、沼間里へ、といはるゝのみ。鎌倉へはなほ遠かり。われは日毎に行徳へ、ゆきかよへども古那屋にも、又媒人の宿所にも、媳御の居るを見しことなし。よしや彼岡の新墓は、哥々夫婦にあらずとも、人に隠して埋めたる、そは臭き譯なからずやは。これのみならて怪しきは、きのふ人の噂に聞しに、いぬる比古那屋では、犬塚とかいふ罪人に、宿したる科によりて、あるじ文吾兵衛は搦捕られつ、その子の小文吾が働きて、彼犬塚が首捕て、潛我の使に進らしつゝ、親はやうやく免されたるに、その日よりして小文吾は、いづ地ゆきけん家にかへらず。又吾儕も豫て疎からぬ、鹽濱の藏四郎、孟六均太の三人さへ、この比よりして佐方しれず、といふはいよ、疑ふべし。かゝれば聞に埋めしは、彼犬塚が亡骸。さらすはこゝの山林と、犬田が隣

に謀し合して、藏四郎等を殺したる、その亡骸を埋めても、相繋に復すかられば、恥し影を隠せし。斷罪もなかり、勘詰たる、三にひとつは違ふべからず。そは衆人を欺くとも、蛇の道こそ娘はしれ。いかでか吾儕を欺き得ん。明地にうち出し給へ。彼新墓は何人ぞや。と詰問れて妙眞は、何と岩峯に集る鷲に、身を直せし鬼より、苦しき臂の波風を、再三たび鎮めつゝ、氣色に見せじと微笑みて、思ひがけなき邪猜かな。凡生とし活る物、子を慈ぬはなきぞとよ。譬ば色に惑ふとも、さる悪人は今の世に、又あるべくもあらずかし。一箇も當らぬ事ながら、疑れてはなかなかに、さのみは隠すべくも侍らず。彼犬塚信乃とやらん、已ことを得ず阿沼間が兄の、撃捕りしは親の爲にして、素より怨あるものならず。切てその亡骸を、墓らんと思へども、行徳はなほ憚あり。そなたの墓所へといはれしを、推辭れずとて房八が、その意に任したりけれども、絶て見しらぬ罪人の、軀を埋得させしとて、わが慈悲貌に云々と、人に告べき事かは。といひ瞞れば、手を拍て、俯つ仰ぎつうち笑ひ、しかいせんと思ひしかば、信乃をも數に加たれば、間には落て、語るに落ちる。よく思ふても見給へかし。犬田が仏ごころありて、よしや彼ものゝ亡骸を、埋んと欲するとも、既に八幡の相撲より、恨を含む妹夫に、頼れもせじ、詰ひもせじ。件の事の纏より、六月廿二日の晝昏、栗崎にて山林が、犬田と出會の擲擲は、誰とてしらぬものもなし。余るを云々といはるゝは、言の後先取次なる、その偽りしるべきのみ。これによりて猜するに、小文吾はこゝの哥々を、殺して逐電せしなるべし。かくてその親文五兵衛に、竊に金もて和解れし、おん身はわが子の亡骸を、阿容々々として人にもしらせず、葬たるにぞあらんずらん。されば娘さへ出したる、女あるじの朔日より、月さへ大のみそか夫を、とり替、引替飽まで、よき樂をせらるゝよ。人目ばかりの念佛三昧、その術は喫ぬ。論より證據、彼新墓を發出して、目に物見せん。と立揚る、裳を楚と引留て、且俟給へいふことあり。彼新墓は誰なりとも、その職役にあらずして、墓所を發かば不法ならん。その身に預ることならぬに、うち捨て措ねかし。といへば見かへる睛を睜て、縦その役ならずとも、正しく認し不敵の悪事





(す とん さ 落 を 眞 妙 郎 九 能 て し 逞 を 智 奸)

を、莊官殿に訴て、賞祿にせねば酒も得飲めず、寶の山へ入りながら、手を空して歸らんや。送に誣る歟、偽る歟。一ト跨なる岡山へ、引もてゆきて面前に、明々黎々を分て見せん。運の際ぞ、覺期をせよ、とばかりいふては物もなし。おん身が心ひとつもて、身にもならん、仇にもならん、と纏にいひしはこゝの事也。よろづに人目つゝましき、密夫を引入れんより、再増を招給へかし。その婿殿は外ならず、恥しながらこの鼻なり。年の程も十とは登らず。錢こそもたね健にて、船もよく漕ぐ、小口も利く、酒は喫ども睡上戸なれば、物静ひせぬ柔和もの、女房の尻に布けば敷け、辛防つよきは年の功、龜の甲より八卦にこそ、ときのふ堤の賣下に、生刻を見させしに、女房を下に置ぬといふ、地天泰にて大吉なり。身上は些劣れども、里には友達夥あり。山林が養父といふても、さのみけにくきものにはあらず。今立地に絶更て、この商量に乗らんとらば、竊に岡へ埋めたる、その亡骸は誰にもあれ、人にしらする事にはあらず。身に引受て一代の守本尊にならざらんや。否といへば冥罰

面、莊官殿に訴て、賞へ給して密夫共、獄舎に繋ん、いかにぞや。否とも應ともいひ給へ、あな難かしや。と引く袖を、拂へども又こりずまに、年に似けなき色好み、僧さも憎し、腹だたし。いかにすべき、と玉なす汗の、千に心を摧くのみ。暴立ては事の破れにならん、と思ひかへしてさり氣なく、墓所の事に憚りて、心よはくなるにはあらねど、數ならぬ身の花もなきを、さばかりに思はれなば、そはともかくもすべけれども、わかきはさら也、老たるも、浮氣は男の癖なるに、苟且にものいはるゝを、いかでか實事と思ふべき。雨にもそぼち、雪にもかよひし、百夜の情深草の、例に做ふとしもあらねど、日を連ね月を累ねて、おん身が心の變らぬを、よく見定めて後ならずは、悔しき事の多かるべし。いとわかより昔より、吾儕に浮たる事なければ、孀婦になりても猥がはしき、濡衣は被せられざりしに、何認めてかおん身にのみ、云々といはるゝは、よに限りなき恨み也。かくても思ひ捨じとならば、又日を隔て來給へかし。只今應をしがたきも、亦理りに侍らずや。といふをば聞かて冷笑ひ、一寸延れば尋とやらん、なるにもあらず。成ぬてもなく、口實にいひとつとも、さる緩やかなる戀にはあらず。否と應とは地獄極樂、岡の死人を掘出すも、夥の人を浮するも、その吉凶は只一言。否ならば否でもよし、しからば岡へ。と又立あがるを、邊しく推禁て、そは又あまりに性急也。余らば應歟。それは亦。それは亦とは人惑はしもの、此方へ向ね。と引よして、携るを振解き、かい溜りつゝ、逃ればあちこち追索縁れて、せんすべもなき折から、蛭崎十一郎照文は、文五兵衛を相伴て、行徳よりかへり來つ、背門より入らんとする程に、裡面には人の挑むがごとく、踏鳴らす簀子の響に、作麼何事ぞ。と先に進みて、抱福のかたより衝と入るに、舵九郎は妙眞に、携著んと追遶る、卻舎を拍て照文に、忽地破と突當る、勢ひあまりて、仰さまに、身を轉して倒れけり。妙眞は、照文のかへり來たるにちからつきて、よき折にこそ蛭崎ぬし。といふ間に舵九郎は、勃興と起て、照文を、向上てふたゝびうち驚き、あな無遠慮なる奴もぞある。事成んとせし密談の、腰を折るまでいといたう、扱しは後家の密夫歟。穿鑿すべき事もあり、莊官許引摺邊



て、この返報を信とすべし。とくく来よ。と立蒐る、腕を了と拿詰て、撞と投たる修煉の拳法に、縁頼の簀戸打倒して、遙に庭の中央へ、筋斗りて、あな疼し、痛しく。と側なる、羅漢杉に携りつゝ、やうやくに身を起しても、敵すべくもあらざれば、恨しげに見かへりて、鉛刀武士奴、をばえてゐよ。偶怪我の功名で、汝が拳法の捷れしならず。わがよく投られたればこそ、これ見よ膝も搦鉤ね。これでも啖へ。と裳を褰て、尻推向てうち敵けば、照文怒て、まだ懲すや。女あるじと侮りたる、狼藉はいふもさら也。某をさして密夫、と罵りしは何事ぞや。再三たび尾陋の雑言、今はしも許しがたし。其處な退きそ。と敦固て、刀を免り、と引抜けば、妙真吐嗟と推禁めて、渠は名だたる悪棍なるに、傷け給はむづかしからん。鄙語にいふを見に棒打、敵手になるべきものには侍らず。逃なば脱し給はずや。と謀られて照文は、齒を切りて疾視たり。舵九郎は、さもこそ、とうち見て呵々と冷笑ひ、刀を抜て威しても、人を殺せば身も殺さるゝ、有繋に命は惜かりけり。破らずや刺すや、いかにぞや、その鉛刀も骨のある、暴風さまは吹がたからん。破らずは暇をまうさん。と猶豫に誇る擬廣言、あちこちに黏し衣の土を、うち拂ひつゝ、なる、草履を取て足ばやに、罵りながら逃去けり。當下照文は、刃を収めて縁頼より、背門のかたを見わたすに、彼悪棍は影もせず、驟るゝ隅もなかりしかば、僅におちみて又舊の席にかへり著く程に、次の間に立在て、件の爲體を闕窺たる、文五兵衛も進入て、照文と共に妙真に、事の末を告れば、妙真は倒れたる、簀戸を遶しく推立て、さて舵九郎が狼藉なる、渠が邪猜の條々、いはれし事は云々、と潛やかに報るになん、兩人齊一驚きて、余らば又禍の、こゝらに起る緒にこそ。いかにすべき。と額を聚めて、俱に思ひを凝したる、照文は後悔の、拳を擦りて嗟嘆しつ、事の趣はやくも知らば、彼悪棍を撃留て、禍の根を断べかりしに、既に彼奴を走らしたれば、且くも躊躇しがたし。そは又いかなる故ぞといふに、舵九郎に告訴せられて、彼岡なる新墓を、發るゝ事ありとも、山林が亡骸は、その首なきにより、信乃が軀といはいふべし。しかれども、夫婦合葬したりしかば、その妻の亡骸は、陳するに、

なし。これよりいたく穿鑿せられれば、彼身がはりの事さへに、露顯すべき歟、料がたし。その事の破れに及ばず、犬田父子も、大江の老母も、いかにして脱るべき。かへすゝも舵九郎を、走らしたりし油断は大敵、悔しき事をしたりけり。後れたりとも追蒐て、撃果すより外に術なし。いでく。といひかけて、刀を取て立んとするを、文五兵衛推禁めて、宣ふ趣理り也。遺恨は誰もさる事なれども、今さら追ふとも及ぶべからず。且舵九郎はこの里に、定めたる宿所なし、只同惡相聚ふ、無賴賭博の友のみ多かり。尤愚按に候へども、譬ば千尋の堤の水は、一ト掬の壤をもて堰きがたし。惣に今追詰給は、毛を吹とて疵を求る、再度の後悔ありもやせん。這奴は這奴が隨にして、はや未然の禍を、避る術こそあらまほしけれ。早るは要なき事ならずや。と諫められて照文は、僅に怒を斂めけり。且して文五兵衛は、妙真を見かへりて、喃阿懐、おん身は何と思ひ給ふぞ。小文吾が武藏へ赴きしより、既に十日にあまれども、渠はさらなり、道德すら、三日四日歴ても返り給はず。けふは蚤崎ぬしに訪れて、うち相譚でもなかなかに、慰るよすがもなく、居つゝ物を思はんより、市川へ赴きて、又妙真と商量せん。誘給へ。とつれ立て、途いそがして来て見れば、又よき事は聞もせて、搦て加えて胸くるしき、不慮の事のみいで来にけり。そもいかにして脱るべき。と問ば妙真嘆息して、善には善の報ひある、道理は豫て聞ながら、義士も節婦もなき後まで、枉津日のなほ責縁て、幸なきうへに幸なきは、過世の業報ならんかも。形なき身の形なき、世をいかにして通るべき。よしや吾儕は誣られて、無失の罪に沈むとも、稚き孫だに恙なく、人としならば年來の、心づくしもその甲斐あらん。女子はよろづに淺はかなるを、かゝるときにはいとどしく、思ひ決めし事も侍らず、先だつものは涙にこそ。といひかけて又うち歎くも、照文諫め奨して、禍既に蕭牆より、起ると知つゝ諄々と、長兪議は無益也。かゝれば、大と小文吾を、こゝに俟んは甚危し、某は大八の新兵衛を携て、速に安房へ還らん。祖母も孫に傳添ふて、且この地を遠離らば、彼舵九郎が毒氣を避る、これ究竟の便点ならずや。とくこの處をたち去て、封疆まで退かば、惡黨まれ、



莊官まれ、數百人もて追蒐來るとも、怕るべき事にはあらず。古那屋の主人は宿所にかへりて、今宵の出船に乘走らしなば、翌は早旦て大塚へ、到らんこと易かるべし。この條の趣を、大と四犬士に報知して、なほ又進退便宜を得ずは、皆伴ふて安房へ來ね。老母はまづはや起行の準備をこそ。と急しく、遺なく示し合すれば、文五兵衛感佩して、この譏寔に然るべし。なほ、休き親兵衛、と妙眞さへ相伴給ふに、猛の事にて從者なければ、某は孫を背負ふて、郡界まで送るべし。やよ阿懐よ、急るゝとも、慌て物をな取遣れそ。と心をつくれば、妙眞も、遂にこの譏に從ふて、睡覺たる稚兒に、新しき衣被せ更て、護身袋をそが儘に、腰に楚と著さして、わが身も手ばやく衣とり出して、行装を整つ、貯祿の沙金などは、財布の儘に身に著つ、家唐の位牌、古記舊録、孫が被替の衣までも、遽しくとり集めて、一袱に包みにけり。照文は水行こそ、便よからめ、と思へども、順風ならねば心に任せず、只共走りに走らんとて、いよこれ彼を急す程に、きのふ江戸まで船を出せし、依介といふ小斯のみ、只一個かへり來つ、妙眞が、驟しう、促装するを見て、こはいづ地へか邁せ給ふ。と訝しげに咨るを、妙眞は曲に報ず、いな、蟹崎ぬしが大入を、云々の處まで、將てゆかんと宜ふに、襦きものをうち任して、ひとり遣るべくもあらず、行徳の外祖さまが、途まで背負出さんとて、かへりも得せてはすれども、なほ心もとなさに、吾儕も共侶にと思ふかし、從者なきをいかゞはせん。今還り來しものをすら、遣ふは心なきに似たれども、些の袱包あり、そこらまでゆかずや。といへば依介一議に及ばず、そはいと易き事になん。一チ日船を漕走らしても、足は疲るゝことなきに、今かへりしとて何かあらん。何處までも俱し給へ。と快く諾ひたる。心さまの淳朴なる、主の爲に勞を厭ず、他し篙工等とおなじからねば、さはとて件の袱包を、申結かけて負しつゝ、おのゝ草鞋の紐を締めて、文五兵衛は大入の親兵衛を背に負ひぬ。留守には彼耳疎き、老婆をのみ遣せども、有繫に各殘は惜るゝ。笠上杖よしのびに、支度やうやくと整しかば、照文を先に見せ、餘共侶に背門より出るに、人に面を見せじとて、笠ふかく傾けて、

より進む程に、落日暉々として、野禽飛ぶこと急也。袂に留る夕風は、畫の秋暮に似るべくもあらず。急ぐとすれど足弱の、動もすれば後るゝを、待つては又走る。市川の町を離れて、田舎路を上總のかたへ、並松原まで來にければ、處々に延繁る、茅萱の下に集く虫の聲するかたより暮初て、日没ごろになりけり。浩處に前面なる、一ト叢藜き松蔭より、顯れ出たる一個の癖者、頭に手拭の糾鉢巻して、腰に一口の短刀を跨、右手に入九尺なる長權を挟み、柿色染の筒腹彼の、牙籤煩なるに、諸肩袒たる、單衣の兩袖を前に締めて、毛驢陽著に、衣の衿を、片端折せし射、鬚の打扮、髪は皓く、面は赤涅にして、山猿の暴たるごとく、骨は太く、膚は黒斑にして、罔兩の祟るに似て、大道も狭しと立塞るを、と見れば是別人ならず、怒れば船を覆し、又屋をも倒すといふ、現暴風の名にしおふ、舵九郎にぞ有ける。當下暴風舵九郎は、持たる權を取直して、横たへつゝ、又推立て、酒氣芬々たる聲高やかに、やをれ賊奴輩遅かりし。汝等既に悪事の戲房を、われに睨まれ詰られて、後家共侶に逐電敷。かくあるべしと猜せしかば、夥計の甲乙駆催して、門には狗を附おきつ、途には視法師を立置て、夜行をかけたる路脈を、この海道と馳著て、先へ輪て張る網に、宿栖迷ひの旅鳥、捕へて絞るは手の隙費らず。脱れがたしと觀念して、女を遞與して、はやく死ね。逃とていかでか道さんや。と朝旬に嗶啞て疾視たり。照文これを聞あへず、先度に懲ぬ不敵の惡棍、今齒の根を斷すは、地方の患を何時かは除ん。刀を穢すは惜れども、望に任して先物見せん。と敦固猛く對ひ進みて、刃を晃りと引抜けば、舵九郎は聲ふり立て、衆皆出よ。と呼るにぞ、こゝろ得たり。と左右なる、高萱の中、小松の蔭より、或は三人、或は五人、折權大魚刀などを、引提たる、夥の惡黨衆々と、蝨のごとく跳出て、はや照文等を攪籠て、擊仆さんと競ひ蒐れば、照文は些も擬議せず、前後左右に引附て、面もふらず戦ふたり。その間に文五兵衛は、大入の親兵衛を、妙眞に抱かしつ。小兒と婦人は特に危し。依介を將て、舊の路を、市川のかたへ退き給へ。とくゝ。といふ程もあらせず、後方よりも一ト隊の、惡黨、突然と顯れ出て、咄と嘯て、撃んと競ふを、文五兵衛は信と見て



かくては脱れがたしとて、妙眞を背に立して、旅刀を打振々々、且く防ぎ戦ふたる、老人なれども素よりの町人にあ  
らざれば、撃刀をさく法に稱ふて、敵は二三人、浅傷を負へども、多勢を憑みて物ともせず。依介は亦文五兵衛が  
失あらんことを怕れて、援んと思ふにも、身に寸鐵を帯ぎれば、妙眞が捨たる杖を、うち振立て進みけり。この時  
にしも照文は、はや三人を砍伏せて、五人に深傷を負せしかども、敵は目に餘る大勢なれば、後方を見かへる暇  
もあらず、又舵九郎に近づかん、と思へどもなほ推隔られて、進退自在を得ざりけり。余程に依介は、文五兵衛と推  
並びて、且く敵を柱へしかども、手には一ト條の杖のみなれば、三方より打閃す、敵の器械を撥かねて、眉間を  
礮と傷られたる、痛痛なれば霎時も堪はず、潑と潑る鮮血とともに、苦と叫て仆れけり。文五兵衛はこれを見て、  
頻りに憐む老人の、勇氣も腕も衰へけん、禦ぎ難つ、おもはずも、逡巡して妙眞と、間遙になりたる、透を窺ふ  
舵九郎は、薄暗きかたより走り来て、聲をまかけず妙眞を、親兵衛共侶楚と抱けば、吐嗟と叫ぶ身を悶て、ふり解ん  
とて角へども、聲ふり絞て泣く稚兒の、枷としなりてせん方もなく、隻手に釵子拔とりて、舵九郎が抱る腕を、骨も  
徹れ、と丁と刺く、裏闕くまでにあらねども、有繋疼痛に堪ざりけん、驚き怒りて、霎時もあらず、こは何するぞ。と  
身を戦して、組たる両手を解しかば、妙眞は稚兒を、肩に揺被、逸足出して、逃んとするを、脱しも遣らず、跳蒐り  
て大八の親兵衛が肩尖を、丁と颯と引よして、枝の果を挿ごとく、推放、搔獲て、左の脇に捉龍たり。妙眞は稚兒を、  
略奪られてなかくに、脱るゝ路もなくなりぬ。いかで親兵衛をとりかへさん、と思へば些もたゆたはず、喃むじん  
也。釋きものに怨もあらず、科もなし。むごきも人によるものを、返せ復せ。と叫びつ泣つ、引留ん、と立よれば、  
幼すな。と踢倒して、勝のかたへ横たふ路を、一ト町あまり走るになん、妙眞は稍身を起してなほ追留んと慕來る  
を、舵九郎は見かへりつゝ、朽樹の株に尻うちかけて、腋腋に抱きし稚兒を、弄玉のごとく投揚て、地上へ擡とうち  
落せば、息も絶へく哭叫ぶ、聲をよるべの薄月夜、妙眞は朝つ懸つ、響く近づく程に、舵九郎は稚兒を、又引よして



(る 起 に 途 惡 衆 師 弱 善 話)

動せず、尼奴馬よくこれを見よ。己がこゝろに從はずは、  
この俄鬼は今寂滅爲樂。又同行の三人は、夥計の數輩  
に任用したれば、一人も活てはかへすべからず。岡へ埋  
めし死人の縁起も、彼も此もうち出して、今より一期を  
憑とならば、市川へ將て還りて、今宵を二世の事はじめ。  
しからば俄鬼も下には措かず、阿乳母日傘で、饅頭の、  
皮を剝する榮耀の表盛。否といへばこの細鱗を、肉醬に  
して酒をすゝめん。こゝろを決めて應をせよ、應をせず  
はこの俄鬼を、と手應の石を搔拿て、胸前打んと振揚れ  
ば、妙眞は吐嗟とばかり、見るに目も眩こゝろも消て、  
叫んとするに聲出す、禁んとするに腰たゞず、小草の上  
に身を投すえて、共に死んと泣沈む。かゝりし程に照文  
は、廿餘名の惡黨を、八方へ殺散して、文五兵衛共侶に  
妙眞が往方を索ねて、稍この處へ走り來つ。折から雲間  
を漏る月影に、遙に見れば妙眞は、道次に見伏てをり。  
舵九郎は推仰向たる、稚兒を左手に押へて、右手には石  
を搔拿つゝ、今や打んとふり揚たり。兩人齊一駭き怒  
て、や上等霎時。と呼被つゝ、僅に走り近づけども、は



や入保を取られしかば、又いかにともせんすべなし。齒を切り拳を捺りて、瞬もせて疾視たり。舵九郎も亦これを見て、頤を擧口を開きて、轉ぶがごとくうち笑ひ、汝等兩人まだ死すや。一ト歩たりとも近づかば、この石をもて餓鬼奴を單撃、尼奴は啼泣てよくも見ず。雲の天幕、草木は戯棚、かくまで野曠き勾欄にて、看官なきは榮なし、とおもひしによく來つるかな。そも七種にて打挫ん敷、碓に打て結果ん敷。望に任せん、いかにぞや。と飽まであざみ弄べども、照文も文武五兵衛も、透あらば親兵衛を、搦ひとらんと思ふのみ、再び言葉をまじらへず、いひ合さねども、神佛の感應冥助を默禱して、怒を忍び、心を苦しめ、立並びつゝ目成たる、間四五歩に過ぎりけり。舵九郎は既に斯、侮傲る殘忍不敵の、興に乗して早には撃ず、又何々と冷笑ひ、揃ひにそろひし鬚撫ても、汝等兩人まだ死ねば、後家奴も珠數を斷がたからん。さらば餓鬼奴を料理せん、拳の牙をよく見よと、再び石をとり揚れば、妙眞は只手を抗て、あれよ／＼と哭叫ぶ、聲魂悲しき絶體絶命。照文も文武五兵衛も、今は忍ぶに忍れず、小兒を撃ば答の大刀、響をいかでか逃すべき。乾竹削になさんず、と刀の柄に手をかけて、走り進んとする程に、舵九郎は拿たる石を、閃しつゝ稚兒の、胸を望て撃んとするに、おもはずも拳狂ふて、地上を破と拍しかば、且怪み且睨て、塵粉になれ、と復り揚る、腕忽地麻痺て、われにもあらず惘然たる、頂の上に鬚鬚と、一朵の靄雲天引降て、電光妻じく、風亦颯と音し來つ、石を巻き沙を飛ばして、草木を靡かす鳴動に、或は明く、或は暗く、雲の漸々に降來て、大八の親兵衛を、引包むとぞ見えたりし、はや中天へ巻登すれば、舵九郎はわれに復りて、驚き睨る兩手を抗つ、なほ稚兒を遣らじとて、跳狂ふて撲地と輾べば、足はそらさまになりて、身は地をはなれ、雲の中に物ありて、倒に引揚るがごとく、鮮血濺と霑りて、舵九郎は臂より、鳩尾の邊まで、ばらりずんと引裂れたる、軀は挫と落てけり。かゝる奇特に照文も、文武五兵衛も進みかねて、忙然たる後方より、潮に逃たる悪黨四五人、なほ朽をしくや思ひけん、船棹、櫂、藻刈鎌、おの／＼懸手物を閃して、不意に起て撃んと進むを、照文はやく見かへりて、大刀

五日の月の、影のみ幽に遣りけり。



八犬傳第五輯序

余常以謂。有遊乎世者。有爲世所遊者。遊乎世者。適於自所適。不適於人所適。是以樂在內無竭也。爲世所遊者。適於人所適。不知自所適。是以微其樂於外。以自苦焉。若狂接輿遊于歌詠。莊周遊于寓言。左思司馬相如遊于文場。杜甫李白遊于詩詞。羅貫笠翁遊于傳奇小說。雖所遊不同。而其樂一致。亦惡踏人之足跡哉。蓋鸞鳳不羣飛。葛藤不獨立。葛藤也者。吾欲拂之。鸞鳳也者。不可得而爲友。雖然。人世一夢中。其所遊。非華胥必南柯。寤寐在。我。何遠之有。能知是樂。而後遊者。心之欲與不欲。無往不樂。遊乎遊乎。余固也久矣。今茲端月。本編脫藁。暨闕人告成。卽是言爲序。

文政五年陽月上澣

簑 笠 漁 隱

南總里見八犬傳 第五輯目錄

自第四十一回至第五十回

卷之一 第四十一回

木下闇 妙眞訝 依介

神宮渡信乃遭 積平

同卷 第四十二回

撫次 剪犬田決 進退

誣額藏 奸黨 逞殘毒

卷之二 第四十三回

射群小 豪傑鬧 法場

涉義士 俠輔投 河水

同卷 第四十四回

雷電 社頭 四雋 會語

白井郊 外孤忠 窺讐

卷之三 第四十五回

賣弄名刀 道節 復怨

追喪 窮寇 助友 換敵

同卷 第四十六回

地藏堂 莊助 爭首級

山脚村 音音 拒舊夫

卷之四 第四十七回

莊助三試 道節

雙玉交 還其主



同卷 第四十八回

歌馬暗導 兩夫妻

卷之五 第四十九回

陰鬼陽人肇判然

兄弟悲全二老親

節義貞操迭苦諫

同卷 第五十回

白頭情人遂合卷

青年婦人善提

是書每輯。五本爲一帙以刊行。唯第四輯。四本爲一帙。是故今於本輯。增一本以補其不足。自是之後。亦當如第三輯已上。

八犬傳第五輯目錄 卅八回 已上題目 見前輯卷端





南總里見八犬傳 第五輯 卷之一

東都 曲亭 主人編次

第四十一回

木下闇に妙眞依介を誘ふ  
神宮渡に信乃精平に遭ふ

蛭崎十一郎照文は、文五兵衛共侶に、逃る悪黨を追走らして、舊の處に来て見るに、妙眞は小草の上に、伏沈みたる儘なるを、頻に呼ども應をせず。こはいかに、と驚睜て、兩人右より左より、やをら扶起しつ、遽しく石澗を掬て、顔を吹被などしたる、介抱等閑ならざれば、妙眞は稍こもちづきて、眼をひらきて吻く息の、狹霧は雨と降更る、涙を袖に堰かねて、膝より傳ふ行潦、ながらふる身をうらみ良なる、胸さへ曇る夕月の、幽き影に、と見かう見て、喃古那屋の翁、蛭崎ぬし、うちも累る殃厄の、一箇脱れて又一箇、いとも怪しき風雲の、降集程に見えずなりし、穉きものはいかにぞや。その亡骸は樹杪に、掛られたる歟、地に落し歟。よしや軀を引裂れて、七段八段になりたりとも、今一たび見まほしけれ。あらずやいかに。と問かけて、又潸然と泣沈めば、文五兵衛もはふり落る、涙に鼻をつまらして、否舵九郎こそ引裂れし、亡骸は彼處にあり、大八の親兵衛が往方は知るよしなけれども、顔ふに渠は小兒なり、犯せる罪のあるものならぬに、夜叉敷天狗の所行なりとも、兇暴虎狼の悪棍と、ひとしく命を絶れんや。世に神隠しといふことありて、速ければ一兩月、遅くとも兩三年には、還さるゝものぞとよ。歎くは渠が爲ならず、神に祈り佛を念じて、かへり来る日を俟給へ。今とて術はあらずかし。といひつゝ、目を押拭へば、妙眞いよ、うらみ泣て、大八の親兵衛は、おん身の爲に、孫なれども、男はよろづにむつよくと、しかばかりだに、諦め給はば、思ひ絶ても

りぬべし。況小文吾どこのといふ、他とせし男兒一人あり。吾僻は鶴に子と鶴を、喪ふてまた幾日もあらず。恨に思す櫻實の、ひとつといふて掛替もなき、孫さへ神に獲られしを、歎かていつまで待るべき。絶ぬ思ひに病騰ふて、世にも人にも疎れんより、この野の露と消なまし。惣に呼活られて、強顔きものは命也。悲しきかな。と身を投俯て、嗚咽亦咳逆る、哀傷さこそ、と文五兵衛は、人の歎きもわが涙も、禁かねつゝついゐたり。照文聲を勵して、恰例けれども婦人の臆斷、時の不祥に値ばとて、生を輕じ死を樂ふは、亦甚しき惑ひならずや。吾つらくと思惟るに、大八の親兵衛は、鬼神の爲に隠されて、今その往方をしるよしなくとも、決して恙あるべからず。何となれば、渠は四歳の小兒なれども、原是犬士の一人なり。犬士の一人たるときは、伏姫うへのおん子に等し。伏姫うへのおん子ならば、役行者の擁後もあるべく、觀音薩埵の利益もあらん。さればこそいぬる比、父房八に賜られしとき、一旦息絶たりけれども、大法師に扛抱れて、忽地甦生せしのみならず、その胎内より握固たる、左の拳をうち披きて、仁の字の玉顯れ出、なかりし瘡の身にいて來て、形牡丹に似たる事、是未曾有の奇特なれ。大約かくのごとき神童は、窮阨の中に在りといふとも、鬼魅もこれを犯すべからず、水火もこれを損ふべからず。凡庸痴呆の童子に等しく、野狐天狗に匂引れて、豈溝壑に死すべきや。神慮と佛力は凡智もて、量知るべき事ならねども、舵九郎を屠戮して、親兵衛を拯れしは、役行者の應驗ならん歟。余らずは伏姫の神靈成、神謨にぞあらんずらん。彼姫うへは心雄々しく、且孝にして、信あり義あり。その心術と行狀は、丈夫にも多く得がたし。終らせ給ひし爲體と、御遺言の趣を、今さら思ひ合すれば、骸は富山に瘞れて、二十年あまりふる塚の、標の松を肥すとも、靈は必犬士のうへを、護らせ給ふ事あるべし。わが推量に違はずは、他し犬士と俱ならて、此度彼小兒をのみ、まづ一人一將て還りて、君の見參に入れんとせしは、時のなほはやきによりて、神慮に協せ給はねば、且く隠し給へるならん。さばれ只是推量のみ、當らずといふとも據あり。今ゆくりなく失ひし、親兵衛に恙あらば、玉を握りて生るべからず、身に亦丹花の



悲もいて來じ。孫の爲に自愛して、還さるゝ日を俟給へ。祖母外祖の愁歎は、恩愛の切なるも、私の情義にして、只その一家のうへに保れり、彼稚兒を失ひし、わが愁歎の八しほにましたる、君の爲には不忠に似たり。友には不信と怨みられん。今此時の不祥に惑ふて、事の不如意に怒狂はゞ、われこそ腹を切るべきに、死なぬは命を惜むにあらず、死してその益なれば也。心を定めてわがいふよしに、就て惑ひを解ねかし。世を憤るは愚癡にこそ、後の榮を俟すや。と頻に諫奨せば、文五兵衛は言下に悟りて、亦共侶にぞ慰めたる。妙眞僅に涙を斂めて、蚤崎ぬしの白地に、料らせ給ふ如くならば、後憑しく侍れども、過世いかなる業報にや、子さへ孫さへ失ひし、わが身ひとつの薄命は、樹枝に離れし猿猴にも、及ばぬものをいかにして、後の榮にあふよしあらん。よに惜からぬ命なれども、得死れぬは罪障の、いとしも深き故なるべし。吾儕には身の暇を給はせ、剪たる髪を剃捨て、斗敷行脚の比丘尼とならば、萬にひとつ親兵衛に、環あふ日のありもやせん。譬ば素懷を得遂すして、旅より旅に野ざらしの、屍は獸を肥すとも、罪障竟に消滅せば、後の世こそやすかるべけれ。安房へ參るは要なし。といひかけて目を拭へば、文五兵衛も堪かねて、頻に涙をうちかみけり。照文聞て頭をうち掉り、剃髮の事はとまれかくまれ、ひとり不覺に行脚して、孫の往方を索ん事は、遂がたうして且危し。さればとてこの儘に、市川なる宿所に還らば、純九郎が夥多の悪棍、擊漏せしも多かるに、又横ざまに恨を合て、冠せんとこそ謀るらめ。かゝれば宿所に還るも危し。一旦安房へ赴きて、しかして後に進退を、國司の仰に従はゞ、身はやすくして危からず。又大八の親兵衛は、神明佛陀の擁護によりて、雲に駕り空を翔らば、今はや安房に赴きたる歟、これも亦知るべからず。縦その事あらずとも、辛して將て來つる、雲士を途に失ふて、その祖母だも俱して遇すは、何を證に云々と、わが君に聞えあぐべき。こは只おん身がうへのみならず、その進退は、某が身にしも係る事なりかし。かくまでを言をわきて、驚明でも聽れずは、わが命運も是までなり。と一犬士を失ひし、奴をいかにせん。進では里見殿に、まうし解ん置もなく、退きては、大等に、ふたゝび面を向がたし、進退こゝに谷まりて、自殺するより外にすべなし。事、備を思ひ涙で、人をも身をも討たば、行脚の亦、聞も訖らず眼を睜て、蚤崎ぬしの宜ふ趣、理りならずといふことなし。現市川へ還るは危く、安房へ赴けば悪棍等が、餘毒を避るに究めてよし。今さら澁ることやはある。われはこゝより立わかれて、竊に武藏へ赴くべし。かくて道徳と犬士等に、事の趣を報知して、又立かへりて市川なる、留守の宿をも折ふ訪ふべく、時宜によらば安房へいゆきて、おん身に對面すべきなり。其時おん身はかへり來るとも、亦只彼地に留るとも、そは左も右も隨意なるべし。長兪議せば小夜のみ更ん。今宵の宿りへ急ぎ給へ。と言葉せわしく勸れば、妙眞やうやく領きけり。照文ふかく歡びて、しからば月の没ぬ間に、とくくと誘引立て、舊の大路へ赴くに、妙眞はその道すがら、文五兵衛を見かへりて、さるにても痛ましきは、依介が事也かし。渠が心さまの淳樸なる、他し篙工等に立優りて、主の爲になるべきもの也。人にしらせぬ旅なれども、渠なればこそ途までもとて、愁に將て來たるにより、可憐命を傾さしたれ。不便なる事してけり。といひつゝ、涙吒めば、文五兵衛も嘆息して、われも介こそ思ふなれ。心急ぎのせらるゝとも、亡骸を埋めずは、狗鳥に傷られん。としてやよけん、かくやせまし。と相譚てゆく程に、聊先に進みたる、照文これをうち聞て、現彼依介とかいふ小厮は、大敵を見て怯せず去らず、遺たる杖をとり揚て、且く防戦ひつゝ、其處に命を傾せしは、よに有がたき義僕也。その亡骸は今竊に、道次に埋置て、後に改葬るべし。まづ彼處までいそがずや。といふに兩人歩を早めて、舊の松原に來にければ、前面なる樹下に、一個の人立在たり。つくんと透し見るに、額の素きは、亡者の被る、地藏格にやあらんずらん。背の高きは一ト楯の包物を負るなり。手に竹杖を突立たる、その模様大かたならず、依介に似たりけり。妙眞遙にこれを見て、遽しく文五兵衛が袂を引つゝ、聲を細めて、彼見給へ、依介が、冤魂の顯れた。り彌陀佛々々々。と唱れば、文五兵衛は領くのみ、共に念佛する程に、照文はいちはや

を向がたし、進退こゝに谷まりて、自殺するより外にすべなし。事、備を思ひ涙で、人をも身をも討たば、行脚の亦、聞も訖らず眼を睜て、蚤崎ぬしの宜ふ趣、理りならずといふことなし。現市川へ還るは危く、安房へ赴けば悪棍等が、餘毒を避るに究めてよし。今さら澁ることやはある。われはこゝより立わかれて、竊に武藏へ赴くべし。かくて道徳と犬士等に、事の趣を報知して、又立かへりて市川なる、留守の宿をも折ふ訪ふべく、時宜によらば安房へいゆきて、おん身に對面すべきなり。其時おん身はかへり來るとも、亦只彼地に留るとも、そは左も右も隨意なるべし。長兪議せば小夜のみ更ん。今宵の宿りへ急ぎ給へ。と言葉せわしく勸れば、妙眞やうやく領きけり。照文ふかく歡びて、しからば月の没ぬ間に、とくくと誘引立て、舊の大路へ赴くに、妙眞はその道すがら、文五兵衛を見かへりて、さるにても痛ましきは、依介が事也かし。渠が心さまの淳樸なる、他し篙工等に立優りて、主の爲になるべきもの也。人にしらせぬ旅なれども、渠なればこそ途までもとて、愁に將て來たるにより、可憐命を傾さしたれ。不便なる事してけり。といひつゝ、涙吒めば、文五兵衛も嘆息して、われも介こそ思ふなれ。心急ぎのせらるゝとも、亡骸を埋めずは、狗鳥に傷られん。としてやよけん、かくやせまし。と相譚てゆく程に、聊先に進みたる、照文これをうち聞て、現彼依介とかいふ小厮は、大敵を見て怯せず去らず、遺たる杖をとり揚て、且く防戦ひつゝ、其處に命を傾せしは、よに有がたき義僕也。その亡骸は今竊に、道次に埋置て、後に改葬るべし。まづ彼處までいそがずや。といふに兩人歩を早めて、舊の松原に來にければ、前面なる樹下に、一個の人立在たり。つくんと透し見るに、額の素きは、亡者の被る、地藏格にやあらんずらん。背の高きは一ト楯の包物を負るなり。手に竹杖を突立たる、その模様大かたならず、依介に似たりけり。妙眞遙にこれを見て、遽しく文五兵衛が袂を引つゝ、聲を細めて、彼見給へ、依介が、冤魂の顯れた。り彌陀佛々々々。と唱れば、文五兵衛は領くのみ、共に念佛する程に、照文はいちはや



く、ほとりに進み近づきて、それは依介にあらずや。と問へば然なりと應つ、杖に携て樹蔭を出たり。當下如眞と文五兵衛は、前に立、後に遶りて、眼を定めて再び見るに、地藏楮敷と思ひしは、白曝の手巾もて、額の瘡を巻たるなり。原來いまだ死ざりし、と思へば齊一聲を被て、やよ依介敷、恙なきこそ幸なれ。そなたは禪に悪棍等に、いたく撃れて倒れしかば、穢絶たらんと思ふになん、今も今とてその事を、いひつ歎きつ、亡骸を、とり斂んとて来る途にて、ゆき遭たりし歡しきよ。といへば依介微笑て、僕、は彼とときに、一旦は死せしならん、われをも知らず倒れし程に、日は暮れ、天は結陰て、暴き風雲の過るまに、わが面を撲つ驟雨の、口にさへ入りにけん、忽地に甦生しつ、四下を見れば薄月夜、唧がましき虫の音のみ、敵も躬方もあることなし。われはともあれ人々は、いかになり給ひけん、と思へば心安からず、辛して身を起せば、漸々に撲傷の疼痛を覺て、速には走りかたかり。扱もわが人は、南へ走り給ひし敷、市川へ還り給ひし敷、或は撃れ給ひし敷。敵に拘れ給はずや。と思ひかねつ、樹下に、立在て候ひしに、うちも揃ふて恙なき、面をあはし奉れば、疼痛を忘れて足も進めり。只この中に坊さまの（親兵衛をいふ）見え給はぬはいかにぞや。と問へば妙眞目を拭ふて、大八がうへに就ては、くさんくの話あり。いと怪しき事なりき。といふに依介驚きて、それは亦甚麼なる事ありし。と問ふを照文うち滅して、途中難談究て益なし。古那屋の主人はこゝよりして、とく還るこそよかめれ。われは大江の祖母を將て、兩人南に赴んに、わが年いまだ五十に至らず、婦人も四十あまりとおぼし、柳下恵にあらざれば、影護く思ひしに、依介既に甦生して、こゝに遭は幸なるかな。渠を安房まで將て適かば、心ぐるしき事もなし。かゝれば今宵の宿りに急がん。古那屋の主人よ、彼地の事は、曩に示しあはせし如く、彼人々に言傳給へ。脱落はあらじ、こゝろ得たりや。といふを文五兵衛聞果す、それは御こゝろやすかるべし。大江の阿婆、さらばそよ。禪にもいひしことなれども、われ彼地よりかへり來ば、留守も折折見まふべく、安房へも還て安否を問ふ。よしなく船を懸はすに、氣ながく運船し給へ。といへば妙眞うれしげに、

そはほるもなき別にこそ。聞きに歩をいそぐとも、こゝろして罷き給ふな。秋の暮の堪がたきも、今宵時程なるべし。病な煩ひ給ひそ。とこゝろを付れば領きて、纏て袂を分つになん、情由を得しらぬ依介も、惜む名残は異ならて、路は異なる北南、別れておのゝ急ぎけり。余程に文五兵衛は、その宵初更の比及に、市川まで走りかへりて、里の形勢を窺ふに、撃残されし悪棍等は、有繋に公聞を憚てや、何地ゆきけん影もせず。又大江屋の門傍より、裏面のやうをさし覗くに、篙工等はいまだひとりも還らず、留守なる婆々は芋を績て、細き燈火の下にをり。これ彼すべて無事なれば、僅にこゝろを安くして、獨つら／＼思ふやう、行徳の宿所にかへりて、わが浦船に乗らんとせば、はや夜の更てその船を、輒くは出すべからず。こゝより水行を進まんとして、案内知たることなれば、とかくして一艘の快船を借とりつ、足をまし、篙工を倍て、武藏を投て漕しけり。されば又照文は、急ぐとすれど行侶は、老女なり疾負なり。辛して二更の比、大和田の里に宿投りつ。是より日毎に五六里の、路を進みて上總に赴き、異なく安房にかへり著ぬ。照文妙眞等が事、この下に話説なし。案下某生再説、犬塚信乃、犬飼現八等は、いぬる六月廿四日の朝未明に、大田小文吾に送られて、船路をゆくこと六里許、宮戸河より北のかた、千住河を派りて、その日末の比及に、武藏國豊嶋なる、神宮河原に著にけり。いぬる比叢六が、信乃をふかくも許謀て、村雨の大刀を奪せしは、こゝなりけり、と豫てより、現八も小文吾も、傳聞たる事なれば、又今さらに思ひ合して、俱に遺恨に堪ざりけり。扱あるべきにあらざれば、神宮の岸に船を繋ぎて、旅宿の事を相譚ふに、信乃は且く沈吟じて、この所よりわが舊里へ、一里あまりもあるべからん。しかれども、豫て報たる情由あれば、伯母夫許赴きがたし。さればとて、このわたりなる里人は、農夫ならざれば漁者のみ。絶て客店あることなし。こゝより西南のかた、二十町許にして、瀧野川といふ村あり。この村に、金剛寺といふ古刹あり。辨才天の靈地也。某八九歳なりし時、母の爲に祝禱して、しば／＼詣し事あれば、案内はよく知れり。簡様々々にこしらへて、彼僧坊を旅宿にせば、世を潜ぶに究竟ならん。且大塚へ遠



からねば、額藏の莊助と、往來に便よし。これを捨ては戸田わたり、驛路はなほ遙なり、瀧野川こそよからめ、といふに兩人諾ひて、齊一岸に上る折から、一個の賤夫水際に立り。はやくも信乃を見かへりて、おん身は大塚なる莊官の、令甥とやらんにはさずや。と問れて信乃は驚きながら、その人をすらく見ると、年齢は五十あまり、六十にもやなるべからん。舊たる袴の單衣を被て、手に一挺の藻刈鎌を携たり。さしその面魂、悪棍とは見えざるに、既にわがうへ知られしを、悪果べうもあらざれば、現八小文吾に目を注して、進み對ひて莞然とうち笑み、現推量せらるゝごとく、われは藁六が由縁のもの也、抑和主は何人ぞ。と問かへされて、うち微笑み、はや忘れ給ひし歟。小人はいぬる比、網船を貸進らせし、船主にこそ候なれ。わが名は猪平と呼ばれたる、土地に久しき漁者なれども、年老て子もなければ、今は網引の業をせず。さばれ漁船は、なほ一二艘持たれば、備篙工して人に貸すを、生活にしてこそ候へ。大塚の莊官は、漁獵を嗜み給へば、年中には幾遍となく、こゝに水獵し給ふ折、わが網船を貸進らせしも、はや年來になりたり。只おん身とは昨今なれども、忘れもえせずこの月の、十六七日の比になん、おん身は一個の壯俊と、共に莊官に携られて、漁獵に來給ひつ。その折小人心當に、莊官に問候ひしに、彼はわが妻の甥なる、大塚信乃といふもの也。これはわが里人なる、網靴左母二郎と呼ぶものぞ、と報させ給へば定かに知れり。その日は莊官の過失で、船より滾落給ひしを、おん身がいとも精悍しく、被あげ給ひしにあらすや。扱も大塚の凶變は、心苦しき事になん。彼騒動を外にして、何地にか遮給ひし。と眞實だちて弄けば、信乃は再び驚きて、現いはるればその事あり。われは殺生を好まぬに、心におもふ事の多くて、面忘れし疎さよ。知らるゝごとくいぬる比、伯母夫に俱せられて、こゝに遊びし次の朝、吾儕は下總に赴きつ、彼處の友に送られて、只今かへり來にければ、何事もまだ聞しらず。大塚の凶變とは、何なる所以ぞ、聞まほし。と問へば猪平領きて、原來彼件の趣を、露ばかりも知らせてやをはする。しからば曲に告べきに、こなたへ來ませ。と先に立て、己が宿所に誘引けり。三士は思はず目を



(三 犬 士 船 神 官 渡 につ な ぐ)

推したる、胸中いよ、霧ならず。かくて猪平は、河原にそふたる白屋の、門の戸を推開て、遠くし籠を把つ、簀子の塵を掃片よせて、信乃現八小文吾を、上座に請のぼし、地爐に枯葦折焼て、茶釜の膚を拊試たる、心のどかに火を吹ば、信乃等は頻に焦燥て、主よ、茶も湯も欲からず。大塚の事心もとなし、彼凶變とはいかなる故ぞ。と再問れて小膝を進め、小人も彼處へいゆきて親しく見たる事ならねども、こゝらに風聞隠れなければ、聞たる隨の趣を、物がたり仕らん。扱もいぬる十九日、眞夜中比の事にやありけん、大塚の莊官夫婦は、陣代簸上宮六ぬし、屬役軍木五倍二ぬしに、砍られて即死し給ひぬ。その折莊官の小断なる、額藏とかいふ猛者が、遠方より歸あはして、主の怨を報ひしとぞ。宮六ぬしは當坐に撃れて、五倍二ぬしは、淺瘡才瘡、あちこちと負ながら、辛して逃亡たり。縁故を尋るに、彼陣代の威勢もて、莊官の獨女を、娶らんとて約束せしに、これより先に息女の母御が、左母二郎にも約束して、婿にせんといはれしを、猛に變改せられしかば、左母二郎



はふかく怨みて、その宵竊に令弱を、略奪て走りつゝ、圓塚山まで將てゆきしに、令弱濱路どのとやらん、そのころに從はでや、左母二郎に殺され給ひき。いと痛ましき事になん。その折に亦誰とは知らず、左母二郎を撃捕て、首を樹枝に伐梟つゝ、云々と書遣したり。只左母二郎のみならず、土太郎、加太郎、井太郎など呼れたる、三個の破落戸さへに、おなじ山路に殺されたり。土太郎はいぬる日に、彼網船を漕したる、備篙工て候へば、犬塚ぬしにも識られしもの也。或はいふ、加太郎井太郎等は、旅轡を昇ものなれば、左母二郎に備れて、濱路どのを駕して來り、土太郎はこの夜さり、莊官に憑れて、左母二郎を追來て、俱に命を隕せしとぞ。就中傳へ聞くだに、いと心苦しきは、額藏男の薄命なる、主の仇人を撃たれども、敵手は特に威勢ある、陣代なり屬役也、その方さまに誣られて、わがいふよしは一切聽れず。背介とかいふ考僕とともに、むごく獄舎に繋れたり。かゝりし程に鎌倉より、大石殿の下知を受たる、丁田町進とかいふ一個の老黨、陣代として犬塚に下向しつゝ、額藏背介を牽出さして、日毎の苛責間斷なし。そは彼嶺上の弟なる、社平といふ壯俊と、五倍二がこしらへて、怨を復すと聞えたり。莊官夫婦の殺されしは、婚姻の宵に令弱を、網鞆に奪去られしと、瑁引手の名刀が、似ても似つかぬ價物なりしを、瑁がねも媒妁も、怒り狂ふて事起りしかど、社平ぬしも、五倍二ぬしも、さる事は絶てなし、臺六夫婦を害せしは、則小斯額藏也、宮六と五倍二は、その折彼處に適あはして、事のこゝに暨る也、と實事しやかに誣る物から、眞夜中ごろの事なれば、これ彼ともに證人なし。但背介とかいふ老僕は、額藏よりはやく還りて、莊官夫婦の撃るゝときに、淺瘡を負て倒れたる。そは額藏の證人とて、云々と聞えあげしに、背介は口よく利ものならぬに、年は老たり、瘡は負たり、果敢々々しくもいふことなければ、これさへに誣られて、日毎の苛責を脱れず。かゝれば件の兩人は、ちかきに首を刎らるべし、といひもて罵るもの多かり。可惜忠義の壯俊を、冤枉に殺されなば、いと憐むべき事也とて、知るもしらぬも彼命助と、軍木を憎ぬものはなし。解きまうすも、解きまうすも、難事多からん。なほよく人に聞かひね。と言葉せわ

しくとき示せば、信乃はさら也現人も、小文吾も、驚呆れて、齊一嘆息したりける。當下信乃は慨然たる、眉根をよせつゝ、現入と、小文吾を見かへりて、わが伯母夫婦の心さま、そは好もあれ歹もあれ、總角の比よりして、養れたる恩惠をおもへば、哀戚の涙禁め難かり。さるにても額藏は、その處を去らずして、主の仇人を撃し事、よに羨しき大義也。しかるもいたく誣られて、命危きをいかにせん。わが同盟は一人として、薄命ならぬものもなし。歎ずべし。と怨じて臉をしばた、けば、兩人も亦遺恨の外背、脱語たる拳を捺りて、慷慨嗟嘆は皆相同じ。さればとて彼人を、搦出す術もなし。俺們兩人彼處にいゆきて、なほ又里の風聲を、聞定めて後にこそ。といふを猪平推禁めて、各位は大塚ぬしに、甚麼なる由縁あるかはしらねど、漫にな早り給ひそ。いといひがたき事なるを、明々地に告べき歟。こゝろに悖ふことありとも、そは聞ながし給へかし。世の風聞に就て思ふに、犬塚ぬしはその初、莊官の瑁がねならずや。然るを陣代の密議によりて、遠離られ給ひし、と世の人はいふめれど、社平ぬし五倍二ぬしは、なほ娟く思ひけん、腹心のものに流言さして、濱路を誘ひ出せしも、又臺六が追捕に蒐たる、左母二郎とその餘の三人を、圓塚山にて殺せしも、信乃額藏が所爲也、と喋々しくいはせしかば、犬塚ぬしにも疑ひかゝりて、往方を索らるゝとぞ。大塚の里人等は、犬塚ぬしを最眞ぬもなければ、竊に胸を苦しめたる、兪手に汗を握れども、爲にいひと證のなければ、只舊里へかへりなせそ、と念じて口を針てをり、と彼里人はいふぞかし。小人も大塚に、聊相識るものあれば、これらのすぢさへ粗聞たり。さるを誰にもをはしませ、犬塚ぬしの友也とて、彼處へ邁てこれ彼、と言問ひ給はと捕れて、辛きめにあひ給はん、いと危しとも危し。と手首ふりて密語ば、現入小文吾はいとしく、忿激に堪かねしを、思ひかへしてうち鎖き、そは甚しき誣罔なれども、危邦には入るべからず。よくこそ知し給ふたれ、歡しく候。と應て信乃に目を注すれば、信乃は腰纏の財布より、粒銀四五顆とり出て、懷紙にうち載つゝ、これを猪平に進めていふやう、こはいと些少の物なれども、好意を謝するのみ。某等ゆくりなく、和殿に邂逅したるによ



り、故郷の計を聞くのみならず、身に係るべき冤尤を、潜やかに告げられしは、多く得がたき幸なり。聞くがごとくば今さらに、大塚に還りがたし。信濃は母の生國なれば、彼地へや赴くべき、いまだ思ひ定めねども、こゝらに逗留すべくもあらず。水際に繋留たる船を、この友人の還る日まで、預りてたびねかし。いはでも如才あらざめれど、俺們が下總より、かへりし事もいひつる事も、和殿一個の胸に秘めて、親しき友にも告給ふな。といふを猪平聞あへず、そはこゝろやすかるべし。宜ふまにノ諾ひたり。大塚の莊官は、年來の花主なりしに、おん身はそが令甥なり。世の評判は舅公にまして、賢人君子といはれ給ふ。可惜武士の薄命なる、けふはからずも再會して、亦痛しさも一トしませば、いとひがたき事をすら、潜やかに告たるのみ、醜を受ん爲にはあらず。このわたりは近き比まで、豊嶋の采地なりければ、この舊恩をこそ思へ、管領には民親しまず、況大石殿の陣番等は、民の膏腴を絞るのみ、忠義を誣て奸佞を、逞しうせらるれば、誰かそれを徳とすべき。犬塚ぬしはこゝらにひまして、人に知られ給ふとも、大塚の陣番へ、告訴せんものありとも覺す。しかれども彼城中より、こゝらまで穿鑿りて、折々夥兵のうち巡れば、一ト宿も留進らせがたし。名残は最惜けれども、はやく他郷へ避給へ。この脱は要なし。と推辭を信乃は再びすゝめて、好意はさる事なり。さばれ是だに受られずは、何をもち某が肺肝を表すべき。一河の流れも他生の縁、その落薄を見相憐むは、愈天稟の善心なめれど、主人のごときは多く得がたし。善に與して不義を憎む、鯁直人とおぼしきに、いかなれば悪棍の名にしおふたる土太郎を、備ふて船を漕せしやらん。といへは猪平微笑て、否小人はこの年來、只一チ日も土太郎を、備ひし事はなかりしに、彼日に限りて莊官の、土太郎を備ひてよ、と宣はせしによりて也。介らずはいかてか彼悪棍に、わが船を漕すべき。小人は年老て、生活だに懶惰ければ、人のまにノせざるることなし。只兩個の獅子ありて、そが一個の名は力二郎、一個は尺八と呼ばれたり。近き比こゝに来て、網引にその日を送れども、信濃の壯健なれば、奮然と豐嶋殿の、被亡をうち救きて、扇谷の管領家をすら、思惟る氣色なし。況大塚の陣

番などには、解とも思はずといふ、彼等が言を慎んで、禍を取ることやあらんと思へば小人教訓して、しばしば儆たりければ、余後は罵られねども、志は今に撻す。こゝより戸田へ提燈あり。彼等に送らせ候ばや。といひつづつ筒螺をとり揚て、吹鳴さんとする程に、現八小文吾是を禁めて、かさねノ誠心は、感ずるにあまりあれども、吾儕兩人はるく、と送りてこゝまで來たりし甲斐に、行侶は乏しからず。このうへになほ人を増さば、なかくノ視にたつべし。といふをしづかに見かへりて、しからば隨意し給へ。と應て懸て筒螺を、舊の柱に掛たりける。當下信乃は件の銀を、あるじのほとりにさし寄て、嚮にもしばノすゝめしごとく、願ふはこれを納め給へ。竊に主人の應答と、その氣質を察するに、浮世をはやく簞笠に避て、この水濱に隠れしもの歟。昔ゆかし候。といへば猪平額を拊て、否ざるものには候はず。わかゝりし時いさゞげなる、武士の祿を食たるのみ。本性は姨雪也。舊名を世四郎といへり。形のごとき下司なりしを、なほ愈ることありて、舊里なればこの處へ、追退けられ候ひき。小人が相識る老女、去年よりして上野なる、荒芽山の麓に在り、と近屬仄に聞えたり。倘信濃路へ赴き給はゞ、訪ふて宿を投め給へ。便もあらば、と豫てより、一通を寫めおきつ。なほ又おん身三はしらの事をし書加まるせん。と眞實だちて身を起しつゝ、棚の隅よりとり卸す、塵埃染たる硯を吹て、茶碗に残る茶を滴む、墨は曲れどいと直き、黄軸の秃筆拔出して、かくる眼鏡の玉匣、ふたとせになる船日記の、末なる白紙引裂て、走書して一通の状もろ共に巻籠て、飯桶の簞蓋反揚て、撮とりたる飯粒もて、封じて標識を書しるしつ。犬塚ぬし是はこれ、いとも無禮なるわざなれども、心くまなきことぐさに、この一通を委ねまつらん。荒芽山の麓ぞ、と風の便に聞たるのみ、迭に年來疎遠なり。彼處へいまだ適ても見ねば、いとおぼつかなき事なれども、必詰ね給へかし。老嫗の名を音音といへり。よろづに物こそ乏しからめ、浮世に遠き山里なれば、逗留し給ふともけしうはあらず。よりに憑み奉る。といひ被て恭しく、件の状を遞與になん。信乃はやをら受とりて、いはるゝ趣こゝろ得たり。遅速は定かならねども、信濃路へ赴かば、



由縁を訪て届べし。和殿の所望はうけ引たり。些の物なほ受ずや。といふに猪平ますく感じて、かくまでに宣すれば、且く領り奉らん。辱し。と受いたゞきて、紙に拵りてそが儘に、硯宮に納れば、信乃は件の一輪を、懐に挟つ、現入小文吾共侶に、謝を述、別を告て、おのゝ笠をふかくしつ、南を指て出てゆけば、猪平はほなげに、門傍に立てぞ目送りける。

第四十二回

夾剪を撫て大田進退を決む  
額藏を誣て奸黨殘毒を逞す

信乃現入小文吾等は、猪平が宿所を辭して、青田の睦を五六町、南を望てゆく程に、左に細小なる岡ありて、樹粒隙なく生茂れり。且くこゝにと立よりて、齊一株に尻をかけつ、ふたゞび進退を相譚ふに、信乃はしばしば嘆息して、某曩には神宮河にて、村雨の大刀を盗れしを、知らず潜我殿に罪を得たり。今は又彼河原にて、猪平に邂逅して、岡ざる資を得たり、縦大塚に赴きて、街談欄説を擲るとも、誰か亦彼ほどに、曲に告るものゝあるべき。現禍も禍ならず、福も亦福ならず。世は塞翁が馬なりけり。願ふに彼猪平は、人を識の量あるもの歟。われに信あり義ありとせずは、疑ずしてはるゝと、一輪を委んや。書状を輒く誂しは、こゝろありての所行ならん。十室の邑にも忠信あり、傾蓋故舊の如しといはまし。さるにてもわが伯母夫婦の、横死は思ひがけなき事也。みづから讓せし禍なりとも、一家の不幸はしかすがに、是某が不幸なり。濱路も亦憐むべし。渠愆に節義を守りて、親をも身をも喪ひし歟。往事はこゝに悔ても及ばず。額藏の莊助は、その罪にあらざして、今縲紲の中にあらずして、親をばとまれかくまれ、某は總角より、彼人と義を結びて、死生を俱にせんと誓へり。況わが伯母夫婦の仇を、立地に撃たるをや。衛計共に空して、勢ひ拯ひ得がたくは、共侶に死んのみ。他し事なく候。と思ひ入て尋ぐを、現入小文吾聞あへず、その述、懐は犬塚ぬし、和殿一個のうへのみならんや。某等は犬川生に、いまだ面識ならずとも、

玉と忠をおなじうせば、既に異姓の兄弟なり。財をもて拯ふべくは、盤纏を擧して共に計らん。又誓力をもて拯ふべくは、死を共にして相資ん。親疎を論ずることかは。と辭等しく怨すれば、信乃は莞爾とち笑て、刎頸の交りは、いづれに親疎あるべきならねど、某は就中、故舊の微意を演たるのみ。腹あしくな思ひ給ひそ。兩友ちからを勤し給はゞ、幸ひ尤甚し。しかれども犬田ぬしは、假初に送り來て、逗留この地に日を彌らば、親を忘るゝものに似たり。和殿は船を乗かへして、行徳と市川へ、これらのよしを報給へ。さらずは彼人々の、待わびて、さぞ物を思はん。還り給へ。と叮嚀に諭せば小文吾頭を掉て、某も親の事を、思はざるにあらねども、彼處は既に無事にして、こゝには火急の難義あり。舊里人に待れじとて、立かへりてふたゞび來ば、竟にその期に合ずして、輒斷を枯魚の市に見ん。豈是をしも義とせんや。且大塚の城中へ、親しく交加することなくば、何を使著に犬川生を、拯ひ出すことを得ん。犬塚ぬしは勿論也。犬飼ぬしも潜我殿より、その沙汰彼所へ聞えし歟、これも亦知るべからず。されば城中の爲體を、日毎に窺知るべきもの、某ならで誰かあらん。是見給へ、今來し途の田の睦にて、この鉄を拾ふたり。鉄は進みて物を剪れども、退くときはその功なし。剪は鉄の本字にして、鐵櫃に前の字をも、又剪の字を書て前後をわかつは、をさくこの義を取れりとぞ。某總角なりし比、手迹の師たる人はいひにき。鎌整なンドの農具ならば、田の睦に遺てもあらめ。あるべき處ならずして、この鉄を拾ひしは、前みて仇を剪るといふ、十字占ならんと思ひしかば、歡びてとり揚たり。然るを今行徳へ、退くときは鉄の功なし。事既に奇異なれば、こゝにふたゞび思惟るに、某は縁を求めて、彼城中へ入らんとすとも、商賈などに打撈ずは、忽地人に怪れん。しからばわがこの額髪を、剃落さては便なき事也。しかおもへども剃刀なし。今この鉄を獲たりしは、亦はからざる幸ひならずや。わがこころ既に決せり。兩友と共に進むべく、獨故郷へ退くべからず。いで、と左手をかけて、引出す額髪を、みづから件の鉄もて、はやくもはさみ落しけり。信乃現入はこれを見て、齊一感じて遂に禁めず。犬田主犬田ぬし、鉄の鬘



喩は究めて妙なり。かくまでめでたき前象あるを、いかでかその意に任せざらんや。はさみし迹に長短あり。刈半さし給ひね。といふに小文吾敬びて、さもこそあらめ、と拊て見つ、鏡を現八に遞與になん。こちへ向ね。とほとりについで、はさみ遣せし額際を、遣もなく刈とりしかば、前日剃し月額と、おなじ程にぞなりにたる。信乃も側に左見右見て、適微妙く肖つきにけり。姿を窺すに便よし。誘給へ、計りし如く、瀧野川へ赴ん。といひかけて笠をうち戴れば、兩人も笠をふかくしつ、後に跟き先に立て、舊の販歌に立出れば、日影は落て視も廻に、戦く稻葉に風渡る、下圃になりけり。かくて件の三大士は、金剛寺に赴きて、岩窟堂に詣つ、辨才天を默禱して、食堂にいゆきて呼門へば、寺僧出迎へて來意を問けり。當下信乃は進みよりて、某等は、辨才天に宿願あり。七日參籠すべく思ふて、遠方より來り。休息所を貸給はらば、幸甚しからんといふ。かゝる事折々あれば、寺僧は聊も疑はず、そはいと易き事也とて、姓名を問、住所を訊ふに、實を告んはさすがにて、三大士は某甲某乙と、慢に名告けり。よりにて寺僧は憤して、信乃現八小文吾を、客壇の側なる、子舎に安措して、夕膳を差する程に、はや黄昏になりけり。かくて、三大士は縁頼より、あちこちと見たすに、庭は石神川の流を引、水清く、山高からず、茂樹青葱として、瀑布あり、奇石多かり。夏を忘るゝ佳境なれども、心の憂は山水を、うち見て慰むべくもあらず。傍に人のをらずなれば、三大士は再額を聚めて、こゝより大塚へゆきかよふ、緯の便宜を相譚ふに、信乃は後方を見かへりて、某は彼里人に、多く面を識られたれば、夜艾ならでは赴きがたし。兩友は白晝といふとも、里に相識る人のなければ、後やすき事ながら、郷導の爲なれば、今宵は某犬飼を將て、潜やかに邁て見ん。三人共侶にと思へども、一人も岩窟堂に通夜せずは、法師門に怪れん。且神佛を欺くに似て、こゝろに偷からずかし。今宵は犬田留り給へ。犬飼生を先にすなるは、その實父の墓彼處にあり、そこらを償せん爲のみ。愚意に従ひ給はんや。といふに兩人頷きて、この譚にしかるべし。とくく。と急しつゝ、寺僧には岩窟堂に通夜すといふて外に出れば、既にして日は暮たり。

さる程に、信乃現八は、辨天堂を潜出で、足に信して急ぐ程に、岩窟堂なれば人にも遣せず、瀧野川より大塚まで、その道二十町に過ぎれば、はやくも莊官墓六が宿所のほとりに來て見るに、門には竹の欄かけて、裡面には人影ありともおぼえず。今さらに浅ましくして、嘆息しつゝ退きて、そが前面なる網乾が宿所を、外のかたよりさし覗くに、現こも空房になりたり。この處はその初、糠助の宿所なりし、と信乃が告るに、現八は、懷舊の涙を禁めあへず。家はむかしの儘とし聞くに、親の面影は夢にだも、見るよしなしとぞ啣ける。さてあるべきにあらざれば、信乃は現八が袂を引て、親の墓所に參詣す。祖母と番作手束の墓には、里人等が齊脱しならん、水も涸れず柩もありけり。又十歩ばかり左のかたに、近屬葬たらんとおぼしき、墳塋兩基並びたり。こは墓六と頼篠が亡骸を瘞しなり。こゝには絶て柩もなし。信乃はつらく見かへりて、その徳の厚薄は、死後に必見るべき事あり。親と伯母との甲乙を、思ふに就てなほ思ふ、錦を被て夜故郷へ、歸るといふ諺にも、劣るはおのが不肖なり。許させ給へ。とわびしらに、二親の墓、祖母の墓、彼新しき墳塋にも、水を沃ぎ葬草を挿て、曲々に祈念を凝せば、現八もそが後方に、跪きつゝ念じたる、回向に夏の夜更初たり。かくて又、信乃は現八に信して、糠助が墓所に赴くに、この夫婦の墓にも柩たえず。こは糠助が身まかりし比、信乃が墓六にとき勸めて、香華料を寄せしかば、その菩提院より植る也。現八は信乃が恩信に、感涙を拭ひあへず、水を汲かけ、柩を手向て、追慕の哀みやるかたもなく、地上に平伏し、慟哭して、時の移るをしらざりけり。信乃も有繋に懷舊の、涙を沃ぎて俱に祭るに、田舎の墓所は寺内にあらで、多く田の畦にあるをもて、かゝるときにも自在也。小夜更たれば寺に詣ず、信乃は又先に立て、額藏が母の塋域、行婦塚に赴きて、現八と共に祭れり。その子の爲に災害消除を、こゝろに占て禱るなるべし。又現八は甲夜の間、墓六が一卜件の風聲を、彼此にてうち聞しに、猪平が告たるとき、精細なるに及ねども、言大かたは異なることなし。とかくする程には、廿四日の月高く升りて、丑三ならんと思ふ比、行婦塚を祭果て、信乃は現八共侶に、その曉がたに瀧野川なる、岩窟



堂にぞかへりける。小文吾は信乃現八に、事の趣をうち聞て、然らば翌はわれゆかんとて、竊に示し合する程に、天は明て、朝鳥の啼聲す。寺にて早飯を果すとやがて、小文吾は亦現八を偵にして、大塚に赴くに、途なる農家にて、王子權現へ獻する竹筒と、弓箭を賣るもあり、又麻と木綿を織るもありけり。小文吾はこの處にて、麻と木綿を十四五反と、篋箋と楸をさへ買とりて、信濃路などよりいて來たる、商旅に打扮つゝ、現八を先に立て、大塚に赴きけり。現八は笠ふかくして、しらぬ人にもなほ潜べり。さして訪ふべき家もなければ、この日も亦行婦塚、番作夫婦の墓、糠助の墓に詣て、小文吾と共にこれを祭れり。いづれも同盟の義をもつて、親の如く子の如くす。祭果て現八は、親の菩提院に赴きて、住持に對面して、糠助が舊里人なるよしを告て、布施をすゝめなどする程に、小文吾は玄關に尻をかけてをり。現八は、住持と雑談する序に、藝六が事の趣を告るに、藝六は宮六に撃れ、願符は五倍二に殺されしといふ。又額藏が事を問ふに、城中の沙汰はよくもならず。當下現八は膝を進めて、某同行の商賈あり。大塚の城中へ、出入せんことを願へり。もし紹介を許し給はば、こよなき幸ひなるべしとて、他事もなく請求れば、住持は布施の多きに愛て、冥おもふ氣色もなく、大塚の城中には、些の檀越なきにあらず。折々ゆかばおのづから、好財主にあふこともあるべし。さはその人に對面せんとて、小文吾を召のぼして、城中なる檀越の姓多を記したる、手實一枚を興へしかば、兩人ふかく歡びて、恩を謝し別を告て、小文吾は大塚の城中へ赴きつ、現八は金剛寺へかへり來て、信乃にけふの首尾を告けり。小文吾既に城中へ、交如することを得たれば、信乃はいよくふかく隠れて、又大塚へ赴かず。現八は折々いゆきて、阡陌の風聲を撈るに、扇谷山内の兩管領は、近き比計我の御所と、和睦やうやく整ふ物から、なほ迭に狐疑あるにより、大塚の陣番等は、信乃が往方を索るに、清我までは穿鑿り得ず、只そのかへり來るをまちて、搦捕んと議するのみ。現八が事などは、絶て傳へも聞きけり。介程に小文吾は、日々大塚の城中に赴きて、麻と木綿を賣る毎に、本價の多少に拘らねば、廉からずといふものなし。これにより、彼此

にもてはやされて、はや知人もいて來しかば、なほそのすぢに際交りて、職舎の對面をよく見ばや、額藏の對面を、竊出す便もがな、とをさく、肺肝を摧けども、城中に入ることを得て、まだいくばくの日を経ざれば、かゝる大事を倉卒に、相譚べきよすがもあらず。とかくする程に、夏をなごりなく客宿に過して、秋といへば夏悲しき、七月朔日になりけり。小文吾は曠昏に、大塚よりかへり來つ、信乃現八と團坐して、竊に城中の沙汰を報るに、みな憤胸に滿て、うち聞毎に嗟嘆に堪ず、けふを限りとおもふになん、便宜の進退を定めんとて、且く閑談する程に、食堂より夕膳を差めけり。當下信乃等は寺僧に對ひて、前月廿四日より、某等が七日の參籠、今宵にて満願せり。か、れば明朝巳の比及に、身の暇を給はるべし。是は屬日の食料也。これは當坐の布施物也とて、小文吾が賣遺したる、麻と木綿と、永樂錢一千五百文を贈りにければ、寺僧はこれを受おさめて、いよ、叮嚀に欸待けり。日暮て三犬士は岩窟堂に赴きて、更に又議するやう、今この同盟三士の中に、清淨なるものは犬飼のみ、その餘は伯母と妹の服あり。さるを日來この神窟を、談合谷にしたる事、神慮その憚なきにあらねど、軍陣には神を祭るに、絶て觸穢を忌ことなし。今俺們が危窮存亡、譬ば疲馬に鞭うちて、大敵に向ふが如く、その身は矢石に傷られて、なほ一陣を成るに似たり。總麻の服ありといふとも、わが身の慾に祭るにあらねば、神は免させ給はん歟。いでや彼瀑布に祓禊して、同盟犬川生の爲に、窮厄解除の冥福を禱るべし。さはとて齊一衣を脱て、おのゝく瀑布に身を搏しつゝ、當山岩窟辨才天、并に灌の不動明王、若一王子權現と、念じて丹精をぞ凝しける。追前齋再說、嶺上宮六が弟巖上社平は、いぬる六月二十日の朝、屬役卒川菴八と共に、搦捕たる額藏背助を、緊しく獄舎に繋して、腹心の歩卒兩人に、訴狀一通を齎して、鎌倉へ遣すに、往返一晝夜を限りしかば、その宵初更の比及に、緯はや鎌倉に聞えたり。さればその告訴の趣き、額藏を誣て、信乃を疑ひ、莊官藝六夫婦はさらなり、宮六を殺して、五倍二に手を負せしは、藝六が小斯、額藏が所爲にして、老僕背介といふものを資け、藝六が妻の甥、犬塚信乃といふものも、亦その惡に與れり。但

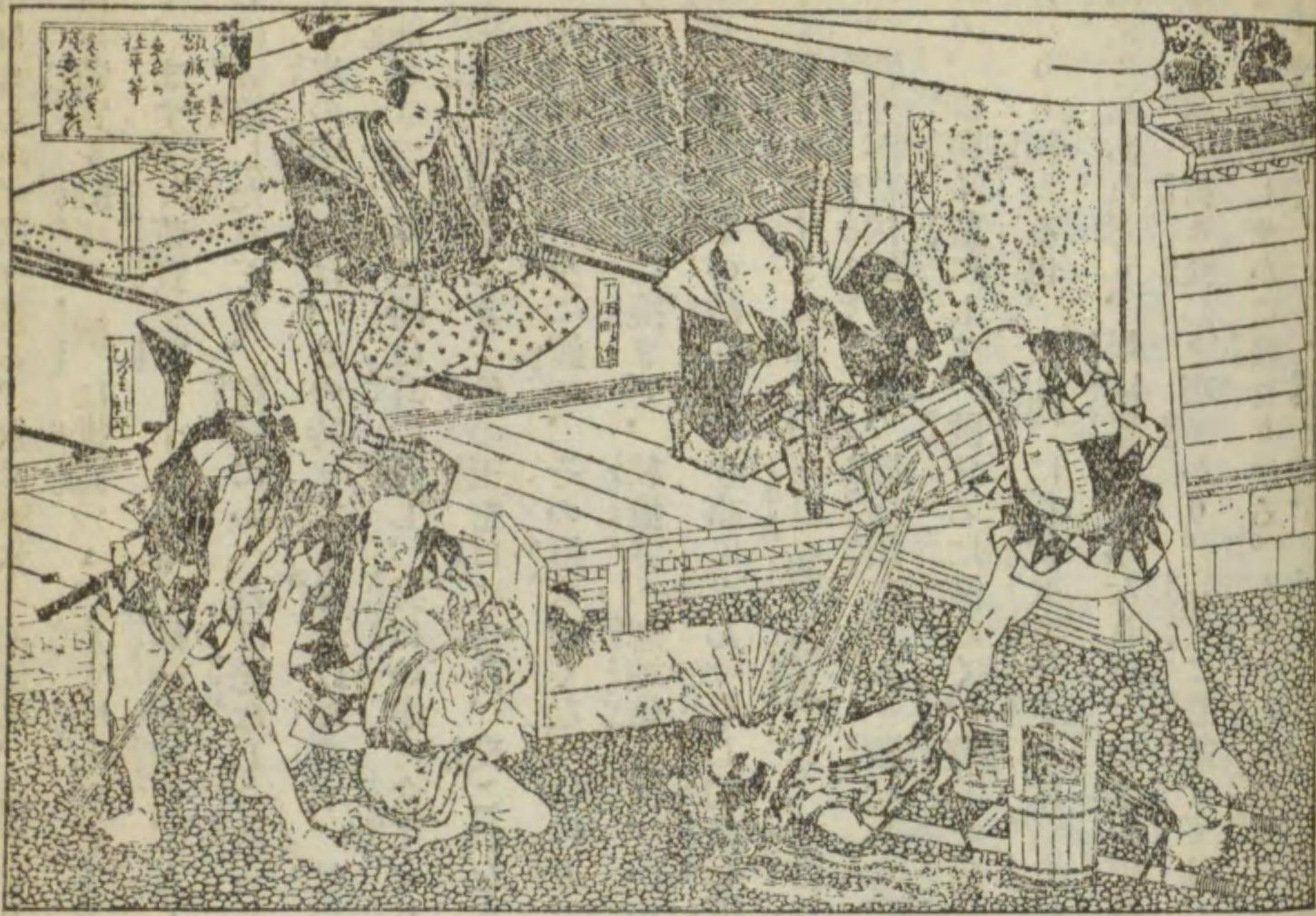


信乃は逐電して、いまだその往方をしらず。これより先にその夜ざり、轟六が女兒、濱路を盗出せしも、そが追捕のものを四人まで、圓塚山にて残害して、云々と書遣せしも、信乃額藏等が所爲なるよし、風聞既に定か也。よりて額藏背介等を、當朝に搦捕て、既にその身を禁獄せり。冀くは額藏等を給はりて、兄の怨を雪んと欲す。仰ぐ所感斷にあり。狀訴仍て件の如し。誠惶誠恐とぞ書たりける。是により、大塚の城主、大石兵衛尉が鎌倉の邸中には、老黨を聚合て兪議あり。これ彼と擇れて、出頭人丁田町進を陣代として、大塚へ遣すべしと定めらる。よくその情偽を拷糾して、社平巷八等が訴の趣、その事いよく實ならば、刑罰は律の隨に。執行ふべきもの也、と猛に命ぜられしかば、町進は次の日の曉に、鎌倉をうち起て、頻に馬を早めしかば、十六里を四時の程に、大塚の城へ乗著て、社平巷八等に對面しつ、生命を述傳へて、五倍二が刀瘡を檢るに、眉の上僅に一ヶ所、淺痕なれば物のいひざま、生平よりも爽なり。よりて事の趣を咨るに、五倍二答て、某はいぬる十九日、宮六に俱せられて、品草濱に赴きつ、かへるさははや更闌たり。折から張燈の蠟燭の、いと乏しくなりしかば、そを轟六に借ん爲、且湯をも乞はよとて、渠が宿所に立よりしに、彼小斯額藏が、主の夫婦を欲して、逃去んとしたりける、撞見に不意を撃れて、宮六と若黨二人は、矢庭に命を墮したり。某さへにかゝる趣舎、遺恨に堪ず候。と實事しやかに陳じけり。町進うち聞て、既にかくのごとくならば、事忽にしがたしとて、その曠野より廳を開けば、夥兵等は額藏背介を、獄舎より牽出し、縁頼ちかく推居たり。當下町進は、やをれ額藏。と呼かけて、事の顛末を鞫問するに、右に巷八あり、左に社平あり。夥の燈燭亮きて、亭午のごとく明かるに、夥兵は索を牽、獄卒は杖を揚て、とくく事の趣を、まうし上よ。と責たりける。かゝれども額藏は、騒ぎたる氣色もなく、主の仇人の見通しがたくて、當座に擊留め候ひし、そのこと、趣は、曩日聞えあげたる如し。別に仔細も候はず。といへば町進驚をふり立、やをれ額藏、汝は信乃と謀し合して、主の女兒を盗出せし、その背圓塚山のほとりにて、追捕のものを欲して、誰者無名の書を遣せしは、人を

欺んと欲するの奸計ならん。風聞既に定かなり。かくてもなほその懸に覺かて、主の宿所に立かへりて、鐵財衣袋を盗ん爲に、莊官夫婦を殺せし折、遺あはしたる宮六と、若黨二人を殘害して、剩痕を負したる五倍二が命、恙なれば、その口狀と風聞と、符節を合して分明なるに、汝が外に誰をさして、今さら主の仇人とするや。嗚呼の癖者かな。と罵れば、額藏撓まず小膝を進めて、いと憚あることなれども、宣ふ趣こゝろを得がたし。某はその前日に、主の使をうけ給りて、下總よりかへりしのみ。緣故を定かにしらねど、主人夫婦の殺されしを、見つゝ遁すべきにあらねば、箠上殿を擊留たれども、朋輩に抑留せられて、軍木殿を擊漏せしは、尤遺恨の至り也。况彼大塚生は、その前日故ありて、下總へ赴きたり。そは傍輩の奴婢を召て、問せ給はゞ分明ならん。又莊官の女兒濱路を、豪奪して走りしは、浪人網乾左母二郎なり。且濱路を殺せしも、左母二郎が所爲なるよし、建たる牌に記しあらば、これも亦分明なるべし。軍木殿はその身の羞を、掩ん爲に誣給ふとも、某より些し已前に、主の撃るゝを認しものは、則これ背介也。五倍二殿に小鬘を吹られて、簀子の下に躲れてをれり。かくまで正しき證人あり。問せ給はゞこれも亦、言明白に候はん。といへば丁田が左右なる、社平は竊に巷八に、目を指しつゝ冷笑ふ。當下町進は、膝に立たる扇杖をとり直して、やをれ背介、と呼被るに、背介は齡六十に餘りて、小鬘に深痕を負のみならず、辛く獄舎に繋れたる、恐懼によりて胃道衰へ、頭を戦し顔くのみ、果敢々々しくは答ざりしを、町進は倍と見て、背介はその宵、轟六とその妻の撃るゝを、定かに認しことある歟。件の夫婦を殺せしは、額藏なるや、宮六なるや、明々地に聞えあげよ。莊官夫婦を殺せしは、額藏にぞあらんずらん。額藏歟、額藏歟。としばしば問ども應を得せず、頻に點頭のみなれば、さもこそあらめ、と町進は、額藏を乞と疾視て、不敵の癖者、なほ陳するや。今背介を糾明して、轟六夫婦を殺せしは、宮六歟と問ば、頭を揮れり。額藏歟と問ば、頻に點頭く。その應答分明也。這奴鞭ずはいかにして、速に首伏すべき。とくくと焦燥ば、うけ給はる。と獄卒等は、杖を揚て立かゝるを、額藏急に見かへりて、



各位且く等給へ。背介が頻に頭をうちふり、又頻に點頭しは、みな渠が病の所爲也。その頭を掉んとするとき、宮六歟と問れしかば、勢ひ頭を掉ることなく、その點頭んとするときに、額藏歟と問れしかば、勢ひ點頭ざることを得ず。その辭を聞ずして、只介をもて黒白眞偽を、決め給ふはいかにぞや。といはせも果す推伏せて、一百あまりぞ撰たりける。憐むべし額藏は、背破れ、皮肉爛れて、忽地氣絶してければ、獄卒は杖を駐め、引起して水を吹被るに、且して息出けり。社平卷八はこれを見て、心地よしこちよし、といはぬばかりに笑片向て、ふたゝび背介をうち見てをり。町進もと見かう見て、額藏が大膽なる、一朝には首伏すべくもあらず。彼背介奴が物いはぬは、額藏を竊に資し、罪を脱れんとての所爲也。彼奴をも鞭すや、いと手ぬるし。と敦閑は、獄卒は暴やかに、又背介を推伏せて、撲こといまだ十下に至らず、叫び苦しむ聲細りて、忽地に息絶たるを、やをら引起して、口中に、薬を沃入れしかば、纒に息のかよふのみ、又生べくも見えざりけり。とかくする程にはや、二更の漏刻音すれば、町進は、額藏背介を、獄舎にかへし遣せしに、背介はその曉がたに、終にむなしくなりにけり。しかれども額藏は、弱りたる氣色もなく、罪に伏すべくもあらねば、社平五倍二は氣を悶て、町進に密書を遣し、物影賄路で、媚諛すといふことなく、その斷獄を急するに、町進も亦利の爲には、傾きやすき小人なれば、竊に社平五倍二を慰めて、背介は脆く死したれども、きのふ既に首伏したれば、是第一の案驗也。某亦復處分あれば、額藏を問落すべし。縦彼奴は首伏せずとも、背介が首伏をもて證據とせば、刑罰に障りなし。今しばらく俟給へ。としのびやかに回報しつ、腹心の夥兵兩三人を、圓塚山へ遣して、左母二郎が事を記せし、彼樹の幹を、伐とらしてこれを見るに、果して云々の數十字あり。よりて又額藏を、獄舎より牽出さして、筆と紙をさしつけつゝ、われ聊思ふよしあり。左母二郎と書け、濱路と寫け。天罰仍件の如し。六月十九日の宵と書べし。とくくといそがして、右手の縛を緩しければ、額藏は勢ひ推離べくもあらねば、いはるゝ隙に書てけり。そのとき町進は、額藏を、初より袴に懸しく縛り、彼伐とりし幹の文字



(すに恚を毒殘等平社て誣を額藏)

と、これ彼を合して見つゝ、擧然たる聲高やかに、やをれ辭者、これを知れりや。圓塚山の樹を推削りて、これは是、惡黨納乾左母二也。或秘藏の大刀を掠て、又處女濱路を拐擧し、その從ざるを怒て、こゝに烈女を殘賊せる、天罰仍て件の如し。六月十九日の宵、子の初點、と識せし幹は、伐とらしてこゝにあり。汝が手迹と合し見るに、同筆なること疑ひなし。かゝれば信乃と謀し合して、濱路を盗出せしも、又左母二郎等四個の追人を、殺して世の猜疑を掩ん爲に、云々と書遣せしも、みな是汝が所爲なる事、世の風聞と啗合せり。彼處に濱路が死骸なければ、豈左母二郎に殺されんや。信乃に濱路を將て走らしたる、偽書は汝が作意也。この一條をもて推すに、藤六夫婦を殺せしは、宮六五倍二なりといふ、汝が奸詐顯然たり。天罰仍の如しと書しは、これその自識としらざるや。と敦閑惇く詰れども、額藏は些も擬議せず、その宵の事は云々、といひ解んとする程に、町進はいよいよ哮て、兵共彼奴が骨を拗て、首伏させよ。と焦燥は、獄卒等は阿と應て、額藏を斃木の上に、推仰向括著て、



目口もわかず沃ぎ被る、水は垂氷の凍解る、響よりも間なければ、額藏は霎時も得堪ず、忽地に息絶しかば、獄卒等は苛責を駐て、倒に推立つ、水を吐しなどするに、且して避生せり。これよりして兩三日、町進は術をかえて、ますく苛責を重くすれども、額藏は初のごとく、主の仇人を撃しといふのみ、苦痛を忍びて遂に屈せず。しばしば氣絶したれども、獄舎にかへれば恙なし。故あるかな額藏は、いぬる夜犬山道節が肩の瘤を劈て、わが手に入りし忠の字の玉は、この時までも身をはなさず、はからずもわが玉に、換たる物と思ふになん、或ときは、頭髻の中に籠おきつ、ある時は耳に隠し、又口の中に含てをり。さる程に杖に撲れ、或は水を沃る、種々の苛責に筋骨痛て、心地死べう覺るとき、件の玉を口に含み、又これをもて身を拊れば、苦痛立地に除去りて、心地清々しくなるのみならず、杖瘡は一夕に癒て、その痕もなくなりけり。町進等は玉の奇特を、露ばかりも知らざれば、竊に怪み思ふやう、額藏は苛責に撓まて、杖瘡さへ忽地癒るは、いかなる法術あるやらん。渠は莊官の小所に似げなく、夥の人を殺せし事も、その故あるべき事になん。もし幻術を得たらんには、思ひの隨に責さして、脱去することもやあらん。はやく殺すにますことなし、と肚裏に尋思して、遂に使者を鎌倉へ遣して、主の大石兵衛尉に、謙獄の趣を認るに、背介が首伏云々なり、圓塚山にて人を殺せしも、額藏と信乃が所爲なるよしは、云々の議によりて、顯れたるに、額藏も既に、陳するに辭なく、莊官、墓六夫婦を害して、身の罪を脱れん爲に、還て宮六五倍二を、主の讐なりと誣たる也、と曲に首伏せり。されば背介は曩日に、獄舎にして身まかりぬ。信乃は清我へ走りし、とその聞えこれあれども、鄰國敵地の事なれば、いまだ追捕の議に及ばず。但額藏は、苛責を肩とせず。幻術邪法を修するもの歟、折々怪しき事多かり。速に誅戮せずは、非常の事もあらん歟、と忠義を誣て、奸邪を責け、卷八と連署して、實事しやかに報たりける。かくて七月朔日に、その使者鎌倉より歸來れり。よりて町進は、卷八と共に、主の下知狀を披見するに、墓六夫婦を殺せしもの、小所額藏ならんには、既に五逆の罪人なり。當に竹籠の刑罰に行ふべし。かゝれば、額藏は、復讐の罪は協わども、さしも兄の讐なれば、法場に臨んで、額藏に並べり、額藏に罰を歸ん、と願はゞそは隨意なるべし。額藏が鼻懸なる、加ふるに邪術あらば、是凡庸の罪人ならず。をさく、非常を傲めよ、と下知せられたりければ、町進等は欣然として、總て社平五倍二に、主命を傳へつ、明日未の比及に、庚申塚のほとりにて、刑戮を行ん。宜準備あるべし。と懇にぞとき示す。この時五倍二が眉間の瘻、はや過半癒しかば、兩人雀躍して、主恩を拜謝し、町進が計議を徳として、且歡び、且勇む、意氣揚々と含咲て、免許の復讐ならずとも、彼奴が臍肚刺串かば、是怨を雪るに足れり。誅戮の義を任されしは、武運に稱ひ候。と言承してぞ退出ける。嗚呼奸黨の殘毒なる、且く天に捷もの歟。畢竟額藏が性命奈何ぞや。そは次の卷に、解分るを見て知らん。

南總里見八犬傳 第五輯 卷之一終



南總里見八犬傳 第五輯 卷之二

東都 曲亭 主人編次

第四十三回

群小を射て豪傑法場を鬧す  
義士を渡して俠輔河水に投む

却説丁田町進は、大塚の里老等を召よせて、卒川港八していはするやう、轟六が小所頼藏は、主の夫婦を害したる、逆惡既に明白なり。いはんや又、前陣代主従を犯したる、圓塚山のほとりにて、夥の人を殺したる、その罪戻一にあらず。これにより彼罪人は、明日極刑に處せらるべし。背介はいぬる日身まかりたれば、今さら罪科の沙汰に及ばず。轟に汝等に領指たる、轟六が奴婢は罪なし。みな舊里へ放遣せ。且轟六が莊園は、その家庫とともに没却せらる。券書によりて進呈せよ。又轟六が妻の甥、犬塚信乃といふ癖者は、頼藏が支黨也。竊にその往方を索ねて、搦捕たらんものには、夥の賞錢を賜らん。倘隠しおくものあらば、信乃と同罪たるべきぞ。と儼にいひしらすれば、里老等は呆果て、曇時目と目を指しつゝ、怵難たる一兩人、麻の袴の稜引揚て、縁類に進み近づき、御説ては候へども、頼藏はその夜さり、轟六頼藏が撃るゝ折、遠方よりかへり来て、主の怨を復せし事は、婢女們こそ粗知たれ。轟に聞せ給ひしとき、定かに申あげざりしは、連係を怕れて也。渠等に再問せ給はゞ、相運あるべうも候はず。又大塚信乃が事、轟に濟我へ赴て、その宥は宿所にあらざりし。こは奴婢俱にみなしれり。誰が支黨といふことや候べき。且轟六が莊園も、すべては渠が有ならず。その中なる三が一つは、信乃が親番作より、譲られたる莊園なりしを、久しく轟六が御領せり。かゝれば忠義人、大塚氏の職職にて、渠より御事あるものなり。頼藏たるべき由縁あるべし。

も、今は新我へ赴きて、船用せられれば、さてあらん。もしかへり来ることあらば、あはれおん影を解せられて、乃を莊官になし給ひね。こは衆人の情願なり。大約此度の凶變を、彼人與知らずといふ、誰人はいと多かり。明鏡も曇れば照さず、千慮にも亦一失あらん。猶且再問再勘ありて、恩赦の沙汰こそ願しけれ。といはせも果す難入は、眼を瞪らし聲ふり立て、こは奇怪なる奴原かな。頼藏が罪惡は、轟に背介が首伏せしに、なほくさんゝの證據あり。よりて脱るゝに辭なければ、みづから罪に伏せしを、今さらに又誰にか問ふべき。彼轟六が下女共は、主の擊れし爲體を、露ばかりも見ずといひしに、又云々といふよしあらば、そは汝等が囑略を畜ふて、極惡大辟の刑人の首を續せんと謀るならん。信乃が事も亦爾なり。彼奴は濱路を誘ひ出して、圓塚山にて人を殺せし、同惡のものなるよしは、その宥頼藏が書遣せし、落書によりて察せらる。さるを惡事なしとして、莊官にせまほしなど、胡論の所望は、民として、守を謀るの罪輕からず。再いはゞ悉、搦捕て獄舎に繋ん、汝等命を惜ずや。と席を拍てぞ敦囑たる。權に壓れて里老は、諫争ふべくもあらねば、阿容々々と里にかへりて、臆て件の趣を、衆人に傳へしかば、皆齒を切り、腕を扼りて、更に又議するやう、しからば事の趣を、鎌倉へ告訴して、頼藏を救ふべし。俺們はその宥の事を、認たるものならねども、鞭上が濱路を娶らんとて、媒妁軍木共侶に、莊官の宿所へ来て、酒宴して夜を深せし、その事の趣は、誰とてしらぬものもなし。さるを品革へいゆきしかへさに、立よりしなどいふ、みな酷しき誣罔なり。頼藏をだに救ひ得ば、犬塚ぬしの冤枉は、争はずしてかならず釋ん。よに志あるものは、とく鎌倉へ赴かずや。と一人がいへば、又一人、三人四人と散動て、果は遮じといふものなく、いと轟しく罵騒ぐを、里老等推鎖めて、人々不平の述懐は、寔によしある事なれども、縦今より夜を日に繼て、鎌倉に赴きても、往返三十里に餘れるものを、翌は誅せらるゝといふ、彼男を救ひがたし。世の鄙語にいふことあり。長き物には巻るべし。高き物には手も届かず。一虎斃れて、一虎進む。鞭上殿と丁田殿と、奸曲刻薄甲乙なし。今鎌倉に推參し



て、領主に愁訴すればとて、用捨はこゝに措るべからず。宮六ぬしは陣代なり、額藏は小断也。主の警を撃たりともさばかりの罰はあらん。況てふかく誣られたるを、今速に解んとせば、素れし糸を急に引て、いよく固く結るとく、人は救はで、身も罪せられ、妻子に歎きを遺すべし。漫に早りて後悔すな。と利害をときて諭せしかば、里人等は只管に、慍るのみすべなくて、衆皆思ひとまりけり。爾程に七月二日になりぬ。(大が犬塚へ赴んとて、行徳を船出せし日也)この日巳の比及に、町進は、菴八、社平、五倍二等を應に聚合て、額藏を誅戮の、隊配を示すやう、渠は幻術あるべきもの也。よりて卒川生を檢監とす。夥兵三十餘名を將て、をさく、非常を警むべし。きのふ里老等が、すぢなきことを聞えあげたる、事情を察するに、日來額藏に魅されて、刃に親愛すればならん。とかくに遊行のものを禁めて、人の觀ることを許すべからず。某も亦武者汰して、城外をうち巡らん。用心かくのごとくならば、縦額藏幻術ありとも、刑に臨てその術を、施すによしならん。簸上生には兄の警、軍木生にはその身の仇也。思ひの隨に刺留給へ。といへばみなそのころを得て、一議に及ばず承諾す。當下社平は膝を進めて、番長の遠慮、その所以あり。しかれども額藏は、檻の獸網の魚也。些の法術ありといふとも、何事をかしたいすべき。貴意をお費し給ひそ。と誇良に慰れば、五倍二も欣然と、歡を述、別を告て、おのゝ宿所に退りつゝ、をさをさ準備をしたりける。かくてはや、その日も些し斜なる、屠所のひつじのあはれげに、急がぬものを時の數、入としいへば獄舎より、牽出さるゝ額藏は、桎梏、忽ならぬ、縛の索、端短に、とる手緊く追立る、五六個の獄卒と、三十餘名の夥兵等に、稱麻の如く圍れて、庚申塚へ赴けば、檢監卒川菴八は、信濃麻の夏衣に、縶の段々筋の陣羽織を裝て、精好の野袴に、純子の裾縁彩たるを、腰高に穿下して、紫金作の兩刀を跨へつゝ、網代の塗笠を、紐短に結戴きたる、左右に兩個の若黨を従へて、籠、柳箱、床几をもたせし、奴隷を後に立し、先を追して、いかめしくねりゆく程に、後方に額藏上社平は、これも、柴甲に折腰致して、縶の下を指端折せし、打粉をさく、菴八に突

らず。就中額藏のト刀は、額に額藏が腰刀の、鏡刀也と見てければ、社平はこれを擲りて、この日も腕に帶たりける。故あるかな、件の短刀は、鞘は金の華桐なり。中心に梵書の一文字あり、よりて桐一文字と名けたる。便是犬塚匠作三成が、年來祕藏の有試物也とて、女兒龜篠に取せしかば、龜篠も亦年あまた、護身刀にしたりしを、曩に信乃を撃せんとして、竊に額藏に貸たる也。間話 休憩、五倍二も衣袴、大小刀まで具足ひて、この日を晴と打扮たる、その装ひ、社平とこれ一對なり。おのゝ従者には、短鎗、竹鎗、床几を持して、陸續として城を出たり。既にして菴八等は、庚申塚に來にければ、塚を去ること二反許、年ふりたる棟の下に、額藏を牽居さすれば、三十餘名の夥兵等は、手にく、捍棒を突合して、徂徠の人を禁めたり。かゝりけれどもなほ觀んとて、屋棟に跨り、樹に登りて、眺望するものいと多かり。當下卒川菴八は、床几に尻をうちかくれば、獄卒等は額藏が、桎梏を釋去て、八重索被て守てをり。菴八これを信と見て、やをれ額藏、汝が罪科、五逆に當れり、よりて大石殿の下知状あり、謹て承れ。といかめしく呼かけて、懷より一通の刑書を取て讀聞すれば、額藏頻に嗟嘆して、戰國澆季の世とはいへども、日も月もなほ照し給ふに、人の心は虎狼に等しく、良民を屠殺して、これを名づけて法度とす。善を惡とする故に、忠義を誣て、五逆と罵り、惡を善とする故に、奸曲を美して、君子と稱す。むかし東海の孝婦、誣殺せられて、遂に三稔の早魃あり。杞梁が妻いたく哭して、忽地に城陥れり。冤民の天地を動かす、その崇速なり。汝達は是斗宵の小人、いふにしも足るものならねど、豺狼をもて扞城とし給ふ、大石殿の家風こそ、かへすゝもこのころ得ね。といはせも果す菴八は、怒れる眼尻逆立て、憎き末期の擬廣言、物ないはせを、とくゝ。と床几をはなちて焦燥ば、獄卒等は八重括せし、額藏が索の端を、棟の枝に投かけて、力に任して釣揚れば、足は倏忽に地をはなれて、六尺あまり引登されたる、背は幹を負るが如し。そのとき社平五倍二は、衣も袴も袷取り褰げし、身輕の打扮、物々しげに、龜甲入たる鬪衣の、上まで高懸露して、青竹の鎗わき挟みたる、勢ひ猛く進み出て、兩人齊一額藏を、左右に丁と疾



視て、虐賊額藏、天罰の、かゝるべしとは今しるや。國士の爲には大犯人、われらが爲には怨敵也。三年竹の短鎗の串刺、受るやいかに。と呼かけたり。痛しきかな額藏は、屠舎の牛羊、釜中の魚蟹、三寸息絶れば、萬事休ん。天日これが爲に暗して、油雲漢陌より走るが如し。遙にこれを望るものは、潸然として目を拭ふ、涙は茅が軒端に傳ふて、落る玉水歟と疑ふべく、又樹下の土を潤して、葉漏の露敷と怪しむべし。爾程に社平五倍二は、拿たる竹鎗疏々と、素突に素抜試つ、左右齊一閃して、額藏が脇腹を、刺貫ん、と刃頭を引て、呀と被たる聲より先に、五十歩許東西なる、稻塚の蔭よりして、兩方一度に射出す響箭、弦音と共に鳴渡りて、五倍二社平が肩尖へ、揺一揺と立。俱に灸所を外れしかども、痛手なれば霎時も堪はず、兩人苦と叫びつ、鎗を捐てぞ倒れける。菴八等は、こはそもいかに、と驚きながら立ちよりて、と見ればその箭に五六寸なる、紙牌を結提て、奉納若一王子權現、所願成就と書たりける。原來眞の征箭ならず、守を否して、賊を愛する、百姓們が所爲にやあらん。疾蒐出して生拘れ。と聲ふり絞りて下知すれば、うけ給はる。と夥兵共、東西に立ちわかれて、稻塚目かけて簇々と、走り進まんとする程に、なほも射出す神箭に、皆紛々と射倒されて、右往左往に辟易す。周章勝ていふべからず。當下稻塚推倒して、顯れ出たる兩個の武士、東西齊一弓投捨て、準備の竹鎗搔取て、清朗なる聲高らかに、茶毒の酷吏、騒ぎなせそ。額藏何等の罪かある。虎威を借て、刑罰を濫り、私怨によりて、忠義を凌辱す。是汝等が行ふ所、神は怒り、人は恨り。されば同盟の義に仗て、天に代て、塗炭を掻ひ、虎狼を獵て、人心を快くす。作麼俺們を何人とかする。本郡大塚の人民、犬塚信乃戌孝、下總清我の浪人、犬飼現八信道等、こゝにあり、こゝにあり。弓箭も鎗も、王子の神寶、今汝等が五毒の竹鎗、その身に出て、その身に返る。觀念せよ。と罵責て、鎗を捨て走免れば、菴八いよく駭驚きて、敵は箭種の場たるぞ、彼とり籠て、聚作せ。と剛烈しく呼れば、夥兵はこれに獎されて、手に一掃をうち振て、遊患むを備が現八は、ものしや。と樹に受、樹に掛りて、勢も驚かせず、聲に五六人の、地居中絶絶たり。額

八遙にこれを見て、敵は樹に懸人なれども、樹葉當りがたければ、懸きもあへず額藏を、奪ひ去らる、事もやあらん。彼奴をはやく結果て、後ややすくすることよけれ、と腋裡に尋思しつ、遺たる竹鎗とり揚て、遠しく棟のほとりに、近づかんとする折から、忽ち後方に入ありて、酷吏菴八且く等、犬塚犬飼同盟の一死友、大田小文吾梯順こゝにあり、首をわたせ。と呼留たる、聲に駭く菴八は、阿と罵て飛揚る、運歩取次に見かへれば、信乃現八に一爰増て、骨違しく、色白く、肥膏づきたる大男、奉納牌を結下たる、王子の竹鎗閃して、透間もなく突立れば、菴八は遠しく、竹鎗をもて受つ拂ひつ、且く防戦ふ程に、菴八が若黨と、五六人の獄卒、おの／＼照手物をうち振て、共侶に援來つ、撃倒さんと競ひ蒐るを、小文吾は物とせせず、精神ます／＼加りて、確立駈立進みけり。その間に信乃現八は、拵る敵を思ひの隨に、八方へ撃散しつ。なほ菴八を撃んとて、驀直に走來る、前向に勃興と身を起すは、是五倍二と社平なり。この時われにかへりければ、肩に立たる箭を抜捨て、刀を免りと拔連つ、寄ば破らん、と立たるを、信乃現八は倍と見て、望み敵ぞ、ござんなれ、漏しはせじ。と東西より、大喝一聲、嘯て懸れば、社平は現八と刃をまじへ、五倍二は信乃を拵て、戦ひいまだ十合に至らず。五倍二は拿たる刃を、憂丁と卷落されて、驚睜て逃んとするを、脱しも遣らず背より、腹へ孔斜と刺貫く、鎗に縫れて轉つ輾つ、頻に悶苦しむを、そが儘地上に縫留て、今こそ復す伯母の仇、思ひしるや。と罵て、抜く手尖き太刀風に、首を撲地と撃落せば、社平はこれに舌を掉て、刃を引て逃走るを、現八透さず追詰て、敵伏せ、刺殺して、なほ逃まよふ夥兵等を、縦横無礙に追拂ひつ、信乃ははやくも額藏を、樹上より扶下して、縛の索繩捨れば、現八も亦引かへしつ、社平が兩刀を分捕して、額藏にぞ遞與ける。爾程に小文吾は、拵る若黨獄卒を、一人も漏さず刺伏て、菴八にもあちこちと、數不所の深痕を負しにければ、逃んとしつ、走り得ず、矢庭に倒れて死にけり。物員ならぬ奴隷などは、いちはやく逃去て、手にあふ敵のなくなりしかば、小文吾も鎗を捨て、樹下に聚合ふ程に、信乃は額藏を勦りて、危かりし大川生、わがうへ又人のうへは、



一朝に説盡すべからず。こは辭我殿の御内人、犬飼見兵衛老人の養ひ子、和殿も豫て相識れる。古人糠助の實子なる、犬飼現八信道也。彼は下總の行徳人、古那屋文五兵衛の長子なる、大田小文吾弟順也。この兩友もわれに等しき、癖ありて、彼玉をもてり。さるによりて日來より、某を相助けて、こゝに和殿を拯れし、歡びこれにますものなし。と引見すれば額藏は、恭しく小膝をつきて、某何等の天福ありて歟、萬死を出て一生を、保つ幸ひのみならず、この雋傑達に、面を接せざりし日より、かくまで愛顧せられし事、併犬塚ぬしの、鴻恩によるもの也。他日もし事あらば、身を殺して齋ふとも、なほ嗟らず候。と歡びを述、義を美して、感涙坐に吒めば、現八小文吾慰めて、俺們も亦幸ひに、和殿と兄弟たるべき宿世あり。聊死力を盡せしは、素より義の仗る所にして、つや／＼恩とすべきにあらず。社平、五倍二、菴入等が、殘毒の竹鎗は、天理人望に違ふをもて、和殿を害することかなはず。彼等は還て竹鎗に、縫れて命を隕せしこそ、王子の神罰なるべけれ。曩に俺們相謀て、和殿を拯んと欲せしに、手長の器械なきにより、王子村のほとりなる、農家にて露ぐ、鎗と弓箭を買とりて、大敵を殺崩せり。今はしもこの地に要なし。はやく戸田河をうち渡して、鄰郡まで退くべし。誘給へ。と急せば、額藏ます／＼感佩して、信乃現八等を先に立つ、西北のかたへ足ばやに、走去ること六七町、まだ十町には過ぎりけり。浩處に大塚より、新隊の雜兵二十三人、塵埃を揚揚て追蒐來つ。こは纏に逃去たる、奴隸等が城に還りて、云々と報しかば、町進驚きて、疾行の雜兵に、その癖者を擊留よとて、頻に下知を傳へしかば、兪鳥銃を携たり。既にして城兵等は、はや四犬士に近づきて、箭來程よくなる隨に、筒頭を揃へ、連掛て、火蓋を切らんとする折から、俄然として降そぐ、夕立の雨、繁を紊して、忽地火繩を滅たりける。城兵等は思ひがけなき、暴雨に度を失ふて、且く捫擇する程に、轟々然と鳴わたる、疾雷に電光して、雨なほ烈しかりければ、城兵はいよ／＼匿きて、まづはや雨を避んとて、倉庫下に立寄たる、雨の上に驚駭て、天地に響く一ト雷の、雷火に照れて死するもの、いくばくといふ數をしらす。

死を脱れしも、共倅に氣絶して、おなじ枕に伏たりける。四犬士は再度の追捕に、懸れがたしと思ひしかば、四下の松を籠盾に取て、身は濡ながら敵をまちしに、天雷の祐により、力をも用ひずして、夥の敵兵亡びにければ、是凡事にあらずとて、瀧野川と王子の神を、遙におがみ奉り、なほも武運を默禱して、齊一間道を走りつ、戸田川まで來にければ、雷は收り、雨も細りて、はや黄昏に近かりける。とく／＼前向へ渡さんとて、彼此と見たすに、戰國の習俗にて、領主の嚴禁あればにや、渡船絶てなし。況て雷雨に水陸の、人迹稀なる折にすれば、便船せんにも船を見ず。いかにすべき、と皆氣を悶て、東へ走り、西へ赴き、おなじ河原を幾遍となく、往返に果しなかりけり。かかりし程に町進は、隊兵百五六十名を將て、馬を飛して追蒐來つ、遙に聲をふり立て、虐徒惡黨走るとも、今は脱るるに路あらんや。汝等種々の幻術もて、或は王子の神助に假托し、或は猛に雷雨を起して、夥の士卒を殺せばとて、われ亦非常の備あり。再度の追兵を遣したるも、なほ心もとなさに、時を移さず多勢を將て、みづからこゝに追詰たれば、袋の物を取るより易かり。みな手を束て縛を、とく／＼受よ。と呼れば、その隊の士卒共聲合して、鬨を吐とぞ揚たりける。四犬士はこれを見て、河には舟なく、陸には敵あり。進退こゝに谷りぬ。刀の刃の續ん限り、わが命のあらん際り、思ひの隨に戰ふて、陣歿するより外にすべなし。命は是義によりて、鴻毛よりなほ輕し。同盟、同日同時に死なば、故ら願ふ所なり。折もこそよき黄昏にて、道のぬかりは躬方の幸ひ、備を亂さずうち寄せなば、奇を出して中を割らん。目ざす讐敵は丁田のみ。人馬の足を立させな。と迭に諫奨して、必死の覺期勇しく、近づく敵をまつ折から、誰とはしらず水際なる、茂き高蘆をおしわきて、

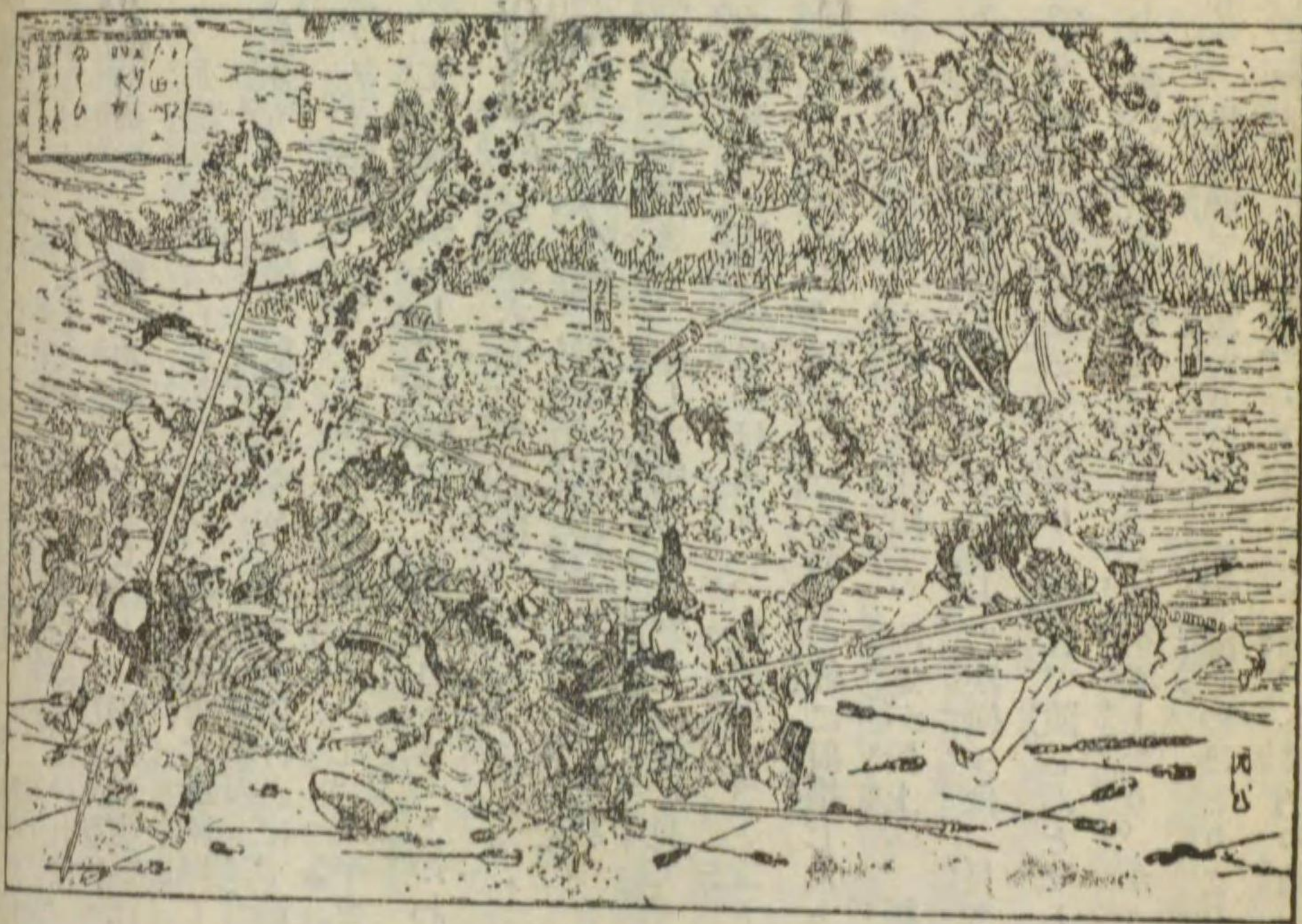
漕よする一葉の舟のなかりせば秋の川なみ誰かとほまし  
かく歌ひつゝこなたの岸へ、はやくも船をよするものあり。四犬士これをみかへりて、彼も敵歟、と訝れば、簑笠著たる一個の舟人、遠しくさし招きて、刀禰們はやく乗給はずや。縦萬夫の勇ありとも、敵の多勢に比れば、なほ九



牛の一毛なり。可惜命を捨んより、とく／＼。と勧めたる、聲さまは神宮なる、猪平に似てければ、信乃現八小文吾等は、その人なるをはや知りて、天の祐と霎時も猶豫せず、額藏共侶身を跳らして、船に閃りとうち乗れば、猪平は權をとり伸て、岸をはなれてゆく船を、返せや復せ。と呼かけたる、町進は眞先に、水際に馬を騎居て、鞭を抗つゝ招けども、猪平は耳にもかけず、船底より簑笠を、四ばかり取出して、四犬士に遞與していふやう、折から逆風なれば、いかばかりに漕とても、速にはこの船を、前面の岸へよせがたし。雨はやうやく霽たれども、敵の箭を禦ん爲也。とく／＼めされ候へ。と窓に勸れば、信乃等はます／＼歡びて、思ひがけなき猪平叟、吾黨のこの危窮を、いかにして知られけん、神速微妙の援にこそ。といへば猪平含笑て、しかおもはるゝは理り也。刀禰們はいぬる比、小人が宿所を辭し去りて、南を望て赴き給ひし、道の程心もとなさに、竊に迹を跟て遮しに、刀禰們は杜岡の、ほとりに霎時憩ひ給ひき。その折の密談を、圖らずも竊聞しに、みな同盟の義によりて、額藏どのを拯んとて、死をだも辭せざる武勇謀略、瀧野川なる辨天堂を、旅宿にせんと相譚給ひし、その智その勇、大かたならぬ、雋傑達なりけり、といよ／＼認て憑しく、又慕しさも一トしほまして、宿所に還りておもふやう、彼人々は額藏男を、拯とらんと謀るとも、城中の守禦嚴重なれば、獄舎に潜び近づきて、竊出さんとはかなふべからず。かゝればその刑罰の日、法場を劫して、奪ふて走らんとこそ謀るらめ。いづれも不敵の豪傑なれば、本意を遂んは必定なれども、其處より城へ遠からぬに、再で夥の追兵を出さば、寡は衆に敵しがたし。縦追兵を殺崩して、且くは走るとも、近屬この戸田河には、渡船稀なれば、こゝに至りて追詰られん。もしその折に拯ずは、可惜義士を殺しやせん。と思ひにければ密々に、瀧野川へ赴きて、その進止を窺ひつゝ、又大塚へ赴きて、刑罰の日を問定めつ。けふしも船を彼處によせじ、刀禰們を俟たりしに、俄頃の雷雨に黒白を別ず、はや刀禰們はあちこちと、水際を徘徊し給ひけん、とも知らずして且くも、物を思はせしのみならず、今些遅かりせば、敵に喰らわれつべし。危かりし。と被罵り、心の震をとききせば、信

乃現八小文吾は、いよ／＼と感嘆して、猪平が任使善悪を、額藏に告るになん、額藏も赤感風して、その恩信をぞ歡びける。既にして船は稍、北の岸に着にければ、四犬士は曲々に、歡びを演るに暇なく、猪平を見かへりて、皆其會を契つゝ、蹙て水際にをり立ちけり。爾程に町進は、士卒共侶に聲を揚て、頻に船を呼禁れども、舟人は聞ぬ態して、亦漕かへすべくもあらねば、鞍帯敲きて敦閑悍く、彼射て捕れ。と下知すれば、雜兵凡四五十名、おの／＼岸に立並て、箭繼早に射被れども、その間遠ければ、箭は徒に水中に、落るとやがて流れけり。町進はこの光景に、ます／＼怒罵りて、いひがひなき兵共かな。士卒を夥殘害して、死刑の囚徒を奪去る、虐賊等を撃漏しては、われも尤を脱れがたし。河幅はいと廣けれど、このわたりには淺瀬あり。われに續け。といひ被て、馬を颯と乗入るれば、英雄の士卒六七十名、兪後れじと渡しけり。しかれども夕立雨に、河上より落す水、おもふにまして高ければ、士卒は左右なく渡し得ず。或は弓をもて、流に杖つき、或は臂を連て相扶け、推流されじと喘ぐ程に、町進は只一騎、馬を河の中央まで、辛して進るを、猪平は遙に見て、遽しく船底より、弓箭を取出て、能響固めて、矢聲をかけて丁と發せば、町進が乳のほとりへ、篋深くさ立とぞ見えし。札よき衷甲を被たりけん、裏缺までに至らねば、掻殺捨てぞ進みける。猪平は一の箭を、既に射損じたりければ、只顧にこゝろ睜て、二の箭を刺んとする程に、忽然として一個の壯夫、水中より浮出て、町進が衿上へ、抓子棒を楚とうち被て、仰さまに引落しつゝ、腰なる刀を拔出して、押へて首を取てけり。その水中の疾働きは、目ざましなどいふばかりなし。かくて件の壯夫は、町進が馬を奪ふて、水中にて閃りとうち跨り、後れて渡さんとせし雜兵を、抓子棒を以引倒し、突流し推沈れば、敵は忽地辟易して、舊の岸へ逃登るを、追ひつゝ、馬を乗上たり。かゝりけれども城兵等は、水に濡れしも陸なるも、衆皆岸に踏留りて、推捕籠てぞ攻たりける。當下蘆原のほとりより、又一個の暴夫、突然と顯れ出て、はや横鎗を入れしかば、城兵は開靡きて、亂騒ぐを、得たりや應、と長柄の鎗の刃頭尖く、敵伏せ、刺殺す、千變萬化の働きも、勇士は纔に兩





(る苑を厄窮び、たふ士犬四に河田戸)

人なり。城兵は既にはや、大將を撃れたれども、有緊に大勢なるをもて、退くもあり、進むもあり。嘯叫て戦ひけり。四犬士は北の岸に、この兩勇士の働きを、瞬もせず、眺てをり。四士齊一感嘆して、水際近く船を歇し、精平を呼かけて、亂たる世の習俗とて弱を助けて、強を折く、俠氣のものなきにあらねど、老人のごときは稀なるに彼兩個の、壯夫は何處いかなる人やらん、名をだにしらぬ俺們を、拯んとて歎、仇を殺して、なほ大敵と戦ふ光景、世に珍しき勇士なり。事情は叟こそしらめ、いと訝しく候。といへば精平微笑て、彼等は曩に告たりし、力二郎尺八也。小人既に老たれば、けふの副に相譚にき。血氣に早るものどもなるに、豊嶋煉馬兩家の爲に、怨を復さんと思ふころあれば、大塚の陣番等をさへ憎むこと甚し。よりに異議なく同意して、彼等は蘆原に躲てをり、機に臨み變に應じて、町進を撃捕たり。といふに信乃等は驚きて、しからは又彼兩勇士も、命を惜まて難に代る、我等が爲に恩人也。しかも叟にはいと親き、歎なりと歎聞たるに、もし陣敷せば敵とも甲斐なし。そ

の歎を他に譲りて、都にも免るゝは、勇士のせざる所にして、俺們も亦これを恥。その船を歇よせ船へ。再、岸へ渡して、生るとも死するとも、安危を彼人々と共にせん。今さら躊躇ことかは。と言葉等しく急せば、精平頭をうち棹て、否、この船を寄すべからず。義を見て勇むは刀禰の、志なるべけれども、彼等が敵と戦ふは、刀禰を落さん爲也。然るを再彼處へ渡して、俱に陣敷し給はば、此彼共にみな益なし。うたてやな壯俊共が、町進を撃捕なば、扱あるべきに深入して、遂に命を隕しやせん。匹夫の勇こそ是非なけれ。やよ、うち棄て落給へ。さばれ彼等も小人も、只俠氣を旨として、今刀禰を效ふにあらず。世の豪傑と思ふにより、命に換て頼ん、と欲することのあれば也。そは委まらせし、狀を音音に届給はば、彼等がうへも、小人が、こゝろも定かにしらるべし。今刀禰を渡しつゝ、追兵を禦留たれば、われは神宮へ還りがたし。況彼壯俊等を、先亡ることあらば、誰を便著に立潜びて、餘命を何處に負るべき。けふを限りの浮世ぞ、と豫て覺期を究めたり。然はこの船をこゝらに流さば、刀禰の又渡し給はん、さらすは敵にとられやせん。船もろ共に身を淪て、赤心を顯すべし。さらばく。といひかけて、はや河中へ漕出せば、四犬士は是をうち聞て、且感じ、且驚く、水際に足を翹て、やよ等給へ精平叟。いはるゝ趣、理りなれども、叟等三人を見つゝ、死して、何地へか落らるべき。なほいふことあり。その船を、枉て且くよせてよ。と異口同音に呼禁れども、精平は應もせて、河中遙に漕退けつ、豫て準備をしたりける。船底の栓を引抜ければ、船は底より水入りて、人に乗せつゝ、忽地に、波の下にぞ沈みける。四犬士は茫然と、見る目届かぬ薄暮に、戦ぐ蘆の葉さはがしき、前面は修羅の大刀音矢叫び、よせてはかへす河風に、澳より黎む宵闇の、其處ともわかずなりにけり。かゝりしかども四犬士は、捨て走るに忍びずして、なほ悵然と立しを、信乃はややく思ひかへしつ、忽地に聲を奨して、時なるかな命なるかも。必死を極めし俺們は兩三度危窮を脱れて、思ひがけなき精平は、この河中に投て死せり。且兩勇士の存亡も、目今思ひ定めがたし。然ばとて云々に、この小節にかゝづらひて、河原に立て曉すとも、死したる人の返るにあらず、勇士を援る爲にもならず、精



平が俺門に、いひ遣せしよしを思ふに、荒芽山まで赴かば、恩に答るよすがもあるべし。誘給へ人々よ。通宵走りて無異を料らん。とくく。と誘ひ立れば、現八も亦小文吾も、寔に然也と領きたる、そが中に額藏は、遙に信乃を見かへりて、彼樊噲が大功は、細謹を顧ず、大禮は小讓を、辭せずと歎いひしをおもへば、猪平が入水、勇士のうへは、尤惜むに勝たれども、水を隔ていたづらに、うち歎きしは、われもげに、女々しかりき。と相愧て、現八小文吾共侶に、うちつれ立て野干玉の、闇にしあれど猶も世を、しのぶに似たる岩しるの、蕨のかたに赴きけり。

第四十四回

雷電の社頭に四雉會話す  
白井の郊外に孤忠警を窺ふ

走るものは、路を擇まず、貧きものは、妻を擇まず、餓たるものは、食を擇まず、寒きものは、衣を擇まず。その時と勢ひと、人情すべてかくの如し。さる程に、信乃額藏現八小文吾等は、上野信濃を心當に、その終夜間道より、只管に走れども、比は七月初の二日、黒白も別ぬ鳥夜にしあれば、適こと五里許にして、忽地山路に迷ひ入りつゝ、とかくする程に、天は明たり。と見れば、いまだ名をだにしらぬ、高山の半腹に來にけり。懸て巖に登りつゝ、東細帯の間よりして西北の方を直下せば、寂たる人煙適に見えけり。なほ彼此と徘徊するに、山に荒たる神社ありて華表に掲し匾額に、雷電神社といふ四大字は、なほ定かにぞ讀れたる。信乃はつくくんと瞻仰て、諸賢はいまだ思ひ得ずや。こゝは補川の東南なる、雷電山に疑ひなし。彼方に見ゆる人煙は、是補川の郷なるべし。きのふは思ひがけなくも、庚申塚のこなたにて、神雷の落かゝりて、夥の追兵を拉れしは、世に稀なるべき天恩也。かくて昨夕は途に迷ふて、今はからずも雷電の社頭にして天の明しは、因あり縁あり、奇ならずや。といふに有理と額藏等、三士も齊一瞻仰つ、且感じ且尋みて、石滴を掬ふ朝露水、おのゝ社壇に額づきて、俱に祈念を凝しけり。且して四大士は樹下に退きて、又彼此と見わたすに、神社の背に藪多かり。茶更梅梅も少からぬに、みなよく懸して、半は現たり。

懸て藪と茶更を探て餌に充るに、甘きこと凡常に過ぎたり。忽地に疲勞を忘れて、心地清々しくならぬはなし。山腹はおのづから、朝日の影遅ければ、樵夫牧童にだもなほ遺す。鳥は緑樹に隠れて、聲いよゝ高く、雲は青霽に起りて、追いまだ定らず。現静けきは、山の徳なり。名山靈峰いづれはあれど、時にとりての佳境かな、と皆共侶に嘆賞して、或は石に尻をかけ、或は朽幹に身を倚て、迭に相譚ひ慰めけり。當下額藏は、恭しく貌を改めて、きのふは事の慌しくて、曲に歡びを演得ざりき。こゝは人迹稀なれば、密談に究竟なり。いでや胸臆を盡すべし。犬塚ぬしは何等の故に、静我に留り給はざる。况犬田犬飼の、兩友をさへ相伴て、某が必死の厄を、拯ひ給ひし爲體、不思議といふもあまりあり。つやく思ひ得がたくこそ。といはれて信乃は含笑て、しかおもはるゝは理り也。某も亦静我にして、免れがたき大厄あり。この故に下總なる、行徳に流浪つ、ふたゝび危かりけるを、幸にして三四の豪傑、身命を擲て、遂に窮厄を釋れたり。その故は箇様々々。と彼村雨の刀の失せし事、又現八と組撃して、滾て船に落たる事、文五兵衛と小文吾が事、妙眞、房八夫婦が事、大八の犬江親兵衛が事、大法師と蛭崎照文等が事、伏姫の縁故、珠數の事、八房の犬の事、すべて安房の里見に宿因ある、その槩略をとき示せば、現八小文吾も迭代にその漏たるを補ひけり。額藏は聞く毎に、駭然としてうち驚き、潸然としてうち歎く。房八が義烈はさら也、親兵衛が幼穉して、犬士の一人ンたるを喜して、いとなつかしく思ふにも、文五兵衛妙眞等が、心操の大かたならぬを、嘆賞して聲を斷ず。且、大が二十餘年の行脚の勤苦、又照文は母の爲に、從弟照武が子なりし事、その宿縁を感悟して、哀歡交みづから禁ぜず。いはんや亦現八小文吾が孝順義勇を眷愛して、いよ骨肉の如く思へり。そのとき信乃は又いふやう、某行徳にありし日は、舊里の凶變を、夢にだも知らざれば、竊に和殿に對面して、事の趣を報んとて、犬飼生共侶に、船もて犬田に送られて、神宮の岸に著し折、漁者猪平に呼留られて、はじめわが伯母夫婦の横死と、和殿の忠勇、非法の禁獄、詳に傳へ聞たり。これにより、犬飼犬田と密談して、瀧野川なる辨大堂に、七日



許參籠して、云々と謀りつゝ、遂に和殿を拯ひ得たり。加 海 猪平尺八力二郎とやらんが援あり。既にして恙なく、四友面を接せし事、歡び何物かこれにますべき。こは里見殿よりして、徵聘の沙金也。蟹崎生の懇意の隨に、某且く預りおきつ、受納め給ひね。といひかけて懐なる、財布を撈て一ト包の、沙金をとう出て遞與になん、額藏は謹て、受いたゞきて、左右なく納めず。某いまだ里見殿に、一介の功もなし。和君達こそ屬日より、某が故をもて、纏腰の費多からめ。是よりの後進退は、和君達と共にすなるに、財を分んことは本意にあらず。こはこの儘に犬塚ぬし、なほ領りてたびねかし。と推辭ば信乃は頭を掉て、刎頸の交りは、送に介意あるべからず。某も和殿の爲に、蟹崎生に辭ひしかども、云々の議によりて、已ことを得ず諸ひたり。その功なきは皆おなじ。和殿に賜し物なるを、われいつまでか預措べき。この後纏腰乏しくならば、送に相資んのみ、財を分つといふよしあらんや。曩に彼殿の徵聘を、且く固辭奉りしは、同盟全からねば也。とくく納め給はずや。と諭されて額藏は、遂にその意に任したる、沙金を懐に挾つ、思はずも嘆息して、現只今いはるゝごとく、玉の文字によりて思ふに、我等と過世似たるもの、八人あるべきことになん。犬江氏の子とともに、既にして五人也。就て又一奇談あり。曩に某はからずも、圓塚山のほとりにて、一個の犬士に撞見たり。その故は如此々々。と信乃に栗橋にて別れし日、千住より日の暮れしかば、思はず路をとり、誤て、圓塚山を過る折、左母二郎が村雨の刀をもて、濱路を殺す條より、犬山道節忠興が、左母二郎を砍倒して、濱路と名告合し事、且濱路は道節が妹なりし事、その父の事、母の事、濱路が節義、道節が孤忠、一五一十を窺聞せし事の趣、又道節は、村雨の刀をもて、亡君煉馬倍盛の仇、管領扇谷定正を、狙撃んと思ふにより、濱路が需に應ぜざりし事、濱路はそが儘息絶しを、道節が火葬せし事、絆果て額藏は、村雨の大刀をとり復さんとて、道節は挑ひし折、守護袋を道節が刀の柄にからまして、遂に渠に取られし事、又道節が肩なる瘤を、一ト擊擗と歎しとき、金窟口より飛散る玉の、怪しくもわが手に入りて、これ彼玉をとり換たる、その玉には忠の字

ある事、道節は火避の術をもて、竟に逃れ去りし事、爾後額藏は、左母二郎が首を、木の杵に懸懸て、云々と雷轟せしは、濱路が爲に人の猜疑を、あらせじとのわざなりしに、これによりて町進等が借醋を賣し事、大約事の願末を、曲に告て又いふやう、某禁獄せられし日、水火の苛責、痛楚に勝ず、心地死ぬべうおぼえしとき、この玉を口に含めば、快然としてその氣力、生平より壯になりぬ。又この玉をもて身を捺れば、杖瘡立地に癒て、その痕だにもなくなりぬ。この故に町進等は、法術ある歟と疑へり。これ亦奇妙といひつべし。これ見給へ。と遽しく、誓の中に藏したる、玉をとう出て示せしかば、信乃現八小文吾は、共侶にこれを見て、嘆賞聲を合しけり。當下信乃は茫然たる、險を思はずしばたまきて、いかなれば吾黨に、有縁の婦人は、悉く、薄命かくのごとくなるや。伏姫うへは凡人ならず、權者の後身ともいふべき歟。しかれども、その終焉の爲體を、傳聞くだにいと痛まし。且阿沼蘭といひ、濱路といひ、才貌節義の世に捷れしも、廿歳のうへを越ずして、皆これ非命に終を取れり。不幸これより甚しきはなし。且濱路が眞の親は、煉馬家の一老臣、犬山道策ならんには、その素性も賤しからず。某曾彼女子の、縹致十二分の趣ありて、嬋娟なりしを惜むにあらず。只その節義に勇猛なる、婚姻その期に及ばねば、一夜の情も被ざりし、某が爲に節を守りて、百年の命を捨て、心操を悼むのみ。幸にして大川生、その宵、彼山路を過らずは、誰か最後の爲體を、認てわれに報知せん。某諸賢の資によりて、名を揚家を興すとも、又正妻を娶るべからず。子孫の爲に已ことなくば、妾のみにて事足りてん。こは彼義女の爲にして、古人寒食足下の微意也。奸佞人等に謀られて、亡ひし村雨の大刀よりも、彼犬山道節こそ、なほなつかしきものなりけれ。渠はこの玉の、皮肉の間にありしかば、その身はこれをしらすとも、その姓氏の犬山なる、且この忠の字の玉ありて、名さへ忠興と稱すといへば、犬士たる事疑ひなし。しかおもへども環あふ、時をいつとも期しがたし。これもほみなき事なりき。といひつゝ、吒む感涙を、歛かねたるこゝろの誠に、小文吾も現八も、爲に貌を改めて、俱に感嘆したりける。且して現八は、額藏にう



ち對ひて、某が實父糖助は、和殿にも疎からざりし、と犬塚生に傳聞たり。某ははからずも、實父の名を知のみならず、はじめてその墓を祭しは、犬塚生の恩信により。然れば犬田共侶に、同盟の義を以、和殿の母前の墳塋所、行婦塚を祭りし事も、兩三度に及びたり。これによりて再おもふに、彼犬山道節も、過世の兄弟なるべきに、今は往方をしらずといふとも、環あふ日のなからずや。といへば小文吾も又いふやう、凡同因果の六犬士は、おのゝ親同胞あり。出生の地も同じからねど、その氣、俱に通じて、眞の同胞にもますことあるべし。さるにより犬川生は、玉を道節と相換て、なほその玉の奇特あり。同根同氣の感ずる所、これをもて徴とせば、又何をか疑んや。只山林房八と、精平等の三四の義士は、おのゝ因果に深淺ある歟。犬士の列に入ることかなはず。しかれども房八は、その子に犬江親兵衛あり。只精平が任俠は、因縁悟易からず、且力二郎尺八は、勇悍の壯俊なるに、惜しや陣歿したらん歟。彼等は三人命に換て、頼むといひしは何事やらん。これらはいよゝ解しがたし。犬塚ぬしはいかにそや。と問れて信乃はうち領き、某もしかおもふのみ。精平が所望のすらは、曉知るよしなけれども、情と思惟るに、渠は本姓姥雪也、舊名は世四郎、と呼ばれたりとみづからいへり。某が畜犬の、その足四白なるをもて、與四郎と名けし事あり。彼と此と同訓也。又世の常言に、雪は犬の姨と歟いへり。その氏の姥雪なるは、亦是犬に縁あるならずや。且力二の兩字を轉倒すれば、便是方となる。又尺の字のへを上にすれば、便是戸の字なり。又これを全聚すれば、房の字となるにあらずや。さて尺八の八の字を、房の上に冠らすれば、八房の二字となる。強牽傳會に似たれども、亦是犬に縁あるならずや。後にならず因縁の、定かにしるゝ事あるべし。今の急務にあらざれば、且く度外に措ねといふ、意外に出し妙論に、小文吾はさら也、額藏も現入も、只管に感服して、その才幹をぞ稱ける。かくて又額藏は、腰刀を右手にとりて、これを信乃に示していふやう、きのふ庚申塚のほとりにて、犬飼生の精悍しく、此平が兩刀を分擔して、某に腰に懸りにき。そは粉案の折なれば、さしも心つかざりしを、今朝はじめてよく見るに、

この腰刀はいぬる比、栗櫛の櫛りにて、櫛に和君に見せまらせし、桐一文字の銘也。いぬる六月十九日の夜、上宮六を擊留て、五倍二に癩を負せしは、この腰刀をもつてせり。某囚徒となりし比、社平が掠奪たるならん。かくて又循環りて、某が手に落し事、亦是一奇といひつべし。しかれどもこの桐一文字は、和君の祖父匠作ぬし、先祖相傳の名刀也とて、龜篠どのに授給ひし、來歴は云々と、定かに聞ることあれば、和君の爲には茂陵の千金、これにますもの何かあらん。某はなほ社平が大刀あり。一ト口にして事足れり。彼村雨の名刀は、道節が手に落たれば、今請復すによしもなし。是を和君に譲まつらん、藏め給へ。とさしよすれば、信乃は欣然として、左右の手に、受取て、と見かう見つ、義なるかな大川生、わが伯母附屬の刃をもて、當座に仇を撃しこそ、いと羨むべき績なれ。某潛我にて危難の折、大刀を喪ふのみならず、腰刀をさへ打折たれば、行徳へ著し日は、腰に寸鐵を帶ざりしを、犬田生がこゝろありて、所藏の兩刀を贈り給ひき。きのふ五倍二を擊留て、銳鈍を試しに、現拔羣の銳刃なり。鞆は金の臥龍にして、甄も又紫金魚子に、金の雪篠を置たるもの、兩刀の表装一對也。既にこの兩刀あれば、事足て候へども、桐一文字は先祖の重寶、有繋に捨がたき思ひあり、厚意に任してこの腰刀と、相換て鞆に帶べし。まづはやこれを進らせん。納め給へ。と正首に、わが腰刀を贈りにければ、額藏は受とりて、見つゝ眉根をうちよせて、某六七歳なりしとき、傳聞たる事こそあれ。この表装を見て推量るに、無銘なれども左文字に似て、刀尖に疵は候はずや。大刀も無銘に候はずや。と問れて信乃は訝しげに、そをいかにして知られけん。いはるゝ如く些の疵あり。兩刀ともに無銘にこそ。といへば額藏歡びて、扱も不思議の事になん。某が亡父大川衛二が、年來秘藏の兩刀あり。鞆は云云、甄は云々、無銘なれども左文字なりき、と母の折々説示されしを、小耳に挟みて忘るゝことなし。しかるに今この腰刀を見れば、父の遺刀に彷彿たり。雪篠は家の定紋、刀尖些缺たるは、わが父嘗山獵を好みつ、一日矢傷野猪を刺留しに、刀尖餘りて側の石に、刺かすらしたりければ、そこらに疵はいて來たり。爾後父は堀越殿(足利政知を



いふの、藏政多慾を諫めかねて、忽地自殺しつるとき、彼兩刀は没却せられき。何人の手に落たりけん、往方もしらずなりしとぞ、母はをり／＼いひもて出て、うち歎き給ひしも、今は昔になりしを、こゝに憶はずわが父の、遺刀を見れば、歡しく、又哀しさも一トしほませり。犬田ぬしはこの兩刀を、何人より買とりて、犬塚ぬしに贈給ひし。奇なり奇なり。と感涙を、拭ひもあへず嘆賞す。信乃現八小文吾は、又この奇遇に感佩して、耳を傾け、目を指しつ、齊一譁嘆したりける。そが中に小文吾は、小膝を搦とうち鳴らして、俗に禍も三年俟ば、福になるといへり。そは塞翁の故事なるべし。一昨歳の秋の比、某が識れる買人、その兩刀を携來て、こは捨賣にしたりとも、三十金にはなるべけれども、只今火急の要用あれば、價十五金を給はるべし。しからば進らせんといへり。見るにいと欲しければ、いはる、隨に買とりて、親文五兵衛に告しかば、聞も訖らず眼を睜りて、わが家初は武士なりけれども、今市塵に世を渡れば、汝も町人の子ならずや。さるをその身に要なき物に、十五金を費す事、いと愚なるわざにこそ。舊へ返せ、と叱られしを、なほいと惜みて祕おきつ、いぬる比犬塚ぬしに、初見參の牽出物とて、そが儘贈たりけるに、豈思はんやその兩刀は、犬川ぬしの家尊の大人の、像見の名物ならんとは。これ禍も三年俟ば、福になるといふ、世話に相似て面目あり。いと歡しく候。とその傳來をとき諦せば、額藏はます／＼感じて、しからんには犬田犬塚、兩友の貶なり。有がたきまで辱し。世になき父と今こゝに、相見る心地に候。といひつ、臉をしばた、けば、信乃は又腰なる大刀を、やをら右手に拔取て、犬川生犬川生、この大刀とてわが物ならず、社平が大刀と換給へ。桐一文字を惠れたれば、一刀にして事足れども、和殿のこゝろを休る爲也。武者の戰場に敵を撃たる、分捕の劍戟を、その子孫に傳れば、子孫以面目とす。某社平を撃ざれども、五倍二とその惡等き、渠も警敵の半隻なれば、そを乞て腰にせん。こは古人鬪體蓋の、獲猛に勝れることあり。いざ／＼と勸れば、額藏は辭すして、兩刀俱に換てけり。現八これを見かへりて、人妻を以これに贈れば、人又妻をもて必酬ふ。犬田生の牽出物は、犬塚

より犬川と、三傳して置に返れり。世の人は只眼前の、利にのみ走りて義に疎かり。こゝをもて壽食の友のみ。生計信友に違ぬなるべし。今三刀の奇遇を見ても、その宿因の深きを知れり。傳へて子孫の美談とせん。いとめてたしめてたし。と頻に稱賛したりしかば、額藏いよ／＼歡びて、某諸賢の助によりて、萬死を復せしのみならず、けふよりして小斯の苦役を、免るゝことを得たり。むかし總角なりし比、竊に犬塚ぬしと謀りて、名字を莊助義任と改たれども、主の莊官に憚て、世には披露せざりし也。今はからずもわが父の、像見の兩刀を惠れたれば、額藏を改めて、犬川莊助義任と呼給ひね。額藏とは莊官の、漫に名づけし字也。今さらおもへば、不祥の義あり。額は則比太飛と訓り。額は顯すものなるに、額藏と熟すれば、額藏るゝと訓をもて、世を潜ぶ貌あり。又死人の幘目に似たり。果して不測の罪を得て、世をしのぶこそうたてけれ。さは莊助の莊にして、助あるにますことなし。改名の趣意かくの如し。といへば、衆皆諾ひて、しかるべし。と應つ、この日よりして額藏を、莊助とぞ稱しける。商量既に果しかば、信乃現八は共侶に、小文吾にうち對ひて、曩にもしば／＼勸めしごとく、和殿は行徳へ還り給へ。假初に送り來て、はや九日になりたり。家尊の大人も妙眞も、さぞ待わびてあらんずらん。加旃前諾せし、大道徳と蚤崎生に、約を違るに似て快からず。犬川生を拯ひ得たれば、遺憾きこともあらじ。還り給へ。と促せば、莊助も亦意を演て、俱に歸郷を勸るに、小文吾いまだ従はず。いはる、趣よしあれども、行徳は無異にして、こゝはなほ安からず。荒芽山まで送りゆきて、しかして後に袂を分ん。世の鄙語にも、佛を作ること易く、魂を容るゝことは、最難しといふにあらずや。始ありて終なくは、よに大丈夫とすべからず。猪平が云々と、いひつることもあるものを、荒芽山の光景は、いかならんと見果すして、この處より歸去らば、彼佛を作れども、魂を容ぬに似たり。再な勸め給ひそ。と思ひ入て推辭しかば、信乃等も遂にせんすべなくて、聽てその意に任しけり。かく果しなき長談に、秋の日影の傾くを覺ず、下晡になりしかば、四大士は又商量して、縦浮世をしのぶとも、この深山に露宿せば、猛



獸毒蛇の愁もあらん歎。今宵は桶川に宿投るべし。さはとて齊一身を起して、又神垣をぞ伏拜む。別雷の名にし負ば、武運は甘雨の降ることく、武名は雷霆の轟くごとく、隈なく天の下にしも、播さし給ひね。とおのゝ雲時黙禱して、又彼の木果を拾ひつゝ、飽まで腹にみつ栗の、中の細道踏わきて、桶川の郷へ下りけり。却説信乃莊助現八小文吾は、次の日旅宿を夙に起て、笠深くしてゆく程に、さしも急ぬ旅なれば、世を潜ぶ身もさすがにて、名所を吞ね、山水を見て、一宿二宿と日を彌りつゝ、おなじ月の初の日、上野國甘樂郡白雲山、明鏡の神社に參詣す。明鏡、今は妙義に作る。若夫明鏡山は、白井城の北隅に在り。其西北のかたは、碓氷郡を背にして、同郡の荒茅山と、南北に相對へり。僧正尊意の所開、南朝名臣の隠るゝ所、歴々として古蹟存焉。千年成阪隘は、二十有八層より、百六十層なるもの、四阪五阪升降す。深谷の地を帯れる、崖岸の状を見かへれば、鑿もて穿なせるが如く、高嶺の天に横たふ、崗、巒の勢をうち仰げば、刀して削れるに似たり。煙霞の子細なる、泉石の分明なる、實に天上の靈奇にして、人間の絶妙也。その神殿攝社を咨へば、地主神を波古曾と號け、本社を妙義權現と唱ふ。隨身、仁王、總門あり。神明宮、日本武、天満宮、稻荷神社、辨才天、飯綱不動、觀音、聖天、大黒天、金毘羅、人麿の禿倉あり。本地、神樂、護摩の三堂、繪馬掛の四阿あり。香水、及菅公の硯水あり。枚擧るに遑あらず。神殿佛堂上久て、戰國澆季の世といへども、亂妨の兇徒あることなし。又その名蹟奇峯を問へば、仙人瀧、大黒嶺、地藏岳、塞河原、阿彌陀岳、大日岳、鸞反嶺、金剛峯、釋迦岳、天狗岳、天蠟峰、高籠嶽、五臺峰、金玉峯あり。俗にこの邊を奥院といふ。險峻たる靈嶽を、仰眇として向上れば、萬尋の青壁は、凸凹としてなほ遙なり。空洞たる幽谷を、競々として直下せば、千仞の綠苔は、穹蒼として限なく。葛藤の挂る處、人迹罕に及び、荆棘の絨る所、鳥路纒に通ふ。その奇その妙、面あたり、目に見、耳に聞く物から、夢に似て、夢にもあらず、現にして、現ならじ、とわれなはわれを疑へり。巨細に思を賦せんとして、左思が十年の吾を説とも、いかでか、樵斧に及ん。日今こゝに説出せるは、是明月の

前にして、片玉が探る類なるべし。斯有しかば四犬士は、この靈嶽を巡禮して、或は降り、或は上り、隈なく遊歴する程に、その日も未下刻になりつゝ、よりに申嶽の邊なる、茶店に雲時尻をかけて、疲れし足を休るに、この茶店に遠眼鏡あり。麓のかたに推向て、臺に居たる儘にして、放に客に貸めり。莊助は戯れに、遠眼鏡を引よして、山間遙に直下せば、毎には見えぬ麓路まで、いと鮮明に見えてけり。浩處に、蘭織笠を戴たる一個の武士、總門のこなたなる、溪川の橋をあなたさまに、うちわたりつゝ、適ありけり。心ともなくなほよく見るに、圖らず後方を見かへりて、本社のかたをうち仰ぎたる、面影は笠の隙ながら、犬山道節に似たりけり。こはいかに、とばかりに、瞬もせず目送るに、はや總門の外に出て、往方もしらずなりにけり。遺憾きこと限りもなければ、只顧に嘆息しつゝ、信乃現八小文吾等に、云々と密語ば、三士も俱に嘆息して、もし返るや、とかはるがはるに、眼鏡を採て直下せども、遂にその甲斐なかりけり。當下信乃は沈吟じて、遠眼鏡もて見し人に、道著んと欲するとも、この處より總門まで、一里四町ありと歎いへば、飛鳥なりとも及ぶべからず。きのふ巷の風聲を聞たりしに、管領扇谷定正ぬしは、近屬當國に退居して、白井に在城し給ふといへり。彼道節は兩管領を、狙撃んと欲するならずや。しからんには渠も亦、こゝらわたりを徘徊して隙を窺ひ、時を得ば、君父の怨を復さん、と謀ることならずや。これ彼をもて推量るに、犬川生が見たる武士は、道節なること疑ひなし。誘給へ、下向して、白井の邊に趣かば、萬に一ツ彼人に、環あふこともあるべし。とくく。と急せば、莊助現八小文吾は、一議に及ばず同意して、番きつ、又領きつ、うちつれ立て足引の、山本見えてなほ遠き、千々の石階落すが如く、足に信して下向せり。不題、管領扇谷修理大夫定正は、近屬山内顯定と不和なるにより、猛に鎌倉を退きて、上野白井に在城す。當國より信濃越後まで、定正の采地なれば、をさをさ人馬を調煉して、不慮に備ん爲なるべし。これにより定正は、きのふ五日の早且より、砥澤の山に狩競して、明る六日の申の比に、白井の城に回旋す。定正その日の打扮は、紋紗の狩衣に、精好の袴、豹皮の行藤穿て、金作



の大刀に、虎皮の尻袴したるを腰に跨へ、八分反の武者笠を戴きて、奥州驪の、太逞き馬に、紅の厚總掛て、磯馴松に月と衝を、銀の磨白にしたる鞍、四方羞明く皆具して、靱紫 靱播練つゝ、馬上優に歩行せたり。相従ふ近臣は、巨田新六郎助友、籠門三寶平五行、妻有六郎之通、松枝十郎貞正等、從類凡三十五名。外様の若黨五十餘名、又弓箭鳥銃を肩にせし、雑色奴隷に至ては、毛擧るに違あらず。夥の列卒に、野猪鹿など、くさんぐの獲物を扛擔したる、前匠後従の目ざましく、五町あまり續きけり。既にして定正主従は、はや白井の城までは、二十町に足らぬ道の程の、並松原を過る折、と見れば一個の武士の浪人、皂蛇皮絹の單衣の、申時ばかりなるを被て、編笠をふかくしたれば、年の齡は定かならず。道のゆくての左のかたなる、年ふりたる松の下の、葛石に尻をかけて、右手に拿たる一ト口の大刀を、やをら膝に推立つゝ、忽地聲をふり立て、世に千里の馬なきにあらず、只これを知る伯樂なきのみ。今も鏝邪が劔なきにあらず、只これを知る良將なきのみ。惜かな、わかこの名刀。屠兒の肉俎に乗せられずは、農婦に鋼の炭を搔れん。恨むべし。とくり返し、又くりかへして、頻にひとりごちたりける。前走の雑色兩三人、うち見て懸て立よりて、こは奇怪なり、何人ぞ。知らずや管領の狩倉より、目今還らせ給ふなる、おん馬前に程近きに、笠をも脱す、尻さへかけて、手に刀を拿たるは、禮儀に疎き白徒也。とくく笠を脱捨て、ついりて拜み奉らずや。と齊一叱懲らせども、浮浪人は果敢々々しく、見かへりもせて、冷笑ひ、噫味や、あながまや。燕雀那ぞ大鵬の、志を知るよしあらん。管領はいと貴き敷。現汝達の主なれば、貴きことに思ふなるべし。しかれども兩管領は、清我殿の舊老黨、京都將軍の家臣なり。貴きは將軍ばかり、世に貴きものはなし。しかれども、なほこの上に天子の御ませり、天子は無上至尊なれども、なほその上に宗廟在す。宗廟は是萬物の父母、天津日月の神になん。われは浮浪の武士なれば、主もなく家縁もなし。管領われに恩徳あらば、貴くも思ふべし。管領われに徳なくば、われはわが世を渡らんのみ。こゝらの皆道散きにあらず。只是一個の浮浪人が、この樹下に憩ひしとて、路の障になるものか

は、儼事すな。と叱回して、ひとりごつこと初め、いよ／＼高く呼れば、雑色等はます／＼怒りて、大膽不敵の癖者かな。いふよし聞はずは縛ん。打よ仆せよ。と教圍て、立かゝりたる三方より。なほ懲さんと競ふ程に、定正間近く馬を進めて、騒しや何事ぞ。彼鎮めよ。と制させて、鎧際に従ふたる、松枝十郎を見かへりて、云々と仰すれば、十郎はこゝろ得果て、其樹下に赴きつゝ、浮浪人にうち對ひて、其許は元來何處の人ぞや。かしこくも管領家の、みづから問せ給はんとて、おん使を立られたり。かくいふは御内の近臣、松枝十郎貞正也。誘々、おん前に參り候へ。とくく。と急せば、浮浪人は阿と應て、拿たる刀を遽しく、腰刀に挿添て、緒を解く笠を背のかたへ、一間許投退けて、初て面を顯したり。そのとき人愈睛を斜にして、遠近齊一これを望るに、年齢は二十といふて、なほ二三は過べからず、面色白して鬚鬚青かり。眉は秀て、遠山の如く、眼は朗にして、雙星に似たり。隆準丹脣、これこの一個の好男子、月額の迹、延黒みて、驥鬣の額を搔ふ敷と疑はる。容儀堂々、神表凜々、庸人ならずぞ見えたりける。畢竟この人定正に近づきて、又甚麼なる説話がある。そは次の巻に、解分るを見て知らん。



第四十五回

名刀を賣弄して道節怨を復す 窮寇を追失ふて助友敵を換ふ

却説樹下なる浮浪人は、騒ぎたる氣色もなく、松枝十郎眞弘にうち對て、某は下總なる、千葉の福草村の浮浪人、大出太郎といふもの也。父ははやく世を去りつ、母は明失て年來になれり。親ひとり子ひとりなる、寒家は孝養兼餌の、料足さへ竭てせんすべなし。纏に残るものとは、この一口の大刀になん。祖父より某まで、既に三世の重寶なれば、身にしもかえじと思ふ物から、親の爲には惜むも要なし。美價を得ば售んとて、まづ千葉殿(名は胤康)に見せまらせしに、彼君眼豆のごとくて、眞玉も石も、得辨ねばや、贖物也とて、返されたり。かくてもなほ懲すまに、潛我の御所に参りつ、親の爲なる願事を、聞えあげんと欲するに、人に紹介せられしならねば、左右人等疑ふて、緋いよ／＼整はず、再び望を失ひつ、又鎌倉へ赴きて、山内の管領家へ、售らばやと思ひしに、彼御内にも相識なければ、誰とて汲引するものあらず。當下某 おもふやう、世に千里の馬ありといふとも、よくこれを知る伯樂なければ、生涯田畝に糞ふのみ。連城の壁ありといふとも、よくこれを識る下和なければ、瓦礫と共に碌々たり。今わが企望の三諸侯は、みな千乗の君にして、只一口の大刀を得識らず、いかでか賢と不肖を擇て、擧用するものならんや。大約かゝる暗君には、わがこの刀を售ぬもよし。扇谷なる管領家は、賢に親み、不能を思ひ、寛きこと海のごとくて、容納はずといふことなく、篤きこと地に異ならで、敵給はずといふことなし。當今無雙の名將なりとぞ、世

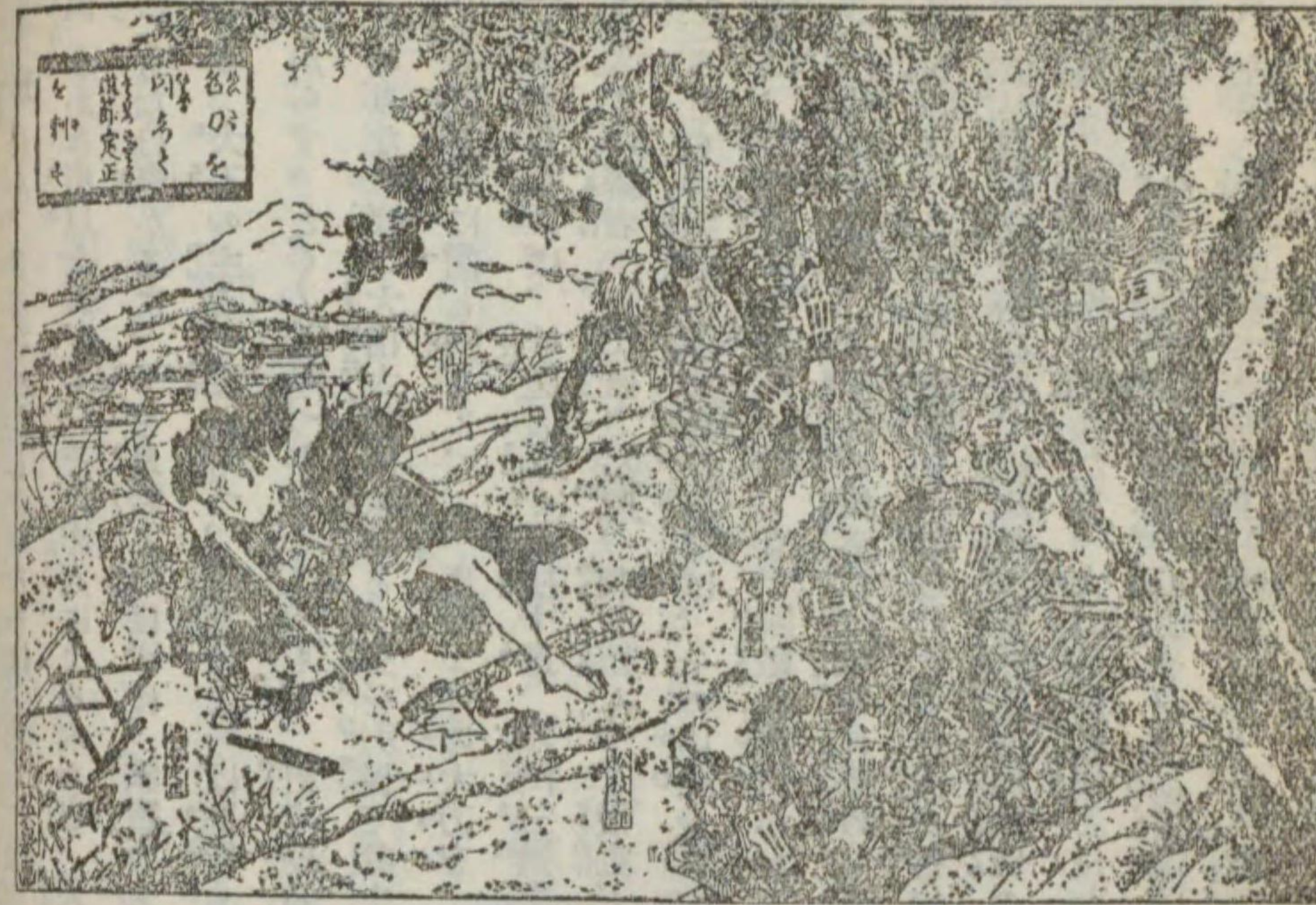
人はをさ／＼いふなる。彼君は今上野なる、白井に在城し給へば、略の程なほ遠くとも、彼處へ参らばこの名刀の、價を倍して買せ給はん。さはとて踵を旋らして、おん跡を慕ひつ、きのふこの地に來たれども、こゝにも相識絶てなければ、申し入るゝよすがもあらず。砥澤に山獵し給ふよし、市中の風聞隠れなければ、歸城の折を候ふて、見参し入らばやとて、漫に虎威を犯したる、不敬の罪を宥られて、これらの事の趣を、聞えあげ給はらば、こよなきおのが幸ひならん。と憚る所もなく答たる、辯舌流るゝ水のごとく、一ト癖あるべき面魂に見るもの聞くもの目を指しつ、則適雄々しき人骨やとて、嘆賞せぬはなかりけり。そが中に眞弘は、そのいふよしを聞果て、舊の處へかへり來つ、則緋の趣を、云々と報まうせば、定正しば／＼領きて、馬より下て、道傍なる、芝上に牀几を立てせて、そのもの召といそがし給へば、眞弘再び走り向ふて、彼浪人を將て來にけり。その間に定正は、牀几に尻を懸給へば、近臣左右に警衛して、齋整としてつゝいるたり。されば件の浪人は、そが儘眞弘に俱せられて、間近く跪きたるを、定正靈時、と見かう見て、下總千葉の浮浪人、大出太郎は汝が事敷、明失たる母の爲に、家寶の大刀を售んと欲する、その孝行賞すべし。その大刀何等の徳ありて、予に售んとて自負したる。三世家傳の由來を告よ。大刀の銘を何とかいふ、その來歴はいかにぞや。と問れて臆せず、小膝を進め、さん候。某が、祖父は故管領家(足利持氏)に、仕へたるものなりければ、兩公達に従ひまつりて、嘉吉の結城合戦に、陣歿して候ひき。よりにて父は仕官を欲せず。下總千葉に退隠して、年四十にして身まかりたり。年來浮浪に、武器調度を、沾却して候ひしを、なほ一口の名刀あり。これは是世に名だたる、村雨の大刀になん。乃祖尊氏將軍より、持氏卿まで相傳せしを、春王殿に譲らせ給ひつ。爾後嘉吉の戦ひ敗れて、春王安王、兩公達は、討れさせ給ひしかども、件の大刀は幸ひに、臣が家に祕置り。某が父は彼公達の、伽屬従なりければ、結城の城を拔れし日、村雨を腰に佩て、辛く屯を殺脱つ、千葉に僑居を下たるよし、父が自筆の古記録あり。紛れあるべうも候はず。といへば定正うち領きて、現村雨の大刀の事は、予も豫てより傳聞たり。



ざりとても名を竊む、贖物をもて人を欺き、利をしも搦る鳴許人の、世には往々ある習俗なるに、汝が父の遺書也とも、認め手迹の傳來録を、誰か證據とするものあらんや。別に證とするよしなきや。と再び問れて、些も擬議せず、御説では候へども、贖物をもて利を謀れるは、狡商人のうへにあらん。高祿をだも欲せず、二世浪人の某さへに、疑れ奉るは、いと朽をしくこそ候へ。抑この大刀の鋭ことは、陸には犀象を破るべく、水には蛟龍を截といふ、唐山の龍泉太阿、我朝の小烏壽鳩、鬼丸龍尾など聞えしも、なほこの右に出べからず。加旃拔放てば、刀尖より水氣流れて、太山の石湧に異ならず。うち振るときは村雨の、梢を洗ふに似たればとて、纏て村雨と命けられしを、語繼ぎ聞傳へし、人口になほ膾炙せり。鄙語にいふ論より證據、こは贖物敷、眞物敷、よく擬せ。と誇良に、答も果す拿たる大刀を、取直し拔放ちて、晃かしつゝうち振れば、不思議なるかな刀尖より、潑然として潰る、水氣四方に散亂して、彼警衛の近臣等が、面を撲て降沃げば、衆皆袖もて拂ひもあへず、適に潑とぞ退たりける。さばれ定正は牀几をはなれず、扇をもつて避たる水氣の、なほ精好の袴の上に、被りて結ぶ白露を見つゝ、只管感嘆の、隣打鼓せば破落々々と、落て碎る名刀の、奇特に疑ひ忽地解たる、その歡びは大かたならず、思はずも聲高やかに、やよ等、霎時、大出太郎。かくまで正しき證あれば、疑心は既に氷解せり。その大刀これへ、とくくもて、といはれて太郎は欣然と、身を起さんとする程に、松枝眞弘推禁めて、こは不覺也、大出生、縦中途の見參也とも、貴人に咫尺したてまつるに、帯刀すらなほ憚りあり。況白刃を引提て、近づき奉るよしあらんや。大刀をわれらに遞與し給へ。といへども聽かず、頭をうち掉り、原來和殿は某を、なほ疑しく思ひ給ふ敷。人々われを疑はざり、われも亦人々を、疑ひ思はざるにあらず。亂れたる世の習俗とて、凡貴きも賤きも、笑の中に刃を隠す、貪慾邪慳は置りかたかり。然るを今虚々と、高貴人也とて心放して、身にもかへじと思ひし實を、左右人達に遞與しつゝ、價も賜はて驚きせられれば、われは孤軍の敵無なり、新難なる人々と、争ふたりともその甲斐なく、大刀をばとるも價も賜はて

命を喪れん。さるむづかしき事ならば、售らて後悔なきこそよけれ。といふを冠正うち聞て、十郎が雷聲の響は、憤ふかき所以なれども、それは亦人によるべき也。大約六十六箇國、龜甲の如く封疆を建て、數國を領する大諸侯、東にもなほ多かるに、予を良君と思はずは、家寶の大刀を齎して、はるくこゝに推參せんや。かゝれば予はその村雨より、大刀の主こそ愛おもへ、時宜によらば高祿もて、召使ふべき大出太郎を、なほ疑んは要なき事也。聊も厭しからず。とくくみづからこゝへもて、許すゆるす。と鷹揚なる、寛仁大度の主命に、眞弘忽地閉口して、逡巡するのみなれば、大出太郎は欣然と、刃を引提て身を起しつゝ、しからば御免を蒙るべし。よく擬せ。と定正の、牀几のほとりに衝と寄りて、跪きつゝ件の大刀を、進らするやうにして、胸前捉て仰ぎまに、突倒し推伏て、刀尖晃りとさし著れば、吐嗟と騒ぐ松枝十郎、竈門三寶平、妻有六郎、その餘の近臣、外様の諸士、雑色奴隸、列卒までも、さては癖者、射て瘡さん敷、刺や留ん。と散動ども、賈誼が所云鼠に投るに、器を忌むごとく、よしや癖者を討とるとも、主君も俱に命を隕さば、その甲斐なしと躊躇て、握る拳の汗も只、沸がごとくに捫擇す。この時にはや定正は、刀の柄に手をかけつゝも、剛敵に推伏られて、終に刃を抜くこと得ならず、兵共拯へ。と叫ぶのみ、又せんすべはなかりけり。當下件の癖者は、天地に響け、と聲ふり立て、管領定正慥に聞け。下總千葉の浮浪人、大出太郎と名告しは、且く汝主従を、計らんとての假の名也。去歳の四月十三日、江郷田地袋の戦ひに、一族從類員を盡して、汝が爲に亡び給ひし、煉馬平左衛門尉倍盛朝臣の老黨に、さるものありしと知られたる、犬山監物貞知入道道策が獨兒に、乳名道松と呼ばれたる、犬山道節忠與とはわが事也。君父の讐を復さんとて、新に臥し、膽を嘗、千辛萬苦の宿望を、今こそ果す、怨の刃、受よやツと罵れば、定正いよく驚怒て、反復さんとする處を、起しも立す。誓を、左手に楚と引著て、細頸丁と搔切たり。松枝竈門妻有の黨、敵の從類皆これを見て、吐嗟と騒ぐ大叫喚も、よしなや遠慮の手を下さて、遺恨に堪ねば今さらに、備を立るに違もあらず、われ擊留ん、と刀尖を拔列ね閃して、





(す 刺 を 正 定 節 道 て し 閃 を 刀 名)

八方より競ひ蒐れば、道節は左手に引提し、響敵の首級を投捨て、乙と嘯て縦横無礙に、殺塵けたる必死の大刀風、雨歇、平歇、名刀の、奇特に土を潤したる、道のぬかりに敵の雜兵、迂るを獲たり、と撲地と砕る、修煉の手のうち、瞬間に、血は涿鹿の野に満て、撃るゝものぞ多かりける。されば一人、當千の、向ふに前なき勇士の働き、響ば餓虎をもて、群羊を駆るごとく、唯是一個の道節に、影の士卒辟易して、こゝは足場の悪かるぞ、且退けと罵りつゝ、濺と亂れて迹迷ふ、雜兵に誘引れたる、松枝籠門妻有の諸士、心ばかりは早れども、大廈の倒れんとするときに、一木いかでかこれを柱ん、皆共侶に逸足を、踏亂しつゝ、逃走るを、蓬し返せ。と呼被たる道節は刀尖より、雷る水氣をうち振打ふり、一ト町あまり追ふ程に、一ト叢繁き藪蔭より、閃を咄と作して、顯れ出たる一個の若武者、これ怎麼なる打扮ぞ、但見れば、素絹に皂絲もて、壺盧の花を、處々に、縫消したる狩裝束に、萌葱威の身甲して、精好の奴袴に、龜甲鈎たる眩甲鬘鏡を透間もなく具足ひつ、腕には二尺五六寸なる、金

傳の犬刀に、湖鏡の風塵被て、九寸五分なる短刀を懸、左手に、響敵の首級を引提し、響敵の首級を以て、その隊の兵、三十餘人、おのゝ短鎗の刃頭を揃て、道節が前後左右を、犇々と捕獲つゝ、復武者音をぞ揚たりける。當下件の若武者は、弓杖突て、聲高やかに、愚なり犬山道節、良將はおのづから、時運に稱ふ神助あり。管領いかでか汝等ごとき、孤客に撃れ給はんや。けふ謬て汝が爲に、命を隕せし假管領は、只是當家の勇臣なる、越杉駄一郎遠安と呼れしもの、去年池袋の捷軍に、汝が主君倍盛の頸捕て、名譽の感状を賜たる、剛者なりけれども、汝が年のわかきを見て、漫に思ひ侮りけん、阿容々々として撃れしは、不思議の僥倖ならん。かくいふわれを誰とかする。管領補佐の一老職、武術文學、敷島の道にしも暗からず、その名は都鄙に高かりける、巨田左衛門大夫持資入道道寛の長男なる、薪六郎助友が、父の奇計を受行ふて、汝を謀りしとらざるや。わが父道寛、豫てより、豊嶋煉馬の殘黨の、隙を窺ふ事もやあらん、とおさく、遠謀あるをもて、去歲の秋より彼此へ、士卒をわがち、遣して竊に撈り問せしに、下野武藏の間にて、優婆塞に姿を變つゝ、左道をもて愚民を迷し、錢を集めて、軍陣の、便點に充る汝が影迹、既にして顯れたり。さばれ幻術ありとかいへば、明に捕易からず。油斷の體にもてなしで、こゝらへ誑引よせんとて、わが管領は近日より、白井に在城し給ふ、とおぼろげならず洵知して、なほ鎌倉を出給はず、近臣越杉が面影の、よく主君に似たるをもて、駄一郎に大將の狩裝束賜りつゝ、きのふ五日の早且より、砥澤の山の狩倉は、彼建久のむかしを偲ぶ、汝を釣ん爲なりし。父の先見果して違はず、今招ずも網に入る、汝が命運はや彈たり。討捕るはいと易けれども、敵ながら可惜しき、勇士と思へばわが箭に被ず、及びなき身の力を量りて、非を悔ひ、時の務を知らば、降参せよ。とぞ呼びける。道節は謀りにけり、と思ひし敵に計られて、怒れる面に朱を沃ぐまで、疾視詰たる必死の覺期に、大刀とり直して、些も撓まず、扱は助友ごさんなれ、耳穢はしき降参呼り、九世を易るとも、響の奴とわれやはならん。今定正を討得ずとも、わが先君に鎗を觸たる、越杉もおなじ主の仇、思ひの



隨に擊留たれば、聊亡君尊靈を、慰奉るよすがあり。恨らくは父の讐、竈門三寶平五行を、擊得ざりしこそほ  
 るなけれ。然とて名もなき雜兵を、幾百人殺さんより、汝とわれと勝負を決せん。助友進め。と刃を抗て、頻に招く  
 不敵の廣言、憤さも悪し、と捕手の兵、ヤツと被たる諸聲と、共に齊一衝閃かす、鎗を前後に飛越反踰、右に受て  
 は左に流す、手燬煉の刀尖丁々發石と、疾風に枝を折ること、鎗の蜚卷幾條歟、砍落されて逃るもあり。或は眞額  
 乾竹割、或は胴創舞車、矢庭に命を隕すものはや十人にあまりつゝ、遺るも痛手を負ぬはなし。忽地激と開き靡け  
 ば、道節得たり、とますく進みて、面もふらず助友に、走近づかんとする程に、助友騒がず、弓に箭刺ふて、能く  
 固めて鏢と射る、矢聲と共に道節は、身を淪してぞ避たりける。程もあらせず射出す二の箭を、大刀もて丁と切拂ふ  
 神出鬼没の疾働きに、助友は心睜て、弓を憂哩と投捨つゝ、大刀を抜んとする程に、松枝妻有の近臣等、時分を揣  
 りて返し來つ、助友に力を勦して、彼擊留よ。と下知すれば、その隊の兵數十人、推隔、とり圍て、微塵になれと  
 ぞ揉だりける。當下道節思ふやう、わが思慮の足らずして、敵の謀に當られたれば、先君の讐敵、眞の定正にいま  
 だ得あはず、加旃父の讐、竈門三寶平五行も、この隊にあらずとおぼしきに、漫に進て戰殺せば、世の胡虜になら  
 んのみ。大宿望を遂ん事、けふに限りて翌なからんや。幸にして黄昏たり。只一方を殺開きて、身を全して、時  
 を俟ん。こゝにて死することかは、と尋思の臍を固めたる、奮戦突戰、初より、精神ますく加りて、多勢が中へ割  
 て入る、迅こと恰鷹の如く、はや一ト條の血路を開きて、且戦ひ且走れば、助友頻に焦燥て、士卒を罵り獎して、眞  
 弘之通共侶に、何處までも追ふたりける。浩處に、信乃莊助、現入小文吾等の四犬士は、曩に明鏡の山中にて、  
 莊助が遠眼鏡もて、見たりしといふ武士を、いとなつかしく思ふになん、倘あふことのあらんかとして、山を下りて彼  
 此と、尋索てその曠昏に、白井の城へ遠からぬ、一ト村落を過る程に、里の老弱罵聲きて、今如此々々の松原にて、  
 管領撃れ給ひにけり。寇は一個の浪人にて、懐馬の殘黨なるものぞ。といへばいな、管領の、いかでか撃れ給ふ

べき。彼縣に殺されしは、去歲の軍に各を擲たりし、御内の越前といふ人ぞとよ。そはとまれかくもあれ、縣者は  
 術燬煉也。單身にして瞬間に、死人て山を築きしといふに、逃てわが村に走りも入らば、いかにして禦ぐべき。門  
 戸をとく鎖せ、女子ども、喧嘩の側杖打るゝな。と呼る音聲轟しく、皆東西へ奔走す、騒劇大かたならざれば、四  
 犬士もうち驚きて、原來此わたりにて、復讐の本意を遂しは、彼犬山にぞあらんずらん。とくその處へ赴ずは、い  
 かでか虚實をしるよしあらんや。暮ぬ間にと共侶に、歩の運びをいそがしつゝ、里遠離る晩闇、前面を透し長視れば、  
 年尙わかき一個の武士、手に白刃をうち振て、追來る敵を物ともせず、敵近づけばとつて返して、殺離け擊退けて、  
 なほ戦ふこと兩三度、道のゆくての四犬士の、間に忽地衝と入りて、背に立か、と見かへれば、往方もしらずなりに  
 けり。そのとき亘田助友等は、士卒を頻に駈立て、透間もなく追蒐來つ、前面に立在む四犬士を、是も道節を助大刀  
 の、同類なりと思ひけん、彼擊留よ。と下知すれば、多勢を頼む捕手の雜兵、咄と嘯て衝出す、鎗の刃頭は夕立雨  
 の、電光にしも異ならず。四犬士はこはそもいかに、と驚避ても一ト言の、問答に暇なければ、已ことを得ず腰刀を、  
 抜合しつゝ、戦ひけり。さる程に雜兵等は、只獨なる道節だに、得擊留ざりけるに、替る敵手は四犬士なり。譬ば山の  
 幸雄等が、一虎を追走らして、百獅子に逆ぶが如く、忽地に殺崩されて、一ト町あまり退きしを、助友ははや守返し  
 て、逃る士卒を罵激しつゝ、みづから短鎗を閃して、四犬士にうち逆へば、松枝眞弘、妻有之通、恥を知り名を惜  
 む、武士なきにしもあらざれば、又助友を相援けて、刀尖より火出るまでに、嘯嘯て攻たりける。浩所に城中よ  
 り、援の兵百騎許、汗馬に鞭ち、宙を飛して、はやくも近づく程こそあれ、射方を勇る鬨の聲に、逃たる士卒も聲を  
 合して、皆共侶に競ふて蒐れば、新隊は備を引わけて、横鎗をぞ射たりける。この時既に日は暮て、影なほ細き六日  
 の月も、むら立雲に隠されつ、又顯るゝ明闇不定の、霧を籠盾に四犬士は、一進一退力を勦して、苦戦に大刀の鋼鐵  
 續かず、彫のごとくなるまでも、淺瘡一個所負ふものなく、千變萬化の秘術を盡して、頻に捷に乗るものから、不知



案内の夜戦なり、緯は素より不意に起りて、われに援の兵なければ、思はずも蒐隔られて、迭に拯ふことを得ず、信乃莊助は、城兵の、新隊の中にとり圍れ、又現八小文吾は、助友が隊兵と、戦ひおの／＼暇なき、四士四所に別れても、危窮はおなじ九死一生、厄難こゝに三たびに及べば、存亡いまだ知るべからず。寡をもて衆に敵するは、已こ

とを得ざるのみ。縦四犬士萬夫の勇あり、敵に一介の術なくとも、脱れ果べくは見えざりけり。有斯し程に道節は、辛く大敵を殺脱て、走ること三四町、既にその日は暮にけり。追來る敵のなかりしかば、跡傍の樹下なる、石に尻をうち掛て、且く息を吐く折から、忽ち後方に鬨の聲して、撃大刀音さへ聞えけり。道節耳を傾けて、原來なほわが來つる跡に、烈しき戦ひあるにこそ。櫛にわれ、頻に慕ふ敵兵を、砍拂ひつゝ走りし時、前面より來つる旅客等が、間に入りて立紛れずは、輒く敵に遠離らんや。折しも黄昏なりければ、敵は四箇の旅客を、わが助大刀のものぞと思ふて、捕籠て撃にやあらん。もししからずはわが來し跡に、いかにして戦ひあるべき。彼旅客等が來つる故に、われは輒く追手を脱れ、脱れし故に旅客等は、敵に撃るゝ事あらば、便是人を殺して、わが命を保るもの也。勇士のせざる所にして、恥亦これより甚しきはなし。いでや彼處へ走り還りて、旅客等を拯ひてん。拯ひ得ずともその人々と、共に死なば、生るに勝れり。呼しかなり、と肚裏に、思ひ決めて速しく、緩みし帯を引締びつゝ、裳を棄けて露直に、舊の處へ還りて見れば、果して四箇の旅客等は、城兵に捕圍れて、既に戦ひ疲勞けん。その危きこといふべからず。臆城中より、加勢の武士百餘許、いて來れりとおぼしめて、勢ひ始に彌増たれば、道節靈時尋思をしつゝ、と見れば敵の捨たる弓箭、處々に多くあり、又統たる列卒繩も有り。是究竟と應手なる、弓を拵り、箭を撫りて、索さへ漏さず左側なる、大竹藪に潜入りつゝ、敵の後に近づくを、しるもの絶てなかりけり。かくて又道節は、幾尋かある件の索を、彼此の竹にからまして、引動しつゝ忽地に、鬨の聲を揚しかば、城兵これに驚されて、こはそもいかに、と見かへる處を、竹藪の中よりして、射出す弦音、空箭はなく、矢庭に命を隕すもの、五七人々に及びにけれ

ば、城兵、懐へず騒ぎ立て、原來敵に伏兵あり。一ト圍こゝを、選りて、思ひ懸る程に道節は、索を引ては竹を斬じ、箭を射出しては索を引く。暗さは烏し、藪中に、籠れる敵の多からん、と思ひ懸る城兵等は、いよ／＼周章くのみ。父道寛の軍術を、見馴聞熟たる助友も、終に怵へず皆共侶に、人聲撲て崩れにければ、信乃莊助、現八小文吾等の四犬士は、忽ちこれに力を得たる、勢ひに乘しつゝ、敵をよき程に追捨て、はやくも迹を瞞しつゝ、荒芽山の方へ走りけり。城兵等は思ひがけなく、敗走りて思つきあへず、白井の城へ逃籠らんとて、頻に把握したりしかば、助友怒て、聲高やかに、蓬き兵共の逃足かな。計るに敵は煉馬の殘黨、よしや伏兵あればとて、怕るゝに足るものは。藪中へは箭を射被け、鎗を突入れて駈出せよ。逃たる奴をば、とく追蒐よ。只一人だも擊留すは、後日の咎を脱れがたし。いふかひなや。と敢闘て、烈しく下知を傳れば、城兵これに驚されて、藪の邊へかへし來つ、且箭を射被け、鎗をいれ、果は端より掻分て、衆皆撈索るに、敵はひとりも在らずして、躬方の遣せし列卒繩を、彼此の竹に結びて措り、原來熟く謀られたり。遠くは適じ追蒐よ。と再び罵駈くのみ、はや時移りて往方を知らねば、呆れて進む擬勢もなし。助友は後度の不覺に、安からず思へども、窮寇は追ふべからず、一ト圓白井へ退きて、便點をもつて遺なく、擗捕るこそよかめれ、と思ひかへして強ても追せず、竊に家隸兩三人に、謀を授け、留めおきて、眞弘之通共侶に、全隊の士卒をいそがしつゝ、白井の城にぞ還りける。かくて宵は、なほ甲夜ながら寂寥て、入跡絶たる列幹の松の、背を蒼田に風渡る、土堤の茅葺に置く露を、命と聚く虫の聲、高くも澄る夕月夜、影さへ薄き單衣の、裙を脛まで端折て、腰に帶たる兩刀の、外に一刀挿添たる、いとも怪しき一個の武士、稻塚の蔭よりして、四下を見かへり見かへりつゝ、忽然として立出たる、是はこれ別人ならず、犬山道節忠與なり。既に竹藪の奇計をもて、夥の敵を退けて、輒く四箇の旅客を、拯ひにければ、いよ／＼躲れて、はやくも件の藪には在らず、近きわたり身を潜して、豫て時分を揣りけん、助友等が全隊を將て、白井の城へ還りゆくを、遣過し目送りて、再び顯れ出たるなり。當下犬山道節は、



彼此にいくらとなく、横り臥せし敵の死骸を、曲々に、と見かう見つゝ、曩にわが投捨たる、越杉駄一郎遠安が、首級をやをらとり揚て、月を燭に又よく見たる、怨の外皆凄しく、霎時脱てうち領き、天運いまだ全からずや、管領定正ぞと思ひつゝ、撃しはその臣遠安なれども、這奴も先君倍盛朝臣に、鎧を鏑たる怨敵なり。彼染鼎の恥を雪め、睚眦の怨を復すは、皆是志士の本意なるに、打落したる仇人の首級を、捨て走らば大敵に、怕れにけり、と人はいはん。些少なれども今宵の家業、わが先君を祭の胙、これに優すものあるべしやは。とひとりごちつゝ、死骸の袖を、手ばやく散落離と裂とりて、件の首級を推包む、心のどけくその端を、帯に融して結附るを、後方に立て見るものあり。ともしらずして道節は、叫ぶ藪蚊を拂ひつゝ、たち去らんとする程に、癖者等と呼留て、是りと衝出す鎧の刀頭に、こゝろ得たり。と道節は、片足代にあちこちと、身を跳して、倍と見かへり、此度の敵は一人、敵。百騎にあまりし城兵だも、みな逃足は速かりしに、汝一人かへし来て、虎髯を拵るは殊勝なり。名告れ、聞ん。といはせも果す、鎧を築扱て、聲をふり立、道節さのみ廣言すな。われは初度の戦に、早りて、肝に痠を負ふたれば、又功名を貪らず、汝を捕手の駐駐は、朋輩に譲りつゝ、彼處の樹蔭に退きて、思はず時を移したり。かくて空しく城中へ、還らんことの本意なさに、ひとり汝が往方を索ねて、目今迹を認めたり。わが名は音にも聞つらん。去歳の四月の戦ひに、汝が父道策と、組で當坐に首を獲たる、靈門三寶平五行也。親さへ子さへわが手にかくるは、過世あるべき武士の名聞、首をわたせ。と罵たり。道節は願ふ敵ぞ、と疾視詰て、聲高やかに、原來汝が五行よな。その名は豫て聞しかど、面を楚と認めねば、撃漏せしに、居残りて、出て名告るは天の賜、わが武運こそ憑しけれ。霎時も忘れぬ父の仇、其處な退きそ。と敦固て、刀を是りと拔放せば、三寶平も亦おぼえある、武藝に誇て、些も撓まらず、迭に烈しく聲を合して、衝出す鎧、撃大刀の、音も隙なき生死の際、一上一下と術を盡しつゝ、霎時は挑戦へども、忠孝無二の道節が、獅子奮迅の怒りも、頻りに進む鬪の大刀を、終には陰に開かねたる、鎧を憂懼と巻落され

て、大刀を抜んとする處を、大喝一聲道節が、うち閃かす刃の下に、三寶平は身を轉して、足空さまに倒れたる、軀のうへを飛越えし、首は遙あなたなる、松に當りて落てけり。さる程に道節は、父の讐さへ思ひの隨に、撃果したりければ、歡び比んに物もなく、刃を歛めて樹下なる、仇人の首を引提來つゝ、又その死骸の袖を斷離て、包みて腰にぞ著たりける。浩處に、助友が、曩にこゝらへ留置たる兩三人の家隸は、おのゝ鳥銃携て、東西の樹下より、寛よりつゝ、矢比を掃りて、火蓋を鑽らんとする程に、道節目ばやく透し見て、左右に擱む小石の飛礫に、西なるひとり、頰を、打破られて叫びもあへず、はや仰さまに倒れたり。又東なる一人は、鳥銃を打落されて、驚嚇て取らんとするを、取らしもやらず道節は、驚鳥の如く疾近づきて、足を飛して礫と踏る、爪頭尖く吭を、したゝかに撲折かれたる、灸所なれば聲も得立ず、手足を張て仰反たり。程もあらせず又一人、弓に箭刺ふて樹間より、出るを道節透し見て、遺たる鳥銃取るよりはやく、火蓋を鑽て、挫と放せば、讐と共に樹下なる、彼一人も倒れけり。三人が外に今はしも、敵はあらず、と道節は、鳥銃そが儘投棄て、袖を拂ふて悠々と、高峯のかたへ還りゆく、宿を何處とまだしらねども、なき後までも主を思ひ、親を忘れぬ犬山は、尾張のみかは上野の、白井の城の城將士卒も、その里人も、後の世までも、語繼ぎ聞傳へて、道節來つといふときは、頻泣兒も立地に、聲を輟て怕れしとぞ。三國の時張遼が武名に小兒を懼したる、遼來々々よりも目覺しき、名を海内に揚にけり。

第四十六回

地藏堂に莊助首級を争ふ  
山脚村に音音舊夫を拒む

再説、信乃莊助現八小文吾等の四犬士は、思はずも白井なる、城兵に捕圍れて、苦戦に時の移るまで、なかくに死を究めしに、誰か圖らん竹叢の中より、鬪を作り箭を射出して、われを助るものありければ、城兵これに辟易して、鐵壁よりも堅かりける。重圍忽地釋たるまに、夜に紛れ迹を埋めて、同意異途に走りつゝ、やうやくに



九死を出て、一生をぞ獲たりける。そが中に、大川莊助義任は、いぬる日、庚申塚なる法場にて、三犬士に死を拯れし、恩義をこゝに答へ、と思ひにければ進むときも、三士に先だちて防戦ひ、退くときは殿して、殊さらに後れしかば、終に信乃等が往方をしらす。六日の月は出ながら、秋天の定めなくて、結陰では又齋るゝ、影いと細き爛竹の、しのぶに便よき宵なれども、いひ合したる事のなれば、何處を投て彼人々に、追著んよすかはあらぬを、猪平が信乃に誂しといふ、書狀の事を思ひ出で、おぼつかなくも心あてに、荒芽山の方へとて、其處ともしらぬ間道捷徑、足に信して走る程に、今ははや二十町來ぬらんと思ふ物から、なほその山の麓に得著す。瀧には目にあまりし大敵と、戰疲勞たるうへに、不知案内の夜行を、ひとり頻りに走りければ、いといたう餓たるに、喉さへ渴きて堪がたかり。さばれ此邊は、適どもゆけども茫々たる郊原にして、憩んと思ふに家もなし。と見れば右側なる茂林中に、火光隠々と見えしかば、こゝにも栖ば、住む人ありけり、縦一碗の飯を獲ずとも、敲きて水を乞はばとて、進み入ること一ト町許、件の茂林にいゆきて見るに、人の家にはあらずして、最老たる樹下に、編小なる地藏堂あり。彼處で見たる火の光は、此佛へまゐらせたる、燈明の洩たるなり。堂は一間四方に過す。これ將いたく朽傾きて、骨を顯す萱が檐に、田文地藏堂と題したる、扁額を掲たり。このとき莊助おもふやう、かくまで荒たる小堂なれども、土地に由緒ある靈佛ならずは、里遠離る茂林の佛に、誰か夜なく燈燭を進らすべき。田文といへば耕作に、をさく利益あるもの歟。こは近郷の歸依佛ならん、とおもへば、行婦の名を得たる、母の塚さへなつかしくて、悵然として立も得去らず、なほ彼此を見かへるに、地藏堂の左のかたに、苔埋たる石塔六七あり。そが間に、近屬建たらんとおぼしき、木塔婆もありけり。言訪ふものは樹間なる、草葉に虫の聲するのみ。さらでも聞き樹の間より、振離囁ればむら立雲に、又入る月の影ならで、幽けき遠寺の鐘聲を、聞漏さじとて、健れば、夜はまだ深けず、初更なり。とてもかくても後れしものを、急ぐとも甲斐はあらん。且くこゝに憩んとて、地藏堂の扉を開きて、霎時念じて、裏面

のやうを、つら／＼と見入るゝに、石佛にして坐像也。身長は三尺許もあるべし。龍柄なる、一雙の花籠に、草の花を建たるが、日ごろ經にけん萎みたり。そが机の中央に、兩皿の盛物あり、頸を推籠してなほよく見るに、皿なるは、菜と桃なり。時に取ては是も亦、百味の飲食なりけり、と思へば漫に聲を被て、地藏尊々々々、六道能化の教主として、餓鬼を濟せ給ひなば、わが餓たるをも憐み給へ。御前の供物の好しきに、猿鼠をのみ肥さんより、己別當仕らん。許させ給へ。と戯れつゝ、進み入り引おろして、菜も桃も漏すことなく、忽地に盡せしに、桃は三四よく潰て、甘液の多かれば、飢を忘るゝのみならず、渴もやがて止にけり。方便無量の佛恩かな。と又戯れて額をつき、退き出んとするときに、孤燈の油はや竭て、忽地に滅にけり。あの燈明はとまれかくまれ、空はなごりなくうち曇りぬ。雨は降るとも復月の出べくもあらぬ夜に、荒芽山まで適ばとて、彼人々に遭んとは、今さら思ひ決めがたし。今宵をこゝに隣さん歟、なほ彼處までゆくべき歟、と尋思に宵は安からで、舌打すれば、蛙、わが口眞似歟諸隣に、鳴立られていとどしく、尻もおちぬ小堂の樞に倚てつく／＼と、猶ゆくすゑを思ふ折から、忽地人の足音して、前面より來るものあり。莊助はやく透し見て、初夜過たるにこの茂林へ、松も燈さで獨來るは、豈參詣のものならんや。こは必盜賊の、臥簞造るにあらんずらん。躲れて楚と見定めばや、と思へばやをら身を起しつゝ、竊歩しつゝ左邊なる、石塔の背に身を潜して、その近づくを窺ひけり。さる程に、犬山道節忠與は、君父の讐を撃果したる、兩級の首を腰に著て、はやくも其處を立退きつゝ、案内知たることなれば、捷徑を疾走りて、その夜初更の比及に、田文の地藏の茂林まで來にけり。この堂の邊なる、舊塚の間には、今茲四月十三日、君父の一周忌の追薦に、由縁のもの建たりし、塔婆一ト基ありければ、件の首級を纏禮んとて、茂林の中にぞ進み入る。浩處に後方より、年老たる賤夫の、棒の脚絆に袂端折して、竹子笠を戴きたる、肩には二袱の小包を、結合しうち掛て、道節が跡を跟て來つ、地藏堂のあなたなる、樹の蔭に立躲れて、近くもよらず成りてをり。道節はわが前後に、窺ふものゝありとはしらで、塔婆の下に進向



ひつ、腰に著たる兩包の、首級の締塊解おろして、塔婆の前に縛贈つゝ、恭しく額つきて、類に祈念を凝らすになん、莊助は塚の蔭より、透し見れどもその意を得ず、肚裏におもふやう、この癖者が齎して、舊塚を祭れるは、引剝せし贓物を、邪鬼に供養して、なほ造化を願ふならん。這奴憎むべし。憎むべし。先うち驚して、試して見ばや、と石塔の間より手を出し伸して、並備へし二包なる、首級を無手と擣獲て、引入れんとする程に、道節はやく頭を擣て、驚きながら莊助が腕を丁と攪詰て、引出さんと前へ曳く。莊助は亦引著られじ、とそが儘些も身を動かさず。應に千尋の大木の、巨根を四方に張れるがごとく、千曳の綱手に被るとも、なほよるべくもあらざれば、道節はいよく驚き、ますく怒り引あふ程に、送に劣らぬ金剛力士の、世尊の鉢を争ふて、紫雲を踏も外せし如く、間に兩箇の石塔を、瓦落離撞と推倒して、忽地籠盾のなくなりければ、道節獲たり、と衝と寄せて、股杖に臙を踏入れて、左手を帯の締塊へ、被んとするを、莊助は、臂を拵て振釋く。雙方入躬の最手抽手、相撲の極秘、拳法の妙奥、互に知たる事なれば、地を踏四ます力足、烏夜に目標は暴雄の、勝負孰とわきがたき、争ひ果し奈末與美の、腕に甲乙なかりけり。この時までも彼老人は、樹蔭に息を凝らしつゝ、透し長視て、舌を吐き、その勇力に呆るゝ可り、端なく出も難たりしを、聊覺あるものなりけん、休かねたる面色して、走り寄つゝ、兩人が間へ杖を衝入れて、推分んとしてければ、道節も莊助も、再びこれに驚きて、思はず組たる手を放す、御舎に落せし首級の包を、兩人取らん、と立よる所を、取らしもやらす又老人は、間に直と躬を入れて、杖採なほし推隔たる、早速の働き、思はずも、己が肩なる兩杖の袋物をうち落しつゝ、遠しく躬を屈して、頻に四下を搔撈たる、程もあらせず兩雄は、齊一焦燥立如法夜に、認め敵も、當坐の手覺、當るに任して左右より、彼老人を突退れば、踉蹌ながら轉も倒れず、兩三步退きて、小膝を突たる手下に、撈り當しは道節が臂の首級の二包ぞ、と思ひかけねばわが包よ、とこゝろ得手ばやく引よして、左右に抱きて身を起す。とは又しらで道節は、探り當たる老人の兩箇の包をわが臂の、首級とおもへば髪時も指す、諸手に

に引搦て直躬と立しを、それかとはかり莊助は、且く烏夜に懸し見て、臂を擣りて腰刀を、掛りと扱て、下と取る、寛は翳てその邊に、推倒されたる石塔の、棹石の稜、礮と撃つ。刀尖鋭き拳の牙に、その石四五寸打削られて、機と出たる石火の光に、面を認る程もなく、姿を隠せし道節は、火を獲て脱るゝ火遁の術に、往方もしらずなりたるを、老人はなほ跡を慕ふて、舊來し路へ走るになん、莊助は亦その足音を、はじめの癖者なるべし、と思ひにければ些も猶豫せず、續て茂林を走出つゝ、何處までも、と投かたの、荒芽山路へ追蒐しかど、曇りし隨に霽ぬ宵の、六日の月は没にけん、いと暗ければその迹を、認かねしより只ひとり、心あてなる彼山の、麓村にぞ著にける。不題、上野國甘樂郡、荒芽山の麓村に、音音といふ微賤の老女ありけり。年の齡は五十あまり、二三にもなりぬべし、原は武藏のものなりしを、故ありて去歲の夏、この山里に世を避しより、熟ぬ手技に椽食、素樸片木の薪樵る、鎌倉遠き不樂僞居、かくて月日をふる郷の、空なつかしき三芳野の、田面の雁はまだ來ねど、秋としなれば急るゝ、冬を禦ん洗衣、綴刺とぞ鳴虫に、驚されて今宵より、夜延の續芋暇なき、現世わたりの苦しきを、今思ひしる浮世の中に、老の杖ぞと頼みてし、兩箇の子供はいぬる比、主の供して戰場に、赴きしより死せしとも、生りともまだ信聞えず。家に遺るは兩箇の娘御のみ、兄が妻を曳手と名づけ、又弟婦を單節と呼べり。年は二十と十八公の、松の操に常葉の竹の、子をし産せて見まほしき、妹伏ながらに玉匣、ふたとせ近く遠離れども、よに隔なき相娘の、優さず劣らず姑に、朝夕竭す孝行の、徳は孤ならで鄰へは、いと遠き山脚の、孤屋なれば人しらず。親族もなく友もなく、住得し隨の別世界、言訪ふものは八重葎、擔端に暢ふ松風と、絶ぬ寛の音はすれど、女子世帯の水入らず、三人よすれば茲と、訓てふ文字は我うへならで、背門の秋蟬鳴暮したる、七月六日の甲夜過て、還らぬ人を俵わびしさに、門の戸はまた鎖ざりけり。斯有て音音は續果ぬ、苧桶を擣遣り、後見かへりて、喃單節、きのふよりして管領家の、戸澤山の狩倉に、斯邊の盡處まで夫役を指れし、當日を辛く免れても、惣に售も得遣らぬ。彼瘦馬のある故に、けふまでは

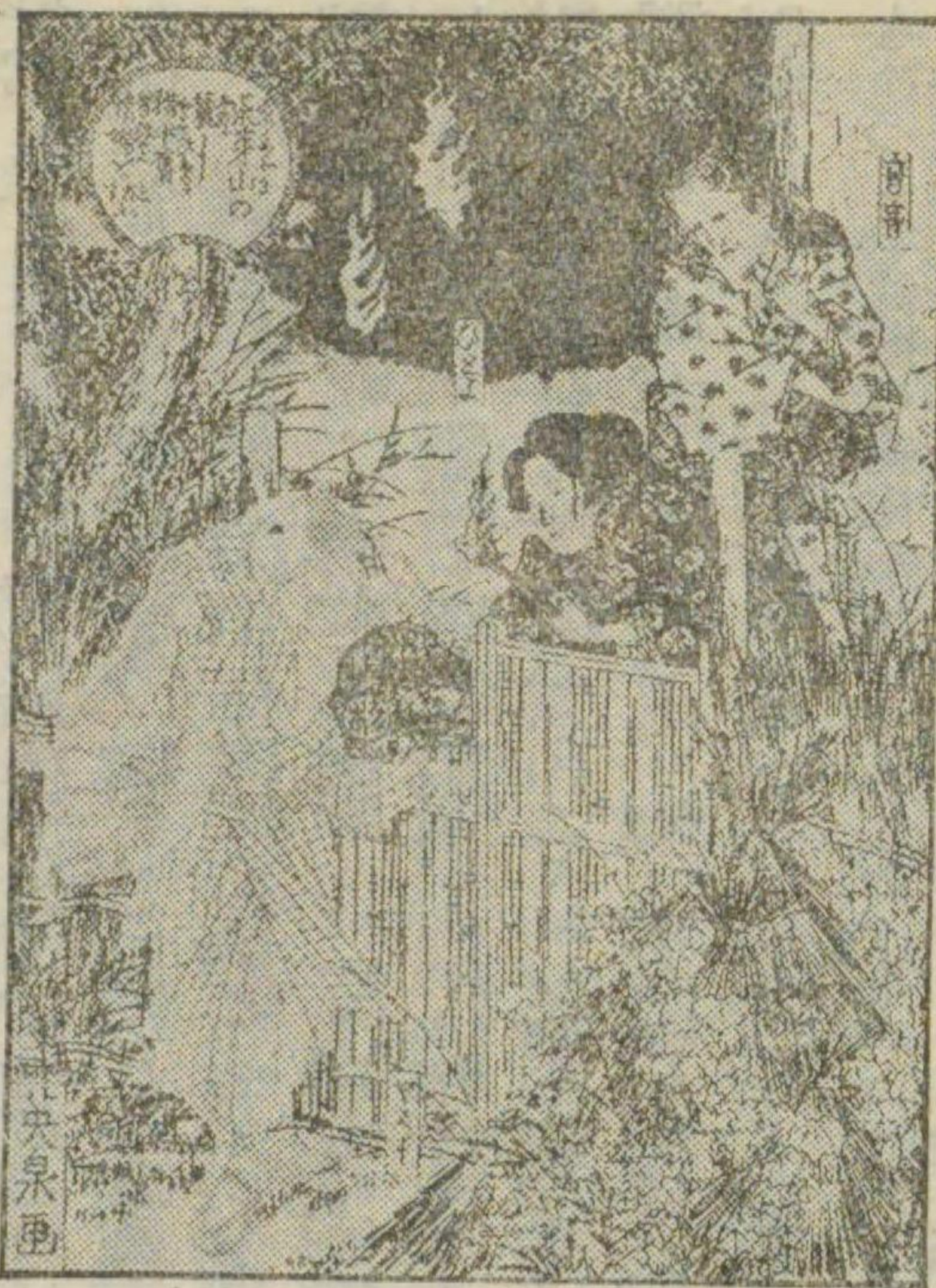


村長どの、訴さざりしに困じたる、家に男子の絶てなければ、可愛や曳手が今朝未明より、馬を追ひつゝ夫に立て、出にし隨に歸りも來ず。途にて荷脱の馬に逢はゞ、繼してはやく歸らん、といひにしものを、いかにぞや、白井まてはよも徴されじ。趣舎わろくて丁場まで、替馬に得逢はずとも、暮て歸らぬ事やはある。居つゝ物を思はんより、田文の茂林の邊まで、出迎ふて將て來てん。留守してたべ。といひかけて、身を起さんとする程に、單節はいそしく推禁て、物體なき事宣ふかな。生わかき身の骨を竊みて、天結陰る夜をこめつゝ、親を使ふて、留守やはせん。姉の今迄かう遅きは、わらはも心にかゝり侍れど、迎に出なば、何姑さまの、獨寂しく慰めかねて、おん物おもひを倍ん敷とて、いはで苦しき宵にのみ、案じ煩ひ侍りにき。宵は尙甲夜に侍るなる、彼茂林の邊まで、走一走邁て、迎侍らん。雲時の程ぞ、俟せ給へ。と懇に慰めて、立まくするを、引留て、おん身を出し遣らんとて、壁訴をやはずべき。二人列拉かへり來る、顔見るまではいとゞしく、又物思ひを倍んのみ。彼玄妙寺の鐘の聲、今撞出すは初更にこそ。早りて出て、邁違んより、且く俟ばかへり來ん。今朝も今朝とおん身と曳手が、夫役に立を争ひつゝ、いなわれ邁ん、彼ゆかんとて、女子にはよに相應しからぬ、馬追ふわざも、老たるわらはを、養ふ便著と眞實しき、心操はいづれを姉、孰を妹とわきがたけれども、車姉がひに争ひかねて、おん身は遺され給ひにき。その孝行を見るに就き、思ふに就て悲しきは、豊嶋煉馬のおん滅亡。といひつゝ外面透し見て、酸鼻たる聲細やかに、言可惜しくあなれども、受たる御恩は須彌より高き、吾儕が主君は陪臣でも、世に知られたる道策さま、こはいはでもの事ながら、恥を告ねば情由立ず、うたてき老の諄言、と挾せらるゝ敷しらす侍れど、いと若かりしその昔、彼處へ參り仕へし比、あるべき事敷、御内の若黨、姥雪世四郎といふ若郎に、思ひおもはれ、贈太くも、人視の關を幾遍敷、踰てあふ夜の情の塊り、有身しより絆發覺て、郎と共に縛められ、命を召るべかりしに、主君の側室阿是非どの、其比懷妊し給ひつゝ、いと惻隱ある婦女子なれば、彼我が爲にまうし覺めて、そが儘日ごろ經る隨に、産給ひしは男兒にて、道松と命けらる。

吾儕も赤いく程なく、獄舎の中に産帯を、解しは無難や并にて、そは力二筋と尺八なり。かゝりし程に阿是非どのの、願ひによりて不軌の科、糾しも果す免されて、世四郎ぬしに穩便に、身の暇を給はりつ、吾儕は乳房のよく張ればとて、そが儘に留られて、和子の乳母になされたり。されば吾儕が産たりし、并は近き里人許、杜鵑子に遣らし、七才の春まで、字し給ひにき。そは年來道策さまに、おん子育のなかりしに、道松和子の誕生ありし、おん歡のあまりにこそ。喪るべき首を續れて、母さへ子さへ懇に、庇み賜ひし主の恩、いかでか仇に送るべき、とそのとき思ひ決めしより、わが子のかたは見もかへらず、只和子をのみ掌の玉とし愛て、夜と日となく、字育まらせしに、忘れも得せず寛。正三年、春正月、月のことなりき。主君の側室の二の町なりし、黑白といひしが腹にいで來し、正月といへる娘さまより、その母御前の悪心起りて、正妻にのぼされし、阿是非どのの世を去り給ひつ、和子も一旦死し給ひしを、簡様々々の事により、和子は不思議に夢より、甦生せ給ひつゝ、黑白をはじめ悪人は、なごりなく亡されて、彼娘さまは二才なりしを、大塚の莊官許、親知らずとかいふ約束にて、養女に取らし給ひにけり、この時にしも神に禱り、佛を念じて夜垢離執り、貳なく仕へたる、吾儕を特に憑しく、おぼし食てや道策さま、その次の年の春、七とせ里に養せし、わが子共を召よして、兄を十條力二郎、弟を尺八郎と名づけ給ひき。十條は母の氏、吾儕が親は十條佐吾とて、御内の(煉馬家をいふ)歩輕卒也けり。加以胞兄弟を、道松和子の間侍にとて、手習素讀、武藝まで、和子と等しく習し給ひし、かゝる主君のおん慈愛は、譬を取るに物もなし。かくて去歲の春の季、豊嶋殿(左衛門尉信盛をいふ)の歩輕卒、禿木市郎ぬしの兩箇の女兒を、力二尺八が娘にとて、猛に縁整ふて、姉の曳手を力二に妻せ、妹のそなたは尺八へ、その婚姻も同宵なる、時しも四月十二日、世に珍しき妹伏事、同庚なる主の和子、道松さまよりいちちはやく、妻を娶らせしも道策さまの、皆おん指揮の隨なりし、その歡びは纒に一ト宵、明れば修羅の哀み來たる、思ひがけなき俄頃の出陣、池袋の敗軍に、豊嶋煉馬のおん一族、員を竭して撃れ給へ



ば、誰か一人も残るべき。吾儕が主君道策さま、おん身が参々の市郎ぬしまで、其處に命を傾し給へば、煉馬の館さへ火攻せられて、家中の男女大かたならず、灰燼となりて失せし時、存命ふべくもあらぬ身の、なほ又おもふよしあれば、兩箇の媳婦を左右に將て、辛く重圍を脱つゝ、些の由縁をこゝろあてに、この山里に落住りしは、全く命を惜むにあらざり、和子と子共の存亡を、撈取て後にこそ、ともかくもならばや、と豫て覺期を究めし故也。その甲斐ありて歡しき、和子は信、聞え給へど、おぼつかなきは子共のうへのみ。けふまでも音耗なきは、俱に戰歿せしにやあらん。妹侠の契りは纔に一ト宵、一ト日も添ぬ良人の面影、尙視覺る遺だに、なき人とこそなりけん、變ぬ操の姉妹が、山婦の手技に熟るゝまで、吾儕に優しき孝養節義を、おもふに就ていふかひなきは、舊夫世四郎ぬし、犬山の家を去りしより、神宮河原に不樂つゝも、猪平とか名を改めて、網引を業に只ひとり、細き煙を立械の、潮のまにまに今もなほ、恙あらず、と戸田船の、風の便りに聞しかど、廿年に餘る去歳までも、絶て歸參の願ひを立てず。況や主家の滅亡を、しらず良して、阿容々々と、仇人の民になり果し、心は鬼歟、人にして、人とは思ひ侍らねど、縁は絶ても兩箇の子共が、親てふ文字は削られず。斷ども斷れぬ血脈を引ば、胞兄弟俱に父に似て、命惜しさに刃を伏せつゝ、仇人に降参することあらば、信なきもなかゝに、ます事ありと思へども、なほ片心にかゝるから、竊に和子に問まうせども、われは知らず、とばかりに何事もまだ告給はず。子といふものの絶てなくは、親のこゝろはいかばかり、長閑からんをかくまで、われから物を思はする、愚痴は老女の癖にこそ。噫益もなき長物語に、夜延の隙を費したり。耳苦しくは聞れずや。といひつゝ鼻をうちかめば、單節も涙さし吒みて、よに有がたきおん物語は、皆教訓の端なるに、一ト言なりとも苟且に、うけ給はり侍らんや。婚姻の誓の儘にして、別れし良人はとても世に、在りとし思ひ決めねば、二世の契りを憑むのみ。胞兄弟俱にいかにして、仇人に降参し給ふべき。そは有まじき事ながら、斷参しきは世四郎さま、學問くだに附録とも、いはれぬ義理の、備に、かゝる歎きを外にのみ、遺し給ふは故



(ふ 訪 を 婦 情 舊 平 猪 に 麓 の 山 芽 荒)

そあらめ。妹侠の契りは纔給ふとも、兩箇の子共は、母節前共個、二十年あまり大山の家に代へてをせしに、野郎の願ひの聞えざりしは、それも故こそ侍りけめ。浮世の中に親として、子を思はぬはなきものを。と執成せば、頭をうち掉り、そはいはるゝ事ながら、當國も亦扇谷家の、采地では侍れども、神宮の郷は、豊嶋の舊領、他し百姓はとまれかくまれ、彼人はなほ阿容々々と、仇人の民になられんや。爾るを厭ぬ心を推せば、故主の恩も、子共の事も、思ひやはする、忘れしならん。と腹立しげにいひ滅す折から、外面に立人響を、音音はやく聞つけて、彼は曳手が還りしならん。疾燈燭を、といふ間に、單節は臆て稱脂燭して、先に立つゝ折戸の裡面より、妖さまかへらせ給ひし歟。なごてやかくは遅かりし。といひかけて振照らす、脂燭に面を對すれば、それにはあらで、見もしらぬ、老たる一個の行客也。袂包を肩にして、竹子笠を引提つゝ、戸口に立て小腰を折め、某はこの山脚なる、由縁を尋るものになん。途にて賊に追れしかば、鼻煩れて堪がたし。水一ト瓢賜れかし。と乞れて忽地興覺貌に、なほつらゝとち視成るを、音音はいまだしらずしての光に、思はずも亦行客と、面を對して、鈍ましや、錯ひにけり、と不樂しげに、迭に再びと見かう見たる、行客はやく呼かけて、そなたは音音にあらざるや。われは世四郎の猪平なり。見忘れたる歟、いかにぞや。と名告るに扱はとうち騒ぐ、曾合がたき諸折戸を、裏面より礮と引闔たり。單節は件の老人が、名告るを聞て、その人なりき、と思



ひあはする胸苦しさに、それが儘退く。姑の袂を竊に掖駐て、しらぬ行客ならばこそ、強顔くいふて適しもせめ。彼は正しく良人の爹々歟。面影忘れ給はずは、おん心に入ずとも、今宵はこゝに歇まらせて、武藏の事の今昔を、語慰め給はずや。といはせも果す聲苛やかに、そは何事をいはるゝやらん。心弱きを女子といふとも、浮世の義理には背がたけん。善思ふても見給へかし。廿年あまり縁絶たる、舊夫は兩箇の子共が、親にして親ならず。爾るを故なく名告も會ば、むかしの不軌に異ならんや。世四郎どのは縁断たり。又猪平といふ翁に、訪るゝ覺絶てなし。譬ば認らぬ行客なりとも、故主の鴻恩、忘るゝことなく、忠義に厚き誠あらば、今宵は疎、いつくまでも、留るよしのあるべきに、廿年あまり、一チ日の、歸參の勸解をまうしも出ず、仇人の民となるまでに、義理に背きし人と知りつゝ、何樂くて武藏の事の、今昔をやは相譚ふべき。只うち捨て措ねかし、情をな被給ひそ。と敦園卓き老女の一轍、そを理ともいひかねし、單節はいよ、智苦しさに、背向になりて嘆息す。猪平これを洩聞て、音音が恨、さぞあらん。われ豈夫婦の情義をもて、阿容々々として、おん身を訪んや。忘れがたきは故主の恩、一ト日も仇に思はねども、浮世の塵を避しより、漁夫となり果ては、又一介の功もなし。何面目に歸參の勸解して、子共の身の幅を狭くすべき。これは是素よりの、わが志なるものから、なほ心もとなきは、令郎君のうへになん。且又子共の事をしも、竊に報んとおもひつゝ、武藏の盡處からはるゝと、恥かゞやかしく詣來たり。且くこゝを開てよ。と敵く折戸の内立つ、音音は子共のうへをしも、竊に報んといはるゝに、再び智は騒げども、思ひかへして回答もせず。うち泣く娘を見かへりて、扱も單節が涙脆さよ。今の世の人心、親同胞でも油断せば、身の仇になる例もあり。外に立人は敵がたの、間諜者にぞあらんずらん。わきて閉鎖に心をつけて。門の戶外され給ふなよ。益なかりき。と呟きて。履音暴く、縁頼なる、障子を礙と闔隔て、母屋へ逃入りにけり。單節はそなたを目送りつゝ、さしも氣剛き姑の、心の底を汲しらねども、いとつかしき良人の安否を、問まはしさに母屋のふたを、見かへりながら、縁をたたくて、

竊に折戸を叩開つゝ、猪平を透し見て、寤しや睡夜に、何時まで立せ給ふべき。阿姑御舟の體なし言は、御舟大人のおん爲を、思食たる誠心なれば、腹及くな聞せ給ひそ。この山邊には客店なし、且く彼處の柴置小屋に、途の疲勞を休ひ給へ。よき折を候ふて、母屋へ伴ひまゐらせん。わらはは單節と呼ばれたる、娘侍り。と名告あへず。涙を袖に押拭へば、猪平ふかく歡びて、原來そなたは豫て聞く、尺八が妻單節なりし歟。わが年來の志と、情由を音音がしるよしなれば、罵らるゝとも厭しからず、廿年あまり胡越の如く、絶て久しき故主へ竭す、忠義といはんは嗚呼なれども、竊に令郎君に見參して、稟試ばやと思ふ一議あり。さらても又子共がうへを、母にも娘にも告んとて、はるばると來しものを、空しく還るは本意ならず。臥房はよしや何處まれ、一ト宿曉さし給ひね。といふに單節は、又うち泣て、世とて時とて物體なや。良人の爹々に宿貸あへず、甲斐なきわらはが言の葉を、縁に繋る誠ぞ、とかしこらも諸給ひけん。心苦しき限りなけれど、彼處に雲時潜せ給へ。大かたは土間なれども、簀子も些は侍るか。物欲しうはをささずや。蚊遣の團扇進せん。其行囊の重げに見ゆるに、わらははに預け給ひね。とよに隔なき愛々しさに猪平ますゝ心おちゐて、田文の茂林にて、二箇の包を、探違へしと思ひもかけず、しからばこれを。と肩よりおろすを。單節は左右に受携て、先に立つ、柴小屋へ、案内をしてぞ休はすれば、二更の鐘の音なる。當下音音は、障子をひらきて、單節は何處ぞ。寢よとの鐘の、報るに曳手はまだかへらずや。と問れて單節は柴小屋より兩三束の續松を、とり添て走り出、さのみは御心苦しめ給ふな。わらははも月來熟たる路也。そこらまで適て、見て來てん。と回答て母屋へ衝と入て、猪平が兩箇の包を、そが儘戸棚へ隠しつゝ、草鞋穿締め、裾壺折て、いそしく移す松の火を、ふり照してぞ外面へ、出て頻に走りける。



南總里見八犬傳 第五輯卷之四

東都 曲亭 主人編次

第四十七回

莊助三たび道節を試す 雙玉交其主に還る

單節は四鼓の左側まで、還らぬ姉を迎へんとて、いと精悍しく蕉火を、ふり照しつゝ走り出しを、音音は慌忙、呼かけて、やよ俟給へ甲夜にすら、そなたを出し遣り難しに、今さら適ることやはある。こや吾儕こそ適くべけれ。駐り給へ。と聲高やかに戸口に立て招けども、天結陰りて路暗く、其處とも判かて松の火も、忽地見えたりしかば、ひとり頻に嘆息しつゝ、悵然として立在しを、かくてあるべきにあらざれば、母屋へ退き入しかど、左に右臂は安からず、なほつく／＼と思ふやう、この山里に落著し、去歳の秋の于蘭盆より、道策さまをはじめまつりて、戦歿しけん子共の爲、なき人々の菩提にとて、田文の茂林の地藏菩薩へ、燈明をまゐらする、大願を發せしより、日として懈ることはないけれど、黄昏毎に彼處まで、ゆきかよふすら寂しくて、不覺に四下の見らるゝまでに、こゝろよからぬ草原路を、飯らぬ姉も、ゆく妹も、厭はぬは現こゝろの誠。かゝる孝順貞實の、同胞としも生れ來て、人の妻とはなりながら、などでやいたく薄命なる。わが子供には一雙の、夫婦と人に譽られん、暇もあらで只一夜、契りもあへず生死の、海とも山とも今宵まで、夫の信聞せぬは、産靈の愈歟。生れながらに山里の、賤婦ならばさてあらん。微職なれども親三世、武家に生れて物ひとつ、引提し事もなかりしに、晝は善山に新進り、夜は殊切り、馬の履、うづゝか夢の一歩半、夢にもあらぬ良人ののみ、只なつかしく思ふる、歡きの聲に袖の雨、音にはたてず氣かろげに、俱に吾儕を

也。さてあるべきにあらざれば、志を激して、頭を擡で、涙を斂め、噓われながら愚癡なりき。歎きたりとして益々はある。心もとなき兩箇の姉婦が、今や還る、と縁類に、立も懶き折屈み、足もて撈る草履を、引穿て復外面へ、出て且く立在む折から、犬川莊助義任は、心當なる麓の白屋、是首歟彼首歟、とばかりに、尋てこゝに北向の、窓より洩るゝ燈火の、甲夜過たるにまだ鎖さぬ、諸折戸に立よりて、呼門入らんとする程に、音音ははやく透し見て、そは何處へとて適給ふ。と呼答るを見かへりて、否、己は行客也。卒爾ながら物問てん。此邊に音音といふ老女の、宿所を知らば、誨てたべ。と問かへされてうち騒ぐ、臂を鎖めてさり氣なく、音音は吾儕に侍るなる。何處より來ませしぞや。と再問へば、歎しげに、原來そたて候歟、某は武藏より、同行四人の旅人なり。しかるに同道なる一友人、或に憑れて、そなたへ届進らする、書翰一封齎せしを、曩に白井のこなたにて、不慮の鬪諍に側杖打れて、各亂走してければ、その友達に後れたり。さばれ今宵はこの處に、宿を投めし事もやとて、跡を慕ふて來つる也。われより先にさる人の、詣來しことの候はずや。と他事なく問れて、頭を傾け、否、さる人はまだ來まざる。武藏といへばこなたにも、音耗を俟よし侍れども、その状なくは詮なきわざなり。なほ又そこらを隈なく索ねて、書狀を齎せしその人々を、伴ふて復來給へかし。といふに且く沈吟じて、いはるゝ趣こゝろ得たれども、はや甲夜過て、天いと暗し。山路に索迷んより、こゝにて俟ば、必あふべし。霎時憩し給ひね。と請れて強顔く推辭も得せず。さらば草鞋を脱措て、母屋に入りて、休ひ給へ。と回答て廳で案内をするに、莊助はやうやくおちりて、後につきつゝ引るゝ隨に、縁類よりうちのぼりて、地炕の邊に座を占れば、音音は燈蓋搔起して、莊助をつらく見ると、髪薄して色白く、骨坐高くて、年尙若かり。當下竊に思ふやう、この人、貌は寔れたれども、兩刀を身に帶たれば、必武士の浪人ならん。うち見たる面魂の、悪棍にはあらざるべし。さばれ心は貌によらねば、こは敵がたの間諜者歟、輒く量知りが

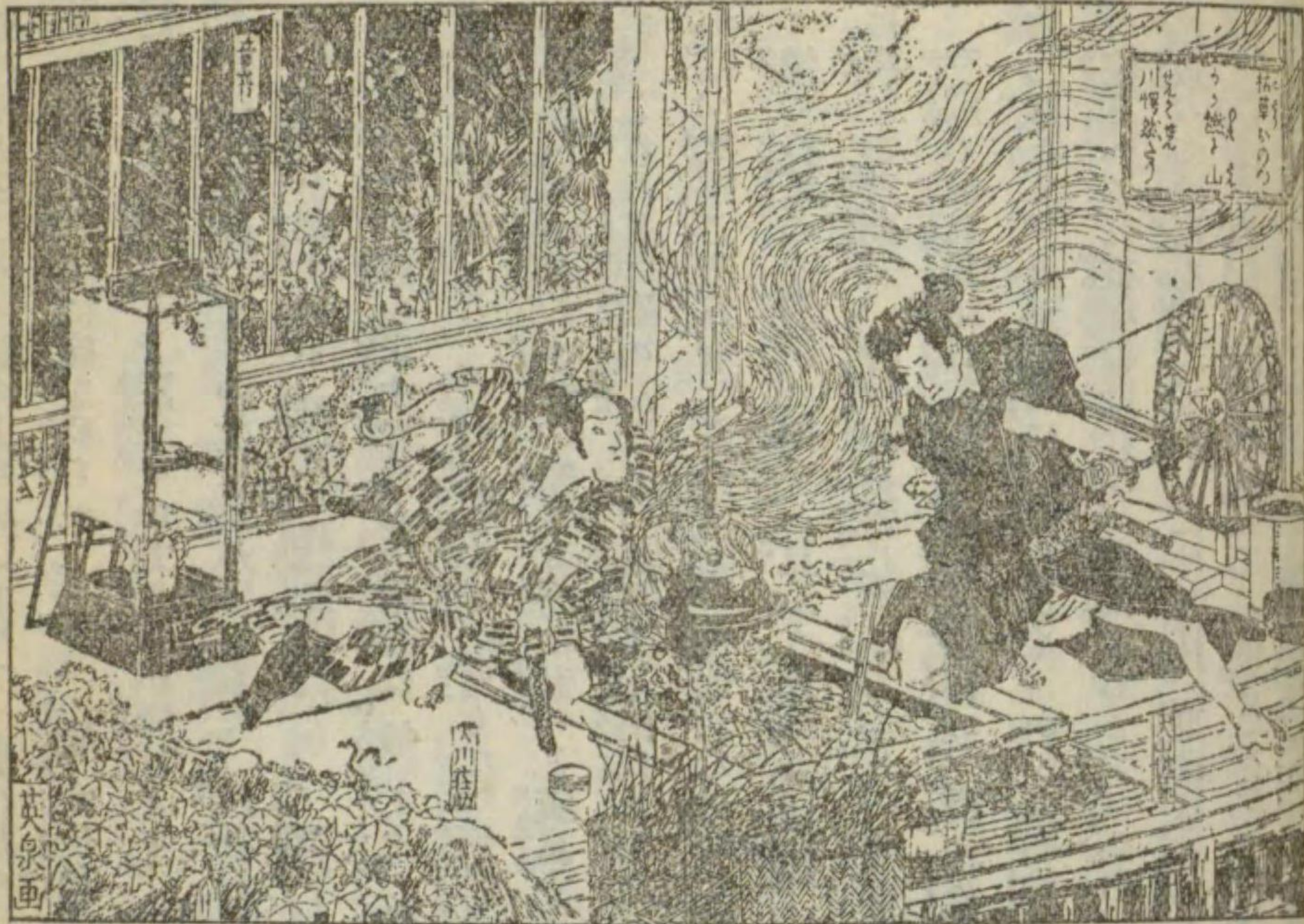


たし。試して見ばや、とさり氣なく、汲出す晩茶の一柄杓、馳走態して、さていふやう、見らるゝ如く片山里に、幽けき煙を立侍れば、翌の炊の儲もなし。家の内なるものどもは、今朝出て、まだ還り侍らず。物調へんと思へども、留守なきをいかにせん。いと無禮なる所行なれども、霎時留守して賜てんや。といはれて莊助うち微笑み、そはいと易きことなれども、去來不定の旅人に、宿守らするはあぶなからずや。失たる物のあらんとき、われも亦影護し。今とて急ぐことかは。と推辭ば音音もうち笑て、寔にいなるゝ事ながら、錢財を有るものならば、さる用心をすべけれど、寒家の後やすきは、何をか厭ふ物のはべらん。この山中には蚊も蚤も、なしとはいへどこゝらには、更ゆく隨に、蚊は多かり。彼處の刈草掻出して、地炕に熏て俟給へ。只一走にかへり來ん。且く頼みまゐらす。といひかけてはや外面へ、そが儘走り出にけり。莊助これを目送りて、噫、氣早行なる老女にこそ。縦熟たる路なりとも、この暗き夜に松も燒さて、何處まで遠くことやらん。物のいひざま進止、山家に育し人とは見えす。いかなるもの零落て、浮世に遠き山里の、賤婦としもなりにけん。いはぬこゝろの奥ゆかしさよ。とひとりごちたる頼頭へ、文と叫びて寄來る蚊を、頻に撲て、噫うるさや。現夥しき蚊にこそあれ。且燭一燭。と縁頼なる、刈草の籠引よする、折から荒芽の山下風、窓より颯と吹入れて、燈火拂とうち滅したり。莊助これに迷惑して、焯兒やある、と搔撈れども、今來し儘に案内を知らねば、欲する物は手に當らで、思はず茶碗を拳倒し、又紡車に跌くのみ。ほとく困じて、果て又、地炕の縁を拊廻しつゝ、火筋を取て搔起す、螢ばかりの埋火に、刈草夥うち被せて、顔さし入れて只管に、燒著んとしたれども、未枯の草多かれば、吹けども吹けども、早には燃えず。こゝろ頻に焦燥隨に、火吹管はあらずやとて、なほ懲ずまに探れども、こもその所に當らねば、せんすべ盡て闇室に、手を叉きて、呆れてをり。さる程に、犬山道節忠興は、甲夜に田文の地蔵の茂林にて、兩箇の癖者前後にあり、わが携へたる仇人の首級を、奪ひとらんとして、藪みし時、思はず發する石火の光に、火懸の癖もて思き避しは、敵を怖るゝ故ならず、大事の前なる小事ぞ、と

思ひかへして戰ひを、好ざるによりてなり。そは野干玉の器にして、精、儼しき折なれば、彼老人が肩より落せし、其兩箇の襖包の、これ彼よく相似たるをもて、取違へしを終に得しらず、そが儘に又擲て、只今宿所へかへり來つ、こはいと闇し。音音は在らずや。なぞて燈火をうち滅したる。曳手、單節。と呼立れども、絶て回答をするものなければ、呟きながら進み入る、案内知たる白屋の、闇きに迷はず徐々と、家唐の邊の破戸棚へ、兩箇の包を投納れて、戸を引闔て、なほ幾遍敷、音音々々。と呼つゝも、地炕の前面に搔撈坐して、彼此探求るは、燈箱を取んとてなり。又莊助は、道節が、かへり來しときおもふやう、亂れたる世の人心は、正直のもの寡して、奸惡の徒多かり。あるじ老女が眞實しげに、吾を慰して、出て適きしを、今やうやくに猜すれば、この白屋は盜賊の、宿にもやあるべからん。さらば甲夜にかの茂林にて、塚を祭りし癖者等が、栖家も必こゝなるべし。かゝれば曩に精平が、云云といひけん事も、亦一向には信がたし。縦その言に、偽なくとも、都も鄙も一ト郷に同名のもの多かれば、こゝの音音は精平が、由縁のものにあらずして、賊の妻子にこそあんなれ。もし果してしからんには、われを謀りて外に出しは、そが同類に報知して、輒く害せんとならん。遮莫、烏合の山賊、なほ外面に集ふとも、いかばかりの事やほせん。さは遣りなく引よして、鹽にしてくれんず、と忽地腹に尋思をしつゝ、些も動かて舊の儘に、手を叉きて息もせず。この時までも道節は、間近く人の在るをしらねば、燈箱を索ぬるに、終に探り得ざりけん、地炕の縁を搔撈て、火筋を取て、灰に推立、彼此頻に搔起す、埋火は嚮に莊助が、うち被せたりし刈草に、おのづから移りにけん、再び颯と吹入るゝ、熱銳き夜風にさそはれて、忽地燈と燃揚る、火光にはじめて面を對して、驚く道節、訝る莊助、齊く刀を搔取て、等しく鎧を突立ながら、左手を加て疾視たる、互の身構、劣らず優さず、地炕を中に足場を掃りて、且く透を窺ひつゝ、道節苛急で、撃んと進む、大刀を拔せず并禁たる、莊助はやく聲を被て、早給ふな犬山生。と呼れて道節こゝろを得ず、われを識たる汝は誰ぞ。と問へば莊助莞爾と笑て、われこそ和殿と過世ある、犬川莊助義任なれ。告べき事の多



なるに、且その刃を退かずや。といはれて道節誅しげに、と見かう見つゝ、うち領きて、刃を鞘に納めても、いまだ些も由断せず。名告を聞てわれも亦、聊おぼえなきにあらず。いぬる六月十九日、その日もかゝる是夜中比、圓塚山の邊にて。といへば莊助膝立なほして、節婦濱路を火葬の愁歎、わが竊聞しを知らざりけん、彼村雨の大刀をもて、君父の讐を謀らんとて、立去らんとする程に、刀の鐺握留て、名告被つゝその大刀を、(句)取らんとするを振拂ひ、丁と撃たる刃の光りに、(句)こなたも透さず抜合したる、(句)互の修煉、虚々實々、(句)一上一下と歎結ぶ、刀尖餘りて腕へ、(句)受しを浅痕敷、(句)砍込む肩尖、(句)思はず瘤を劈れたる、(句)その瘡口より飛散る小玉、不思議にわが手に入りしかど、護身囊の紐延て、あやにからまる刀の柄に、(句)心もつかずそが儘に、紐引断て後に知る、囊の中にはさゝやかなる、一顆の玉に鮮々と、懸れたるは忠義の義の字、(句)その身の中より出たる玉にも、自然と見ゆる忠義の忠の字、(句)とはしらずして、警ならぬ、仇には有繋、千金の、身を惜めば火遁の術に、(句)迹を埋めて往方をしらず、本意なかりしに、今宵の再會、(句)田文の茂林にてわが祈念の、妨せしも汝にあらずや、(句)彼舊塚を祭りしは、原來道節、和主なりし歟、(句)その折間にわけ入て、推隔しは何ものぞ、(句)われは得しらず、(句)われも得しらず、(句)そも亦後にしるよしあらん、(句)そは何人にもあらばあれ、心憎きは汝が骨法、武藝勇力凡庸ならず、迭に祕密を説明して、合體同志の契を結ば、萬卒を獲たるにも、まして憑しかるべけれども、汝とわれと宿縁なし、況過世をしるよしあらんや。然るを過世のありといふ、われは一切信がたし。妖言をもてこの期を延して、油断を撃んと謀るならずや、何てふその術に乗るべきやは。と詰る辭も果ぬ間に、刈草ははやなごりなく、燃盡しつゝ又さらに、黑白もわかずなりしかば、莊助聲をふり立て、縁故をとき盡さねば、疑るゝはさる事なれども、迭に正しき證據あり。そは此彼の玉のみならず、和殿の身に痣ありて、形牡丹花の似くならば、是則和殿とわれと、當に異姓の兄弟たるべき、第一の證據也。まづ證據を、といふがせば、道節は身の中なる、痣さへ知られて半信半疑の、痣ひの奇效に、心驚なる、地獄の



(りた然愕川山て燃らかづのお草枯)

獄に一、羽の、物見ありしを既にはや、火の燃るとき見てければ、探取りつゝ、遠しく、行燈に火を移しけり。されば、又あるじ音音は、竊に思ふよしあれば、去來不定の旅客なる、莊助に留守を任して、田文の地蔵の茂林のかたへ、兩三町赴きつゝ、曳手單節がかへる歟とて、且く途に立在めども、前面より来る續松の火光は絶て見えざりけり。素より物を買ん爲に、出たるにあらざれば、其處より馳てかへり來つ、諸折戸の邊より、裡面のやうを窺ふに、道節と莊助が問答仄に聞えしかば、驚ながら左右なく入らず、歩を竊つゝ近づきて、縁頬のこなたなる、柴垣に手をかけて、なほその言を聞てをり。裡面にはさりともしらずして、道節が今移す、行燈の火を見かへりたる、莊助やを膝を進めて、喃犬山ぬし、和殿果して身の中に、牡丹に似たる痣あらば、わが過世の兄弟なり。悪み給ふな、いかにぞや。と再問へば、道節は、頭を傾け肩うち擡て、怪しきかなわが痣までを、いかにして知られけん。われは生れながらにして、左の肩に瘤あり。六歳のとき故ありて一旦横死したりしを、不思議



に蘇生せし頃より、瘤の上に痣いて来て、形牡丹の花に似たり。かくて夥の年を歴て、いぬる月の十九日、圓塚山のほとりにて、和主に瘤を砍られしとき、聊もその痛楚を覺えず、次の日、肩を拊て見しに、瘤は愈て、刀瘡の迹だに絶てなかりけり。原來そのときわが瘡口より、出たる玉のあるにこそ。不思議といふも餘りあり。さりとてもこの得がたきは、何等の故にわが痣をもて、過世ありといはるゝやらん、因縁甚麼。と疑問へば、莊助莞爾とうち笑て、千萬言を費すとも、證なければ空語なり。疑しくはまづこれを、見給へかし。といひかけて、諸肩担ぎつゝ背向になりて、背の痣を示すになん。道節は遽しく、行燈を引よして、つらく／＼とうち見れば、莊助も亦痣ありて、こは身柱のほとりより、右の胛の下に至りて、形牡丹の花に似たり。豫て鏡に照して見たる、わが痣にしも異ならねば、思はずも大息つきて、奇なり奇なり。と嘆息す。當下莊助祖を歛めて、衣領の縫合に藏めたる、忠字號の玉を取て、これは是和殿の肩なる、瘡口より出たる物なり。又某が秘藏の玉は、護身囊もろ共に、かの折和殿に獲られしかば、文字こそ異なれこの玉と、相似たるを知りてぞあらん。よく見給へて遞與すになん、道節これを掌に、受つゝ懸て行燈の、灯戸に向てと見かう見つゝ、感嘆いよく淺からず、わが玉を、まづ腰著なる、印籠の中に納めて、項に掛たる莊助が、護身囊を返していふやう、囊にわれ、この囊を披きて、世に未曾有の玉を見つ。又臍帯を包し紙に、和殿の乳名誕生日、及その玉を感得の、緯の趣云々、と書つけてありしかば、こは必庸人ならじ、再會の日のあらん歎とて、そが儘膚に著たれども、かゝる奇特のあるべしとは、一切思ひかけざりしに、わが瘡口より出たる玉と、痣さへこれ彼相似たれば、宿因なしとすべからず、只その故をしらざるのみ。己が痣はこれなりとて、左の衣領を開放べて、肩を顯して示しにければ、莊助は欣然と、護身囊を受納めて、道節が痣を見るに、豫ての推量一點違はねば、思はず怡悦の陣うち敷して、和殿にこれらの痣あるよしは、圓塚山にて令妹に、告給ひしを續聞て、粗しることを得たれども、今面りこれを見て、宿因空しからざるを了解せり。願するにこの玉は、これ人假の物ならず。近時、安房

の里見の息女、伏姫と聞えしは、傳説なる烈女也。彼姫御釋かりしとき、云々の事により、假行者の示現あり。こは感得の珠數にして、除數の玉ぞとを。かくて長祿二年の秋、伏姫富山に自殺の折、その除數の八の玉は、一道の白氣と共に、八方へ散亂せしよし、近會同因の兩三友、下總の行徳にて、里見の舊臣、金碗入道、大坊、密使登崎十一郎等に邂逅して、その來歴を定かに知り。かゝればこれ自他の玉は、伏姫臨終の誓ひにより、その氣と共に散亂して、吾黨と共に、又人間に出現したる歟。件の玉には仁義禮智、忠信孝悌の文字をわかちて、ひとつ／＼にありとなん。これをもて因縁の灼然なるを知るに足れり。又吾黨の身の中に、牡丹に似たる痣あるよしは、八房の犬の毛色に、類りしものなるべし。彼八房の犬の事は、簡様々々。とその槩略を、とさ示して又いふやう、因縁かくのごとくなれば、われに等しき痣ありて、その相似たる玉をしも、藏弄せしもの八名あるべし。和殿を加えて六名は、既に相あふことを得たり。遺る二名も遠からず、その員に充んこと、類を推して知るべきのみ。抑和殿とわが外に、同因果の豪傑は、武藏國大塚の人氏、犬塚信乃成孝、こは和殿の令妹。濱路節婦が結髪の郎にして、孝字號ある玉をもてり。次に下總藩我の浪人、犬飼現八郎信道、こは信字號の玉をもてり。次に行徳なる市人の子、犬田小文吾悌順、こは悌字號の玉をもてり。次に市川の里人、山林房八が孤なる、大江親兵衛仁、こは仁字號の玉をもてり、おの／＼その身に痣ありて、所こそ異なれども、その形は相同じ。これらをもて推ときは、出生の地も、父母も、おの／＼同じからずといふとも、過世の兄弟なるにより、各々自然に犬をもて、苗字にせし歟、奇といふべし。いとまかしこき事ながら、彼姫うへを、吾黨の、過世の母とし祭るとも、其を誣たりとすべからず。同因の八士具足せば、みな共侶に安房へ参りて、里見殿に仕まつらめ。これその原に返るの義なり。かくまで因果淺からねども、なほ宿業の係る所歟、薄命ならぬものもなく、今におの／＼安堵せず。されば犬塚成孝は、伯母夫婦に謀られて、村雨の大刀を喪ひ、そを知らずして藩我へ参りて、思ひがけなき罪を得たり。その折犬飼信道と、組撃しつゝ船に陥り、はからず行



徳に漂泊して、犬田父子に扶られ、且山林房八夫婦が、身を殺してやうやくに、再度の危窮を釋得たり。某は又彼夜さり、思はずも主の讐を、當座に一人、擊留めしを、讐の奸黨に誣られて、既に死刑に臨みし折、犬塚、犬飼、犬田の三雄、法場を劫し、奸黨を擊果して、某を拯ひつゝ、共侶に走る程に、戸田河のほとりにて、追手の城兵に追詰られ、渡りかねつゝ死を極めしに、神宮の精平とかいへる、漁夫の扶助によりて、船を獲て敵を避たり。只彼精平のみならず、そが親族なる兩個の俠客、力二尺八とか呼るゝもの、蘆荻の中より顯れ出て、奮戦突戰花々しく力二郎は水中にて、追手の大將、丁田町進を撃とりつ。尺八は前面の岸より、渡さんとせし敵を挂て、頻りに挑戦ふたり。吾黨遙にこれを見て、再び前面へ返し渡して、相助けんとて船を招くに、精平一切うけ引ず、豫てより世をはかなみけん、船を淪めて、身も共侶に、入水して亡にけり。これにより某等は、ほろなく其處を立去りにき。折から黄昏なりければ、彼兩俠者が存亡を、定かに見果るよしもなし。こゝろならずもくらき夜に、路を求めて走たり。と告るを音音は竊聞て、且驚き、且怪み、舊夫の精平ぬし、甲夜に正しくわが門に、立給ひしは冤冤ならん、とは知らずしてつれもなく、拒みて雲時も容ざりし、神ならぬ身こそ悔しけれ。そのみならず子共の存亡、心もとなし何とせん、悲しきかな。と聲立て、泣ねどいとはふり落る、涙に恥て今さらに、裡面に入るにも入りかねし、こゝろ隔の柴垣に、携りてひとり伏沈む。裡面には道節餘念なく、絆の趣つくくくと、うち聞て貌を改め、現未曾有の奇談なり。縦宿因なしといふとも、いづれも稀世の豪傑なるに、某眼力明ならねば、村雨の大刀を返さず、しばし和殿と讐敵の、思ひをなせし面なきよ。彼精平はわが父に、舊く仕へしものにして、當時は姓名を、姥雪世四郎といひしとぞ。渠はわが生れし比、如此々々の事により、追退けられしものなれば、わが面影を認らねど、神宮河原にさるもの、あるよしをわが聞たりき。又この家のある音音は、昔世四郎と精由ありて、力二尺八を産たりしに、赤此如々々の裏によりて、音音はそが養育められて、わが乳母になりたり。よりて子共は母に歸て、某

に仕へし也。かゝれば世四郎の精平は、力二尺八が父なれども、えしらぬ人にも、驕に恥て、父子なりとはいはざりけん。況下に差、舊婦に、恥はしさの世をはかなみて、戸田河に投みし歟。寔に不便の最期也。又彼力二尺八等が、追手の大勢を防留めて、四大士を延せしは、謂あることになん。某豫て君父の仇を、狙撃んと欲せしに、復心の郎黨の、残るは僅に渠等のみ。俱に忠義の志、いと逞しき壯健なれども、彼張良を相扶けて、秦始皇の車を摧きし、蒼海公には及ぶべからず。いかで三四の輔弼を獲て、大義を筋んと思ひしかば、力二尺八等を武藏に遺しつ、汝等兄弟こゝろを合して、世の豪傑と見るならば、實情をもて厚く交り、その智慮を深く探りて、絆の便宜を得たらんとき躬方に引入れよ、と命ぜしことあり。これにより、彼兄弟は、離別の父に身を寓て、まだ面識に暇なき、四大士の爲にしも、志を盡せしならん。さるにても和殿只ひとり、などてこゝには宿り給ひし。餘の三大士はいかにぞや。と問ば莊六領きて、さればとよ、その事なれ、吾儕四人、戸田河原の、再厄を脱れて、俱に三四日走る程に、けふしも明鏡の山中にて、某漫に茶店なる、遠目鏡をもて直下せしに、和殿に似たる一個の武士、麓をあなたへゆくありけり。倘その人にあらずや、と思へば纏て三大士に、云々と報知して、皆遽しく下山しつ。其處ともしらで彼此を、たづねてこの曠昏に、白井の城へ程遠からぬ、如此々々の里を過りしとき、里人夥奔走して、云々の處に癖者あり。歸城の折を窺ふて、扇谷殿を犯したり。吾黨は、管領ならず、御内の某甲なりなど、頻に罵り騒ぎしかば、吾黨もうち驚きて、その事果して實ならば、和殿が怨を復せしならん。とくその所へ赴きて、絆の虚實をしらばやとて、共侶に走る程に、前面より血刀を、引提て走り來るものあり。黄昏なれば面影の、定かには見えわかぬ間に、俺們四人が立たる間へ、紛れ入り走脱て、往方もしらずなりにけり。これにより吾黨は、思ひがけなく城がたの、追手の士卒に側杖撃れて、已んことを得ず戰ふ程に、敵に新隊の加りて、いよ／＼難義に及びしとき、竹叢の中より関を作り、頻に敵を射伏して、援るものありければ、終に重圍を殺脱て、異途同志に走りつゝ、日は暮れ、月は雲



に入りて、東西をだにわかたねば、某ひとり後れたり。かくて田文の地藏堂に、且く足を休めしとき、和殿が塚を  
 祭りしを、盜賊ならんと思ひしかば、柱に終に撃走らして、其處よりこゝへ來つるよしは、彼猪平が犬塚に、誂た  
 る書狀あり。そはこの山の麓なる、老女音音へ與れる也、と豫て聞しをよすがにて、犬塚等の三友は、其處に宿投る  
 こともやとて、やうやくたづね來て問ば、彼三犬士ははまだ來ず、こゝにて俟ば必逢ん、と思へば躑にじり入り  
 しを、あるじの老女は物真に、ゆくとて留守を任せしより、刺風に燈火を、うち滅されたる折に、和殿がかへり來  
 につれば、疑心忽地暗鬼を生じて、こも亦賊にあらずや、と思ひ惑ふて辭をかけず。燃揚る火のなかりせば、烏夜に  
 劍を削るまで、迭に傷くこともあらん。危かりし。と膽むかふ、心の限りとき盡せば、道節これをうち聞て、笑片向  
 て、頭を拊、親きを信じ、疎きを疑ふ、世の人情といふものから、これ宿因のなす所、かばかりおかしき事はなし。  
 某はいぬる比、圓塚山を立ざりて、鎌倉に赴きつゝ、響の動靜を窺ひしに、扇谷定正は、云々の事により、上野  
 白井へ赴くよし、風聞大かたならざれば、竊に跡を跟て來つ、乳母音音が宿所に隠れて、なほ又便宜を窺へば、定正  
 はきのふより、戸澤山に狩倉すとて、こゝにも夫役を宛られたり。こは究竟の折也、と思へども音音にすら、意中の  
 機密を告げずして、彼狩倉に程遠からぬ、明鏡山のほとりにいゆきて、歸城の時刻をはや知たり。和殿に遠目鏡もて見  
 られしは、その折にこそあるべけれ。かくて白井のこなたなる、列幹原に俟つけて、この村雨の大刀をもて、思ひの  
 隨に謀り近づき、仇人管領定正を、衝倒し組伏せて、矢庭に頸を搔落せしに、豈おもはんや敵も亦、豫てその準備あ  
 り。わが撃捕りしは定正ならで、越杉殿一郎遠安といふもの也。しかれども遠安は、池袋の戦ひに、倍盛朝臣に鎗を  
 觸たる、こも亡君の響なれば、聊、憤を慰めて、是より敵を擇むことなく、當るに任して撃散せしに、敵の大將互  
 田助友、藪野より士卒を進めて、前後に挟て撃んとす。さりとて陣歿すべきにあらねば、且戦ひ且走る、はや黄昏の  
 折もよく、前より來る敵人の、間に入りて並給れ、敵に走りて見かへるに、追來る敵はあらずして、遂に聞ゆる

の聲、なほ彼竹叢の邊にて、然しき歎ひあるが如し。當下某おもふやう、敵は併の符符等を、わが腕大刀と誂誂  
 て、捕籠て撃ならん。響の危窮を彼等に賣て、脱れ去らんは本意ならず、人を殺して身を利せんより、寧共侶に死な  
 ばや、と思ひにければ、遠しく、舊の處へ走りかへりつ、竊に竹叢に潜り入りて、鯨波を揚、箭を射被け、謀りて敵  
 を驚かしつゝ、暗に和殿等を拯ひ得たり。さる程に、敵は退き、日は暮れて、舊の列幹のほとりに起き、曩にそこら  
 へ投捨たる、遠安が首級をとり揚て、包みて腰に附る折から、はからずも父の仇、龍門三寶平を撃捕て、そが首級を  
 も腰に著、敵の伏兵兩三人を、なほも漏さず撃果しつ、田文の地藏堂の邊には、今茲四月十三日、わが亡君亡父の爲  
 に、音音が建たる家都婆あれば、仇人の首級を贈贈んとて、彼茂林に立よりしに、忽地和殿に驚かれて、祭りも果  
 ず、兩級の首を、又携てかへり來つ。はじめて響の趣を、告んと思ひし音音は在らで、再び和殿に驚かされ、義  
 勇稀なる五犬士の、來歴を聞くのみならず、某もその一人たるべき、宿因を了解せし、歡びこれにますものなし。  
 これらのよしを豫てより、夢にだも知ることあらば、圓塚山にてこの村雨を、和殿に遞與べかりしに響を謀るに究竟  
 なる、物を獲たりとのみ思ふて、女弟濱路が云々と、いひし末期の所望を許さず、且くも犬塚生を、苦しめしこそ悔  
 しけれ。しかはあれども大川ぬし、某が彼夜さり、女弟の仇人を撃留すは、大刀の往方も知りたからんに、不思  
 議にわが手に入りし事、こも宿因の致す所歟。離合得失寔に時あり。犬士の隊に今ぞ入る、わが犬塚へ牽出物は、こ  
 の大刀ならで何かあらん。さは識らざりし時だにも、四犬士は某に、代りて大敵と突戦し、某は又四彦の爲に、  
 途より返し合しつゝ、夥の敵を撃退けたる、進退謀し合せし如く、俱に危窮を脱れしは、自然に協ふ、同氣の感應、  
 嗚呼奇なるかな、妙なりけり。と既往報る長譯に、莊助も亦感嘆して、某もしか思ふかし。又唯けふの値偶のみ  
 ならず、曩に和殿と某と、ゆくりなく玉を相換て、その玉いよくわれに利あり。某は大塚にて、彼奸黨に誂ら  
 れて、緊しく禁獄せられし日心地死ぬべく覺し時、その玉を口に含めば、快然たらずといふことなく、その玉をもて



身を拊れば、杖瘡忽地愈たり。且はからずも、某が主の讐を撃たるは、知らず和殿と易たる玉の、忠字號の誼に稱へり。和殿は亦思はずも、村雨の大刀を獲て、今犬塚に返さんとす。これわが玉の義字號に稱へり。忠は義を兼、義中にも亦自然の妙契也。驕ぶべし。と稱て俱に感嘆す。道節ますく歡びて、和殿と某が曾慮は、迭に盡し得たれども、犬塚、犬飼、犬田等は、外へ赴きし敷、心もとなし。この地は究たる邊鄙にして、人煙少に、山路多かり。且定正が采地なるに、長途に疲勞たらんとき、再び不測の禍あらば、尤危き事ならずや。あるじ音音はいまだ還らず、そが媳婦共も宿に在らねば、これも亦故ありげなる、緯の趣面り、問まほしく思へども、渠等を俟に暇なし。誘給へ、彼此を、隈なく索て三士に逢ん。とくく。といそがし立て、わが兩刀を腰に跨へ、村雨の大刀を携て、速しく身を起せば、莊助この議に従ふて、刀を把て共侶に、出てゆかんとする程に、音音は慌忙きて、やよ俟給へ。と呼留つ、小柴垣の蔭より出て、目に有涙をふり絞り、媼が猛に呼留めしを、和子も、大川ぬしとやらんも、こゝろ得がたくおぼすらめ。いとほやくよりかへり來て、これ彼のおん晤譚を、遺なく聞とり侍りしかど、おん辭の衷を折らじとて、今まで彼處に侍りにき。けふしも君父の讐敵を、二人まで撃給ひしと敷。媼が歡びいへばさら也、世の俊人達と、宿因のをはしまして、交を結せ給ふは、かさねくし幸ひなり。且けふまでも慝み給ひし、子共のうへまで洩聞えて、聊慰め侍りたり。就て怪しと思ふ事、なきにしもはべらぬに、曳手單節もまだかへらねば、なほまうすべき事あれども、今とて出てゆき給ふを、いつまでか留めまつらん。そは又かへり來ますを俟て、申上んと思ふのみ。よしや曩には大敵に、殺克て恙あらずとも、追捕の沙汰はいちはやく、この地へも下知せらるべし。夜深の天に月はなくとも、この曉にはかへらせ給へ、といへば道節領きて、乳母は母に等しきに、か二尺八寸等が事まで、罷て機密を告ざりしは、言の洩れ給きをおそれ也。まづ三犬士の住方を索て、件ひかへりて歸やかに、聞くと

あらば聞もせん。といへば又莊助も、共侶に慰めて、一樹の蔭に憩るも、一河の流を渡れるも、歡なきものは俱ならず。況、宿因淺からぬ、犬士は影と形の如し。途に不測の事ありとも、相資けて無異を計らん。刀自よ、こゝろ安かれ。といふを音音は見かへりて、憑しきかな大川ぬし、かへすんも和子のうへを、委ねまつる。と他事もなき、誠心は現主おもひ、松明をもたせ給はずや。といへば道節頭を掉て、否、燈火を携ては、敵の目標になりもやせん。烏夜こそよけれと莊助に、うちつれ立て出てゆくを、音音は曇時目送りて、折戸引闔、裡面に入る、心ひとつに疑ひを、解くよしもなき物思ひ、曳手單節が飯らぬは、彼松原の戦ひに、邁あはし走り後れて、流筋に疲を負ふたる敷。さらずは馬を喪ひし敷。雜兵に亂妨せられて、還るに路のなかりし敷。かくまで遅きは何の方まれ、平事にはあらずかし。心にかゝるは是のみならず、兩個の子共は戸田河にて、彼大敵を殺拂ひし敷。思ふに就て悔しきは、世になき人と知らずして、強顔く邁せし積平ぬし、健氣なりける最期にこそ。家厩に御燈進らせん。南無阿彌陀佛。と念じつつ、身を起さんとする折から、外面に咳きして、挑燈片手に推ひらく、折戸狭しと庭門より、姥御々々、と呼かけて、來る人を誰そ、と出て見れば、先に立しは莊役根五平、樵夫丁六願介を將て、縁頼まで進み近づき、姥御よ、はやう出られたり。狭夜深たるに、まだ睡らずや。草木も定る夜を犯して、走り廻るは別義にあらず。白井の城より火急のおん下知、等閑にな聞給ひそ。といひつゝ、臆て懷より、下知状をとり出せば、丁六願介はこゝろ得て、挑燈をさしよせたり。當下根五平、恭しく。件の状をうち披きて、

先亡煉馬倍盛が殘黨なる、犬山道節忠興といふものあり。竊に蟻娘の斧を擧て逆謀を逞くし、蚊蚋、山を負ふの力をもて、怨を報んと稱す。よりに巨田新六郎等、逆密説を奉り、今日追捕せしむといへども、窮鼠還て猫を噛み、逃亡て往方知らず。この賊、享年二十三、骨體高く、色白く、月額の迹延たり。倘かくの如きものあらば、速に報稟せよ。擧捕て進らせなば、賞祿は宜功に依るべし。猶同惡のもの四五人あり。姓名いまだ



詳ならず。知るものあらば告訴せよ。舎藏措ば同罪たらん。巨田助友等奉る。  
 と聲高やかに讀果て、又懐へ巻納め、姥御よ、こゝろ得られし敷。和主は他郷の人なりしを、仁田の背人が紹介も  
 て、去歳の夏よりわが村なる、こゝの空房を購求めて、寡居の親子三口、息子は他國したりといふ。女子ばかりで  
 さる癖者を、搦捕ること得ならずとも、そこらによるづこゝろして、得しらぬ人をな留め給ひそ。彼隠宅を知ること  
 あらば、竊に吾儕に報給へ。賞祿は勿論、等分そや。苦しきものは莊役也。瘦村のかなしきは、鄰といふても三四町、  
 家數少く道遠かり。非常の事のあらん敷とて、保伍兩名を駆催して、暗き夜すがら彼此を、敲起して、こゝが打納。  
 倦勞れぬでもなかりけり、といひつゝ、鬻をうち敲けば、音音は開て、うち微笑み、そはさぞ疲勞給ひつらん。丁六ぬ  
 しも、顯介ぬしも、尻をかけて休らひ給へ。焚つけて茶を進らせん。といふを根五平聞あへず、いな茶も水も欲しか  
 らず。然らば退らんとくく。と兩個の樵夫をいそがして、そが儘走り去りにけり。

第四十八回

馱馬暗に兩夫妻を導く  
 兄弟悲て二老親を全す

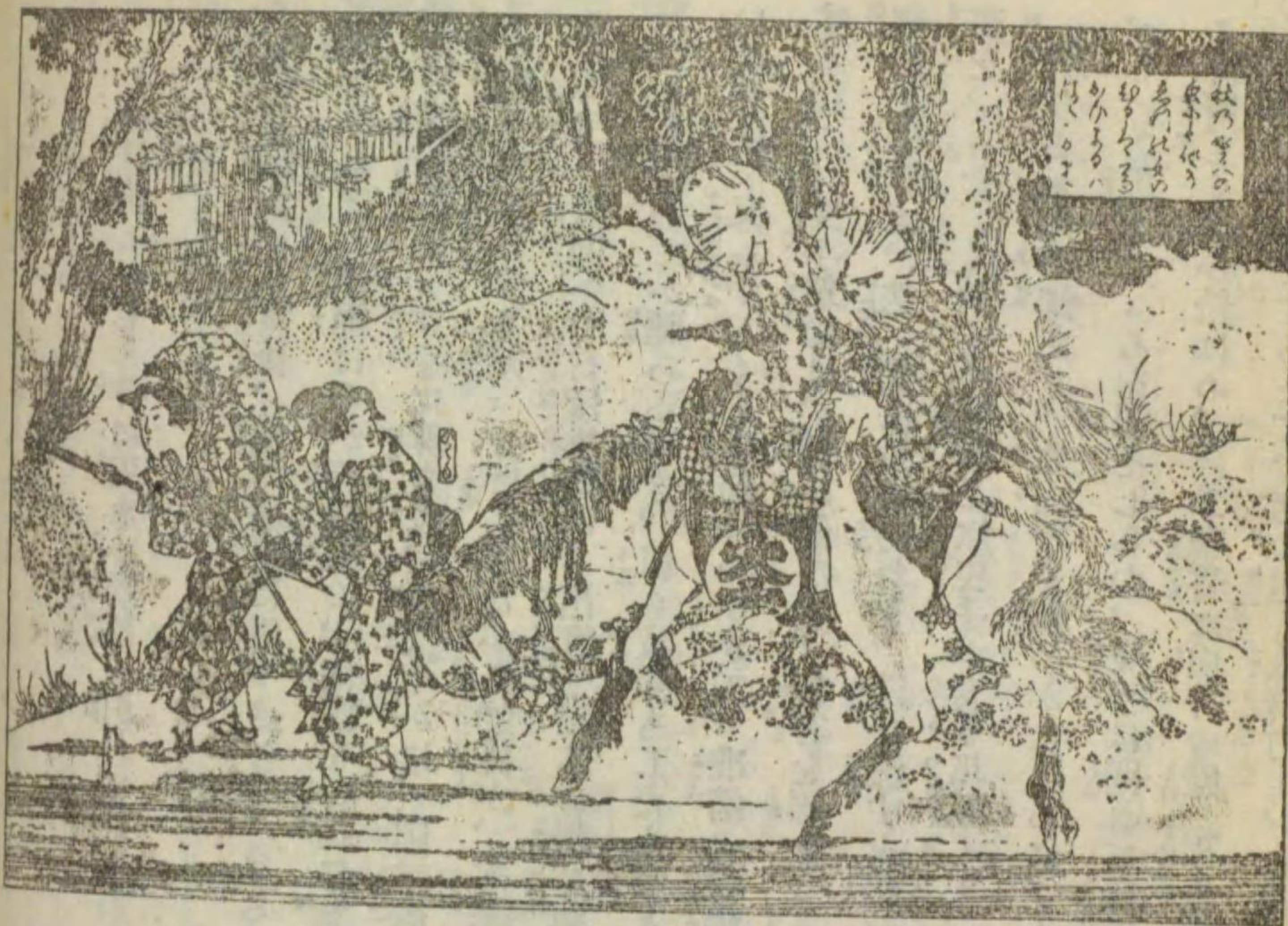
音音は障子引闔て、思はず物とつく息の、いと苦しき宵をのみ、拊下しても安からぬ、追捕の沙汰は豫てより、覺  
 期をして下知狀の、こゝへもはやく届きしを、知らで漫にたち出給ひし、和子こそ心もとなけれ。とく追掛て告ん  
 にも、西敷東敷おほつかな。何處をさして年なみの、いそち過ゆく老が身に、代る子供の共侶に、家にしあらばか  
 る時、又せんすべもあるべきに、うたてや娘婦さへふたりまで、かへらぬ事をくよくくと、思ふがうへになほ思ふ、  
 形なき世のたゞすまひ、絶ぬ苦勞を身ひとつに、憂とも丑の時の鐘、はや鐘々と報わたる、寂滅爲樂の響きには、誰  
 が夢をしも破るらん。更ゆく隨に膚寒き、風がさそふて傍近く、聞けき馬の鈴の音、足掻に拍子をとらしたる、それ  
 かあらぬか、とばかりに、音音は耳を傾けて、聞ば女子の合聲に、馬追ひ勇むる小室曲、隔めく悲調にげに、

荒草山、月こそあらめ露る夜の、盡まで候し極の露、ふる露遠くひとりぬる、かなしき秋の露露ぞと、風の  
 便にしらせん。引

妹俵と、しら井に近き小松原、引れて外にねの日せし、仇なる夢の手まくら、覺れば舊の水壘に、残の雪と  
 書せん。引

と、調ひ連つゝ八重葎、宿の檐下に近づきけり。さる程に、曳手はいたく病疲れし、行客二人を合鞍に、乗したる馬  
 を牽よすれば、單節はそが行笥の、兩箇を一荷に背負たる、右手に蕪火をふり輝し、先に進みて遠しく、鳴子瓦  
 落めく諸析戸を、左手に開きて、聲高やかに、阿姑御よ、目今妖さまを、伴ふて還り侍り。曳手等ではべるかし。い  
 まだ睡らでをはする敷。と呼かけながら姉妹が、笥を縁頬に解卸して、馬を檐下に牽居れば、音音は慌忙きて、  
 開る障子の外面へ、行燈推向け、出迎へたる、歡び氣色に顯れて、などでやくは遅かりし。恙なき只見るまでは、  
 寝るともいかでか睡らるべき。飢も疲勞もしたらめど、怪我せんにはなほますべきのみ。まづはや足を濯ぎ給へ。と  
 いひかけて又遠しく、庖福にいゆきて、準備の温湯を、手桶に汲とり、引提て、縁頬へもて來つゝ、盥に移しなど  
 する程に、曳手單節は、彼兩個なる、行客を馬より下して、まづその足を濯せて、馬に下洗して、既に牽入れ、草鞋  
 紐解く同胞も、迭代に足の汚れを、洗ひ流すを俟かねたる、音音は件の行客等が、外面向て縁頬に、尻うち掛し背  
 姿を、と見かう見つゝ、訝しさに、曳手が背を爪敲して、彼は何處の人たちやらん。辰馬を貸たる敷。行客ならば白井より、  
 殿なるおん下知あり。左右なく留めがたかるに。といふは今にも道節が、四犬士を將てかへり來ば、緯の妨なる  
 べし、と思ふこゝろを得ぞしらぬ、曳手は問れて後方を見かへり、眞夜中過て行客達に、馬さへ貸て伴ひ侍れば、さ  
 こそ訝しく思ひ給はめ。けふ曠昏に白井の殿(定正をいふ)の、歸城の途にて不慮の騒動、情由は定かに得しらねども、  
 猛に軍兵うちよするとて、何の里も人聲打て、かへさに路を去あへず、馬は駭き、人には壓れて、せんすべもなき折





(りをたははるよひお馬はるひの女のつしりた似もに虫のべ野の秋)

から、彼兩個の行客達、わらはが後より來給ひつ、絆の難義を見かねてや、噫痛ましの女馬士、吾儕が後に跟て來よ。いでいひながら、先に立つ、稠人を、推分搔遣り、辛して、路をひらき給ふになん、稍その里を遮脱て、又その先も、路去あへず。しかれども彼二がたの、よに憑しく精悍しく、扶掖給はりし、庇によりて恙なく、田文の茂林のあなたなる、曠野まで來つるとき、思ひがけなく行客達は、等く舊病發りしとて、草折敷て共侶に、枕を並べ給ひしかば、うち驚くのみ、術もなし。この人々の微りせば、わらはも馬も恙なく、こゝまで來ること難かりしに、資けられたる庇を仇に、一人ならず二人まで、病臥給ふを、そが儘に、捐て去んはさすがにて、馬を樹の下に繋ぎつ、うち守るのみ、藥はなし。人煙遠き野に立て、思はずも夜を深す程に、家路のかたより蕉火見えて、稍近づくと、何人なるらん、と見れば妹がはるんと、わらはを迎へに來つる也。迭に呼つ、呼かけられて、其處に集合は忽地に、力つくまで慰めて、事の趣を云々と、告て共侶に繋り侍るに、彼二がたの暫

解は、聊、驚り給へども、さりとて長途を走りかたかり。歸ふは馬にうち乗して、そなたの御所に、御し給はる、今宵をやすく明すべし。只顧この議を頼むのみ、といはれてそれすら推辭によしなし。當時妹と商量しつ、合駈にして二がたを、乗して還りし事の趣、告るに暇なかりしかば、こゝろ得がたく思はれけん。といへば單節も共侶に、よしや猛に白井より、おん下知のありとて、途の難義を拯れし、彼人々をいかにして、うち措てやは還らるべき。獨行といふでもなし、馳るに程もなき夜なるに、何かは苦しかるべき。と情由えしらねば執成て、有藥に出し遣りかねし、受たる恩の重荷すら、負ふて飯りしこゝろの誠を、理りならずと思はね共、音音はいと胸苦しきの、頭を傾け、嗟嘆して、ひとり竊に尋思をするに、彼行客等が二人まで、齊一病痾の發りしとて、曳手が馬を合駈に、借りて宿を投めしは、所以ありぬべき事になん。倘わがうへも、又和子の、潜びてこゝにをはするよしをも、竊に告訴せしものありて、事の虚實を探らん爲に、城より兩個の間者を、行客にして云々と、謀らするにはあらざる歟。然るを今愆に、強顔いふて出し遣らば、彼等はいよゝ疑ふて、戸に立、庭に伏すことあらん。且宿賃て後にこそ、せんすべあらめ、と思ひかへして、やうやくに領きつ、しか開ば推辭がたかり。行客をな留めそ、と莊役の徇傳へし、白井のおん下知はかしこけれども、恩ある人は格別ならん。天の明るまで憩し給へ。客人達はとまれかくなれ、同胞は物欲しからずや。馬にも草を飼ふたる歟。と問ふを曳手は聞あへず、割籠を遅く披きしに、途すがらの艱難苦勞で、まだ瘡すら治り侍らず。いかでか物のほしかるべき。馬は野中に繋ぎし時、まに／＼草を食せ侍りき。妹そなたはいかにぞや。と問れて單節は頭をうち掉り、おん身だに飢給はぬに、わらはは夕餐たうべて出たり。幾遍箸を把侍らんや。と回答て鹽を傾けつ、洗足の水を推流せば、音音は母屋にとり散したる、苧桶草籠片よして、然らば兩個の行客達よ、こなたへ入りて休ひ給へ。といふを執繼ぐ同胞は、行客等にうち對ひて、聊障ることありとて、姑の承引ざりしかば、心くるしく侍りしに、既にその事釋たれば、留めまめらせよといはれ侍り。見らるゝ隨の白屋なれども、



其處に在するにはますことあらん。母屋に入りて曉るまで、なほ又保養し給へ。といひ慰めて誘引へば、件の兩人見かへりて、そは歡しき事になん。情誼は人の爲ならて、途の難義を假初に、拯れしとて正首に、欸待給ふ心操、よに有がたく、いと愛たし。しからば造作に預らん、許し給へ。と共侶に、やうやくに身を起しつゝ、引れて懸て母屋なる、窓の下に並びてをり。當下音音は、行燈の、火光に就て行客等と、はじめて面を對したる、老眼なれども定かなる、瞭しげに膝を進めて、そは力二郎歎、尺八ならずや。思ひがけず。とばかりに、呼かけられて兩人も、驚きながらうち向う上て、齊一膝をうち鼓しつゝ、こは淺ましや、宿のあるじは、わが母刀自てをはしましたり。外面に在りしとき、物宣ひしを聞きかど、大く苦勞をし給ふ故にや、おん聲の囁給ひしに、孤燈の光細くして、彼處まで届かねば、親なるべきを知るよしもなく、外々しく候ひし、不敬を許させ給へかし。一トとせあまりうち絶て、見參に入らぬ間に、頭は眞白になり給ひし、艱苦さこそと今さらに、推量り奉れば、いと痛ましくこそ候へ。さばれ時あり命ありて、恙なき面影を、見奉る歡びは、比んに物候はず。と辭ひとしく慰めて、齊一目皮をしばた、けば、音音は、然なりと應つゝ、歡しさに胷充て、涙ぞやるせなかりける。側聞する曳手と單節は、わが所天をもしらざりしを、羞て有樂に名告もあへず、胷のみ頻りに騒がれて、おもはず顔をうち掩ふ、袖より餘る歡びの、涙に衿を潤したり。且して母音音は、鼻うちかみて、やよ力二郎、尺八もはや忘れし歎。彼は曳手と單節也。婚姻の次の日に、豊嶋煉馬のおん滅亡、物員ならぬ俺們まで、憂には漏れぬ習ひとて、親は子供の安否をしらず、妻は夫に引別れて、信絶し一年半。されば送に隱宅だに、告るによしもなかりしかば、兄も弟も妹も妹も、夫婦不思議にけふ途で、環會たる甲斐もなく、送に面を遺れども、義士と貞女の誠心を、皇天憐み給ひけん、はからず途の艱難病苦を、此彼救ひ濟れて、宿所に伴ひ還りしは、寔に塙せぬ情緣也。去歲の夏よりこの山里に、住不樂たりし憂苦辛勞、いはてもこそ察し給へ。然るを兩個の婦同懸が、懸さへすず断りて、難な夕なに懸めたる、よに若那の疑も、懸き懸りたりき。契

手單節が微りせば、憂に得勝ぬわが身ひとつを、いかでかけふまで存命べき。儻々なる貞女ぞ、と誓て懸め給へかし。やよや、曳手よ、今さらに、何をか歎くことあらん。單節も涙を疾飲めて、良人のほとりへよらずや。とひとり欸待す親ごころ、歡び、言葉に顯るゝ、松の操ぞ憑しき。枯たる枝にも花娘の、さく夜の丁子頭さへ、今宵の祥敷、と思ひたる、曳手單節は行燈の、背のかたよりやうやくに、良人のほとりに近づきて、夫婦は二世の縁とかいへど、その宵限りに別れしより、なつかしとのみ思ひてし、心は霎時も變らねど、かはり果たる面影を、認遺れられつ、認遺れて、結びもあへず草枕、旅ゆく他し人とのみ、おぼつかなきに外々しく、ものいひしことの恥しく、悔しく侍り。と共侶に、勸解て齊一目を拭ふ、哀歎交思ふ事、いはて言語の寡きも、誠は一句に籠りけり。良人はこれを見かへりて、力二郎まづいふやう、榮枯得失定めなく、軍敗れて家を喪ひ、狩場の野鷄に似たれども、いかでか妻を忘るべき。只その契りの短き故に、面遺れしは、そなたのみかは。われらも面目なき物から、むかし魯國なる、秋胡とかいひしもの、妻を娶りていく程なく、他郷に赴き遊學して、年を歴てかへるさに、桑採る女子に懸想しつ、そは妻なりしを知らずして、車を駐め黄金を投て、調戲しは色好みなる、浮たるこゝろの惑ひのみ。今宵の事は秋胡夫婦に、似るべくもあらざるに、何てふ恥ることやはある。驢ぶべし、と稱て嘆賞したりしかば、尺八も亦感嘆して、夫婦面を忘るゝ迄に、短き契を仇にせず、艱苦の中に良人に代りて、老たる親を、けふまでも、いと安らげく養ひし、是をもておん身同胞の、心操を知るに足れり。天縁は疎しといへども、絶ることなしかや。圖らざりける再會は、夫婦の誠心空しからで、神の導き給ひしならん。寔に愛たし。と慰められて姉妹は、面を起す心地しつ。曳手は地炕に柴折焼て、茶を煖めて差れば、單節は、縁頼に措たりける、行筆を引提來て、窓のほとりに移したる、管待大かたならざりけり。彼を見、これを見かへりたる、音音はいよゝ堯やかに、兩個の子共にうち對ひて、曩には途でお身達、暴に病著の發りし、と聞たる儘に緯に紛れて、まだ容體を問ざりき。今の心地はいかにぞや、薬を用ひ給へ



かしといへば兄弟共侶に、否々、さしたる事には候はず。某等は身の中に、聊金瘡の候ひしを、厭はて長途を急ぎつ、風を稟たる故なるべし。その疾俄頃痛みしかども、はからず母御に對面したる、歡びはわが藥となりけん、痛楚は去て快し。と辭ひとしく答るを、音音は聞て、うち頷き、そは去歳の戦ひに、受たる舊疾の發りし歟、然らずは近屬戸田河にて、敵を禦ぎ禁めしとき、疾を負ふたる歟、心もとなし。醫は些のかすり疾でも、破傷風になるときは、いとむづかしきものぞとよ。といはれて兄弟愕然と、うち驚たる目を指して、嘆息しつ、喃母御、この月二日の黄昏に、戸田河原にてありし事を、はや何人に聞給ひたる。訝しきよ。と疑問ば、音音は外面見かへりて、こゝろを付たる聲細やかに、さればとよ、けふまでも、お身達は生りとも、死せりともしらざりしを、甲夜に竊にある人が、和子に云々と告たるを、洩聞しより粗しれり。されば粹のいといたう、睨しき折なりければ、首尾はよくも得聞かず。叔もおん身同胞は、去歳の夏より、何の里の、誰家に身を寓たる。和子は頃日わが宿に、をはしませしを知りてぞあらん。親の安否を訊んとのみ、思ふて索て來つるにあらじ。詳に告よ、いかにぞや。と問かへされて力二郎は、尺八共侶隊を進めて、さう候、粹の機密を知し召れて候へば、何をか慮み候べき。去歳の四月の戦ひに、館(倍盛をいふ)をはじめ奉り、大家公(道策をいふ)も敵あまた、殺離け散散して、頻りに重圍を突給へども、躬方に續く兵なければ、弓折れ勢ひ宛りて、終に陣殺し給ひけり。しかれども、郎公(道節をいふ)は、淺病だに負ひ給はず、勝に乗たる大敵を、殺散し脱脱て、雜司谷まで落給ひつ、馬の左右に従ふたる、某等を見かへりて、やをれ力二郎、尺八郎もうけ給はれ。既に君父を敵に撃して、われ亦命を惜むにあらねど、組んと思ふ敵に得あはず。名もなき仿武者を、十騎甘騎、討捕て死するとも、臣子の本意とすべからず。死は易くして、生は難し。けふの命を且く延て、仇人定正を狙撃は、忠孝俱に全かるべし。今よりして汝等も、わが志を心として、竊に躬方を招き集めよ。しかれども、烏合の徒當多ければ、その事遂に難かり。五指のかはるるに頼んより、一隊にますことなし。敵は一

匪の利に傾き、或は鞍才にして虚名を賣る、烏合の射方は、ありても要なし。鵬ふは豪傑三輩の、資を獲ば事足りてん。汝等兄弟こゝろを合して、なほも武藏を去ることなく、深く隠れ遠く謀りて、世の豪傑と見るならば、淳く交り竊に撈りて、説て躬方に勧め容れよ。その餘の事は云々と、叮嚀に示されて、身の暇を賜りたる、主命道理に稱せ給へば、一議に及ばず承伏しつ、も、惜む別れの愛哀苦、駒を早めて落給ふ、背影の見ゆるまで、目送る程に日は暮れたり。武藏は生れし國なれども、落人となりしより、胡鹵に宿を投め難かり。神宮河原に世を避給ふ、離別の父の今の名さへ、年來傳聞たれども、有繋に主君に憚りて、去歳まではその安否を得問はず。對面せし事なれども、かかる時にぞ見參して、竊に資を借らばやとて、潜びて彼處へ赴きて、はじめて父子の名告をしつ、父の胸中を探りしに、世を避け給へど今もなほ、舊恩を忘れ給はず、館の滅亡、故主の戦歿、うち歎かれし忠信の、言の葉切て連れ現、身の過を一瞥も、飾らで憚り潔き、心の底は顯れたり。かくてこそわが同胞の、親なりけれ、と憑しく、辱なさに感涙を、拭へども堀ぬ自然の恩愛、初對面より二粒の、隔なき身を父に任して、神宮の宿所に潜びてをり。母をば語はて離別の父に、身を寓たるは僻事ぞとて、怒らせ給ふこともや、と思はざるにあらねども、彼も此も私ならぬ、忠義の爲には親疎なし。主をおもへば孝ならぬ、猜忌を厭ふに違なければ、馴染薄かる吾妹子等に、母を任しつ、この山里に、落留り給ふよしを、いかにしてかわが父の、仄に傳聞たりとて、曩に密語給ひしかども、機密の漏るゝこともや、と遠慮ふて、信せず。知りつ、物を思はしたる、不孝の罪はいと重かり。さる程にわが父と、密々に相譚て、或は他郷の浮浪人、或は近國の俠客など、彼此となく交りて、竊に意中に擇めども、これぞと思ふものもなし。しかるに大塚の郷の浪人、大塚といふ壯士は、わが父と面識たる、是蓋世の豪傑也。唯彼大塚のみならず、その友人に大飼、犬田、犬川など呼ぶもの、智勇いづれも劣らず優さず、この人々を躬方に招かば、大事は成らん、とわが父の、識量をもて、その圖を抜かず、彼豪傑等が下總より、かへさに船をよせし折、大人は早くも譚ひ寄て、そ



の事とはなくわが母へ、書状を届け給はれとて、一通を委ね給ひつ。緯のこゝろは彼人々を、この處へ立寄して、なほ郎公と交りを、結せん爲なりしに、その事いまだ果さずして、彼人々に大厄あり。まづその危窮を拯はずは、志を示すに足らず、と大人の先見その由あれば、某等も亦その議によりて、父子三人豫てより、戸田河の東の岸に、船を浮め陸に伏し、彼犬塚等が敵に追れて、來つるを俟しに、果して違はず。思ひ設し事なれば、大人は件の人々を、船に乗しつ、前面の岸へ、漕渡し給ふ程に、某等は敵を柱えて、陣番丁田といふものを、はや水中に撃捕たり。有斯けれども敵はなほ、多勢を憑みて退かず、追ひつ返しつ戦ふ程に、大塚の城よりして、加勢の兵、五六十人、簀々として來て、連放たる鳥銃に、兄は高脛を打破られ、弟は左の肘を撃れて、進退遂に合期せず。これより先に彼此へ、負ふたる淺癩の灸所へ係れば、是まで也、と面も振らず、水際の敵を殺崩して、その宵闇に紛れつ、同胞齊一水中へ、跳り入り底を潜りて、前面の岸へ泗き著にき。斯丹精を盡したる、犬塚等が往方をしも、見届けざらんは本意なき事也。且郎公は、鎌倉へ、竊に赴き給ふよし、豫てその報ありければ、今頃は彼處より、倘上野へ赴きて、荒芽山邊の隱宅に、をします事ありもやせん。事の序にわが母の、安否を訊ふて、吾妹子等をも、慰めばやと思ひつ、血を吸ひ痰に布を巻き、同胞迭に相扶て、遙けき路を辿る／＼も、良三四日の旅宿しつ。今宵思はず吾妹子等に、環りあひしを、しらずして、親の隱宅に伴はれたる、緯の顛末かくの如し。われらが推量違はずして、郎公は既にや、こゝにわたらせ給ふよしを、うけ給はりて安心せり。彼犬塚等はいかにぞや。大人の書状を齎して、索てこゝへまだ來ずや。山路に迷ふて、立よらざりし歟。心もとなく候。と兄が演れば、弟が續て、緯道もなく既往を、報れば母も兩個の娘も、毛骨立まで危さを、今見るごとく駭然たり。そが中に母音音は、思ひかへして、莞爾とうち笑み、現目覺しき暗譚、それこそわが子共なれ、母が日來の疑ひも、忽地釋ておちるなり。既に推量せられしごとく、和子は六月下旬、仇人定正が遊を罷て、わが家に來ましつ、けふしも白井の城野原にて、兩箇の體を撃捕給ひき。見



(忠義體往既往説話)

恨む、定正は、鎌倉を脱して、此處の所を遊べたり。お身達がけふ來つる途にて、里毎に隱立しは、件的事を開明して、驚惑ふて、旅ゆく人の、足さへ駐めしものなるべし。又大塚とかいふ人の、索て來つることなければ、書状は今に届ねども、そが一個の友達なる、犬川莊助といふ猛者が、ゆくりなくこゝへ來にければ、云々の事ありて、和子と忽地斷金の交を結びつ、彼犬塚等を索んとて、共侶に出てゆきたり。かゝれば和子も彼人も、この曉がたには還り給はん。歡び給へ。と聳けば、兄も弟も雀躍して、原來中途の騒動は、わが歡びて候ひし。けふ定正は追れたりとも、討捕給ひし兩個の體は、越杉籠門の徒ならん。犬塚いまだ來ずもあれ、はやその友に連給へば、主君のうへは後やすかり、可愛たし愛たし。と齊一額に手を加て、怡悦の眉を開けども、金瘡に弱りし顔色の、いたく衰へ蒼ざめて、この世の人とは見えざりけり。事の趣始より、側聞しつ、兩個の娘婦も、膝の進むを覺ぬまでに、いと勇ましき良人の義烈に、或は感じ、或は姑む。曳手は思はず太息を吐きて、



男子の悍き心をもて、忠義の爲に親をも妻をも、見かへりがたきは然る事ながら、可惜命の短くは、始終の功をいかにせん。向よりつらく見侍るに、わが所天も叔々も、おん顔の色生平ならず。物宜ふに呼吸の、苦しげに聞え給ふは、金瘡に惱みたまふならん。二親のうへ、妻の歎きを、思ひ給はど今宵より、おん身を愛し給へかし。とよに他事もなく諫れば、單節も俱に、正首に、二がた何と聞給ひし。姉の意見、理りならずや。旅にしあらば療養に、物缺く事もあるべきに、幸ひにしてこの隱宅へ、來ませしはなほ竭ぬ、命運にこそをはすめれ。看病は妻の役なるに、村に醫師のあらずとも、里を隔し縣まで、いゆき通ふて、藥劑を乞ん。なほいつまでも逗留して、氣長く保養し給へかし。といひつゝもはや目に餘る、涙の露は玉としも、欺きがたき誠の言の葉。音音は傍にうち聞て、娘達、適いはれたり。只管功を貪りて、早るは眞の忠義にあらず。曩にも如此ぞいひけらし、よしやその瘡は浅くとも、破傷風になることあらば、耆婆扁鵲にも及びがたけん。俗にいふ命が物種ぞや。と諭せば力二、尺八は、妻のかたを見かへりて、大地に等しきわが母の、おん慈愛の厚きはさら也、いづれも劣らぬお身達、今にはじめぬ貞操節義を、等閑には思はねども、凡戦國に生れし武夫が、些の金瘡にかゝづらひて、空しく月日を送らんや。されば俺們兄弟は、この曉にうち立て、潜やかに鎌倉へ、赴んと思ふかし。かくて敵の虚實を窺ひ、便宜を獲ば郎公へ、報進らせん爲なれば、倘幸なくて、その事發覺れ、警の手に死するものならば、是今生の訣れ也。又唯憑むは母御の事のみ。わが兄弟になりも代りて、奉養を盡してたべ、さてしもわが母百年の、後にはおん身同胞は、良家に再び縁しを結びて、めでたく一期を送り給へ。いひ置く事はこれのみぞ。と辭齊一とき示せば、曳手單節は聞あへず、侶音によゝとうち泣て、悍きも事によるぞかし。親をも身をも、妻をしも、思はぬが忠義なればとて、けふは白井のこなたにて、云々の事ありしにより、鎌倉までは遠くとも、仇人はいよゝ用心して、木を伐り草を交拂ひ、穿鑿嚴密ならましを、知りつゝ彼處へ近づきて、可憐命を阿容々々と、問すが手禱、亦名懸。思ひもかけず彼の事、機を更て對夫に、再び縁しを結べと

は、聞たうもなき業詞。そは情に似て情なし。小兒に憐憫を問ふといふ、世の常言もあるものを、いと涙はかなる女子の言も、些しは聴て、智惠深き、男子の心こころもて、是非の深念をし給はど、後悔絶てなかるべし。願ふは親の光もて、諫めてたべよ、阿姑さま。と呼びつ口説つ、一對の、情義に逼る兩貞女、歎きも對の紅淚悲泣は、いひ合さねど言の葉の、揃ふ誠ぞ哀れなる。恩愛節操無量の情致に、泣立られし力二郎、尺八も手を又きて、聞つゝ歎息したるのみ。兩個の妻の泣沈しを、再び些も見かへらず、兄は弟に目を注して、母に對ひて稟すやう、曳手單節が切なる諫言、それにもまして母大人の、一ト言をもて貰き給ふ、おん慈愛は身に入て、名残はいとゞ惜しけれども、とてもかくても某等は、永くこの地に留りがたし。就て又情願あり。そはわが父の事になん。神宮河原に漁獵して、細き煙を立てつゝも、又異妻を娶り給はず。況故主の大便を、報ん爲に身を捨て、彼犬塚等の四大士を、斬くこの地へ引著給ひし、その、續莫大ならずや。さばれその身の榮利を思はて、戸田河に投み給ひき。義烈任俠兩ながら、想像るだに陽を、斷るゝまでいと哀しく、いと痛ましき事ならずや。かゝれば此度の功をもて、主君の勘當宥免あらば、世間廣く某等は、父と唱へ、子と呼れ、母御も正しき夫婦たるべし。これらのよしを郎公に、聞えあげ執成て、素懷を透さし給はらば、一家の洪福この上なし。人の子として父なくは、これ禽獸に異ならず。うち歎くにもあまりあり。某等が年來の、心の憂ひはこの事のみ。賢察仰ぎ奉る。と膝を進めて右ひだりより、母の氣色を候ふ程に、秋の夜ながら尙長からて、幽に響く遠山寺の、五更の鐘ぞ聞えける。音音は媳婦と子共の情願、忠貞節義に感嘆しつゝ、涙頻りにはふり落るを、袖に隠して、貌を改め、留んといふは妻子の恩愛、適んといふは良人の勇敢、母は適けとも留れとも、今さら是非の判断しがたし。又同胞が愁訴の趣、理りならずと思はねども、わか口親執繼て、いかでか和子に稟さるべき。いと恥しき事ながら、ありし昔の不義淫奔は、世四郎どのゝ罪重く、吾儕が科の輕きにあらねど、人に勝れし乳房に愛て、和子の乳母になし給はりしは、片手打なる、主君の裁判、道理に違はせ給へり、と思はどそ



れこそ道理に違はめ、そを又奈何と推て見よ。奴婢密通の子共をば、畜産に比するといふ、本文に據らせ給ふて、情郎には只何となく、身の暇を賜りつ、吾儕を留め給ひしなり。譬は宿の畜猫が、他し牡猫と尾ぎつ、産たる子猫は母に隸て、その父はなきが如し。奴婢密通して産たる子共は、畜産に比せらるゝ、律とやらんの本文に、據らせ給ひし道策さまの、ふかき御ころを汲も得しらて、今さら和子に云々、と稟すは面なきわざならずや。しかはあれども凡世に、人の子としてその親を、思はぬはなきものを、況此度の功をもて、勸解まうさん、と願ふは孝行、協ぬまても折を獲ば、又せんすべもあらんかし。彼世四郎の猪平どの、今舊恩に答んとて、子共を養て云々の、事ありけりとは思ひもかけず。況入水の事などは、夢にだもするよしなれば、あの人のむじんなる、年來歸參の勸解もせず、故主の滅亡を外々しく、仇人の民になり給ひしは、人にあらずと思ふになん、いと朽をしく腹立しさに、單節と甲夜に彼人の、噂をしつゝ既往を、暗り慰めたる折に、影さすといふ喩に漏れず、猪平どのが門に立て、宿りを投め給ひしを、罵拒みて去したり。今さら思へば亡魂の、幻に見え給ひしならん。と報るに驚く力二郎は、尺八と目を指して、思ひし事よ。わが父は、はや甲夜の間に来給ひけりといひつゝ、俱に呆れつゝ、嘆息の外なかりけり。

南總里見八犬傳 第五輯 卷之四 終

南總里見八犬傳 第五輯 卷之五

東都 曲亭 主人編次

第四十九回

陰鬼陽人肇て判然 節義貞操迭に苦諫す

力二郎尺八等は、思ひがけなく父猪平が、甲夜の間に来て、門に立しを、音音が拒みて容ざりし、と聞つゝ俱にうち驚きて、頻に嘆息したりしかば、音音も今さら後悔の、額を撫て嗟嘆しつ。現彼人の心操、義に仗り恥をしらずもあらば、故主の爲に心を盡せし、此度の功を子共に譲りて、船を沈めて戸田河の、底の水層になり給はんや。然ともしらねば、亡魂の、門に立目に見えしを、情由だに聞かて思ひの隨に、罵辱しめたりければ、むごき心と葛の葉の、うら見によりてなほ迷ふ、旅宿ながらの草の原、歸るによしもなきまでに、冥土の障となりやせん。痛ましきよと密音に、くりかへしつゝうち歎けば、曳手單節は胸潰れて、後見らるゝわが影だにも、項背寒くなるまでに、或は驚き或は歎く、心の悼みいとどなほ、やる方なきをやうやくに、思ひかへして單節がいふやう、世に冤魂といふものの、ありとは聞けど目前に、見しははじめて猪平さまの、甲夜に強顔く拒れても、恨み給ひし氣色もなく、竊に告べき事ありて、來つるに霎時容れずや、とうち勸解給ひし痛ましさに、阿姑さまの御ころの、和ぎ給ふ折をもて、母屋へ案内し進せばや、と思ひにければ云々と、聳き報て、柴置小屋へ、扶容れ落しつ、物まゐらす暇もなく、姉を迎えんとて、いと瞬しくたち出て、かへりて後もこれ彼に、事の繁くて彼かたを、得見かへらざりければ、心にかゝり侍りしに、今將夢魘幻魘。世になき人と聞きながら、彼處にゐます心地ぞする。加以彼人さまの、肩にうち被給ひ



たる、袱包ふたつまで、その折わらはが受とりて、あの置納の小戸棚へ、竊に藏め措たりき。そも又夢の跡もなく大人共侶に滅失し歟、今なほあらん歟、いと怪し、とは思へども彼に此になほ疑んは罪ふかより。要なき所爲て侍れども、誘給へ、わが所天よ。いゆきて事の蹟を見ん。愈もろ共に立給はずや。といひつゝ、軀て身を起すを、尺八急に推禁めて、こは何事ぞ、物にや狂ふ。今柴小屋へゆけばとて、又わが大人の見らるゝものかは。疑しくはひとりゆけ。誘引るゝとも誰かは立ん。益なき事を。と呟けば、單節は有鑿に争ひかねて、戸棚のかたを見かへれば、曳手は、さもや、と頷きて、如右正々しき事さへあらば、ひとり單節が疑ふも、そのよしなきにあらざかし。柴小屋まで邁んより、まづ隣近なる戸棚を撈らば、その二包の行袱の、有や無やを知り易かり。ひらきて見ばや、と遽しく、立んとするを力二郎は、呼禁めて、頭をうち掉り、噫大人氣なしおん身まで、無益の穿鑿することかは。今彼迹を索すとも、後に必しるよしあらん。急がば歎きを倍すべきぞ。とこゝろありげに叱られて、應をしつゝ、是も亦、釋どもとけぬ疑ひに、尋思の頭を傾れば、音音も眉根を蹙して、單節が正しく行装を、彼人より受あづかりし、といふはいよく怪しき事也。執念深き人の亡魂が、行脚法師に誣説て、故郷へ像見を贈りし事の、物の本にも見えたれば、世になき事とて証がたかり。然るを力二郎等は、あの戸棚だに開てな見そ、と禁るはこゝろ得ず。隠さるゝもの見まほしきは、えうなきわざであなれども、かばかりの事何かはあらん。吾儕が許す、娘御達、やよ、共侶に開て見ん。誘て軀て身を起せば、曳手單節も後方に附て、戸棚の下に立よりたる、親には克んよしもなき、力二郎と尺八は、吐嗟とばかりうち騒ぐ、胸を貫く五更の鐘と、共に八聲の鶏の音も、鄰の噂遠けれど、吹おろす風にかどはれて、殊更近く聞えつゝ、はや曉がたになりたり。時こそ來つれ、と周章の、兄は弟に目を指す、心の中に別を告て、竊に急ぐ起行の準備に笠を引よせて、弛みし脚絆を、紐みじかに、結更つゝ、嘆息す。ともみな知らねば。先に立し、音音は襪の袋戸を、開ても肩さ彼此を、撈れば果して、手に當る、二包をとり出しつゝ、單節よ、是は疑。とさし示すを、引よせて左見

右見て、わらはが受とり侍りし時、時夜なりければ、包の色を、疑かに認め得られども、その疑はすべておぼえたり。この二包で侍るか。といへば音音は嗟嘆して、ぬしはこの世になき魂の、齎せし物ふたつまで、迹に遺るは怪しとも、あやしき事の限り也。何にかあらんその包を、とくく披きて見給へ。といふに單節はおそるおそる、結合せし包の端の、堅きをやうやく解分れば、曳手も軀て手傳ふて、二箇の包を共侶に、披きて見れば、こはいかに、顯れ出し男子の斬首、變りし色も一雙の、死相に駭く娘姑、思はず齊一躍立て、退避たる背のかたに、忽地聞ゆる苦惱の兩聲、燦と燃たる鬼燐の光に、再驚く婦女輩、こは何事ぞ。と見かへれば、今まで在つる力二郎、尺八さへに忽然と、形は消てなかりけり。かさねくし奇異怪傀に、誰かは睽惑ざるべき。やよ力二郎よ、尺八よ。喃わが所天よ、わが伏よ。と三人齊一呼かへせども、答は絶て空蟬の、蛻の殻だに留めねば、胸潰れ心惑ふて、是も夢歟。とまだ覺ぬ、無明の醉に忙然たり。かゝる惑ひの中にしも、音音は信と心づく、二級の首を、燈火の、ほとり近く引よせて、つらく見つゝ、喃曳手、單節もこれを何とか見たる。いづれもこれは見しらぬ頸なり。死したる人に靈ありとも。音平どの亡魂が、この忌しく穢き物を、何の爲にか齎て來給はん。うたてや日來子を思ひ、良人を慕ふ俺們が、心の憂ひをよく知れる、狐狸の所爲なるべし。かゝれば目今姿を隠せし、子共は眞のわが子にあらず。音平どのと見えたるも、皆是心の迷ひのみ。誘給へ、脂燭して、まづ縁頼より庭のかた、柴小屋までも邁て見ば、獸の足跡ありもやせん。立給はずや。といそがせば、曳手單節は忽地躊りて、現よく御こゝろつかせ給へり。變化としらて今までも、物いひしことの悔しさよ。いざとて軀て共侶に、立出んとする程に、外面に人ありて、やよ等、霎時、立ずもあれ。一毫こゝに愆れば、その末違ふに千里をもてす。伶俐けれども婦女子の臆斷、理りに似てみな當らず。いてて惑ひを釋んず。と推禁め呼被て、障子を颯と推ひらくを、と見れば是別人ならず、神宮河原の音平なり。彼はいかに。とばかりに、亦復駭く兩個の媳婦に、音音ははやく目を注して、冷笑ひつゝ、些も騒がず。噫鳥藩がまし野狐が、



漫に人を魅るとも、幾遍その術に乗せらるべき。もし速に立も去らずは、生皮剥て腹を冷ん。後悔すな。と罵りて準備の懐劍二三寸、抜かけて佐と疾視たり。そのとき猪平手を抗て、早るべからず、はやるべからず。われ豈妖怪變化ならんや。然るをなほ疑ふて、刃をもつて權すは拙し。そなたに豫て身を護り、仇を禦ぐ懐劍あらば、われも亦身を護り、仇を禦ぐ一刀あり。これを見給へ。と諭しつゝ、突立もてる朴刀を、免りと抜て、側なる、堅木の柱を礎と撃つ、修練の手裏、刀尖鋭く、節をかけてぞ五六寸、砍込む刃を手ばやく引て、鞋に納めて、莞爾とうち笑ち、大刀は武徳の名器にして、非常を検し、非常を防ぐ。この故に妖怪變化も、これに遇へば本形を、顯さずといふことなし。素より冤鬼狐狸の、弄ぶべき物ならねば、その疑ひを釋くに足らん。いで／＼といひかけて、そが儘裡面に進み入る、姿はいたく變れても、心雄々しき老人の、絶て臆する氣色なく、はや上坐に著しかば、曳手單節は今さら平を、見つゝ僅に頷きて、いはるゝ趣よしあれども、胡越に等しき姥雪ぬし、今さら忌も憚らて、瞬もせず猪産の二種、この斬首はいかにぞや。況おん身が戸田河へ、入水の事は甲夜の間、犬川莊助とかいふ旅浪人が、竊に和子に報しとき、吾儕も巨細に竊聞たり。然るをおん身は恙なく、武蔵の盡處よりはる／＼と、こゝに來ませしはいかにぞや。これ疑ひの二ツなり。且おん身が入水の事は、獨大川に聞しのみならず、力二郎尺八等も、其日の戦ひ云々と、報にしものを思ひきや、告し子共は眞柴焼く、朝の炊またずしも、煙のごとく滅失て、今又おん身に見えんとは、是疑ひの三なりけり。かくてもおん身が變化ならずは、兩個の子共と見えたるは、抑亦何ものぞや、こゝろ得がたき事にこそ。と詰問れて猪平は、件の首級を、と見かう見て、縁故を詳にせねば、然る疑ひは理りなれども、わが武蔵より携來て、甲夜に單節に運與たる、二包はこれならず。なほこの外に物あらん。納めし處を索て見よ。といふに、單節は訝し、と思ひつゝ、又單節の、離の錠戸推ひかけば、曳手も眼に附射して、彼此開なく取置ども、それ等と

おもふ物もなし。尙置處の、運へる駈とて、夜具揃く破戸扉を、ひらきて見れば、栗して物あり。概の包異なれども、その二包を結合せし、これ彼共によく似たり。單節ははやく兩手をかけて、棚よりやをら取おろしつゝ、これにや侍る。と指示せば、猪平うち見て、それなりそれなり。且其處に措ねかし。といはれて單節は、こゝろを得ず、扱も不思議の事にぞ侍る。わらはが甲夜に受とりし、包が正しくこれならば、收置たる小戸棚に、あるべきものをいつの間、處をかえし事やらん。加旃よく似たる、是彼四箇の袋物、初の度にとり出したる、その二包は何人が、もて來て隠し置たりけん、これも怪しき事ならずや。といひつゝ、傍を見かへれば、音音曳手も呆果て、寔に甲夜より曉るまで、こゝろ得がたき事のみ多かり。みな是物の障礙にこそ。必油斷し給ふな。と心つくれば怖氣たつ、三人よせても女子の智慧の、澤瀨を渉る遠漁火、人歟鬼歟、と猪平に、疑ひはなほ釋ざりけり。且して猪平は、思ひ得たりし膝うち鼓して、音音よ、さのみな疑ひそ。わが物ならぬ包の事は、推量の外なれども、そのよしなしとすべからず。われけふこの地へ來つる折、身長隆き一個の武士、腰に兩箇の包を著しは、白井のかたより走り來て、先に立つゝ邁くありけり。これより先に彼邊にて、仇撃の事の趣、その風聲を途にて聞しを、是彼思ひあはするに、道節ぬしにあらずや、とはやくも心つきしかば、おぼつかなくも跡を跟て、見失はじとゆく程に、既にして日は暮たり。かくて初更の左側に、件の武士は杜蔭なる、塚のほとりに立よりたり。そのときわれは樹隠れて、その爲體を窺ひしに、天結陰りて闇ければ、定かには見えわかねども、腰なる包を取出して、塚に樽贈て祭るとおぼし。われ又情おふもやう、彼人の樽贈し物は、響の首級歟。さもあらば、わが推量の空しからて、道節ぬしにこそあらめ。近づきて問ばや、と思ふ折から一個の癖者、塚の蔭より顯れ出て、件の包を取らんとす。こなたの武士は取せしとて、挑争ふ力量早技、優さず劣らず如法夜に、亂れぬ拳の奇々妙々。さりとて時を移しなば、一個は必傷けられん。且雙方を推鎮めて、その名を問ん、と老後の腕立、走蒐りてこの杖を、二人が問へ、かう突立て、推分んとせしときに、肩に掛たる兩個



の包を、思はず撲地と落しつゝ、慌忙き彼此と、搔撈當て取る程に、彼癖者が抜刃かす、刀尖狂ふて石塔を、砍削りたる石火の光りに、件の武士も兩個の包を、引提て直躬と立よと見えたる、形は消て往方を知らず。是なん火遁の術なるべし。かゝる奇術を獲たりし人は、道節ぬしにあらざして、誰か亦よくこゝに至らん。その名をいまだ問ざれども、必彼ぬしなるべし、と思ひ決めつ、慕しさに、霎時もあらず又舊の、野路をこなたへ走るになん、癖者も亦茂林より出て、頻りにわれを追ふたれども、及ざりけんこゝまでは、續きても來ずなりにけり。かくてわれはいちはやく、こゝの門邊に立しとき、單節が竊に憐みて、柴小屋へとて憩せたり。かゝりし程に莊役が、白井の下知を傳へたる、絆の趣洩聞えて、心にかゝれば尻もおちみず、竊に其處を立出て、或は背門より庭面より、間なく母屋にこころをつけしに、渠より先にうちつゞきて、こゝに來つる兩人あり。その一人は道節ぬし、彼癖者と思ひしは、犬塚が友、犬川莊助、舊名額藏といひしものなりき。その値遇によりて不意、白井の仇撃、路次の窮厄、わが犬塚に誣譖たる、密書のいまだ届ぬ事まで、遺もなく竊聞て、うち驚きつ歡びつ、かゝる便宜は多く獲がたし。とく見參に入らばや、と思ふ物からしさがに、舊婦にすら罵られし、不似のこの身を見かへれば、恥かはしくて黙止たり。若是て又道節ぬしは、犬塚等を索んとて、犬川共侶遽しげに、外面に出給ひしかば、この間にこそ子共のうへを、音音そなたに報んとて、幾遍となく縁頼へ、足踏かけても面ぶせて、とさまかうさま思ふ程に、兩個の娘婦に相侶れて、來つるは力二と尺八なり。いと淺ましく、うれはしき、こゝろともなく退きて、檐下に近き柴垣の、蔭に立つゝ通宵念佛の外他事なかりき。無事なるときは香を焼かず、事あるときは佛足を、戴くといふ世の常言に、似たるわが身ぞ罪ふかき。今さら思へば茂林にて、わがその包を遺せしとき、道節ぬしに拾れけん。ともしらずしてわれは亦、道節ぬしの二包を、搔撈取りてそが儘に、肩にかけつゝ、こゝへ來て、甲夜に單節に遞與せしかも、儼しからずはこれ彼の、置處やは違ふべき。これによりて驚するに、その二包の首こそ、道節ぬしの撃捕給ひし、兩敵に疑ひなし。以

るかなその二包は、眞の根、ならずして、單衣の袖をもてせり。これその證とするに足れり。袖を打ぬは外なるよしあらん。とく見よ。といそがしたる、言葉の本末今さらに、音音は甲夜に竊聞し、彼莊助と道節が問答にさへ思ひ合して、こゝに僅にこの條なる、疑ひは稍解れども、解ぬ包の氣のかゝる、曳手單節は燈火の、ほとりへよする兩袱の、結塊にはや手をかくれば、音音も間近く膝を進めて、披くを見れば是も亦、兩個の人の首也。これはいかに、と呆れたる、三人齊一睛を定めて、ふたゝび右より左より、見れば無慙や、力二郎と、尺八が首級にて、色こそ變れまざりと、今まで在し面影に、紛ふべくもあらざれば、又胸潰れ心焦れて、喃淺ましの、所天よ伏よ。子共にこそ。と共聲に、歎き彌倍す、愛惜の、首級を取て膝に乘し、紊れし鬘を搔撈て、見つゝ泣つゝ思へども、思ひ難たる味癡の、文に怪しき死喪のかなしみ、涙の雨に六の袖を、絞りもあへず泣淪む。憂には漏れぬ精平も、慰めかねし頭を低て、斑なる齒を乍締る、われからわが身を攻念佛、曾に急釘うつゝとも、夢ともわかぬ人間に、這れぬは現會者定離、かうこそあれ、と觀念の、眼を閉てもはふり落る、涙に哽て泣然たり。當下音音はやうやくに、志氣を奨して、原來子共は撃れにけり。心やりにもなるべきに、その戰歿の爲體を、聞まほしきよ。といひければ、曳手單節は精平が、左右に膝を衝詰て、世になき人歟と疑ひし、大人は還て恙なく、恙もなくてかへりき、と思ひし良人は死顔を、ふたゝび見する武藏の家裘、開て悔しき浦島の、なき玉匣ふたりまで、かうなり果し趣を、しらせてたびね。いかにぞや、やよ喃大人。と呼かけて、事問ふ聲も枯れぬべき、歎きます穂の繁芒、外には降らぬ驟雨に、撲るゝ如く俯沈む、媳婦と媳婦とにいとどしく、泣立られし精平は、涙の目皮しばたゝき、涕うちかみて幾遍歟、いはんとすれば生憎に、塞る臂を拳もて、搏つゝ息を吻とつきて、これらの事は問れずとも、詳に告んと思はずは、恥かゞやかしくわれやは訪ん。音音よ、勿泣そ。媳御達、涙を禁めて聞ねかし。大約人の幸不幸、倚伏は糾ふ纏に似たり。むか



し犯せし罪科を、宥られてもわれからに、快らぬ老後の寸功、兩個の子共に譲らん、と思ひ決めて戸田河に、投にけれど、死も得果す、年來熟たる水技の、邪魔になりてや思はずも、淺瀬のかたへ流されて、東の岸に著しかば、いと淺ましく、朽をしき、わが身にこそ、と今さらに、棄し命を愍に、助る神の恨しく、濡たる儘に忙然と、且く水際に立在つ。とてもかくても業報の、まだ滅びずとしりながら、ながらふべくもあらぬ身の、水に入らねば死れぬものかは。いでや彼大塚の城兵等と刺ちがへて、其處に骸を曝ん、と思ふも苦しき恩愛の、絆に牽るゝ凡夫心、子共の先途を見まほしさに、舊の岸邊に赴けば、戦ひ果て、人影なく、敵歟射方歟、彼此に、俯横れる死骸あり。嗚わが子共は撃れずや、とおぼつかなくも暗き夜に、その生死の迹を索て、遺もなく檢せしに、いと暗ければ身甲の、威の色も見えわかざりし、軀のみにて定かならず。この故にこそ捨果し、命を霎時存在て、いかで子共の存亡を、聞定めて後に、ともかくも、ならばや、と思ひしかば、その曉に神宮なる、宿所に走りかへりつゝ、心竊に準備して、姿を變て次の日に、大塚へ赴きて、街談術説を撈問ひしに、戸田河原の戦ひに、陣番丁田町進は、力二郎に撃れたり。さばれその隊の兵は、東の岸に踏留りて、尺八と戦ふ折、力二郎が援來て、胞兄弟力を勤したる、奮戦突戰、瞬間に、雜兵夥刺伏せて、類に克に乗るものから、町進が屬役に、仁田山晋五と呼ぶゝもの、四五十名の隊兵を將て、大塚より援來つ、連放たる鳥銃に、力二郎も尺八も、灸所の砲瘡、竟に得堪ず、間近き敵と引組で、刺ちがへてぞ伏たりける。かくて屬役仁田山晋五は、力二尺八が首捕て、大塚へ飯陣しつ、なほその功に誇らんとて、力二郎が首級をもて、大塚信乃と偽り唱へ、尺八が首級をもて、小断額藏と偽り唱へて、けふしも庚申塚の邊なる、棟樹の下に梟らるゝ、と緯人口に隠れなければ、うたてや子共を先だてゝ、死後れたる老が身の、やる方もなき鬱憤に、腸を斷歎きして、獨つらゝ思ふやう、梟首せらるゝ子共が事は、悔むもその甲斐あるにあらねど、佞人等が偽名けし、大塚大川兩豪傑の、戦を雲めて、云々と、わが方さまにも、その人々にも、報んずものを、と只管に、おもへば霎時

の世に、その印を消すも、一丁千餘、されば更屬人定りて、庚申塚に掛きつ、心計なる棟樹の下へ、藩り遊ぶ、幸して、取おろせし子共の首を、獲て準備の行帳に、推包み引提て、走ることまだいくばくならず、近邊に夜を衛る兩個の獄卒、棒挟み追蒐來て、癖者等。と呼制たり。絆既に急なれば、兩個の包を秋草の、中に隠して些も擬議せず、返しあはせ引つけて、晃りと拔たる朴刀は、老の拳におぼえの業物、先に進みし獄卒を、ばらりずんと吹伏せて、かへす刃に又一卒の棒も共し手首を、擊落しつけ入りて、閃したる二の大刀に、左の肩より乳の下まで、乾竹削に血けぶり立たる、刃の牙に、叫びもあへず、身を轉して仆れたり。これに聊慰めて、手ばやく鮮血を拭ひ納めし、朴刀もて叢を、わけつゝ包を取出し、又携て戸田河を、歩涉して三四日と、夜を日に續てこの地に來つるは、一切わが身の爲ならず、件の事の趣を、由縁のものに遺さずは、力二郎尺八等が、忠死義歿を誰かは傳へん。音音は年來中絶しを、再會快からねども、渠ならずしてその人なし。法を踰るは、これ人情、義を見て進むは公道なり。故主の爲にも、子共の爲にも、兩ながら已べからず、と思ふばかりに阿容々々と、この隱宅に索來つ、既往をまだ云々と、報ねばいたく罵られ、拒れどもなほ懲すまに、こゝに一宵をふし柴の、小屋に憩て外ながら、故主のうへと、子共が亡魂、竊聞つ、又闕窺つ、哀歎交腸も、袖も斷離るゝ感涙を、絞るにあまる不思議の一條。力二郎尺八等は、死して五日になりぬれども、靈はこの土を去らずして、在し面影まさしげに、且くこゝに顯れて、母と妻とを慰めしは、嗚呼孝なるかな、義なるかも。その折われは外に立て、彼暗譚を聞もしつ、障子の透よりつくゞと見るに勝ねば呼かけて、おなじ圓坐に入らばや、と思ふ物からその頸を、携來つるわれに逢ば、消もや失ん、と躊躇ひし、生を隔の紙一重、佛を憑む唱名も、音にこそ立ね終夜、涙に暇なき魂を、誰促すにあらねども、入聲の鶏の鳴ばこそ、驚されて冥土ゆく、陰火の光り鮮々と、窓より出るをわれひとり、振向見たる心のかなしみ、今までしらぬお身達より、入しほにましてわが胸の、苦しかりき。と口説立て、告れば音音も、媳婦同胞も、哽かへり咳入



りて、泣より外にすべもなき、哀悼悲愁のそが中に、音音は僅に思ひかへせし、頭を擡て、喃曳手、單節もさのみ歎き給ふな。妻子の涙は、なき人の、身にしかるゝと昔より、いふは實事歟、然もあらば、後世こそ人の大事なれ。凡貴きも賤きも、武辨の家に住へたる、命を豫てなきものと、思ひしらずは人なみに、搦れし忠も義もあらじ。主の先途にあらねども、教を守り、義に仗りて、愛たき友を薦ん爲に、その日の敵も外ならぬ、亦是響の麾下の武士、大石兵衛が陣番を、撃捕たるのみならず、犬塚大川兩雄の、身がはりにせられしは、死して榮ある子共が武功、このうへや侍るべき。父も父なり、子も子なり。扱も面なし猪平どの、恩に負かぬ誠心の、子共に功を譲らんとて、捨し命の盡せぬは、神の祐敷、佛力敷。さらずは力二尺八が、孝心其處に船となり、筏となりて早河の、親の必死に代りけん。ともしらずして疎みたる、吾儕が愚痴と僻見より、世になき子共を怪まで、存在しその父をのみ、鬼にやあらん、變化敷、と疑ひし事の愚さよ。許し給へ。と白地に、勸解つゝ泣ば、共侶に、曳手單節も泣腫す、二重險に入重雲の、かゝる憂ひは世間に、儻卒なる再會別離、稚枝の花の年を歴て、共白髪なる雪の松、送の心うち解て、本意ある對面を側ながら、いと歡しう思ふにも、只哀しきは俺們が、短き妹伏の縁し也。別れて後ほきのふまで、雁の翼も絶果て、音耗聞えぬふみ月の、けふは七日の曉も、名のみなりけりいかなれば、年に一たび牛織二星の、あふ瀬はあるに亡者の、影も留めず逝水の、かへらぬ旅の衣手を、綴り合して冥土まで、伴ひはせてつれもなく、長き嘆きを遺されし、この身この身は今さらに、措處なき憂にたえて、脆くも萎む朝貞の、果敢なき露の玉の緒の、たえなば絶よ、日も月も、照らさぬものをいつまで敷、何樂くて存命ん。骸は土にかへるとも、心變らぬものならば、後の世こそ憑しかるべけれ。死ばや死ん。と猪平が、左右より腕を伸て、村刀を取らんとするを、取らしも果す擡遣れば、音音も俱に推禁めて、狂ふをやうやく鎮めたる、當下猪平聲ふり立て、理りなれども娘御達、事の始終を見かへらて、死んと早るはいと後き、女子ごころの感心也。か二郎尺八等は、慮見つ日本に魂の、人に擬れしものならずは、死しての

後、主を思ひ、涙を垂てて案を見せんや。然としておのゝその妻の、命をはやく斷んとて、いかでか霊を驅すべき。これらのよしを思はずに、天を恨み、世を憤りて、生を輕し、死を樂むは、只是愚痴の患ぞかし。おのゝ良人の本意に悖りて、死して何等の益やはある。わが戸田河に投しに、趣は似て意異也。日を同じて語るべからず。今つら／＼案するに、わが將て來つる子共の首級は、道節ぬしに携られ、又彼ぬしの討捕給ひし、仇の首級をわが將て來つるも、主從忠信孝義の感應、こも庸事とはおぼえぬに、況死生は命あり數あり。良人に代りて姑に、仕へて且その菩提を申はゞ、それこそ眞の貞女なれ。かくても聽すや、いかにぞ。と辭せわしく諫れば、曳手單節は大かたならぬ、理りに切られて、かへすによしも泣顔を、いよく擡得ざりけり。されば音音はやうやくに、こゝろの闇も、天の色も、明くなりたる反故張の、窓の下を見出して、喃娘御達、心を鎮めて、且はや彼を見給へかし。力二郎尺八等が、姿は消も亡たれど、その行姿は兩個ながら、舊の儘にて彼處にあり。要なからずや。これもまた、ます／＼不思議の事になん。とく／＼披きて見給へかし。といはれて女同胞は、目を拭ひつゝ、と見かう見て、像見こそ、今は仇なれはなくば、忘るゝ隙もあるべきに、いと歎きを眞十鏡、影も像もなき人の、遣せしは現何にかあらん。いざとて軀て共侶に、立よる窓の片明り、姉も妹も手をかけて、提る包に力なき、憂身ながらにわれもかも、滅残りたる燈火の、前面へやをら推居て、又漕然とうち泣たる、曳手は聲を口隠らして、かゝるべしとは夢にだも、しるよし絶て神ならぬ、地藏の茂林の曠野にて、彼二かたの病臥せしを、妹と俱に勤りて、馬に乗せんとせし時に、頻りに馬の屬強して、すべなかりしは畜生の、世になき人をはや知りて、駭怕れて乗せじとて、狂ひにけり、とやうやくに、今曉るこそ甲斐なけれ。と啣ば單節もうち泣て、然る所以にこそこの兩包を、馬に負さでそが儘に、わらはが背負ひしかの時よりも、なほ重やかに覺るか。阿姑さまも、驚せ。大人も見給へ。喃阿姐、いざもろ共。と同胞が、披く包は一雙の、黒革威の身甲の、鮮血に塗れて韓紅に、痛手を遺す鳥銃の、裏缺し痕も六七ツ、入花菱に小録の、



腕鎧に脚盾とり添たる、これを見彼を想像る、良人々々が陣歿の、烈しかりける戦ひの、かうありけん、と哀傷に、涙ますく、果しなき、音音も俱に塞る宵の、病に帯を引締めて、いふかひなしや娘御達、縦生涯歎くとも、憂を遣る瀬のあるべき歟。かくまで奇しき絆の顛末、これを夢とも現とも、思ひ得がたき親女房の、疑ひを解んとて、この兩包を遺したる、子共は寔に神なりけり。かゝればその妻子として、志の似ずもあらば、いと恥かしき事になん。涙を禁め給はずや。と辭雄々しく諫めても、心の底は弱り果て、鼻のみうちもかまれたる、歎きはおなじ親ながら、猪平はなほ羞てや、胸苦しげに嗟嘆しつ、音音が意見よしあるかな。この身甲も、腕鎧脚盾も、われは素より認りたり。こは力二郎尺八等が、池袋より落て來つるとき、わが家に脱藏めしを、戸田河原の戦ひに、とり出し膚に著て、終に陣歿したりけり。然るを彼等は世になき後に、これを妻子に遺せしは、今より良人に立代りて、忠孝ふたつに命を保て、といはん料にぞあらんずらん。かゝれば浮世に存在て、良人の首を葬る日に、わが亡骸をも瘞めてたべ。是までなりと朴刀を、晃りと拔て、取直しつ、腹を切らんとする程に、吐嗟と見かへる音音より、曳手單節はいちはやく、身を投かけて、やよ喃。と叫びつ泣つ右ひだり、攜る拳にはふり落る、涙に聲をふり立て、こは物體なし俺們を、今まで論し給ひぬる、道理に惺惚御ころに、相應しからぬ刃物三昧、自殺の覺期はいかにぞや。思ひとゞまり給ひてよ。と辭ひとしく姉妹が、力を勵し辛して、取鎮めんと刀尖を、筵疊に縫留させて、喘々諫れば、猪平頭をうち掉て、いな／＼放さぬ怪我なせそ。曩にいひしを何とか聞たる。いぬる二日に戸田河にて、死すべかりしを、けふまでも、存在たるは、子共の爲なり。年來故主へ一トたびも、わが恋を勸解ざりしは、亦是恩義の爲にして、疎遠はつや／＼不實にあらず。かゝりし程に主家の滅亡、子共に訪れて、大義に加り、この時にこそ身を殺して、彼舊恩に答ん、と思ひしものを今さらに、餘命をいつまで貪るべき。年老力衰へて、故主の先途を見るよしもなき、殉死は義士の素懐なるに、哀に迫りて、死を樂び、女共と一死に、思はるゝはこゝろにす。其處退すや。と教諭て、屍體

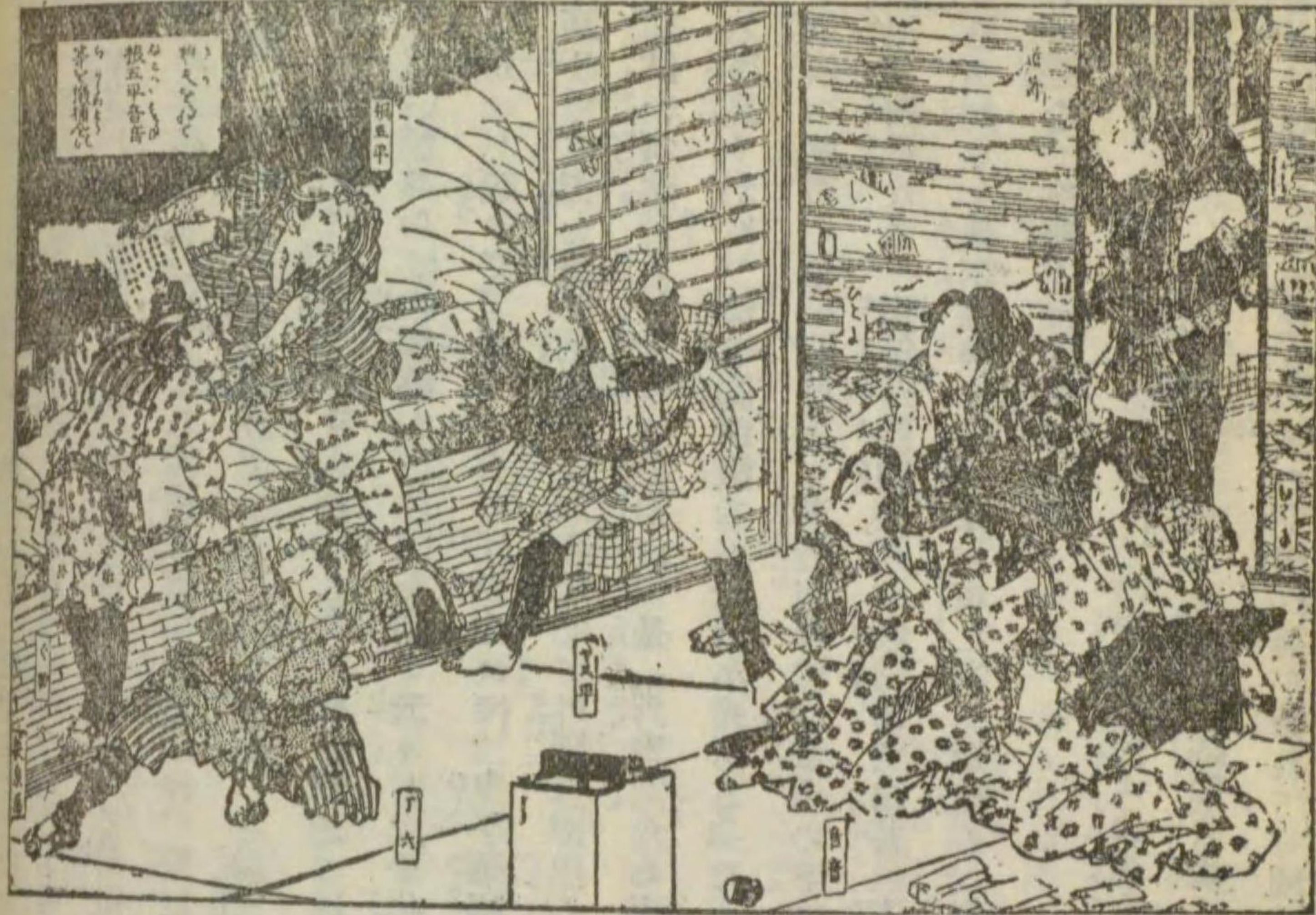
奪るを世間でも、曳手單節はせんすべなきに、やと。と叫で見かへれば、音音は懐へず、齒と密せて、嗚呼、猪平ぬし、殉死はその身の大意なりとも、歸參の免許を受すして、わがこの宿所て自殺せば、法度を犯して故主を侮る、罪を亦復こゝに累ん。加加、莊役が、徇傳たる警敵の下知狀、いはれし事もあるものを、天明でもまだ還り給はぬ、和子のうへいと心もとなし。舊恩實に忘れずは、撃れし兩個の子共に代りて、故主の瀬に立、影に添ひ、死すべき折に、涙く、死んと思ひ給はずや。不覺なりき。と窺れば、猪平莞爾とうち笑て、寔にこれはいはれたり。われとおん身は私に、再會すべきものにしあらぬを、こゝにて死なば、瓜田の履、嫌疑を後に遺すべし。和子には見參憚りあり。いざさらば犬塚等が、往方を索て云々と、子共のうへも、わが宿志をも、報てとも又かくもなりなん。嗚呼しかなり。と頷きて、やうやくに死を止れば、曳手單節は携りたる、拳を放ちて共侶に、辭を添て慰るを、猪平いよいよ諾ひて、刃を鞘に納めつ、告別して外面へ、出んとしたる縁類の、障子を破と踢ひらきて、並立たる三個の癖者、眞額鉢巻素障、各身輕の打扮は、是則別人ならず、昨夕來たりし莊役根五平、丁六願介を左右に將て、意氣揚々たる聲高やかに、汝等胸が潰るゝ歟。かくあるべしと昨夕より、猜したれどもさり氣なく、宿所へ還る面色して、裏を垣根の間荒なる、背門より潜近づきて、簀子の下に終夜、一五一十をみな聞たり。音音はさら也、猪平等も、亦是煉馬の殘黨なる、道節が餘類なり。愈縛めて白井へ牽ん。腕を回せ。と呼りて、腰に著たる黒繩を、手ばやく取りて、投るが如く、仇糾繁扱く張肘は、車に逆ふ蠅螂の、斧突立たる丁六願介も、行材めかせし柚聲合して、根杖も拔よ、と縁頬を、突鳴しつ、鬨きけり。

第五十回

白頭の情人合番を遂ぐ  
青年の嬌婦菩提に入る

音音は思ひがけもなく、敵の間者に裏を被れて、陳すべくもあらざれば、曳手單節を後方に添して、寄らば砍らん、





(すどん捕獲を等音音平五根て得を夫権)

と懐劍の、柄を握りて立んとするを、猪平はやく見かへりて、推隔つゝ些も騒がず、踢颯る裳を引折て、兩三步根五平等に、進み向ひて、冷笑ひ、噫物がまし、里人等が、捕手三味鳥濤ならずや。わが敵手には足るものならねど、獨死んは所作なきに、今さら無益の殺生も、放すによしなき鬻敵の半隻、望の隨に死天三途の、瀨踏をせん。と右手に携りし、朴刀を左手に取て、挟みたる必死の勢ひ、心ばかりは憚くとも、老人なれば、と思ひ侮る、根五平擬議する氣色もなく、彼難作せ。と敦圀は丁六顯介は左右より、拿たる斧を振揚て、擊拗んと走り蒐るを、猪平閃りと遺違して、抜合したる刃の電光、左に流し右に拵て、兩三刀打よと見えたる、先に進みし丁六を、臍斜に破と砍る。砍られて苦と叫びもあへず、斧うち捨て外面へ、逃んとしつゝ縁頼より、落る軀け忽地に、兩箇にわかれて倒れけり。顯介はこれを見かへりて、駭迷ふて庖溜のかたへ、走り避んとする程に、音音が透さず逆撃つ、刃に額を勝れて、叫苦とばかりに外面へ、又引かへず開尖より、背をふたゝびりと砍られ

て、猪手に得替ず幾歩、撥るが如く跳き走りて、庭に倒れて死てけり。根五平はこの光景に、舌を巻き驚を翻して、立足もなく縁頼を、踏外し滾落て、抜せし腰を敲きつ伸つ、慌忙き逃走るを、猪平音音は信と見て、血刃引提て共侶に、追擊留んとする程に、根五平ははや庭門を、出て頻りに走るに、曳手單節も氣を悶て、俱に焦燥ほどしもあらず、奥のかたに人ありて、曳。と被たる聲と齊一、出居の隔亮の間より、打出す銃鏡の、窺違はず根五平は、背を胸まで撃れたる、苦痛の一ト聲、空を颯て、仰反仆れて息絶けり。思ひがけなき助大刀に、猪平音音は驚きながら立駐りて見かへれば、曳手單節は立よりて、諸手をかくる破隔亮を、裏西より颯と推開て、顯れ出たる犬山道節、いと悠々と頤もて、諭す隔亮を曳手等に、舊の如くに閉さして、はや上坐に著しかば、これは、とばかりに、音音はまづその血刀を、拭ひ納めて遽しく、主のほとりへまゐるに、猪平もこゝろ得良に、刃を納めてそが儘に、且外面に走り出て、根五平が死骸に立たる銃鏡を抜取りつゝ、頭を回して四下を見るに、荒田の畦に埋井あり。こは究竟の處にこそ、と思へば臆て件の死骸を、引揚して、推落しつ又立かへりて、丁六顯介が、亡骸を掖もて出して、おなじ井の底へ落しにけり。この時既に天は明て、秋の初風涼しきに、朝餌を求食る群雀の、籬色に降集る比なれば、かくは三箇の亡骸を、里人等に見せじとて、いちはやく隠せし也。音音はこれを見もかへらず、團扇を把て道節を、うち扇きつゝ含咲て、昨夜出させ給ひし隨に、曉ても還らせ給はねば、いかに、と思ひ不樂て、安からざりし胸も稍、今ははつかにおちみたり。さても昨夕はさまぐの、怪しき事のみ侍りにき。その疑ひは解たれども、いひときがたき根五平等に、緯の機密を知られしを、一人なりとも擊漏さば、枉津日の神いよ、暴んを、よき折からに還せ給ひし、おん手裏の微妙さよ。と他事なくいへば、曳手單節も、後方に齊一額づきて、恙なきをぞ祝しける。道節聞てさればとよ、われは昨宵更闕て、如此々々の處にて、犬塚等に索遭にき。よりて犬川共侶に、彼三犬士を相侶て、曉がたにかへり來つ、背門より入らんとせし折に、曳手單節が哭聲の、堪ぬばかりに聞えしかば、異あるべし、と思ふ



になん。呼門もせて彼人々、とそが儘奥に立聚居つ、扱猪平が事の趣、力二郎尺八等が戦歿の事、首級の錯悞、彼胞兄弟が亡魂は、霎時姿を顯して、親と妻とを慰めたる、絆おちもなく竊聞て、われはさらなり、犬塚大川大飼犬田の四犬士も、感涙坐に禁めかねたり。憐むべし力二郎、尺八等は、忠義の爲に、命を隕せしのみならず、年來離別の父母を、相合せんと念じたる、孝感空しからずして、その二親の再會は、子共の靈の致せしかも。われ犬塚等に聞ることあり。皆是過世轉輪の、業報とこそ覺るなれ。そをいかにぞと原るに、われは犬士の隊に入るべき、宿因の大かたならぬ、痣と玉との明證あり。この一條は云々と、昨夕犬川莊助に、告られし時外に立て、そなたも如此ぞ聞つらん。さればこそあれ猪平は、廻姥雪氏にして、舊名は世四郎也。雪は犬の姨といふ、世の鄙語もあるなるに、世四郎も亦犬塚生に、畜れし犬と同名也。況力二尺八の、四字をわかちて又合すれば、八房の二字となる。彼八房は里見の愛犬、吾黨の犬をもて、自然と苗字にせし事も、又身の中に痣ある事も、皆彼犬に類りけん、字畫をわかち一條は、犬塚生の發明なるよし、昨夕彼人々と、送に意中を盡せしとき、詳に示されたり。こは鑿説に似たれども、力二郎尺八は、名をのみ聞て、相識ならぬ、四犬士を延さんとて、敵を防ぎて戦死せしは、唯任侠の所爲のみならず。彼も其も山林房八が事に似て、八房の犬に宿因あらん。もししからずは四犬士の窮厄に代らんとて、可惜命を隕さんや。死せんと欲せし猪平が、得死ざりしは、子共の忠孝、天の命する陽報也。末世の美談なるべければ、曳手單節も思ひ絶て、哀しみにな傷られそ。亡日々々の追薦供養、ながく菩提を弔んこそ、なき人の爲なるべけれ。われと彼等は二世の主従、乳母子なれば、俗にいへる、乳兄弟にて恩義は敦かり。それを喪ひし心の憂ひを、いかばかりと思ふらん。天飛ぶ鳥の兩翼を、うち落されしものに似たり。然とて歎くも甲斐なき所行也。世に傳たる力二郎尺八等が親となり、妻となりたる幸ひを、歎きに思ひかえよかし。虎は死して皮をとめ、人は死して名をこそ遺せ。老少壽夭は命也、と惜れば誰か死ざるべき、世に百歳の上壽を保つも、命散れる所方に、喪る妻の子のかなしみは、何時とてみまなかく

ぞあるべき。思はずや。と、懸に、辭す言葉の末に置く、露散る涙と、露に凝せし感涙に、顔を押けて、只潸然と泣にけり。そが中に猪平は、ひとり適に退きて、縁頬のこなたなる、障子のほとりに手を置き、頭を低て黙然たりしを、道節うち見て、やをれ世四郎、なぞて圓坐に入らざりける。とくく。といそがし立れば、猪平は稍近づきて、まづ恭しく鏡鏡を、道節に返していふやう、不肖の某、愆に、死後れつゝゆくりなき、見參に入りし事、いと恥はしく思ひ候へ。況二十年來の、節を折きて音音を訪ひしは、力二郎尺八等が、陣歿の事の趣、竊に妻子に報知して、彼四犬士の往方をも、見究めんと思ひしのみ。爾るに昨夕圖らずも、田文とかいふ森蔭にて、君に撞見奉り、大川生を柱んとて、とり違へたる四箇の首級は、舊縁の竭ねばならん、とはまだ送に知らざりしを、子共の首級を、其處よりして、主君に携られし事、亦是恩義の感應なるべし。さればにやその夜さき、大川生等の四犬士に、友垣を結せ給ふは、死して悔なき子共が遺忠を、はやくも遂て候。といひつゝ頻りに感激の、臉に誠を顯せば、道節も亦感歎して、豫てその名を聞しに勝れる、老人の志氣、今眼前に行狀を見れば、いよゝ感ふかかき。若かりし時、一旦の、過失は誰もぞあらん。今までいたく差ることかは。舊恩絶て忘るゝことなく、竊にその子を相助けて、わが爲に心を盡せし、その忠その功莫大也。かゝれば今これをもて、むかし犯せし彼一條を、贖ふに餘りあり。よりて亡父尊靈に、なり代り奉りて、勳當を免すなり。けふより音音を妻として、力二郎尺八等が、亡魂を慰めよ。彼等もさこそ本意ならめ。といはれて猪平額に汗して、こは思ひがけもなき、勳當赦免の一條は、歡しく候へども、頭に霜を戴て、浮世に望なき身也。況子共を敵に撃せし、歎きの狹霧、無常の嵐に、花は萎み、香は耗る、兩個の媳婦を寡にしつゝ、恥かぢやかしく妻を娶らんや。こはまだ免許を稟ざりし、昨夕音音を竊に訪ひしを、舊情に引れしならん、と思食たる故なるべし。いと朽をしく候。と辭せわしく怨ずれば、音音も差たる額を拊て、婚縁の事など



は、うち聞くだにも疎しき、戯言も事にぞよらん。要なきわざぞ。と呟きて、席にも堪ず立んとするを、道節急に呼とめて、媪よ、さのみな腹たてそ。言一トたび口より出ては、駟も及びがたし。われ豈漫に戯言して、老人老女を辱めんや。一チ日なりとも猪平と、そなたを夫婦にせずもあらば、忠孝に身を殺したる、力二郎尺八等が志は晝餅とならん。母のみにして養虫の、父と呼れぬ彼等が愁歎、その亡魂の顯れしも、只この事によりて也。かゝればその子を母のみにして、父なきものの如くしたると、けふより父あり母ありて、その孝心を果さすると、利害はえらまで分明也。彼樂みて淫するをのみ、婚媾といふべきや。これを推辭ば子共の爲に、慈なきものといはれん。便是力二郎尺八等が忠孝を、賞するの第一議、枉てわが意に従へかし。又猪平が音音を訪ひしは、素より情義の爲ならぬ、正しき證あるものを、われいかにして疑ふべき。件の證はこれなりとて、懷より二通の書状を、とり出しうち披きて、これを音音に示していふやう、われ昨夕犬塚生に、はじめて對面せしときに、彼村雨の大刀を返して、送に意中を説盡しつゝ、且猪平が事を問ひしに、犬塚生は云々と、巨細に告て、音音へ興る、その書状を示されたり。それを疑へるにあらねども、はやくその意を得まほしさに、音音に代りて、件の状の、封皮を折きて見てけるに、力二郎尺八が、母の安否を問る状也。又四犬士を紹介は、別紙に追書したれども、その手迹おなじからねば、そは猪平が筆なるべし。さばれその紹介にも、力二郎等が名をのみしるして、猪平が名を署せざりしは、嫌疑に憚る老人の、用心ならん、と猜しつゝ、その潔白を感じたり。この一條もて猪平が志を知るのみならず、身を過失にかへり見て、神宮に浮世を避しより、敢又他家に仕へず、子共の爲に、歸參を乞はず、音音が爲に、妻を娶らて、事のこゝに及べるを、もし賞せずは、天意に違はん。力二郎尺八が、魂魄いまだ遠く去らずは、復立かへりてこれを聴け。二十年來離別の父母を、ひとつに合せしは多く得がたき、汝等が孝心の、應報に疑ひなし。恨らくは汝等を、今まで席に侍らし、歡ぶ良を見ぬこととて、兩節の首級を引寄せつゝ、うち覆ふたる。枕を、半ひらきてつくつゝ見つゝ泣しき

腕にのみ、思ひを籠し壯士の、泣ぬは泣くにいやましたる、至極の道理に説かれし、猪平音音は白麻の、有無の問答に口籠りしを、曳手單節は慰めかねて、名をのみ遺す良人の手迹の、これも紀念になりき、と思へば見れば堪がたき、思ひの歎きせり。道節聲を勵して、噫いふかひなし、かくまで、めてたき折に何をか歎かん。酒もやある。と容れば、曳手單節は涙を禁めて、きのふ還らせ給ひなば、進らせばや、と思ひつゝ、いさゝけながら貯の、一ト舛ばかりも侍らんかし。といふに道節領きて、甚佳々々。疾盃の準備をせずや。といふに單節はこゝろ得て、地炕に柴を折焼ば、曳手は庖厨に赴きて、酒壺をそが儘携來つ、同胞酒を盪て、折敷に載する盃の、縁は缺ても相生の、松は操の高壽繪、昔堅地の老夫婦を、如此ぞ壽く亡夫達の、情願遂て俺們までも、面を起す主恩の賜もの、歡びこのうへあるべしや。と祝して移す銚子に、酒のみありて看なければ、曳手單節は外に出て、求めやせん、と聾くを、道節聴く聞とりて、外に求る看より、彼究竟なる物こそあれ。田文の茂林より猪平が、持參の首級は當坐の納聘、馱一三寶平等を看にせば、鬮籠盃にもいやまして、誰か珍重せざるべき。とくく席を改めてよ。とわりなく音音猪平を、對ひ坐して、と見かう見つゝ、かくてははまだ物足らず、木を伐るものは斧をもてし、妻を娶るには媒をもてす、その人欲得、と見かへりたる、隔亮のあなたに聲立て、

わかやくや、雪のしら髪も、うちとけて、もとのいろなる、相生の松。年ふりてけふあひ生の、松こそめてたかりけれ。

と、謠通つゝたち出て、齊一席に著くものは、是則別人ならず、一の著座は、犬塚信乃、次に莊助現八小文吾、皆猪平にうち對ひて、恩人命恙なく、はからざりける再會は、枯たる枝に開く花を、挿頭すにもます歡びなれ。きのふ白井の厄難を、脱れて走るくらき夜に、不知案内の山路に迷ふて、この處へは立も得よらず、遙に適過たりけるを、幸にして莊助が、犬山ぬしとつれ立て、追つゝ索來つるにあひぬ。そは人煙遠き山蔭にて、世に憚るの關もなけれ